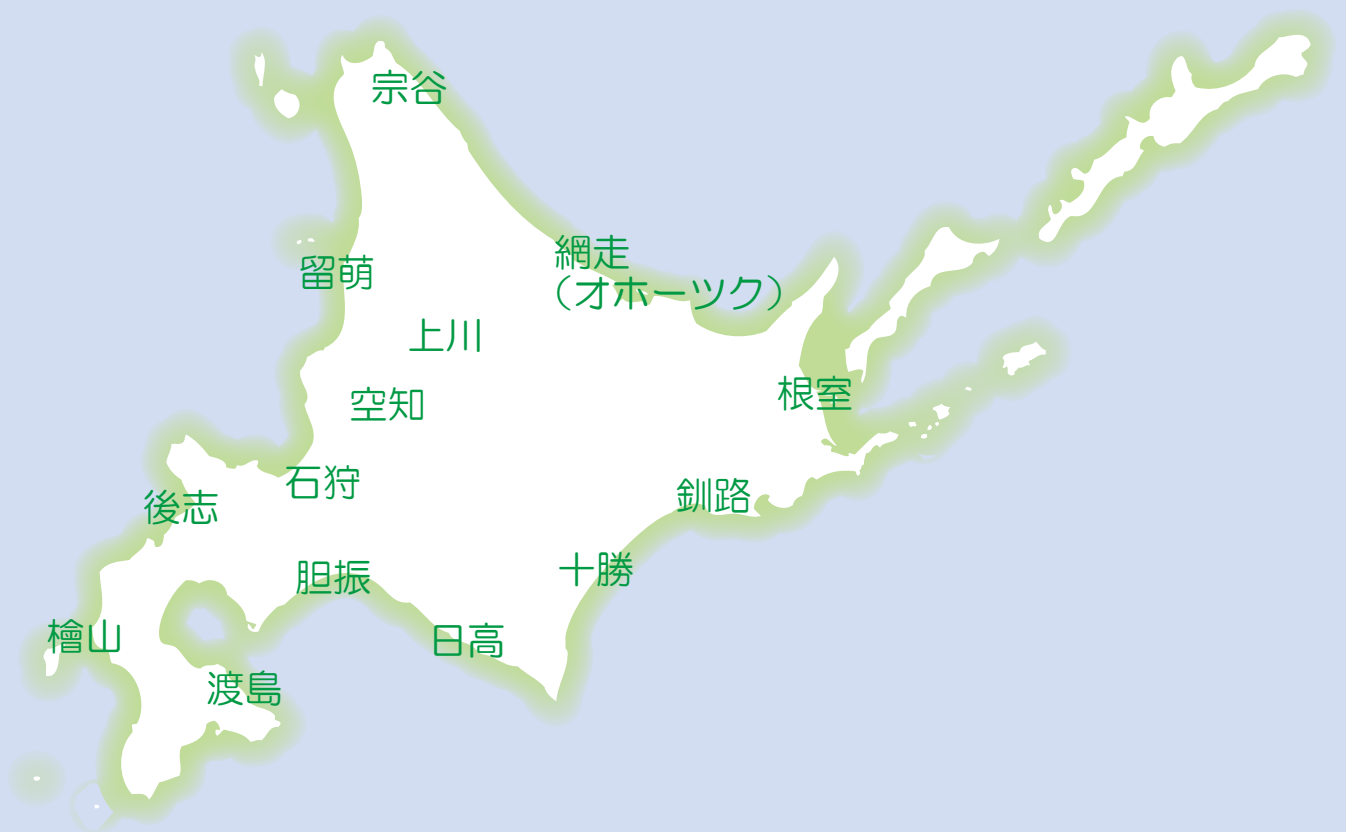


50周年記念誌



北海道高等学校教育研究会

高教研

あの日、あの時、あの場所で・・・



40回全体会講演
五木寛之氏「日本人の心」



第13代 田村会長



第14代 島会長



第15代 青塚会長



初代梶浦善次会長
昭和38年5月就任。



48回全体会司会



第17代 宮浦会長



38回全体会開会式

厚生年金会館、芸術文化の館、ニトリ文化ホールと名称は変遷するが、10回大会から31回、46回を除き、いつもこの場所で開催される。



第16代 金間会長



46回コンベンション会場
ニトリ文化ホールが工事のため使用
できず。客席が不足して立ち見も。



43回会長挨拶
開会式、会長が年頭の挨拶、
ステージに研究主題を掲げ



第18代 守屋会長



38回受付
全道各地から集まり、受付で
1年ぶりの再会に話はずむ。



47回全体会記録係
筆記から録音テープ、MD、CDと
歴史を刻み、いまではICレコーダ



10年ごとに記念誌を編纂



49回開会式
来賓、顧問、役員が壇上に



本部事務局、大会の成功を祈り、
全教職員総出で、この一年が始まる



いつも厳寒の中、会場に向かう



入口の縦看板



50周年記念大会
川口淳一郎氏

第1回研究協議会・総会



14の地区支部長（担当校長）、14の教科部会長（担当校長）、本部役員（会長・副会長・監事）、事務局に校長協会会長を交えて、50周年記念大会に向けた事業計画、研修の充実について協議。
期日 平成24年5月9日 会場 ホテルライフオー・札幌

第2回研究協議会



14の地区支部、14の教科部会の事務担当者（担当副校長・教頭・教諭）と本部事務局クラウド上でCMSを採用した新しい高教研HPを公開。地区支部・教科部会のページを充実。
期日 平成24年11月15日 会場 ホテルライフオー・札幌

50周年記念事業

教科研究事業への増額補助



体育部会



家庭科部会

「記念講演」及び「地方配信実験」



川口淳一郎氏

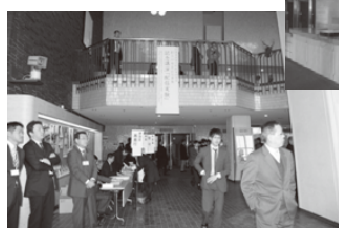


金メダリストと



俳句を交えはやぶさを語る

こんな時代があった



ロビーで配信実験映像の公開

配信実験



講演の司会と会長



会長、講演講師紹介



USTREAM (WiFi) で講演を視聴 (中標津農業高校)



利尻高校、学校に集まり USTREAM 視聴

特別展示「はやぶさ」・「高教研」展



はやぶさパネル



打ち上げロケット模型



イトカワ



はやぶさ帰還カプセル



高教研の歩みパネル



警備員2名が展示会場を常時警備

足を止める市民

駅前通地下歩行空間に設けた展示ブース

道民への会長メッセージ

HPの全面改定

CMSでいつでもどこでも簡単に地区支部、教科部会からの最新の情報をアップできるようになりました。

スマホで、歩きながら、研究会情報を検索できます。



最新教科部会情報



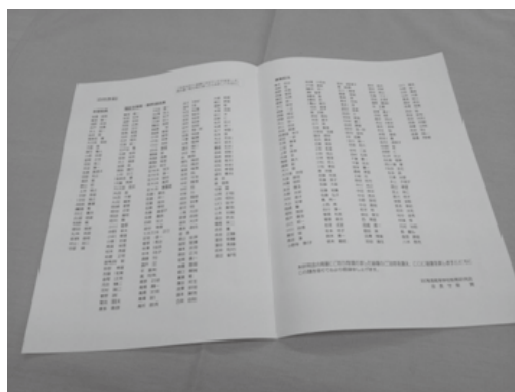
スマホで検索

50周年記念誌

本研究会の歩みをこの1冊にまとめました。

「功労表彰」

本研究会の発展にご尽力を賜りました40周年以後、50周年までの本部役員、地区支部長、教科部会長、及び地区支部・教科部会の事務担当者の方々の功労を讃え、紙面並びに高教研HPにて表彰いたしました。



目 次

発刊の辞	北海道高等学校教育研究会会長	守 屋 開	1
祝 辞	北海道教育委員会教育長	高 橋 教 一	2
.....	札幌市教育委員会教育長	北 原 敬 文	3
.....	北海道高等学校長協会会長	山 本 伸 弘	4
高教研 50 周年に寄せて	第 14 代会長	島 隆	5
	第 15 代会長	青 塚 健 一	6
	第 16 代会長	金 間 正 克	7
	第 17 代会長	宮 浦 俊 明	8
全体講演この 10 年（講演要旨）			9
地区支部～この 10 年の歩みと今後の展望～			17
教科部会～この 10 年の歩みと今後の展望～			35
分科会研究成果一覧			53
研究紀要一覧			72
年表 高教研 50 年の歩み			79
高教研登録会員数及び研究大会参加者の推移			89
本部事務局の歩み			90
◆ 50 周年記念事業◆			
特別展示「はやぶさ」「高教研」			94
功労者表彰			102
◆教育統計資料◆			
編集後記			107





50 周年記念誌発刊に寄せて

北海道高等学校教育研究会

会 長 守 屋 開

北海道高等学校教育研究会が発足してから半世紀、50 周年を迎えることができました。本研究会は、昭和 38 年 5 月 25 日に札幌南高校で設立総会が開かれ、翌昭和 39 年 2 月 1 日に札幌旭丘高校を会場として第 1 回研究大会が開催されました。各教科における研究や発信が自由になされ、本道高校教育を前進させたいという発足当時の先生方の熱い想いを実現させるべく奔走された諸先輩に敬意を表します。この間、ご支援いただきました北海道教育委員会、札幌市教育委員会、北海道高等学校長協会をはじめ、全体集会や教科部会でご講演いただきました講師の皆様深く感謝申し上げます。このように、50 周年を迎えることができましたことは、会員の皆様と多くの先輩諸氏が本研究会をつくりあげてきた努力の賜物と感じております。

さて、近年の生徒数減少に伴う影響などにより、本研究会の会員数が徐々に減っておりますが、北海道教育に果たしてきた役割は大きく、全国的にも注目されてまいりました。本研究会は、会員相互の資質を高めあう研修のみならず、各支部・教科部会の振興を図るために、万全の運営に努めているところです。また、各高等学校におきましては、未来を担う生徒を育むために、平成 21 年に告示された学習指導要領の改訂に伴い、平成 24 年度入学生から数学・理科の指導が先行実施されました。平成 25 年度入学生から年次進行の実施に向けて、あらたな教育課程編成の中で、高等学校教育の質の保証も含め、本格的な対応を真剣に進めているところと思います。

本研究会の 50 周年を記念いたしまして、1 月の研究大会では、開会式並びに全体講演で『「はやぶさ」が挑んだ人類初の往復の宇宙飛行、その 7 年間の歩み』と題した川口淳一郎氏のご講演で多くのご示唆をいただき、盛会のうちに終了することができました。また、特別展示では、「はやぶさ」や小惑星イトカワの模型等の展示とともに、「高教研」展も同時に行い、50 年にわたる北海道高等学校教育研究会の教育研究活動を広報しました。なお、14 の教科部会では、それぞれの分野において、新しい知見の紹介や日々実践している教育活動について、意欲的な研究発表や協議が成されております。また、本研究会が長く続いておりますのも、携わって頂きました本部役員、各支部・教科部会役員、本部事務局、そして、いつも積極的にご参加いただきました先生方のご協力の賜物と感謝申し上げます。本研究会の発展に、ご尽力を賜りました皆様のご功労を讃え、この記念誌に功労表彰者として記載し敬意を表しますとともに、心より感謝申し上げます。今回、これらをまとめました 50 周年記念誌を発刊することになり、高教研のこれまでの各支部・教科部会の活動について、研究実績を含めまして検証していただけるものと思います。

「高教研」は、北海道教育の発展という使命を担い、「未来を担う心豊かな生徒の育成」を目指して、今後とも、教員相互の「研鑽」と「修養」に大きく寄与していく所存であります。なお、本誌の編集にご尽力くださいました関係各位に心から感謝申し上げ、発刊のことばといたします。



祝 辞

北海道教育委員会

教育長 高 橋 教 一

北海道高等学校教育研究会が、このたび、創立 50 周年の節目を迎えられ、『創立 50 周年記念誌』が発刊されますことに、心からお祝い申し上げます。

本研究会は、昭和 38 年 5 月、「本道の高校教育を前進させたい」という先生方の熱い思いのもとに設立され、翌、昭和 39 年 2 月、札幌旭丘高等学校を会場に 350 名の会員が参加し、第 1 回研究大会が開催されました。以降、日ごろの授業実践や研究成果などの交流を通して、北海道の高等学校教育の充実・発展に大きく貢献されており、現在は約 2,500 名の会員数を誇る、全国でも類を見ない教科研究会となっております。

本研究会がこのような隆盛発展されましたのは、設立に当たり奔走された先輩諸氏はもとより、その意志をしっかりと受け継ぎ、本会の運営に御尽力された歴代会長をはじめとする役員の方々の御努力、さらには本会を自らの研鑽を深める場として教科指導の一層の充実を目指す会員各位の熱意によるものであり、ここに、深甚なる敬意を表する次第であります。

また、各学校における質の高い実践研究の発表の場として活用されてきました「研究紀要」は、この度、日記念すべき 50 号を数え、それぞれの時代における教育課題の解決を目指そうとする会員各位の御努力の結晶として、本道高等学校教育の大きな指針になるものであります。

さて、今日、経済を中心とするグローバル化、少子高齢化や情報化が進展し、社会が急速に変化する中、将来を担う子どもたちには、高度化・複雑化する諸課題に対応していく資質・能力を身に付けることが求められております。

このため、学校教育においては、基礎的・基本的な知識・技能の習得はもとより、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力、豊かな人間関係を築くコミュニケーション能力などを育むことが重要であります。

特に、高等学校においては、義務教育を修了した生徒の自立に向けて、最低限必要な能力を身に付けさせるとともに、生徒の適性や進路希望等に応じて必要とされる能力を身に付けさせることが必要であります。

このようなことから、高等学校には、中学校との緊密な連携の下、生徒の情報や学校の指導内容等を共有し指導の充実を図ることに加え、高校間をはじめ、特別支援学校、大学との連携を学校の実情に合わせて推進し、教育活動の一層の充実を図ることが大切であります。

こうした中、本研究会が「未来を担う人を育む北海道高等学校教育の創造」を主題として、確かな学力の育成や新学習指導要領の実施など当面する課題解決をも含め、各教科の立場から本道の高等学校教育を前進させようと願う使命は極めて大きく、会員各位の研究に寄せられる期待は大変大きいものがあると思っております。

結びに、会員の皆様には、記念すべきこの節目を契機に、本研究会がこれまで果たしてこられた役割を改めて思い起こし、本道の高等学校教育の発展のために、今後一層の研鑽を重ねられますようお願い申し上げますとともに、本研究会が、ますます御発展されますことを心から祈念申し上げ、お祝いの言葉といたします。



祝 辞

札幌市教育委員会

教育長 北 原 敬 文

このたび、北海道高等学校教育研究会が創立 50 周年を迎えるに当たり記念誌を発行されますことは、誠に意義深く、お喜び申し上げます。

本研究会は、昭和 38 年に発足以来、今日に至るまで、日常の教育実践を基盤としながら着実に研究実績を積み重ねられ、本道の高等学校教育の充実・発展に多大な貢献をしてこられました。50 年の長年にわたる会員の皆様の熱意と真摯な努力に対しまして、深く敬意と感謝の意を表します。

さて、高等学校教育の多様化の進展に伴い、これまで様々な教育改革が進められてきております。高等学校への進学希望者については、本研究会が発足した昭和 38 年はいわゆる「適格者主義」の考え方を採っていましたが、その後の見直しを経て、特別支援学校高等部も含めた後期中等教育機関全体で受け入れられるよう適切な受検機会の提供などの条件整備が進められました。平成 22 年度からは公立高等学校の授業料無償化及び就学支援金制度が創設されるなど、家庭の経済状況に関わらず、全ての意志ある生徒が後期中等教育段階での学びの場が保障されるよう支援の輪が広がっています。また、単位制高等学校や総合学科などの新学科の創設、中高一貫教育制度の導入、学校間連携や学校外の学修による単位認定の拡充など、生徒の興味・関心、能力・適性、進路等の多様化に応じて、学びの場の多様化と選択幅の拡大が進められてきました。さらには、不登校・中途退学経験のある生徒に対する重点的な支援や基礎・基本の定着のための取組を始めとして、多様な生徒の実情に応じた特色ある学校づくりが進められております。

このような中、札幌市では、「教育推進目標」として「未来を切り拓く人間性豊かで創造性あふれる自立した札幌人」を掲げ、ふるさと札幌に根ざしながら国際的な視野を持ち、未来を志向する創造的で心豊かな自立した社会人を生涯にわたって育成する取組を市民ぐるみで進めております。その中で、中央教育審議会初等中等教育分科会高等学校教育部会の審議にもあった「社会・職業への円滑な移行に必要な力」の育成を図るとともに、そうした力を自ら求める意欲の醸成を図る「進路探究学習」を「高大連携」の取組を含め、市立高等学校教育改革の施策の一つとして取り組んでいるところであります。札幌市としては、中央教育審議会の審議等の動向も注視しつつ、これまでの取組の成果と課題を明らかにしながら、今後の高等学校教育の一層の充実に向けて、改革と創造の取組を進めていくことが必要であると考えております。

本研究会は、このような高等学校教育の改革が進展する中、「未来を担う人を育む北海道高等学校教育の創造」という研究主題の下、時代の先を見据えた研究を続けられ、教育現場での実践にしっかりと根ざした優れた研究を発表されております。これは、本研究会がまさに本道の高等学校教育の研究の中枢を担っていることの証であり、今後とも本道の高等学校の実践的な研究の先導的役割を担っていただくことを期待しております。

このたびの本研究会の創立 50 周年を契機とし、会員の皆様の一層の研鑽と、本道の高等学校教育の充実・発展のためのお力添えをお願い申し上げましてお祝いの言葉といたします。



祝 辞

北海道高等学校長協会

会 長 山 本 伸 弘

この度、北海道高等学校教育研究会が創立 50 周年を迎えられましたことは、誠に喜ばしく、心からお祝い申し上げます。この 50 年間、本研究会は北海道の高校教育を担う教員の研修の場として、研究成果の発表や授業実践等の交流を行い、北海道の学校教育の充実・発展に寄与してまいりました。これまで、本研究会の充実・発展にご尽力された歴代会長はじめ、役員及び会の運営にご努力いただいた先生方、並びに会員として研究会に参加された先生方に深く敬意を表するとともに、心から感謝申し上げます。

昭和 38 年 5 月、本研究会は「高等学校の各教科などに関する事項を研究し、会員相互の研修と識見の向上につとめ、高等学校教育の振興を図る」ことを目的として創立され、以来、毎年 1 月上旬に全体集会及び教科部会が開催されてきました。本研究会の会員数の規模や研究大会・研究紀要の内容は全国に誇るものであり、本道高校教育の研究の中核を担ってきた役割は極めて大きなものがあります。

本研究会の発足当時 60% 台であった高校進学率は年々上昇し、そのため中学校から進学してくる生徒の学力の実態に応じた教育課程を編成する必要性が生じ、1970 年以降、履修単位数・必修単位数の削減や、主要教科の生徒の学力に応じた設定、選択性の拡大など、学習指導要領の改訂が行われてきました。現在、高校進学率は 98% という状況になり、高校で学ぶ生徒は、高等教育への準備教育を求める生徒や、就職に必要な専門教育を求める生徒、義務教育段階の学習内容の定着を必要とする生徒など、様々であります。これまで大学入試の選抜機能が生徒の学習意欲を導き、受験勉強により高校教育の質の保証を保ってきた側面がありました。しかし、選抜制の高い一部の大学を除き、全体的に大学の選抜機能が低下している現状において、高校教育の質の保証は、「中学校における教育の基礎の上に、心身の発達及び進路に応じて、高度の普通教育及び専門教育を施す」という高校教育の目的を踏まえ、高校が主体的に取り組むべき課題となってきました。

このような中、第 6 期中央教育審議会における初等中等教育分科会高等学校教育部会では、高校教育の多様化の中で共通性をどのように捉え、生徒の学習進度や理解に応じた主体的な学びの仕組みをどのように構築していくかについて議論され、その内容は、第 7 期中教審に引き継がれることになりました。高校を中心とした審議会は、総合学科や単位制という制度を誕生させた平成 3 年以来であり、踏み込んだ提言が予想されます。

高校では、平成 25 年度入学生から新学習指導要領による教育課程が学年進行で本格実施となり、教育基本法の理念を踏まえた「生きる力」を育成することが求められています。これからの変化の激しい社会を生きていく子どもたちには、自分で考え、判断し、行動する力が必要となります。そして、それを支えるのは、学校で身に付けた知識・技能、思考力・判断力・表現力といった学力であり、その根底にあるのは主体的な学びへの意欲です。子どもたちが、未来に向かって自らの人生を自らの手で、切り拓いていこうとする意欲を育てていくことが主体的な学びへつながるものと考えています。

創立 50 周年を迎えられた本研究会が、このような高校教育の課題や教育改革の方向性を踏まえ、会員の一層の研鑽の場となり、これからも全国に冠たる「北海道高等学校教育研究会」として力強く歩まれますことを祈念し、お祝いの言葉といたします。

50 周年を迎えた高教研と共に

第 14 代会長 島 隆

高教研が 50 周年を迎えました。私の高教研会員・事務局員・事務局長・会長、そして顧問としての 47 年間を改めて振り返ってみますと、そのほとんどが高教研の 50 年の歴史と重なります。その関わりは昭和 42 年第 4 回高教研から始まります。苫小牧東高校 1 年目の新米教員だった私に能勢元彦教頭（後、札幌西高校長）から「イデオロギーの対立が激しい中だが、『教師が専門職である以上、教職についての専門的知識、技能が必要であることは言うまでもない。加えて、教え上手は必ずしも良い教師ではない。子どもの心に食いつく人間性を持った教師が本当の教師ではないか』。そのために今勉強し、視野を広げなさい」と指導いただき、静修高校で開催された全体集会に参加、教師としての未熟さが目立つ私は視野を広げる大切さを学びました。この思いは第 5 回大会での細谷俊夫氏の講演「わが国の中等教育」でも強くしたことを今も記憶しています。

第 8 回から 11 回大会は旭川北高校からの参加、地方からの参加は自費参加がほとんどでしたが、自分の狭い視野を広げるきっかけを得て、日々の教育実践を見直し、改善へのヒントを得ることができました。

昭和 49 年度に札幌藻岩高校へ転勤、8 年間の大会参加を通して、多くの人との出会いから等身大の自分を知り、欠落した部分に気づき、「授業はあいまいを上手に教えるより、真実を下手に教える方がよい。感動が人を育てる」という改善の手がかりを掴むことができたように思います。

昭和 57 年度から 10 年間、札幌旭丘高校で高教研事務局員の一人として会員 6 千人超を有する会の運営をお手伝いすることになりました。この期間で特に印象に残っているのは第 20 回記念大会の黒川紀章氏の講演「共生の時代」でした。生徒にどう対するかという教師の姿勢の在り方に大きな影響を与えてくれました。

その後、3 年間旭丘高校を離れましたが、平成 7 年度に再び旭丘高校勤務、綾井健二校長の下で高教研事務局員として 3 年間会の運営にあたりました。会員数の減少による高教研の財政面の問題点が表面化し、事務局員の協力を受けながら本部事務局や全体集会の在り方など立て直しに着手しました。その結果、第 36 回大会の午後はシンポジウム開催、第 37 回大会からは午後の開催となり、現在に至っています。その 3 年間の中で忘れられない大会は、平成 8 年の第 33 回大会でしょう。全体集会前日 9 日、準備のこの日は記録的な大雪でほとんどの交通機関はストップ状態でした。そんな中、講師の河合雅雄氏が名古屋から長靴姿で無事到着された時には本当に安堵の胸をなでおろしました。そのような天候状況にあっても 3 千名を超える参加者があったことに感激しました。素晴らしい会員の皆さんに支えられた高教研であることを実感しました。

第 35 回大会を終えて旭丘高校を離れましたが、3 年後に三度の旭丘高校勤務となり、第 39 回、第 40 回大会を会長として携わることになりました。その第 40 回記念大会は思い出多い大会でした。その一つは、全体集会の講師として五木寛之氏をお迎えし、「日本人のこころ」と題する講演をいただいたことです。五木氏のある基調講演で「乾ききった社会に何かの清冽な水、水分、湿度というものを注がなければいけない。水にあたるものは、例えば情という言葉ではないか。…感情、情念、情動といったもの」という言葉に接し、是非お話を聞きたいという思いが強くなり実現させることができました。もう一つは、完全学校週五日制の下で、学校がゆとりの中で特色ある教育を展開し、全ての生徒に基礎・基本の教育内容を確実に身に付けさせ、自ら学び、自ら考えるなどの「生きる力を育むこと」を基本的なねらいとする新学習指導要領が施行されることを受けて、大会 3 日目に道庁赤レンガ庁舎で沢山の参加者を得て新部会「情報部会」が開催されたことです。この部会創設は当時の札幌拓北高校五十嵐勝彦校長の多大なご尽力と設立発起人となられた先進的な 17 名の先生方の協力により開催されました。設立の関係者に敬意を表すると共に感謝申し上げます。

北海道の高校教育の充実のために主体的で自由な研究や研修を行う組織として高教研は発足、関係者の理解と努力により全公立・私立高校 14 教科 24 科目の教員が一堂に会して研究会が行われるようになりました。「教育は人なり」と言います。教師は教育者としての使命感、生徒に対する深い愛情、教科に対する専門的知識、広く豊かな教養を基盤とした実践的指導力がより求められています。高教研は、50 年の伝統と実績を力としてこれからも実践的指導力を培う場としての役割を果たし続けることを願っています。

文末になりますが、高教研の 50 周年を祝し、全ての高教研関係者のご発展をお祈りします。

高教研 50 周年に寄せて

第 15 代会長 青 塚 健 一

いま縁あって教員を目指す大学生相手に、魅力ある講義を模索しながら日々奮闘しています。厳しい躰を無理強いしているのが煙たがられているのは承知で、プロ教師の卵を育てています。本当に子どもが好きで、「研究と修養」を普段着で受け入れ行動できる教師を育てるため、工夫をこらしたプログラムを創造し実践しています。

さて、私は札幌新川高校を最後に退職して3年が経過しました。在職中は道校長協会主催の「北海道高等学校教育研究会」の会長を3年間勤め、教員生活最後の貴重な経験をさせてもらいました。北海道内の公立高等学校教職員の「研修と識見の向上につとめ、高校教育の振興を図る」研究会となるように役員一丸となって推進してきたことが大きな思い出になっています。そこから10年経過し、今年50周年という大きな節目を迎えたことに対して、感慨深いものが脳裏に浮かびます。

ふり返ってみると、旭丘高校の教職員は「厚生年金会館（今はニトリ文化ホール）」で、年始の挨拶を交わしていたことになります。年明けの最大行事として、高教研事務局校として手際の良い業務さばきに感謝していました。事務局校の話題もありますが、変更することは高教研そのものと大きく関わってくるものですから不可能です。事務局校旭丘は、会員の皆様に対して奉仕的に業務をこなしていることはご理解下さい。

一日目の全体会では、開会式後に「全体講演」があり、参加される先生方の期待を裏切らないようにビッグで最前線に活躍する先生を招聘することが至難の課題でした。H13～14年の2年間は、島会長さんの下で事務局長を務めていたのですが、ちょうど「高教研40周年」にあたり記念講演として「五木寛之（作家）」先生を招聘しました。このとき全道高等学校の図書館に、五木寛之先生の本を配布したことを思い出します。島会長さんの後任として、私が3年間高教研会長の大役を務めることになり、身の引き締まる思いで事務局校職員の協力、高教研役員の皆様の協力を得て、「高教研」の更なる発展を目指して一路邁進しました。在任3年間も少子化、統廃合問題が迫っていて、会員数の維持確保に全力を注ぎました。また、新教科「情報部会」が一人前となったり、会員登録もインターネットで集約、さらに本部役員として私立高校からの副会長さんを一人増員となり今日に至っています。私の3年在任中の全体講師の先生についても思い出があります。それは、①第41回（H15年）毛利衛〈宇宙飛行士〉、②第42回（H16年）寺島実郎〈三井物産戦略研究所長〉、③第43回（H17年）吉村作治〈早稲田大学国際教養部教授〉と3人のビッグな先生方をお招きして、全道各校の先生方の士気を鼓舞してきました。

最後になりますが、時代の趨勢とはいえ毎年学校が消えていくことに対して寂しさを感じます。特に、札幌においても「あすかぜ高校」の誕生、4月から新設の「英藍高校」が誕生しますが、その陰には大規模校であった4校が消えているのです。そのような中で「三笠高校」は市立高校「調理コース」で大人気を博していたり、「別海高校」はコミュニティスクールとして学校運営が注目されています。いま、教師に求められている「教員の資質と能力の向上」を推進していくためには、50年という伝統・歴史に物語る「北海道高等学校教育研究会」を会員相互の協力を得て、益々信頼ある研修の場として築き上げていかれることを期待しています。

50 周年記念誌によせて

第 16 代会長 金 間 正 克

本研究会は、昭和 38 年（1963 年）に設立され開校 5 年目の札幌旭丘高校を会場として開かれた。第 1 回の参加者は 350 名、現在の 7 分の 1 の規模であった。以来今日 50 周年を迎え、よく成長してきたものと思う。その背景には、会員各位の高教研に対する強い熱意があり、さらにこの間事務局を営々と続けてきた旭丘高校の努力によるものと言える。私も旭丘にきた以上という半ば開き直った気持ちはあるものの、やはり使命感が先にたち継続できたものと思う。

短い在任期間であったが幾つかの思い出を紹介させていただく。

一つは平成 18 年秋から 19 年にかけて嵐のように高校教育界を席卷した「未履修問題」であった。全国で 663 校、10 万 4 千人（文科省発表）の生徒が学習指導要領で定められている履修すべき科目を履修していなかったと厳しい調査の結果結論づけられた。その結果放課後の補修授業や大学受験間近の冬休み中の特別授業、レポート提出等がなされた。確かに高校側によるルール違反や虚位の報告は改めなければならない。同じことを決して繰り返してはならない。同時に混乱によって多大な迷惑をかけてしまった生徒の皆さんに対し、心よりお詫びしなければならない。だが、この問題は根本的には解決されていないのではないかな。なぜなら今日の高校とりわけ普通高校が大学受験のためにあるという切ない現実の前に有効な手段をもっていないからである。道内で指摘された学校の多くは、いわゆる進学校で彼らの学力は前へ前へと進むことができる生徒だ。本来高校で教えるべき内容を単一化するのではなく柔軟に弾力的におこなうべきであろう。

二つ目は、エピソードのような話である。在任中高教研のホームページを見たと言ってよく他県から電話が入った。また全国高等学校校長会の総会でも同じ趣旨の質問を受けた。趣旨とは他の都府県では信じられない組織でありなぜこのような研究会が成立し得るのかと言うものであった。それこそ私たちが目指してきた全道一本の組織と研究内容の実態を問うものであった。「どうだ。凄いだろう。」と胸中に秘めながら電話口であるいは総会の壇上で淡々と答えたものだった。もう一つさらに個人的な思いであるが、全体講演の講師の招聘、これが最も大変であった。重要であるから大変なのだ。文系、理系、流行、知名度、日程、テーマ、費用そしてなにより話のおもしろさを重視し決めなくてはならない。これまで 75 名を超す講師陣のなかには「はずれ」がなかったわけではないことを考えると、この重圧は結構なものであった。でも楽しかった。

終わりに高教研の 50 周年に際して「今一度初心に帰る」ことについて記したい。そのタイミングなのかもしれないと思っている。高教研の使命について、会則の第 3 条に「本会は高等学校の各教科などに関する事項を研究し、会員相互の研修と見識の向上につとめ、高等学校教育の振興を図ること」とある。さらに高教研初代会長、梶浦善次先生は「よき教育者は常に自らを教育する者でなければならない。」と述べている。この言葉は不易である。過去に身に着けたものを吐き出しているだけでは悪しき意味における教師、教育技術者にすぎない。私たちは新しい知識に謙虚に感動し、勇気をもって工夫してみる気概が必要だ。

今年度の会員数は約 2 千 5 百人、ここ 5 年で 5 百人減である。正直に言うならば組織としての危機感を感じているのは私だけではないだろう。研究会が正しく成長するためには二つの条件が必要だ。一つは「学問の自由」が保障されることであり、他の一つは「財政的基盤」の確保だ。その意味で会員数の維持、拡大は重要な課題であるがそのためにはより魅力的な研究会となるよう会員一同、鋭意努力していきたいものだ。

高教研とともに

第 17 代会長 宮 浦 俊 明

北海道高等学校教育研究会が今年度 50 周年を迎えたことを心よりお祝いを申し上げます。半世紀の間、多くの北海道の高校教員は高教研でさまざまな知的な刺激を受け、各自の教科指導力を向上させてきました。

私が教員になって初めて参加した研究会も高教研でした。厚生年金ホールでの講演が午前と午後の 2 回ある時代です。最初の赴任校は道北の美深高校でしたので、二日目の教科別集会の午後、天候が荒れてくると落ち着かなくなる先生方の気持ちがよくわかります。

20 代の終わりごろ、高教研で発表する機会を得ました。資料も十分そろえることができず、印刷も不鮮明なところが多く、参加者を戸惑わせてしまいましたが、高教研の研発は教員としての大きな自信になりました。その後 10 年にわたって、教科部会の運営を仰せつかることになりました。

運営委員はテーマの選定、講演者の選定・依頼、また当日の研発者や司会・記録の依頼など、6 月頃から 1 月まで間断なく仕事が続くものでした。講演者の思い出は多くありますが、私は何といても樺山紘一氏（西洋史）で、話のスケールが大きく、お酒が強く、教科指導に大いなる力をもらいました。高教研は 1 月の第 2 週の開催ですので、この時期は何よりも天候が心配で、講師を千歳空港に迎えに出て、雪で遅れた飛行機を夜遅くまで待っていたこともありました。そんな私がやがて旭丘高校へ転勤となり、高教研事務局を担当することになりました。その最初の仕事が高教研 40 周年の記念大会でした。全体講演の講師は五木寛之氏でした。五木寛之氏は北海道の高校の先生が三千名も会員となる大会の意義を理解し講演を引き受けてくれました。その後、46, 47, 48 回大会は会長として運営に携わることになりました。会長としては全体講師の依頼が重要な仕事でした。高教研の会員数が減少し、すべての教科を網羅する北海道独自の研究会の意義もなかなか理解され難くなる状況下で引き受けてくれた講師の皆さんに感謝する 3 年間でした。

高教研は社会の変化とともにその姿を変えてきていますが、今も発足時の初代会長梶浦善次氏の「高校教育を前進させようという意欲を持つ人々によって結成されたものである。」（昭和 39 年研究紀要第 1 号）という思いに支えられています。第 1 回大会から 50 年に渡って高教研を支えてきた事務局校の旭丘高校の教職員の皆さんの思いも同様であり、頭下がる思いです。また、全道の支部校の皆さん、教科部会の皆さんの手弁当の力が、50 年のゆるぎない歴史を持つ研究会を支え育ててきました。感謝、感謝です。

高教研は北海道の高校教育の誇りです。戦後の混乱した社会が落ち着きを見せ日本が新たな道を模索し始めたとき、高教研は産声をあげたのです。51 年目からの高教研の研究活動は革命的ともいえる今日の変化の中で、次の世代のための新たな指針を生み出す力となるでしょう。

全体講演この10年

(講演要旨)

宇宙の視点からの教育

宇宙飛行士 / 日本科学未来館館長 毛利 衛 氏



南極に行き「日蝕」を見て、41年前に網走でみた日蝕を思い出した。その一瞬が今の自分の起点となった。自分の役割は経験を繋ぐことで、宇宙を実際に見て、教育への考えを述べたい。

宇宙と地球の違いは何か？まず空気がない。重さがない。全く違う環境では、それまでの常識が通じなくなり、違う視点で物事を見るようになる。

宇宙で見た太陽は、無機質なエネルギーそのもの。宇宙は真っ暗ですべてが吸い込まれそう。スペースシャトルから地球を見ると、人の存在が見えてこない。陸地の森林と海の珊瑚礁しか見えない。太陽の光がなくなると街がネットワーク状に繋がり、人間の存在が見えてくる。

昔は「国」単位で色々なことが起こっていた。今は携帯電話で「個人」が世界中から情報を受信し、発信できる。この大きな流れに沿って世の中は変わっている。その大きな力が科学技術である。

地球は大气によって守られていることは、生命維持装置を持って初めて実感した。それは大変微妙なバランスで保たれている。昨年、火星が6万年ぶりに地球に大接近し、米国がロボットを着地させた。薄い空気の間層があり、生物がいるかもしれないが、教育を考える生命は地球以外には存在しない。

教育を普遍的に見ても良いのではないか。ゲノムが昨年解読された。すべての生命はたった4つの塩基の組み合わせ方が違うだけである。地球全体のことを、教育を含めて考える社会への視点が大切ではないか。

学校の役割は、まず、「社会に適応するための基礎能力を与える」ために義務教育が、次に「個の優れた能力を引き出す」ために高等教育がある。中高では2番が大切。

イチローの活躍にみんな触発されて頑張るようになった。新しい環境に挑んだ者は多くのリスクを被るが、次に続いていく。個が挑戦し成功するとそれが全体に広がり、全体のレベルが向上していく。教育もそれと同じ。

高教研は全教科にまたがり幅広く、大きな意味を持つ。個をどのように伸ばすか、そしてその情報を全体にシステムとしていかにひろめるていくのが大切である。

世界潮流と日本および北海道の進路

三井物産戦略研究所所長 / 日本総合研究所所長

寺島 実郎 氏



道産子で、多感な時代を札幌で過ごした。時代を考えるヒントになる話がしたい。

世界経済の中で日本はどこにおかれているか。21世紀に

なって発展途上国も含めた実質GDPが異様な右肩上がりに成長している。これは世界のバランスを考えると高すぎる。日本経済が成長力を取り戻しつつある要素は2つある。1つは大企業のリストラ要素。利益が上がる体質をつくり、そぎ落とした部分を中小企業が抱えている。もう1つが、「アジアに依存する日本」、とりわけ中国に依存し業績を回復している。中国経済を「生産と消費」の視点から触れたい。生産だが、例えば粗鋼生産の増産。それでも足りず鋼材輸入している。尋常ならざる建設開発ブームの中を走っている。日本の4倍の高速道路を持つ国。異様な熱気の中にある中国。消費だが、理屈に合わない勢いでモータリゼーションが進んでいる。これを考えるヒントとして、「人口パワーと富裕層の台頭」に行き当たる。5千万人の購買層。「巨大な消費社会」の扉が開き始めた。国民経済の拡大の異様なスピードによって内包する矛盾、問題点を覆い隠して走り抜ける瞬間が見える。

中国を考えるキーワードに「大中華圏」がある。中国、香港、台湾、そして人口の6割以上が華僑で占めるシンガポールを加えて4つの国と地域の有機的な連携体。海と陸がシンクロナイズしはじめた。わが国の貿易、生活、産業基盤が、アメリカ依存から、この数年間で「大中華圏」依存に様変わりした。21世紀はアジアダイナミズムとその中核にある「大中華圏」が裏と表を反転させる。

自信を取り戻したロシア。存在感を高めつつあるロシアに対して日本はどう向き合うのか。そして「急速に疲弊するアメリカ」を目撃しなければいけない。イラク戦争後、ドルは下落し、アメリカの信任の揺らぎもすごい。世界の投資家はアメリカだけでなく、アメリカをよみがえらせる産業論的、技術論的要素は何なのか？全くはてなだ。少なくとも、アメリカだけにお金流れ込む構図から転換したことは間違いない。

夢の実現の仕方

早稲田大学国際教養学部教授 吉村 作治 氏



昨日札幌に入り、久しぶりに雪を見た。イスラム教の巡礼月。この間何人もの人がそこで死んでゆく。みな幸せそうな顔をして死に、「よかった、よかった。神に

感謝しなければいけない」と言う。人間の死を一概に悲しいことだと思うのは間違いだという気がしてくる。

エジプトに憧れたのは 10 歳の時。50 年以上もエジプト一筋に生きてきた。エジプトの神と私は赤い糸で結ばれている気がする。

子供の頃、運動神経が鈍く、私を仲間に入れると試合に負けるという評判になり、仕方なく図書室に行った。司書の先生に伝記を薦められた。「伝記には人生が書いてある。これはいいなと思う人生を真似する」といい。伝記になる人は絶対成功している。うまくいかなかった時の乗り越え方が書いてある」と言ってくださった。

「神話は真実だ。でも事実とは違う。だから神話をしっかりと読めば真実から事実を復元できる」と思う。シュリーマンは、その「神話」を信じた人だった。

ハワード・カーターの伝記、『ツタンカーメン王の秘密』という本に出会った。「ツタンカーメン王などない」と言われていた時代に、カーターは、ツタンカーメン王の墓を発見した。読み終えた私はこれだと思い、担任の先生に「エジプト考古学者になります」と言ったら、「バカ、まともに勉強しろ」と叱られた。「やってやろうじゃないか」と逆に思った。

小学校では一生懸命勉強して、中学校はしかるべき進学校に入った。しかし、私はそこでつい有頂天になって、三浪までして、やっと早稲田大学に入学した。

私の三浪は、ある意味ラッキーであった。この年から、観光目的の海外旅行が自由化された。航空会社に交渉したが、断られた。最後の望みは石油を運ぶタンカーに、ただで乗せてもらうことだった。その社長は快諾してくれた。この年社長のお嬢さんが早稲田に入学したからだった。夢を実現するには、まず人に頼ることだ。

若者を力強く社会に送り出すには、夢を持たせること。自分で何かを探した奴は強い。何があってもそちらに向かう。荒っぽく言うと、夢の実現の仕方などは教えようがないが、夢を持てる環境を作ってやるのが大切だ。

私は学生に生き方を教えている。具体的には失敗談という自慢話を語っている。失敗談には普遍性がある。失敗談を自慢できるには、その後何かを実現するしかない。若い人が夢を実現するには、年長者からたくさん失敗談を聞くことだ。

サウンド オブ サイエンス

ジョン・ネイピア ～ 対数誕生物語

河合塾、早稲田塾、数学講師

/sakurAi Science Factory 主催 桜井 進 氏

今日の講演は、400 年前と現代とがネイピアという男の努力によってつながっている話だ。

「指数」は、現在、あらゆる電子機器に係わるが、私も回路計算から興味を持ち、「数学」や「物理」の世界にのめりこんだ。高校で「指数」から「対数」の書き換えを習ったが、その意義や目的がわからなかった。しかし、日本評論社の『百人の数学者』を読み、ネイピアが「指数」のない時代に「対数」を考え出していたことを知り、それ以来頭から離れず、大学も数学科へ進んだ。



ネイピアは、1550 年、「大航海時代」の真只中にスコットランドで生まれた。当時、航海は、経度を算出する正確な時計も暦も、また、天文学的計算法もなく、海難事故が絶えず、多くの船乗りが犠牲になった。その膨大な計算は「天文学者の寿命を縮めた」といわれた。ネイピアは、44 歳のとき、その克服に着手し 20 年の歳月をかけ『Description』を作り上げた。計算法は、「掛け算」を「足し算」にするもので、「指数」も「少数点」もない時代に考えついた。この「対数」は、ケプラー、ニュートンへとつながり、産業革命を経て、現在につながっている。

この 20 年の研究のラストは「対数表」の完成だ。彼は、8 桁の「対数表」を作り上げたが、そのために 13 桁、14 桁の計算を 10 年以上かけて行った。学者でも、宗教関係者でもない者が、『Description』を発表したことで、バッシングの嵐だった。しかし、ブリッグスだけは、その重要性に気づき、運命的な出会いを果たす。実は、ネイピアの「対数」には問題点があり、新しい「対数」が考案された。それが「常用対数」だ。

ブリッグスは、対数の計算に対する利便性に気をとられ、本当のすごさについてはわかっていなかった。その「対数」の本質、「無限多価性」を明らかにしたのは、オイラーだった。

私には、富士山の稜線に指数関数「 $y=ex$ 」、その逆さ富士に対数関数「 $y=\log ex$ 」が、重なって見える。「知覚」や「音律」の中にも「対数」を見ることができる。現在、「対数」は、計算機としての役割は終わったが、ネイピアの「対数」は、ブリッグス、オイラーと引き継がれ、現在では携帯電話の中に引き継がれている。ネイピアの「数のトンネル」は 400 年の時を越えて、私たちにつながり、私たちを支えてくれている。

ニュースの嘘と教育

慶應義塾大学経済学部教授 金子 勝 氏

メディアの情報操作は今もたくさんあるが、政治側は、メディアが流すやり方を熟知して操作をする「メディア政治」が出てきた。人が共感できる手段は「単純化する」「ずらす」「たたく」「繰り返す」の4つである。映像メディアは、見ている側は受動になるが、活字メディアは、読者側に主導権がある。映像メディアは、インパクトはあるが、情報が単純化されて、夥しい数の人に伝える能力がある。しかし活字メディアは、論理的な情報は伝えるが、深い情報ほど範囲が狭くなる。

メディアが横行する時代では、嘘を見抜く力を求められる。今、世界は「軍事」「エネルギー」「通貨・金融」を基軸に大きな転換期にある。我々は、これから始まる大きなバブル崩壊により、今まで進めてきたグローバルスタンダードが脆くも崩れていくのを目の当たりにする。

世界の市場では、「ある原理に従って追求していくと、その原理とは正反対に行き着く」という事態が進んでいる。時代の変わり目というのはそういうものである。目先しか見えない人間は、尚も昔の原理で説明しようとするが、昔の残像では今の時代に合わない。

イラク戦争から世界の構図は大きく変わり、世界の流れは急激に変化し、多極化と不安定の時代に入ってきている。我々は、どこに新しい社会を構成する基軸があるのかを積極的に語らなければならない。

今の世の中、現状維持では、若者には何の未来もない。私たちは、社会の新しい価値の創造者でなければいけない。古いものを守る説教者では、教師は自らの命を縮める。言葉を抽象的に議論する前に、行ったことも見たこともない人たちが立てた政策の滅茶苦茶ぶりに「やっていけるのか」という言葉の強さを、私たちは現実によって取り戻さなければならない。私たちは、現にある問題を解決するために学問をし、教育をし、教育を受ける。

最後に、私たちは一からやり直すとしたら、大地から再出発するしかない。北海道経済は苦しいけれども、その中で苦闘しながらも、新しい価値を実現しようと努力している人たちが数多くいる。その人たちこそが、次の時代を担うことができ、多くの若者にそういう精神を持ってもらうことが私たちの役割である。そう考えると、生きるモデルとは、最後尾にいる人がやがて先頭になるという夢見ている人たちの姿を見せることではないか。

私たちは、教育に未来を持たせるために、私たち自身の夢というものを見いだしていくことが必要である。『人生努力すれば必ず報われる…こともあれば、報われないこともある』



アイデアの発見

作家 阿刀田 高
朗読家 阿刀田 慶子

子どもの頃、獲物をくわえる猫を見て、虎と同じ獐猛な動物という感じがした。小説家として短編小説を書いているが、ほとんどアイデアを軸に書いている。『干魚と漏電』のヒントは、マンションのベランダにあるコンクリートを割ったら、中から死体が出てきたという新聞記事である。家の中には、秘密が隠れている。冷蔵庫も小柄な女性は隠せると知り、冷蔵庫に死体を隠す作品を書いた。コンクリートに人を詰め、川の中に投げてもしばらく経つと割れて死体が出てくる。それを知ると橋も新幹線も心配になるが、コンクリート協会の講演で、それはやる人が下手だからだと笑われた。鍵も不思議で、かけると安心だが、泥棒は簡単に開ける。この矛盾が面白い。男女の愛、夫婦の愛もかなり怪しい。鍵はスペアキーが作れる。夫が亡くなるとすぐにスペアをお連れになる奥様もいる。

私はアイデアを必死に求めてきたが、それは小説を書くため、普通に生きていく上で関係ないと思っていたが、ある時から共通の面が多いと感じるようになった。聖徳太子が和を持って尊しとなすと言った。素晴らしいことだが、和を保つことが目的となり、はっきり意見させないのはい良いことではない。日本人は特異なアイデア、一つの社会が持つ考え方とは別な考え方を表明することがためられる。グローバル化で、変化していく社会に残っていくために、アイデアが必要で、今までと同じようなことをやっていては生き残れない。私が小説について考えてきたアイデアも結構利用価値があると思う。その基本は、別の角度でものを見ることである。小説家は今までと同じ見方でものを見ていたのでは新しい小説にはなりにくい。向田邦子さんの小説に、奇想天外なことは何もないが、独特の視点で、人間関係が鮮やかに浮かび上がってくる。別な角度からものを見ることはとても大切だ。

白川英樹さんも田中耕一さんもノーベル賞の記者会見でセレンデピティと言っていた。偶然の発見と言ったら良いのか。生徒の中に大変優秀でありながら100点を取れないという人がいる。私はそういう子のほうが可能性があると思う。才能の育成としては理屈がわかることはもちろん大切だが、別な好奇心が色々あった方がいい。私はやはり国語力を培うということはとても大切だと思う。私はかなり強固な小学校英語教育反対論者である。

セレンデピティに恵まれるためには、私の小説をお読みにするのがよい。特殊なものの考え方があるのだということを垣間見るには少しは役に立つかもしれない。



科学のおもしろさをどう伝えるか

青山学院大学理工学部化学・生命科学科教授

福岡 伸一 氏

「動的平衡」は生命のあり方、環境のあり方、社会のあり方を解くキーワードになる。ロサンゼルスとヴェネツィアの2つの絵には、それぞれに解釈があったが、その2つが1つの絵だと判明すると解釈が変わった。ものを見たり考えたりするとき、ある部分だけを切り取ると、全体を正しく捉えることができない。人の認識の落とし穴である。



1600年代、レーウエンフックは、顕微鏡を作り、ミクロの世界を観察し、還元論の先駆者となった。今日、生命現象は、「機械論」的な考え方が主流である。私は昆虫少年で、新種を発見し図鑑に載せるのが夢だった。大学では、分子生物学を学び、遺伝子の森で、沢山の新種の遺伝子を捕まえた。その一つにGP2遺伝子があり、その役割を突き止めるため、ノックアウトマウスを作った。しかし、異常が発現せず、その理由を考え始めた。

シェーンハイマーは、生物は「生きる」ために、なぜ食べ続けるかを研究し、「生きている」とは、「分子が絶え間なく合成と分解し、循環している状態」であることを明らかにした。この構成要素が絶え間なく入れ替わり、全体のバランスを保つ状態を「動的平衡」と呼ぶ。

細胞や分子は可変性や柔軟性を持っており、GP2遺伝子が無ければ、周りの遺伝子はその欠落を補って全体のバランスを保とうとする。身体の各器官も互いに連携しており、鼻という機能だけを切り取ることができない。

人の死とは、人を構成する全ての細胞が動的平衡状態を失った時である。しかし、現在は、脳死が人の死と見なされており、人が人として認められるのは脳波が生じる27週目ぐらいとする議論がある。つまり最先端医療は、両側から寿命を縮めているともいえる。

生命現象を動的平衡とみるか、機械論的にみるかは、身の回りのことを見直すきっかけになる。花粉症に効く抗ヒスタミン剤にも当てはまる。

最近、GP2が、「細菌受容体」の役割を果たしていることがわかり、動的平衡は、柔軟性や可変性の陰に、脆弱さが潜んでいることがわかった。狂牛病は、生命現象・生態系が動的平衡にあることを見失い、絵を切り取るように、効率や経済的な合理性だけを考えた結果、地球上に蔓延した「人が牛を狂わせた病気」といえる。

科学の面白さは、どこにあるのだろうか。

1つは、「アンサンブルヒーロー」を見つけることが、科学の面白さにつながっていくのではないか。世の中は動的平衡状態にあり、その「つながりに気がつく」ということも科学の面白さを伝えることになるのではないか。

現代社会はどこに向かうか

東京大学名誉教授 見田 宗介 氏

序論『現代青年の精神状況』、本論『「現代とは」どういう時代か』、結論『新しい時代のシステムと思想の基底』という順で話を進め「現代社会はどこに向かうか」を考えていきたい。



2008年は歴史の転換点である。サブプライム問題に端を発する経済システムの破綻、GMの破綻、秋葉原の無差別殺傷事件から、日本の精神状況が見えてくる。

永山青年の連続射殺事件と加藤青年の無差別殺傷事件は、ともに青森県の貧しい青年が東京で起こした事件で、青年のアイデンティティーに関わる。相違点は、永山青年は希望を持って東京に来たのに対し、加藤青年は初めから憧れは持っていなかったことで、空気の濃い時代か薄い時代かに関わる。70年代の学生は夢を持ち世界が変わると考えていたが、80年代になると軽くなり、90年代になると未来が小さくなった。80年代に始まる少女のストカットは生に対するリアリティーの確認にあり、その感覚と加藤青年の感覚とは似ている。

現代日本における価値観は、年々、世代間の違いが縮まっている。歴史が加速度的に進展してきたことはエネルギー消費の変化からも分かるが、人間が生き延びるためには、スローダウンが必要である。

資本主義の「転換」は、成長に必要な需要を獲得したことによる。古典的な資本主義の矛盾は「恐慌」として顕在化するが、需要の自己創出で解決し乗り越えるのが、『消費化社会』である。「GMの破綻」は、無限に見えたものが、有限であった結果である。自動車の資産は、すでに破綻していたが、金融資産により維持されてきた。それが地球全体に波及したことで起きた。資源の有限性は、この恐慌で明らかになり、情報化社会が見出した市場の無限性は、この資源の有限性から、生産と消費に限界を強いる結果を生んだ。

生物の個体数はロジスティック曲線を描くが、人間もこれを免れない。軸の時代Ⅰは、現代に至る精神の機軸が創出された時代であった。軸の時代Ⅱは、世界の「有限性」を引き受け、社会のシステムを構築していく時代である。現代社会は、曲線Ⅱから曲線Ⅲへの過渡期であり、どこかで減速し、安定平衡値に入る必要があり、経済も人口も成長のカーブを超えて、安定に向かうか、衰退するかの局面に差し掛かっている。

人間界では、第Ⅱ期は、弱肉強食のイデオロギーの時代であった。これからの第Ⅲ局面を向かえるにあたっては、共生系の「個体」の存在が必要である。大進化の王道は、共存関係である。他の生物と共存して調和していくこと。これが未来への指針になるのではないか。

転換期の教育 ―グローバルズムに抗して―

神戸女学院大学名誉教授 内田 樹 氏

我々は転換期にいる。グローバルズムは終わり、ポストグローバルズムに入りつつあるが、それを説明する社会理論も語彙もない。転換期の象徴はアメリカの没落にあり、キーワードは「統合と離散」である。アメリカは移民が新大陸に移住し、統合されて発展してきた。しかし、二度の世界大戦で知らしめたスーパーパワーも翳りが見え、急速に普通の国になりつつある。ソ連が無くなり、その後に出来た国は普通の国である。中国、EUも同様。フランス大統領選で、ルペン候補は移民排斥、EU脱退を掲げており、このように世界の風向きが変わってきている。

20 世紀に語られた全ての美しい言葉が輝きを失い、むき出しの本音が語られるようになった。これが転換期であり、グローバルゼーションの帰結である。グローバルゼーションとは、人間の価値を年取で査定することである。この過程で、国民国家が解体され、国境を越えて自己利益を追求する個人集団が出来上がった。これを踏まえ、転換期をどう迎え、生き延び、どう教育するかだ。

教育界はグローバル人材の育成と言うが、グローバル人材とは、国際競争の中で勝ち残るのに必要な人間的資源のことで、英語力・体力・コンピュータ活用・コミュニケーション能力が高く、どこでも根付き、すぐに仕事ができる人材である。しかも、安い賃金で働けばなお歓迎。その人材である子供達の幸福や市民的成熟への配慮も無い。財界の要望に文科省も中教審も便乗している。

近代以降、成功したビジネスマンは、若い世代の育成を義務としていたが、今は、自社の株主に対してのみ責任を負う。行き過ぎたグローバルゼーションに対し、行き過ぎたローカリゼーションが現れており、これらの間でバランスして安定期に入る。これが、転換期の構図だ。

私はグローバルゼーションに反対してきた。格付けはフェアという発想自体が間違っている。そうした資質は、人間の一部にしかすぎない。学校教育の使命は、格付けできない人間的資質を見出し開花させ、次世代の担い手、公民としての責務を自覚する大人を作ることにある。これが学校教育に託された社会的使命だ。生きる力が強い子供達とは、他者に開かれた心身を持った子供達である。今の子供達に欠けているのは学ぶ力である。学ぶ力とは、自分にとってその価値がまだ分からない・有用性が理解できないものに対して、何だか分からないがこれを学びたい・知りたい・身に付けたいと感じる能力である。これを開花させることが教員の責務である。何のために教師はいるのか、何のために学校があるのかを考えて、もう一度子供達に向き合ってほしい。



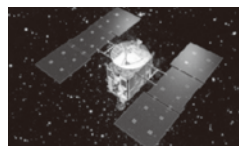
「はやぶさ」が挑んだ人類初の

往復の宇宙飛行、その7年間の歩み

宇宙航空研究開発機構教授 川口 淳一郎 氏

「はやぶさ」が帰還したのが 2010 年 6 月 13 日の事で、もう 2 年半が経過している。菅総理が就任した時で、私に電話を掛けて下さり、「はやぶさの成功は何がよかったのか」と聞かれた。私はこう答えた。「技術より根性だ」と。根性は精神力だ。「意地と忍耐だ」と。意地は意気込みだ。忍耐は諦めない心か。私達のプロジェクト・チームを支えたのは根性だ、と皆さんにそうお話しして日本の発展を紐解く手がかりにしたい。

でも諦めない心が実を結んだのか、というと、そうではない。大切なのは諦めない事ではなく、明るい展望ができる事だ。誰もしていない事に挑む、常に新しいものを探す事だ。粘り強く耐えればよい、というものではない。本日の一貫したテーマは「やれる理由を探せ」である。そして「自分達の力を信じる」、「臆せず挑戦する」、この 2 つも一貫してお伝えしたい言葉だ。



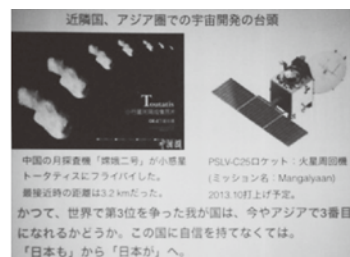
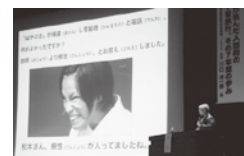
「はやぶさ」のプロジェクトは前人未到の挑戦だった。政府に提案する時をお願いをした。「加点法で評価してほしい。イオン・エンジンが動

いたらまず合格点をほしい。その先は出来高に従って加点法にしてくれないか」と。これを認めてもらったからこそ、今「はやぶさ」の評価がある。

「はやぶさ」は当初、MUSES-C 計画と呼ばれ、小惑星ランデブー計画として検討された。ランデブーとは片道飛行。到着する所までだ。最初から往復飛行を企んだわけではない。米・ソから 25 年以上も遅れて惑星探査を始めた駆け出しとして手堅く行こう、と私達は思っていた。

でも何とかオリジナリティーを発揮したい。米・ソは月や金星・火星という、重力が大きく形が丸い天体に探査機を打ち上げた。重力が大きい天体は重いものが全部下に沈み込み、どんな材料でできていたか、の手掛かりは表面には残っていない。

その当時、世界で私達だけが小惑星に探査機を送る計画、小惑星ランデブー計画を持っ



ていた。オリジナリティーの発揮に拘わった。行きついた結論がイトカワだった。NASAですら、ためらうような計画にチャレンジしなければ、私達のオリジナリティーは発揮できない。そう思ってこの計画に辿りついた。



私達は最後には野望を抱いていた。1986年、その当時すでに小惑星サンプル・リターン計画を構想していた。しかしこの時代、まだイオン・エンジンの準備がなかった

ために、この段階ではプロジェクトがスタートする事はなかったが、最後にやるのはサンプル・リターンだ、ランデブーではない、と私達は信じていた。

それでは、どうして「はやぶさ」は最後の目的まで粘れたか。苦杯をバネにした意地があったからだ。「はやぶさ」に通じたのも幾つかの失敗の経験だった。私はいろんなプロジェクトに参加してきたが、全て成功しているわけではない。失敗もあった。今一つだ、と反省する事もあった。それが溜まって、次こそは、今度こそは、と思う。捲土重来というのか、もう一度してみる、それが高まって、なし遂げられたのではないかと感じている。

「はやぶさ」は、2010年6月13日、地球に帰ってきた。その身を挺してカプセルを守り、自ら故郷の地球の空に輝いて散っていった。帰ってきたカプセルは「はやぶさ」の形見だ。その成果は、必ずや未来に、次のプロジェクトの立ち上げに、つながるであろうと、確信している。

誰もが学びから脱皮する時がくる、というお話をする。学校で習う事はHOWだけだ。学校に何十年通っても、次にあなたがやる事はこれだ、と教えてくれない。

HOWの追及をライフワークだ、と誤解している人が大勢いる。ある講演に行って、女子高生から質問があった。「私は宇宙開発に携わりたい。でも私は文系だ」と。何をしたいのかよりも、今置かれているHOWの延長から将来を考えている事に驚いた。大事なものは、何をしたいのか、に気づく事だ。



私はこう答えた。「いつの時代でも、これをすればイノベーションになる、と予め約束され用意されている事はない。過去を蓄積して準備する

のは誤りだ。学びのプロになるには教材を学習すればよい。しかしそこからは新しい事は生まれない。学びからの転化が必要だ。

「はやぶさ」は前人未到の挑戦だった。他のどの国の誰も考えていない事を私達の独創から出発させた。それがどう実現できたか。それは私達を育ててくれた宇宙開発研究所に素地があった。「見え

るものはみな過去のもの」。亡くなられた長友教授が言っておられた。「君、これまで教育で受けてきたものはみんな練習問題にすぎないのだよ。予め正解が用意されていた狭い世界を覗いてきただけだ」。

私の向かいにいた塚本さんが教えてくれた。

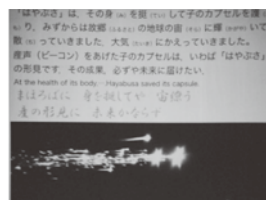
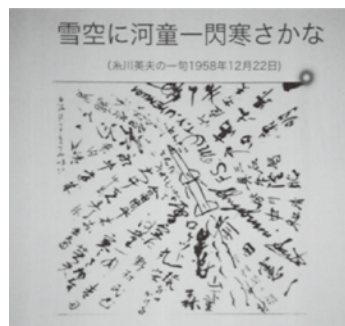
糸川英夫由来の、私達の文化の血は、模範や手本が存在しなくても、自分達に自信を持つことができればよかった。やれる理由を見つけて挑戦しなければ成果は得られない。こうすればやれるという理由を探す文化だった。本来の目的を忘れて後退し、一生懸命できない、しない理由を探す日本の文化の中では、簡単そうだが難しい事だ。

ディベートとプレゼンテーションのトレーニングが必要だ。日本が新しいイノベーションを発信するために、相手への説明性が必要だ。そのためにはトレーニングが大事だ。

創造性を促す教育が必要だ。海水の塩分濃度は何%よりも、なぜ、海水にナトリウムが含まれているか。タイタンにも地球にもある石は、どのようにしてできたか。これに答える事は宇宙や太陽系、地球の創造を解き、その起源を語る事になる。こんな疑問が身の周りには溢れている。これに気付かせる教育が必要だ。

人類はやがて活動範囲を広げて太陽系の中を自在に航海する時代が来る。私達はイトカワにターゲット・マーカーという、タイム・カプセルを置いてきた。人類がもう一度イトカワを訪れて、ぜひ拾い上げてほしい。子供達や若い人達には未来を見続けてほしい。常に動いて、新しいもの、未知のものを探してほしい。

高い塔を建ててみなければ新たな水平線は見えない。一步でもよい、無茶でもよい。高い所から見れば水平線は確実に広がって見える。今まで見えなかったものが見えてくる。未来は「未だ来ぬ」と書く。それが見えてくる。若い人は、挑戦を忘れずに、挑戦を続けて、日本の復興・復活に貢献して頂きたい。そう期待している。



地 区 支 部

石 狩 支 部

1 地区の概要

石狩支部は、札幌、江別、千歳、恵庭、北広島、石狩、当別の7市町を抱える支部で、平成24年度の学校状況は、道立高等学校40校、札幌市立高等学校8校、私立高等学校11校、特別支援学校2校、行政機関5機関である。

2 会員数の推移、歴代支部長・事務局

10年間の会員数の推移をみると、年度により若干の増減があるものの、1100名から1200名ほどで推移しているが、特に23年度・24年度と減少しており、会員登録数の増加を図るための検討が必要である。

〔会員数の推移〕

年度	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24
会員数	1,135	1,147	1,133	1,179	1,176	1,200	1,177	1,156	1,111	1,019

〔歴代支部長・事務局〕

年度	支部長	事務担当者	事務局校
15	武村 宗彦	額田 実	札幌稲西
16	坪田 裕	森塚 勝敏	札幌稲北
17	坪田 裕	森塚 勝敏	札幌稲北
18	小田 章雄	日下 哉	札幌稲雲
19	養嶋 和央	日下 哉	札幌稲雲
20	山岡 正司	井口 郁将	札幌東陵
21	山岡 正司	井口 郁将	札幌東陵
22	新沼 明	鈴木 龍昭	札幌南陵
23	津田 雄二	武田 英俊	札幌南陵
24	竹内 敏治	浅野 敏	札幌拓北

3 支部活動

本支部には、昭和50年から施行された規約に則り、申し合わせ事項で支部主催の事業に対して助成が行われており、平成24年度は、申請のあった英語部会、家庭科部会、養護部会の3部会に助成を行っている。

4 研究発表者及び研究紀要掲載者

本支部は、会員数千名以上を擁し、毎年多くの方々が研究発表、研究紀要への論文掲載に積極的に協力いただき、本研究会の発展に寄与している。

〔研究発表者・研究紀要掲載者〕

年度	項目	学校名	氏 名	分野
15	研究	札幌東	遠藤 忍	世界史
		札幌開成	山田 大隆	理科総合
		札幌厚別	松田 素寛	物理
		浜益	大畑 真人	化学
		札幌南	石井 信幸	英語
		札幌北陵	高野 龍彦	英語
		札幌西	村田ひろ美	家庭
		札幌琴似工業	川村広幸・矢倉賢二	工業

15	研究	札幌稲西 札幌稲北 札幌新川 札幌北	長尾 嘉雄 加藤 誠 早苗 雅史 奥村 稔	情報 情報 情報 情報
	紀要	立命館慶祥 札幌稲北 札幌開成 札幌南	齋藤 忠和 岩田 昭夫 山田 大隆 石井 信幸	地歴・公民 地歴・公民 理科 英語
16	研究	札幌稲雲 大麻 有朋 札幌開成 札幌南陵 札幌山の手 札幌北陵 札幌国際情報 札幌南陵 札幌白陵 石狩翔陽 江別 札幌東商業 札幌市立発寒中学 札幌市立厚別南中学 札幌平岡 札幌稲北 札幌平岸 札幌北 札幌北	山谷 浩光 小山内 壘 吉井優紀彦 山田 大隆 佐藤 和宏 齋藤 美佳 高野 龍彦 船本 龍一 俵谷 俊彦 中川 順一 石川 幸孝 井上 明子 石井 照之 荒島 晋 梅津 由一 石谷 正 加藤 誠 杉本 式史 日比 誠 奥村 稔	国語 日本史 地理 理科総合 物理 美術 英語 英語 英語 英語 家庭 家庭 商業 情報 情報 情報 情報 情報 情報 情報
	紀要	立命館慶祥 札幌国際情報 札幌啓北商業 札幌稲北	齋藤 忠和 奥田 智紀 稲津 正己 加藤 誠	地歴・公民 数学 商業 情報
17	研究	千歳 当別 有朋 札幌工業 札幌旭丘 札幌開成 当別 札幌旭丘 札幌北陵 札幌藻岩 札幌藻岩 札幌北 札幌稲北 札幌稲北 札幌丘珠	加納 敏隆 田辺 孝規 横山 茂 古川 敬子 奥井 則行 梅原 宏之 室伏 論 高瀬 敏樹 今野 篤志 高木 昭信 三関 直樹 奥村 稔 加藤 誠 川西 裕二	国語 地理 倫理 政治経済 生物 地学 農業 情報 情報 情報 情報 情報 情報 情報
	紀要	札幌真栄 札幌開成 恵庭南	永幡 豊 山田 大隆 重成 敏史	地理 理科 保健体育
18	研究	北嶺 札幌稲雲 大麻 札幌西	石山 昌周 北明 基史 菊池 洋好 木川田敏晴	国語 生物 生物 地学
	紀要	立命館慶祥 札幌真栄	齋藤 忠和 佐紺 拱子	地歴 家庭
19	研究	札幌東 札幌月寒 札幌創成 札幌新川 札幌第一 札幌開成 札幌西陵	相庭 達也 鈴木 良伸 渡辺 祥介 清水 貞人 荻原 法子 堀 輝一郎 藤田啓太郎	日本史 地理 倫理 数学 理科総合 物理 化学

19	研究	札幌旭丘 札幌南 札幌清田 札幌稲北 札幌旭丘 札幌拓北 札幌白陵	庄末 剛 手塚 茂也 熊谷 修司 川村 雅人 高瀬 敏樹 梅田 充 高木裕・鈴木崇令・ 竹中直人	英語 英語 英語 情報 情報 情報 情報
	紀要	札幌大谷 札幌拓北 札幌旭丘 札幌琴似工業	今井 豊章 橋谷 隆男 庄末 剛 松田 圭右	情報 芸術 英語 工業
20	研究	北嶺 立命館慶祥 千歳 札幌稲雲 札幌真栄 札幌稲雲 石狩南 札幌清田 恵庭南 札幌大通 札幌南 札幌聖心 札幌琴似工業 札幌国際情報 札幌東豊 札幌北	長峰 博之 中村 素木 菅原 晃 山本 大輔 中俣 明泰 伊藤 友彦 浦巧・渡部恵太 鶴岡 森昭 伊藤新太郎 宮崎 洋司 中條 伸義 古矢治子・市川曉子 平間 信一 長谷 哲生 室木 茂良 奥村 稔	世界史 地理 政治経済 数学 化学 地学 理科総合 理科総合 保健体育 書道 英語 英語 工業 工業 情報 情報
	紀要	千歳 札幌東 札幌北 札幌稲雲 千歳北陽 札幌工業 札幌工業	菅原 晃 干場 敏博 大村 道子 佐藤 朱美 佐藤 恵子 関 澄恵 宮武 宏行	地歴 理科 養護 養護 養護 養護 工業
21	研究	札幌北陵 札幌新川 札幌南 北広島 千歳北陽 札幌創成 札幌東陵 札幌真栄 有朋 札幌篠路 札幌平岸 札幌東陵 札幌北陵	浅川 敬 佐久間直樹 溝上 忠彦 高井 学司 清水 大策 板倉 雄司 小笠原 輝 本杉 聡 中川 弘子 鶴間 伸一 杉本 式史 高田 和典 大平 育代	国語 地理 物理 保健体育 保健体育 音楽 書道 英語 英語 情報 情報 情報 情報
	紀要	有朋 札幌国際情報 札幌北 札幌篠路 札幌旭丘 札幌平岸 札幌東陵 札幌丘珠	小林 雅澄 高堰みちほ 奥村 稔 鶴間 伸一 高瀬 敏樹 杉本 武史 高田 和典 川西 裕二	芸術 英語 情報 情報 情報 情報 情報 情報
22	研究	札幌拓北 札幌西 札幌稲西 札幌啓成 札幌稲雲	久米 隆 正田 隆之 宮古 昌 三浦 治彦 佐藤 朱美	地理 数学 地学 地学 養護

22	研究	札幌東陵 札幌北陵 千歳北陽 札幌東 千歳 札幌篠路 札幌平岸	菅原 綾子 菊地 大 長野 健二 清水まゆみ 落合雄一郎 鶴間 伸一 杉本 式史	養護 美術 英語 英語 商業 情報 情報
	紀要	北嶺中・高 札幌北 札幌篠路 札幌平岸 札幌藻岩 札幌藻岩 札幌東陵 札幌北	菅原 利晃 奥村 稔 鶴間 伸一 杉本 式史 高木 昭信 日比 誠 高田 和典 有田 幸史	国語 情報 情報 情報 情報 情報 情報 情報
23	研究	札幌月寒 札幌厚別 札幌清田 石狩南 札幌第一 札幌あすかぜ 札幌厚別 札幌北陵 札幌手稲 札幌工業 札幌篠路 札幌拓北 札幌平岸	出口 敬智 矢田 龍介 鶴岡 森昭 大澤 達郎 高橋 芳枝 松田 義章 畑野 好美 佐藤 敦 東 昌江 有泉 陸夫 鶴間 伸一 梅田 充 杉本 式史	世界史 数学 理科総合 生物 生物 地学 英語 英語 家庭 工業 情報 情報 工業
	紀要	札幌琴似工業	三本木 豊	工業
24	研究	札幌大通 札幌大通 札幌南 千歳 札幌厚別 北海道教育庁 札幌北 札幌東 札幌南陵 札幌手稲	榊原 康文 蒲生 崇之 溝上 忠彦 飯嶋めぐみ 河端 将史 渡邊祐美子 黒田 信彦 大村 道子 島田美紀子 宮田 敦生	世界史 日本史 物理 化学 理科総合 養護 養護 養護 書道 美術
	紀要	北嶺中・高 北広島西 札幌篠路 札幌拓北 札幌啓成	菅原 利晃 徳橋 孝之 鎌田 亮樹 梅田 充 村中 幸一	国語 英語 情報 情報 情報

5 今後の展望

石狩支部の今後は、本部事務局との連携を深めながら、他の支部より設置校数の多い私学高等学校や特別支援各学校の本会への参加を促す等、会員数の増加に努め、また、研究助成の申請がある教科部会が固定化されていることから、より多くの教科が研究事業に取り組むよう働きかける等、更なる研究実践を積み重ねて本研究会の発展・充実を支え、会員の教師力向上と本研究会の飛躍をともに期待したい。

(記載者 札幌拓北高等学校教頭 浅野 敏)

渡 島 支 部

1 地区の概要

渡島地区は道南の要として、行政、経済、文化などあらゆる分野で函館市を中心に栄えてきた歴史のある地区である。しかし、人口減の問題には歯止めがきかず、市町の統合を行っているがなかなか解決には至らない。この問題に関連して、少子化も進んでおり、中学校卒業者が激減している。公立 19 校、私立 8 校、合計 27 校があり、北海道の中では私立高等学校が多いことも特徴の一つである。これらの 27 校における学級数は、全定合わせて 330 級であるが、少子化の影響を受け、間口減の問題にさらされている。

2 会員数の推移、歴代支部長・事務局担当者

少子化、間口減の問題に関連して、教員数も減少し、会員数を確保することが大きな課題となっている。

〔会員数の推移〕

年度	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24
会員数	270	257	255	237	204	198	189	184	181	174

〔歴代支部長・事務局〕

年度	支部長	事務担当者	事務局校
15	山岡 正司	佐藤 裕寛	函館北
16	山岡 正司	菊 正敏	函館北
17	森 武	井上 俊一	函館東
18	森 武	伊藤 一正	函館東
19	森 武	小松 将人	市立函館
20	竹内 和男	浅野 敏	函館稜北
21	竹内 和男	浅野 敏	函館稜北
22	山本 貴司	牧野 敏	函館稜北
23	小林 雄司	井上 俊一	函館中部
24	小林 雄司	谷川 敬一	函館中部

3 支部活動

どの教科も活発に活動を行っており、授業公開や研究発表など時期を決め毎年行っている教科も多い。また、大学と連携して、研究を進めたり、助言をいただきながら研鑽に励んでいる教科もある。

4 研究発表者及び研究紀要掲載者

一般教科の研究発表・研究紀要掲載はもちろんのこと、渡島地区高等学校 27 校の中には職業教育の拠点校が含まれており、水産・農業・工業などでも盛んに行われている。また、函館市内ばかりではなく、他町の比較的小規模校でも研修への積極的な取組を行い、毎年のように発表をしている元気な学校もある。

〔研究発表者・研究紀要掲載者〕

年度	項目	学校名	氏 名	分野
15	研究	函館西 戸井 南茅部	松岡 篤志 木村 昌志 西村 昇	書道 水産 情報
	紀要	八雲 函館中部	岩澤 利守 厚谷 智	数学 英語
16	研究	木古内 函館中部 木古内 八雲 南茅部 函館中部 函館商業 函館水産 函館水産	田嶋 公一 外山 聖武 石黒 勝 神山 義茂 堀 輝一郎 松島 美穂 加賀美 砂百合 長谷 昇 我妻 雅夫	日本史 現代社会 数学 物理 物理 化学 家庭 水産 水産
	紀要	戸井 木古内 函館白百合学園 函館工業 長万部 函館商業 函館水産	大谷 真澄 稲子 寛信 中村 信雄 金沢 久子 橋本 晃子 前田 貴世 西川 正一	地理 物理 生物 家庭 家庭 商業 水産
17	研究	函館東 函館水産	佐藤 臨太郎 我妻 雅夫	英語 水産
18	紀要	福島商業	浜本 秀樹	商業
19	研究	南茅部 函館中部 函館水産	江尻 巧 岩田 哲 石尾 敏	国語 英語 水産
	紀要	函館稜北	福士 公一朗	情報
20	研究	松前 木古内 函館工業 八雲 函館水産	吉田 正和 稲子 寛行 盛田 典男 柿崎 哲平 長谷 昇	数学 物理 工業 商業 水産
	紀要	長万部 上磯 檜山北 函館中部 函館水産 函館水産	鎌田 俊彦 倉部 英利子 佐々木 龍 荻津 賢 宮崎 和貴 和野 博樹	国語 倫理 美術 英語 水産 水産
22	研究	函館工業 函館西 長万部 大野 函館水産	森 智希 多田 茂男 土井 泰志 山本 雅史 菅沼 俊介	地理 生物 音楽 農業 水産
	紀要	長万部 函館中部	石井 亮 荻津 賢	理科 英語
23	研究	市立函館 長万部 函館水産	五十嵐 直樹 土田 麻帆 中野 紀彦	化学 英語 水産
	紀要	函館中部 松前	大塚 徹 西川 竜矢	英語 書道
24	研究	森 八雲 松前 大野農業 函館水産 函館水産	飯岡 寛治 吉田 奏介 興水 飛鳥 服部 良太 大山 知幸 星澤 克幸	政経 数学 英語 農業 水産 水産

5 今後の展望

今後も、より一層の研鑽に努め、新学習指導要領に対応した研修活動の実践に努めていきたい。また、歴史と文化があるという利点を生かし、これまでの経験を生かしつつも新たな視点を取り入れた研究実践に結びつけていきたい。こうした中から生まれる成果を、渡島部ばかりではなく、北海道の教育の発展につなげていきたい。

(記載者 函館中部高等学校 定時制教頭 谷川 敬一)

1 地区の概要

檜山支部が発足したのは昭和58年であり、それまでは道南支部に含まれていた。道南支部が再編成され、渡島支部と檜山支部が誕生した。他の支部に比べて、独自の活動の歴史が浅い支部である。近年、学校数、会員数等の減少が進んでいる。

とところで、この10年の中で全国的に市町村合併が進み、檜山支部においても檜山管内熊石町と渡島管内八雲町が平成17年10月1日に新設合併を行い、新「八雲町（渡島管内）」が誕生した。このことに伴い熊石高校は檜山支部から渡島支部に移ることとなった。

なお、平成24年度の檜山支部の学校状況は、高等学校5校、高等養護学校1校である。高等学校の学級数の状況は、9学級が2校（江差、檜山北）、3学級が2校（上ノ国、奥尻）、1学級が1校（瀬棚商業）である。また、瀬棚商業高校は今年度末に閉校を迎えることになる。

2 会員数の推移、歴代支部長・事務局担当者

檜山管内は、もともと小規模校が多い地域である。近年の過疎化、少子化、市町村合併等の進行により、学校数や学級数の減少が教員定数の減少となり、それが会員数の減少の要因となっている。また、高教研の研究大会への参加は、檜山支部の教員にとって貴重な研修の場、資質能力向上の機会であるが、旅費、交通の便等の制約もあり、会員数とともに研究大会への参加数も減少傾向にある。

今後も教員の研修の促進と学校の活性化のために、各学校の協力を得て高教研の会員数の増加と研究大会への参加者の増加を図る必要がある。

〔会員数の推移〕

年度	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24
会員数	86	82	88	65	60	53	47	43	35	34

〔歴代支部長・事務局〕

年度	支部長	事務担当者	事務局校
15	井上 晴雄	日向 稔	熊石
16	近田 勝信	日向 稔	熊石
17	近田 勝信	村端 悟	熊石
18	石井 関夫	千葉 憲一	上ノ国
19	加藤 和美	高本 和明	檜山北
20	佐々木 淳一	小林 茂広	奥尻
21	阿部 正行	小林 茂広	奥尻
22	阿部 正行	野村 俊夫	奥尻
23	石戸谷 亮	野村 俊夫	奥尻
24	湯田 恭丈	渡邊 周一	江差

3 支部活動

檜山管内では、高教研の地区支部発足の10数年前に「檜山管内高等学校教育研究会」（略称：管内研）が発足し、全体集会及び教科部会を開催して活発な研究活動と情報の交換を積み重ね、成果をあげてきた。特に教科の面では、この管内研が檜山管内の高校の研究活動の中心を担ってきたため、高教研檜山支部として、独自の研究活動は行われてこなかった。

なお、この管内研は、現在「道南支部高等学校研究会」（略称：道南支部研）として渡島・檜山の両

管内の研究会の一本化が進められた。このことにより各研究会への参加校数・参加者数が増加し、多くの情報交換や活発な研究活動が可能となった。そのため、ここでは平成24年度の道南支部研の事業概要を記して活動の報告とする。

〔平成24年度道南支部高等学校教育研究会〕

名 称	当番校	名 称	当番校
高等学校教育研究会	函中部 江差	国語教育研究会	大野農 熊石
進路指導協議会	函館西	数学研究会	有斗
学習指導研究会	知内	理科教育研究会	市函館
生徒指導研究会	七飯	保健体育研究会	函館工
教育相談研究会	長万部	英語教育研究会	函館商
教護連盟	遺愛	音楽教育研究会	函館西
図書館研究会	市函館	美術教育研究会	函中部
定時制教育研究会	函工(定)	高等学校家庭科部会	函館工
情報教育研究会	柏稜	商業教育研究会	函館商
環境教育研究会	知内	養護教員研究会	南茅部

4 研究発表者及び研究紀要掲載者

この10年の研究発表は20件、その内訳は国語2、地歴5、数学2、理科4、保体1、芸術1、英語2、情報1、工業1、商業1である。また、研究紀要は1件、数学1である。今後も研究の成果を研究発表や研究紀要として、檜山支部はもとより全道の教員の資質能力の向上に資することが重要である。

〔研究発表者・研究紀要掲載者〕

年度	項目	学校名	氏 名	分野
15	研究	大成 奥尻	荒木 直也 塩見 浩二	国語 生物
16	研究	上ノ国 瀬棚商業 江差	千田 隆史 今北 敦子 畠澤 貴幸	数学 英語 情報
17	研究	江差南 瀬棚商業 江差南	堀内 信哉 高野 智史 田中 聖志	理科総合 保健体育 工業
18	研究	大成 上ノ国	花海 直人 庄司 健浩	日本史 政治経済
	紀要	江差	上野 昌生	数学
19	研究	上ノ国 上ノ国	紀伊國 薫 栗山 亮	日本史 理科総合
20	研究	檜山北 上ノ国	村中譜佐朗 高堰みちほ	地理 英語
21	研究	檜山北 檜山北	倉本 能行 佐々木 龍	地学 美術
22	研究	檜山北	本間真理・柴田朝幸	国語
23	研究	瀬棚商業	川村周・稲見好恵	商業
24	研究	江差 江差	岩間 洋之 梶谷 拓人	日本史 数学
	紀要	江差	福光 亮	情報

5 今後の展望

平成24年度に校長協会檜山ブロックの指導により「檜山管内公立高等学校学力向上推進会議」が設立された。これは学力向上に特化して公開授業、中高連携、授業力向上等の取組などについて情報交換を行い、自校及び地域の学力向上を図ることを目的とした会議であり、各校の教頭及び教務部長が参加して開催された。このように喫緊の重要課題に特化して、その課題解決のための会議、研究会等を設立、開催し、研究活動等を充実・推進していくことが重要である。

今後の支部活動として、会員数の増加に努めることはもとより、檜山管内や道南支部の研究会に積極的に協力していくこと、独自の研修の機会を設けることを検討していきたい。

（江差高等学校教頭 渡邊 周一）

後 志 支 部

1 後志地区の概況

後志地区は、積丹半島を囲む北海道の南西部に位置し、1市13町6村で構成されている。中央部には羊蹄山（支笏洞爺国立公園）、ニセコ連峰。海岸線は、ニセコ積丹小樽海岸国定公園に指定され、自然美豊かな地である。産業は、小樽市の商業、北後志の果樹、羊蹄山ろくの畑作（一部水稲）、さらに沿岸部の水産業と多様な産業がみられ、その歴史も古い。人口の減少は年を追うごとに激しく、平成14年度には2千5百人を超えていた中学校卒業生数は、22年度には1千9百人を割り、今後その傾向はさらに厳しさを増し地域経済にも深刻な影響を及ぼすものと考えられる。

2 会員数の推移

歴代支部長・事務担当者〔少子化の傾向に伴って、管内の高等学校（道立12校、町村立3校、私立4校）では間口減、教員数の減少という状況にあり、当支部も会員数の減少が続いてきている。今後各学校の理解と協力を得て、会員数の増加を図っていききたい。

〔会員数の推移〕

年度	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24
会員数	266	224	202	188	196	184	175	151	159	131

〔歴代支部長・事務局〕

年度	支部長	事務担当者	事務局校
15	松下 榮顯	高橋 渡	蘭越
16	中保 力	岡戸 康浩	寿都
17	中保 力	岡戸 康浩	寿都
18	岡田 正裕	西嶋 潤一	ニセコ
19	佐々木誠治	西嶋 潤一	ニセコ
20	斉藤 信寛	田村 弘樹	真狩
21	若林 利行	田村 弘樹	真狩
22	河村 英二	宮川 明子	留寿都
23	河村 英二	青木 祐治	留寿都
24	板東 眞一	大坂 道明	ニセコ

3 支部活動

地区支部として、会員相互の研修活動を実施すべく、毎年度の支部長が努力をしているが、支部全体としての取り組みまでにはならず、本教育研究会への参加を促すことにとどまっているのが現状である。

しかし、当地区には各教科の研究会、各分掌等の部会、教育相談研究会、養護教諭部会等があり各研究会・部会は活発に活動を行っているところであり、当地区での実践を踏まえ本教育研究会に臨むことで、さらに会員の研鑽が深められてきた。会員の減少とともに本教育研究会への出席者も減少傾向にある、ここ数年出席率の向上のため、毎年度の支部長が機会あるごとに出席の呼びかけをしている。今後

も生徒数の減少に伴い間口の縮小が予想されるが、各学校の理解と協力を得て、会員数の増加に繋がるよう努めていきたい。

4 研究発表者及び研究紀要掲載者

〔研究発表者・研究紀要掲載者〕

年度	項目	学校名	氏 名	分野
15	研究	岩内 小樽水産	中川 暁 宮下 直之	保体 水産
	紀要	小樽商業	岡田 賢一	商業
16	研究	倶知安	津端 公彦	情報
17	研究	小樽水産 倶知安	菊地 功 津端 公彦	水産 情報
	紀要	ニセコ	橋口 友和	農業
18	紀要	真狩	中西 聖	農業
19	研究	真狩 小樽商業 寿都 小樽工業 小樽水産 小樽水産	高 雅彦 武田 伸彦 乙川 望美 平井 柳太 大町 善成 我妻 雅教	世界史 理科総合 養護 工業 水産 水産
	紀要	蘭越 蘭越 小樽水産	田端 修 成田 多江 小坂 実顕	理科 家庭 水産
20	研究	倶知安 小樽工業 岩内 小樽水産	保格 秀規 菅原 陽 本間 順 山本 十三	物理 物理 化学 水産
	紀要	倶知安	信田 匡哉	数学
21	研究	余市 岩内 倶知安 小樽工業 真狩 小樽水産	大地 豪 土井みのり 保格 秀規 菅原 陽 田村 弘樹 柴田耕一郎	政治経済 数学 物理 物理 農業 水産
	紀要	寿都 岩内 倶知安	菊池 康 本間 順 津端 公彦	数学 理科 情報
22	研究	蘭越 共和 小樽水産 小樽水産	田端 修 吉村佳名子 小林 実顕 伊藤 健太	理科総合 家庭 水産 水産
	紀要	倶知安	津端 公彦	情報
23	研究	岩内 寿都 倶知安 小樽潮陵 小樽水産	真鍋かおり 八太 敦志 稲垣 佳恵 西原 樹理 藤本 崇人	国語 保健体育 音楽 書道 水産
	研究	岩内 小樽水産 小樽工業 小樽商業 小樽商業 小樽水産	高橋さおり 今村 和彦 高橋 孝児 長澤 裕泰 北出 英俊 木村 剛	化学 保健体育 工業 商業 商業 水産

※研究紀要の詳細は87～88ページをご参照ください。

5 今後の展望

今後の支部活動としては、会員数並びに参加者の増加に努めるとともに、会員各位が日頃積み重ねた教育実践を、本教育研究会の発展に結びつけていくように働きかけていきたい。

（ニセコ高等学校教頭 大坂 道明）

空 知 支 部（平成 18 年以前は南・北空知）

1 地区の概要

空知支部は、平成 18 年度より南空知支部と北空知支部が統合され空知支部となり、支部活動を行っている。

今年度、当地区の学校状況は、高等学校 24 校、高等養護学校 3 校、養護学校 2 校である。今後も統廃合や間口削減などの状況が考えられる。

2 会員数の推移、歴代支部長・事務局担当者

過去 10 年間の会員数の推移をみると減少傾向にあり、近年は 170 名前後とほぼ横ばいである。各学校の協力を得て会員登録数の増加を図るための努力が必要である。

〔会員数の推移〕

年度	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24
会員数	250	236	223	200	183	182	166	161	172	181

近年の支部長、事務局校は南空知と北空知で交代で事務局を担当し支部の運営にあたり会員の啓発に努めている。

〔歴代支部長・事務局〕

年度	支部長	事務担当者	事務局校
15	畑 満	松井 則之	南幌
	廣田 邦生	森塚 勝敏	歌志内
16	畑 満	尾形 雅史	南幌
	二瓶 元旦	高本 和明	深川農業
17	高橋 文明	尾形 雅史	南幌
	菅原 秀治	高本 和明	深川農業
18	望月 憲夫	尾形 雅史	南幌
	戸出 秀那	宮原 淑彰	芦別
19	戸出 秀那	宮原 淑彰	芦別
20	蓬田 恒春	杉本 祐子	南幌
21	蓬田 恒春	中野 潔明	南幌
22	須藤 均	石見 清孝	深川西
23	須藤 均	石見 清孝	深川西
24	阿部 広美	吉澤 恒男	南幌

3 支部活動

管内の校長会が組織する研究会には、各教科以外に分掌に関する教務部や生徒指導部、教育相談などの研修を実施している。そのため、支部高教研としては特別な取組は行っていない。

4 研究発表者及び研究紀要掲載者

〔研究発表者・研究紀要掲載者〕

年度	項目	学校名	氏 名	分野
15	研究	岩見沢緑陵	河本 由生	日本史
		美唄	中島 康晴	政経
		新十津川農業	豊岡 裕康	英語
		妹背牛商業	小松 裕美	家庭
	研究	岩見沢東	高木 昭信	情報
	紀要	美唄工業	原野 勉	工業

16	研究	由仁商業 砂川北 滝川工業 芦別	沖田 晃子 坂本 喜久 榎本 哲史 澤田 真泰	現代社会 養護 工業 商業
	研究	妹背牛商業 岩見沢農業 三笠 美唄	石尾みどり 福本 直人 山口 由人 宇城 隆司	国語 現代社会 理科総合 化学
	紀要	岩見沢東 滝川工業	松本 陸郎 梶 邦明	数学 工業
		滝川 沼田 妹背牛商業 岩見沢緑陵 岩見沢農業	志田 淳哉 大沢 裕史 坂本 朋嗣 大屋 泰宏 傳法 寿紀	現代社会 数学 理科総合 物理 生物
19	研究	沼田 滝川 砂川 美唄 岩見沢緑陵	山岡 景寛 武蔵 恒一 城地 英典 深戸 紀明 坂口 勝幸	生物 美術 英語 商業 商業
20	研究	三笠 滝川西 岩見沢農業 妹背牛商業	越後 暁子 近本学・中川修司 山川 直樹 和田和儀・朝日佑佳	生物 英語 農業 商業
	紀要	栗山	瀬尾 敦子	家庭
21	研究	砂川 岩見沢東定時 由仁商業 月形 岩見沢東全日 岩見沢東定時 岩見沢西 岩見沢農業 美唄工業 深川東	高橋 理恵 土岐 剛史 安達 妙己 石塚 忍 橋本 宏美 木田美佐子 高橋 誠 大坂 道明 小野 博道 山内 康司	化学 生物 理科総合 理科総合 養護 養護 家庭 農業 工業 商業
	紀要	岩見沢緑陵	川崎 知文	情報
22	研究	芦別 砂川 砂川 滝川西 岩見沢農業 岩見沢農業 滝川工業 由仁商業	岩渕 啓介 三浦 信一 星野 壮志 中川 修司 伊與部 明 近江 勉 三浦 嘉 神戸 裕普	政治経済 数学 書道 英語 農業 農業 工業 商業
	紀要	岩見沢緑陵	川崎 知文	情報
23	研究	砂川 砂川 岩見沢緑陵 美唄尚栄	山中 勇人 畑恵成・高橋賢司 大屋 泰宏 渡部 哲哉	日本史 理科総合 物理 農業
	紀要	滝川高校	本間 順	理科
24	研究	岩見沢東 夕張 南幌 美唄尚栄	藤澤 善美 土井 泰志 佐藤 寿成 坂口真奈美	地理 音楽 英語 家庭
	紀要	奈井江商業 岩見沢緑陵	酒井 友彰 川崎 知文	商業 情報

5 今後の展望

今後については、会員数の減少理由を検討し、本部事務局との連携を深め会員数の増加に努め、会員各位が更なる研究実践を積み重ね本研究会の発展を図っていく必要がある。

今一度「高教研」の果たす役割を考え、色々な場面で多くの人たちへ加入の呼びかけに努めていきたい。

（南幌高等学校教頭 吉澤 恒男）

上 川 支 部

1 地区の概要

本支部は、昭和47年の高校校長会の地区割りの変更に伴い、旭川支部と名寄支部の一部を合わせ、上川支部とした。現在の加盟校は、道立高校31校、市町村立高校5校、私立高校5校の合計41校である。

2 会員数の推移、歴代支部長・事務局担当者

本支部創立時の昭和37年度には223名、10周年の昭和47年度は支部改変により774名、昭和48年度は789名で会員数がピークであった。20周年の昭和57年度は643名、30周年の平成4年度は488名、40周年の平成14年度は288名。50周年を迎える今年平成24年度は172名と減少した。

〔会員数の推移〕

年度	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24
会員数	297	293	276	250	237	242	202	191	189	174

〔歴代支部長・事務局〕

年度	支部長	事務担当者	事務局校
15	毛利 奉信	和田 明	旭川西
16	岡田 義明	外川 藤博	旭川北
		吉森 光敏	旭川北
17	岡田 義明	吉森 光敏	旭川北
18	千葉 敏春	菅原 修治	旭川工業
19	千葉 敏春	花松 正彦	旭川工業
20	岡田 正裕	岸田 隆志	旭川農業
21	小川 龍幸	大関 俊郎	旭川農業
22	板宮 克芳	我妻 公裕	旭川商業
23	板宮 克芳	舟山 栄治	旭川商業
24	石原 卓典	沼田 靖生	旭川南

3 支部活動

支部役員会は例年6月に開催し、前年度事業報告及び決算報告、当該年度会委員登録状況の確認、支部役員の確認、当年度事業計画及び本部からの連絡等を行っている。

また、支部創立当初から各教科研究会等を支援しており、毎年2～3の各研究会にそれぞれ1万円ずつ助成している。助成の支出基準は次のとおりである。
〈教科研究会等助成金の支出基準について〉

- (1) 北海道高等学校教育研究会上川支部が主催または共催により開催される大会・研究会について補助する。
- (2) その他、北海道高等学校教育研究会と関わりが深いものと支部長が判断した場合、関係役員の同意を得て補助することができる。

本支部には、教科を含めて13の研究（協議）会があり、それぞれ活発に活動している。

4 研究発表者及び研究紀要掲載者

〔研究発表者・研究紀要掲載者〕

年度	項目	学校名	氏 名	分野
15	研究	旭川商業	岸 美千代	国語
		上川	佐藤 淳	地理
		旭川東栄	木村 浩	倫理

15	研究	東川 上川 上川 上川 旭川商業	上津 印部 印部 斉藤和彦 尾形一彦 帰山 悟	隆路 陽一 陽一 保体 商業	数学 理科総合 化学 保健 商業
	研究	風連 和寒 旭川北 旭川北都商業 旭川北 富良野緑峰 剣淵 旭川工業 旭川藤女子	室田 宮腰 柳本 斎藤 松井 田村 村井 諸橋 鎌田	恵二 幸樹 高秀 肇 徹朗 弘樹 一幸 宏明 亮樹	世界史 理科総合 地学 書道 英語 農業 農業 工業 情報
16	紀要	風連	沖本	正憲	英語
	研究	中川商業 富良野緑峰 旭川農業 名寄光凌	田原 森 赤穂 中嶋	史子 伸一 悦生 孝之	世界史 理科総合 農業 工業
17	研究	旭川北	松井	徹朗	英語
18	紀要	旭川北	松井	徹朗	英語
	研究	剣淵 美瑛 旭川東 旭川西 下川商業 旭川凌雲	本間 浪岡 萬木 今野 藤井亜希子 渡部	靖章 知朗 貢 康典 真紀	世界史 数学 物理 書道 英語 家庭
19	研究	旭川東 上川 富良野 おといねっふ美術工芸 中川商業	佐野 川崎 美土路 前田 健浩 松山淳一郎	祐子 尚子 建 健浩 淳一郎	世界史 倫理 物理 美術 商業
	紀要	下川商業 下川商業	藤井亜希子 佐藤 公敏	竹博 洋介 拓 和彦 一茂 宏海 鈴奈 淳爾	英語 商業
20	研究	旭川北 富良野緑峰 剣淵 旭川東定時 旭川東 上川 富良野緑峰 富良野緑峰	石川 小林 吉田 平松 富田 都筑 森本 佐藤	洋介 拓 和彦 一茂 宏海 鈴奈 淳爾	世界史 地理 現代社会 物理 理科総合 英語 家庭 工業
	紀要	旭川藤女子	鎌田	亮樹	情報
21	研究	道立旭川美術館 旭川東定時 旭川農業 旭川工業	井内佳津恵 平松 和彦 菊地 誠 下村 幸広	津恵 和彦 誠 幸広	世界史 地学 農業 工業
	紀要	士別東 中川商業 旭川藤女子	山本 増山 鎌田	史江 淳一 亮樹	家庭 商業 情報
22	研究	おといねっふ美術工芸 中川商業 上川 旭川商業 旭川農業 名寄産業	岩本 前田 岡崎 盛本 菊地 和田	清海 寛 知之 尚美 誠 博之	地理 倫理 数学 英語 農業 工業
	研究	士別翔雲 旭川西 旭川工業 富良野緑峰 富良野緑峰	藤本 藤野 宮崎 迫中 竹内	純一 忠 一範 学 栄二	国語 物理 地学 商業 商業
23	研究	旭川農業 旭川藤女子	菊池 鎌田	誠 亮樹	農業 情報
	紀要	旭川農業 旭川藤女子	菊池 鎌田	誠 亮樹	農業 情報
24	研究	旭川農業 旭川藤女子	菊池 鎌田	誠 亮樹	農業 情報
	紀要	旭川農業 旭川藤女子	菊池 鎌田	誠 亮樹	農業 情報

5 今後の展望

今後の支部の活動としては、「未来を担う心豊かな生徒の育成」を目指し、支部教員相互がより一層の研鑽と修養に努め、日々新たな知見の下、意欲的かつ実践的な教育活動の推進を支援し事業の活性化と支部の充実・発展を図っていくとともに会員数の確保に努める。
(記載者 北海道旭川南高等学校教頭 沼田 靖生)

留 萌 支 部

1 地区の概要

留萌管内は北海道の北西部に位置し、自然に恵まれた地域である。南北約 130km、東西約 60kmと南北に長く、西は日本海、北は宗谷、南は石狩、東は上川・空知に接し、南北 178kmに及ぶ海岸線は「日本海オロロンライン」として親しまれている。

管内には全日制普通科単置校 3 校、全日制農業科単置校 1 校、全日制工業科・商業科併置校 1 校、全日制商業科 1 校、町立定時制普通科 1 校、高等養護学校 1 校の計 7 校が設置されている。

2 会員数の推移、歴代支部長・事務局担当者

この 10 年間で留萌千望高校流通経済科閉科、留萌高校定時制課程閉課、増毛高校閉校、留萌千望高校電気システム科募集停止などにより、会員数は大きく減少している。今後も少子化による再編統合、間口減などにより、会員数の減少が懸念されるが、各学校の理解と協力を得ながら、会員数を確保していかなければならない。

〔会員数の推移〕

年度	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24
会員数	77	82	76	79	76	64	53	60	51	43

〔歴代支部長・事務局〕

年度	支部長	事務担当者	事務局校
15	野瀬 政裕	中田 伸次	増毛
16	原田 正光	中田 伸次	増毛
17	原田 正光	岩瀬張幸子	増毛
18	原田 正光	岩瀬張幸子	増毛
19	高村 直克	岩瀬張幸子	増毛
20	高村 直克	吉田 聡	増毛
21	松永 務	吉田 聡	増毛
22	松永 務	吉田 聡	増毛
23	猪瀬 徹	太田 倫夫	留萌千望
24	猪股 康行	太田 倫夫	留萌千望

3 支部活動

教科研究協議会を当番校持ち回りで開催している。広い地域ではあるが、各学校の理解と協力により、多くの先生が参加しており、研究協議を通し、資質の向上に努めている。また、教科の他にも養護、教務、生徒指導、進路指導、教育相談の各研究協議会も開催されている。内容も、授業公開、講演、講話、実習、協議など様々な工夫を凝らしながら充実を図っている。

4 研究発表者及び研究紀要掲載者

小さな地域ではあるが、生徒や地域の実態に即した様々な教育実践を重ね、毎年、研究発表を行っている。

〔研究発表者・研究紀要掲載者〕

年度	項目	学校名	氏 名	分野
15	研究	天塩 留萌千望 遠別農業	水口 直樹 朝地 信介 三上真道・佐藤麻美	数学 美術 農業
16	研究	天売	杏澤 里美	情報
17	研究	留萌 苫前商業	市橋 洋幸 藤曲 健司	化学 商業
18	研究	遠別農業	久恒 亮	地理
19	研究	遠別農業 苫前商業 留萌 羽幌 留萌千望	樋口かおり 江尻 憲昭 木村 尚士 岸本 泰輔 富永 薫	国語 政治経済 数学 保健体育 商業
20	研究	苫前商業	佐藤 誠	地学
22	研究	留萌 留萌千望	神山 義茂 千葉 智寛	物理 工業
23	研究	留萌 苫前商業 留萌 苫前商業	菊田 茜 佐藤 誠 柴田美有紀 伊東久見子	数学 地学 養護 養護
	紀要	留萌千望	秋本 直人	商業
24	研究	留萌千望	朝田 累	生物

5 今後の展望

「高教研」は自己の指導力や資質を向上させる貴重な研修の場である。今後も教科研究協議会を中心に、研修の場としての機能を十分に果たせる環境作りに取り組みたい。また、支部の更なる充実、発展、活発化に向け、多くの人達への加入の呼びかけを行い、会員数の確保・維持・増加を図りたい。

（記載者 留萌千望高等学校教頭 太田 倫夫）

10 周年記念誌（留萌地区支部）より

S48.1 月発行

将来への展望

いろいろ困難点はあるが、当地の特殊性から先づ学校間の親睦を図ることが是非必要である。小規模校では教科担当者が 1 名という学校が全体の約半分ある現状から、今後教科別研究会を企画し学習指導法の研究に重点を置いた支部活動をしたいと思考している。その研究会では各校の実践成果をもちより、意見交換をするという方法で効果的な運営をしたい。それにより会員相互の親睦を深め横の連携が密になり、一層の教育効果が期待されるだろうし、本会の趣旨にも沿い、創意工夫を重ね魅力あるものにすれば、会員の加入率も増し、実質的な実のあるものと発展するものと信ずる。

（苫前商教頭 工藤哲一記）

宗 谷 支 部

1 地区の概要

宗谷支部は、当初上川北部及び宗谷地区を含む名寄支部として発足し、その後昭和 57 年に改編・独立して今日にいたっている。

当支部の高等学校は地域の特性を反映し、現在は普通科以外にも商業・衛生看護・看護専攻・機械の各科が設置されており、各校が地域に根ざした特色ある教育を展開してきている。

当支部においてはこの 10 年間で中頓別農業高校が閉校となり、来春平成 25 年 3 月には稚内商工高校が閉校となるので、養護学校を含め道立高校が 7 校、私立高校が 1 校の計 8 校となる。生徒数の推移として平成 15 年度との比較では男子▼ 418 人・女子▼ 416 人の計▼ 834 人の減少となっている。教員数もそれにともない約▼ 70 人の減少となっている。平成 25 年度以降もさらに少子化による間口減等の厳しい状況が予想されている。

2 会員数の推移、歴代支部長・事務局担当者

当支部の会員数は、この 10 年間で高等学校の間口減に伴う教員数の減少により大幅に減少している。

10 年前には 100 名を超えていた会員数は 50 名台まで落ち込んだ年度もあり、今後もこの傾向が続くことが予想されるため、各高等学校の一層の理解と協力を得ながら会員数を確保していく必要がある。

〔会員数の推移〕

年 度	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24
会員数	99	98	98	90	84	70	66	59	52	61

〔歴代支部長・事務局〕

年 度	支部長	事務担当者	事務局校
15	対馬 敏幸	政野 仁	豊富
16	対馬 敏幸	井林 昌喜	豊富
17	対馬 敏幸	井林 昌喜	豊富
18	大西 進	伊藤 博史	豊富
19	大西 進	伊藤 博史	豊富
20	大西 進	宮上 秀仁	豊富
21	山本 文朗	宮上 秀仁	豊富
22	橋本 達也	元村 治郎	利尻
23	橋本 達也	元村 治郎	利尻
24	政野 仁	藤井 浩之	枝幸

3 支部活動

当地区では、社会の変化に対応した三分掌・教育相談・養護教諭・各教科の 1 3 部会に於いて宗谷管内教員の資質向上を目的に高教研支部として、各部会毎に諸問題について研究を深め、活発に活動を行っているところである。

(ただし生徒指導部会と各教科部会は、当支部の

学校数が少ないことや参加旅費等の関係で隔年開催となっている。)

校長会が各学校事情等も配慮して当番校のローテーションを定め、計画的に開催してきている。

今後とも会員相互の研修の場としてより一層の充実が期待される。

4 研究発表者及び研究紀要掲載者

〔研究発表者・研究紀要掲載者〕

年 度	項 目	学 校 名	氏 名	分 野
15	研 発	稚内	桶谷 真平	数学
	紀 要	稚内商工	榊原しほじ	家庭
16	研 発	枝幸	藤井 秀樹	世界史
		浜頓別	下川 欣哉	政治経済
		稚内	鶴丸 慎也	保健体育
		浜頓別	木幡 和由	音楽
		稚内商工	梶 猛	工業
17	研 発	枝幸	十川 光穂	養護
19	研 発	豊富	山崎 辰也	現代社会
		礼文	小山内義輝	数学
		利尻	山崎 努	化学
		利尻	高橋 伸元	地学
20	研 発	枝幸	杉本 修	物理
21	研 発	稚内	古川 博之	日本史
22	研 発	利尻	鈴木香代子	世界史
		稚内	青山 佳弘	化学
		利尻	新居 潤哉	保健体育
23	研 発	浜頓別	飯田恵利子	日本史
		浜頓別	小西 真一	政治経済
		豊富	袴田 純	数学
	紀 要	枝幸	丸子 恵未	家庭
24	研 発	稚内	武藤 慎弘	現代社会
		枝幸	楠本 学	地理
		枝幸	土田 泰裕	数学
		枝幸	佐藤 革馬	理科総合

研究紀要掲載者は残念ながら少ないため、今後に期待したい。

5 今後の展望

当支部の教員は初任者および期限付き教員が圧倒的に多い地域であり、また、学校規模が限られていることから、自校内での教科研修をより広い視点で深める機会に恵まれていない。このような中で、学校間の枠を越えた教科研修を行行情報交換や評価・指導方法、教材について互いに刺激し合うことは、教育の変革期にある現在、大変意義深いことである。

今後は、当支部の会員数の減少に歯止めを掛け、当支部の研究協議会の一層の充実と研究大会への参加を呼び掛けることで、宗谷管内における教員の資質向上と当支部組織の活性化を同時に進めていきたい。

(記 載 者 枝幸高等学校教頭 藤井 浩之)

網 走 支 部（オホーツク支部）

1 地区の概要

オホーツク海に面して雄武から知床まで続く広大な地域を擁するオホーツク支部は、学区から網走、北見、紋別を中心に3つの地域に分けられる。

この地域の産業基盤は、オホーツク海とサロマ湖の恵みによる安定した漁業、畑作と乳製品・肉製品を中心とした農業、酪農業及び2つの国立公園及び世界遺産を有しての観光を主としており、近年の産業構造の変化に伴い、中国やロシアなど海外との流通、交易が深まるなど地域の生活状況も様変わりしつつある。また、人口減少と生徒・児童数の減少に伴い、小中学校及び高校の統廃合が増え、他の地域と同様、就学人口の変化により学校は大きな変革を求められている。

本支部は定時制単置高1校を含む25校70間口からなり、4間口以上が10校、3間口が1校、2間口以下が14校である。

2 会員数の推移、歴代支部長・事務局担当者

平成14年に32校あった学校が平成24年度には25校となり、間口数も減少していることから、登録教員数も当時の263名から156名と大幅に減少している。

〔会員数の推移〕

年度	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24
会員数	250	238	227	216	230	229	165	174	167	156

支部長校は、3つの地域で持ち回りして、2年交替で支部の運営に当たっている。

〔歴代支部長・事務局〕

年度	支部長	事務担当者	事務局校
15	菊池 隆夫	花高 了三	網走南ヶ丘
16	服部 隆廣	中野 潔明	留辺蘂
17	成田 雅昭	中野 潔明	留辺蘂
18	喜多 清彦	田端 秀行	紋別北
19	柏木 秀雄	田端 秀行	紋別北
20	稗貫 隆樹	松永 務	網走南ヶ丘
21	前川 洋	上野 直幸	網走南ヶ丘
22	後藤 寿樹	小松 将人	北見柏陽
23	後藤 寿樹	小松 将人	北見柏陽
24	後藤 哲	岩田 一郎	遠軽

3 支部活動

当支部では、校長会が主催する管内高等学校教育推進委員会を中心に分掌、教科、課程（定時制）の3つに別れてそれぞれ事務局校と当番校を置き、研究協議会と研究成果記録（研究紀要）を毎年事務局が集約し、冊子としてまとめている。研究紀要は平成24年度で第10号となる。

研究協議会の参加者は、管内ほぼ全校が出席する大規模なもので、参加者の関心も高く、公開授業、研究協議、外部講師による講演等が展開され発展してきたが、高教研発表等へステップとなるよう喫緊の課題を踏まえた更なる内容の充実が求められている。

4 研究発表者及び研究紀要掲載者

〔研究発表者・研究紀要掲載者〕

年度	項目	学校名	氏 名	分野
15	研究	湧別	那須 郁夫	音楽

15	研究	紋別南 遠軽郁凌	石岡 亜季 奥原祥・皆口美香・ 迫中学	家庭 商業
	紀要	紋別南	狩野千賀子	家庭
16	研究	女満別 津別	秋口 裕 炭屋 正人	国語 英語
17	研究	北見仁頃 置戸 津別 遠軽 紋別北 北見北斗 留辺蘂	太田 稔 木村 哲也 金田 和実 山崎 恒輝 中西 竜太郎 神田 陽子 籾 宏行	世界史 政治経済 数学 物理 物理 美術 書道
	紀要	北見商業	敦賀 和芳	商業
18	研究	置戸 北見北斗 小清水 雄武 清里	松田 卓也 新濱 学 白石 芳光 宮崎啓一郎 藤野 忠	世界史 世界史 倫理 政治経済 物理
19	研究	斜里 清里	植木玲一・細井久美子 上田 智史	理科総合 保健体育
20	研究	小清水 網走南ヶ丘	川口 修平 川島 秀夫	国語 地学
21	研究	網走南ヶ丘 北見北斗 津別	稲場 琴美 布施 達治 炭屋 正人	数学 生物 英語
22	研究	斜里 美幌農業	植木 玲一 漆原 剛	理科総合 農業
23	研究	北見北斗 網走南ヶ丘 紋別 北見商業	吉谷川史恵 菊池 貴広 加藤 洋平 高原 修	化学 生物 英語 商業
	紀要	湧別	齊藤 文那	家庭
24	研究	遠軽 津別 清里 紋別 美幌 北見工業 紋別	齋藤 利一 三浦 徹 大崎 敦子 春木 崇志 興水 隆宏 菊地 智 木村 一貴	国語 世界史 政治経済 生物 農業 工業 工業
	紀要	興部	鈴木 健之	情報

5 今後の展望

管内高等学校教育推進委員会が組織的、統括的な研究活動を行っているが、分掌においては、喫緊の問題行動等情報交換的な連絡協議会の傾向が強く、教科の研究協議会においても継続的に研究協議会が開催されているものの、2年サイクルで事務局校と当番校が入れ替わり、担当校のみの課題設定であるため、協議会の目的が系統性と計画性に欠けるところがある。また、教員も石狩管内等都市部の経験がある教員が少なく、若い教員だけでなくベテラン教員もこの管内以外の経験がないケースが多いため、研究会等においては日常の問題解決のみ求める傾向が強い。

委員会を取りまとめる全体の事務局と分掌、各教科と課程（定時制）における事務局校が連携を密にして、新たな学習指導要領が完全施行される来年度に向けて、分掌、教科そして課程の課題を踏まえた中長期を見通した計画を立てると同時に、北海道の高校教育全体さらには、日本全体の高校教育の動向にしっかり目を向けられるよう全教員の関心意欲を高める必要がある。

地域性もあり、札幌の高教研に気軽にアクセスできる環境ではないことから、毎年の高教研参加者はどうしても石狩周辺に比べて少ない傾向にある。それ故、北海道教育委員会や義務教育に係る地元教育委員会及び小中学校との連携を強めて、各学校での研修等を通じて管内における課題意識の向上と教員の資質向上を図っていく必要がある。

（記載者 岩田 一郎）

釧路支部

1 地区の概要

(1) 支部の現状

釧路地区は、釧路市・釧路町・厚岸町・浜中町・標茶町・弟子屈町・鶴居村・白糠町の広大な地域におよんでいる。産業は、海岸地域は漁業、内陸は農業・畜産・酪農、観光を中心としている。中心都市釧路市の三大基幹産業であった漁業・製紙・炭硯の衰退による経済状態の悪化と少子化により、地域の人口減が深刻である。

この10年で、管内の中卒者は3096名から2244名に減少し、公立高校の間口も71から50へと削減されている。現在の学校数は、公立高校13校(定時制2校)、私立高校1校、工業高等専門学校1校である。

(2) 支部の教育研究会

支部の教育研究活動は非常に活発であり、各教科のみならず教務・進路指導・生徒指導・教育相談・養護教育・環境教育など、教育活動全域にわたる研究活動が各学校間の連携のもと実践されてきた。さらに今年度より、その全ての研究活動を今まで以上に組織的・機能的に実践させるために、釧路管内高等学校教育研究会という統一された研究組織として発足した。北海道釧路工業高等学校を事務局校とし、組織・会計・規約を一元化、校務分掌等に関する部会6、教科に関する部会11の全17部会となり、これからの支部の教育研究を担っていく。

2 会員数の推移、歴代支部長・事務局担当者

〔会員数の推移〕

年度	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24
会員数	165	162	146	154	142	139	115	126	107	124

〔歴代支部長・事務局〕

年度	支部長	事務担当者	事務局校
15	七五三木正巳	山田 清典	釧路緑ヶ岡
16	久野 政人	井上 政史	釧路北
17	森 徳男	井上 政史	釧路北
18	細川 静雄	山口 聡史	釧路東
19	細川 静雄	山口 聡史	釧路東
20	杉澤 投吉	山崎 俊一	釧路工業
21	杉澤 投吉	山崎 俊一	釧路工業
22	田川 芳紀	田尻 勝敏	釧路湖陵
23	田川 芳紀	勝木 祐一	釧路湖陵
24	山形 恒則	吉田 光利	釧路江南

3 支部活動

全道的に会員数が減少する中、今年度は15名の増となり、支部としては大変喜ばしい状況である。各学校、各教科等での取り組みの成果であると関係各者に感謝申し上げたい。50周年を一つの節目とし来年度以降も、会員数を伸ばしていき、さらに活発な支部活動に繋げていきたいと思う。

4 研究発表者及び研究紀要掲載者

〔研究発表者・研究紀要掲載者〕

年度	項目	学校名	氏名	分野
15	研究	釧路工業	佐野比呂己	国語

15	研究	厚岸潮見 釧路江南 標茶	高木 優 渡辺 真 中西 聖	地理 政経 農業
	紀要	厚岸水産	松川 道義	水産
16	研究	釧路商業 釧路湖陵 阿寒 厚岸水産 釧路北	高橋 昌宏 氏家 正規 竹田 安宏 高橋 篤 村上 肇	政治経済 物理 保健体育 水産 情報
	研究	阿寒 標茶 釧路工業	大和 智也 石井 亮 岩岡 勝人	数学 地学 保健体育
18	研究	標茶 弟子屈	内藤智芳・佐藤圭子 岡田 則之	国語 地理
	紀要	弟子屈	阿部 保志	教職一般
19	研究	釧路江南 釧路工業	早津 茂行 佐藤 貴雄	生物 工業
20	研究	弟子屈 釧路湖陵 釧路湖陵 霧多布 厚岸水産	岡田 則之 富田 一茂 金本 吉泰 吉田 武史 佐々木正吾	現代社会 化学 生物 保健体育 水産
	研究	釧路江南 釧路北陽 釧路商業	須田 和幸 野田 貴洋 多賀友秋・辰山功一	数学 英語 商業
22	研究	釧路江南 標茶	植井 真 成田 雅昭	水産 情報
	紀要	釧路江南	加藤 渉 林 雅也	英語 農業
23	研究	厚岸翔洋 厚岸翔洋	澤向 亮賢 鈴木 一幸	世界史 水産
	紀要	厚岸翔洋	大倉 誠	水産
24	研究	弟子屈 弟子屈 弟子屈 弟子屈 釧路東 阿寒	林 正大 宮嶋 衛次 堀口 人士 阿波 克典 竹本 万亀 澤田 大輝	理科総合 理科総合 理科総合 理科総合 美術 英語
	紀要	霧多布	小笠原清陽	情報

5 今後の展望

昨年度道教委の教育行政執行方針において掲げられた「平成26年度までに、北海道の子どもたちの学力を全国平均以上にする」という大きな目標のもと、各支部・各教科部会では学力向上に向け、今まで以上の各種取り組みが実践されているところだと思う。

釧路市では、全国的にも珍しい学力向上を目的とした「基礎学力保障条例案」が市議会へ提出される予定だ(11月現在)。

「生きる力」を基盤とした「確かな学力」「健やかな体」「豊かな心」の育成が我々教育に携わるものの使命である。今後ますます、真の生きる力とは、生きるために本当に必要な学力とは何かを追求し、地域の将来を担う子どもたちのために、日々研究・研修していくことが重要になっていくと思われる。

そのためにも、一人一人の教員が地域・教科は勿論のこと、学校の枠を越えて連携・研鑽し、視野を広げ日々の教育に還元させるため、一人でも多くの仲間が本研究会に参加することを期待したい。

(釧路江南高等学校教頭 吉田 光利)

根 室 支 部

1 地区の概要

根室地区は、北海道の最東端に位置し、北部は知床半島、南部は根室半島が東に向かって伸び、根室海峡、太平洋に接した地域で、1市4町で構成されている。

沿岸部の漁業、内陸部の酪農といった基幹産業は、それぞれが現代的な構造上の課題を抱えており、また、過疎化の進行や人口の減少傾向は管内全域に広がっている。特に子どもの数の減少は著しく、小中学校の児童生徒数は20年前に比べ半減しており、それに伴い当地区の学校状況も大きく変化している。

今年度、当地区の学校数は、高等学校7校、高等養護学校1校で、10年前に比べると学校数は変わっていないが、高等学校の間口数は12減、生徒数にして約600名が減少している。

こうした中、地区各校は中高一貫教育の導入やコミュニティ・スクール、学校再編の検討等、積極的に特色ある教育環境づくりに取り組んでいる。

2 会員数の推移、歴代支部長・事務局担当者

高等学校の間口数減に伴い教員数が減少している現状もあり、平成当初100名以上であった会員数は、ここ数年50名前後で推移してきている。あらためて本研究会の内容充実に努め、会員登録率の向上を図る必要がある。

〔会員数の推移〕

年度	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24
会員数	71	59	42	40	46	53	58	59	51	48

支部長校は昭和57年4月校長協会の釧根支部が釧路支部と根室支部に分離独立することになり、昭和58年に高教研支部も根室支部として独立した。事務局は羅臼高校におかれ、歴代羅臼高校長が支部長を務めてきたが、平成21年より標津高校と羅臼高校が2年おきに事務局を担当することとなり、現在に至っている。

〔歴代支部長・事務局〕

年度	支部長	事務担当者	事務局校
15	岡崎 孝男	西 博道	羅臼
16	吉田 廣	西 博道	羅臼
17	吉田 廣	納谷 泰文	羅臼
18	澁谷 寿継	納谷 泰文	羅臼
19	澁谷 寿継	千葉 浩次	羅臼
20	澁谷 寿継	千葉 浩次	羅臼
21	飯島 範雄	飯田 知男	標津
22	宮崎 真彰	飯田 知男	標津
23	丸山 年民	鎌田 到	羅臼
24	丸山 年民	小川 政博	羅臼

3 支部活動

各分掌や教科ごとに実施されていた管内の各種教育研究会は平成9年度から本研究会として再編された。

現在、教務・生徒指導・進路・教育相談・養護の各分掌部会及び、国語・地歴公民・数学・理科・保体・外国語・情報・商業の各教科部会が活発に活動しており、毎年度冊子にまとめられ、全会員に配布している「研究成果のまとめ」も、今年で第16集となる。また、家庭科と芸術科に関しては隣接する釧路地区と合同の活動により、大きな成果をあげている

4 研究発表者及び研究紀要掲載者

当地区は、地理的に札幌に遠いという条件にあっても、各教科並びに分掌において研鑽に努め、その成果をたずさえ、毎年1月に札幌で開催される研究大会には、多くの会員が参加している。特に教科部会の研究発表、記録、司会等に積極的に加わり、研究大会の充実、発展に貢献してきている。

〔研究発表者・研究紀要掲載者〕

年度	項目	学校名	氏 名	分野
15	研究	根室	溝上 忠彦	物理
16	研究	中標津	市村 由子	化学
		中標津	浦 巧	生物
		根室	加藤理恵子	英語
	紀要	標津	石垣志保子	家庭
17	研究	根室	熊谷 英則	数学
18	紀要	根室	西島 博樹	理科
19	研究	別海	漆原 剛	農業
	紀要	中標津農業	尾崎 仁	農業
20	研究	標津	干場 大輔	日本史
		別海	林 よし子	養護
21	研究	別海	佐藤 一昭	数学
		中標津農業	山口 由人	生物
22	研究	中標津	井上結香子	政治経済
		別海	松原 直紀	生物
		標津	小川 将	保健体育
23	研究	中標津農業	中野 俊光	現代社会

5 今後の展望

根室地区では、豊かな自然風土や北方文化の歴史遺産等を積極的に活用した教育が展開され、地域に根ざし、子どもの視点に立った創意ある教育が進められてきた。

今年度は「学校・家庭・地域が一体となった未来の根室を拓く子どもの育成」を管内教育推進の重点とし、学校・家庭・地域社会それぞれが主体的に子どもたちにかかわり、三者が互いに高め合うことでそれぞれの教育力の向上を目指している。

学校の教育力向上は、直接の担い手である教員の資質能力に負うところが極めて大きい。教職員の平均年齢が若く、初任者の配置傾向が強いといった地域的な特性をもつ当地区においては、特に研修は大きな意義をもつ。

今後も支部の活動として、会員数並びに研究会への参加者の増加に努めるとともに、会員各位が積み重ねた研鑽を、地区教育の充実に結びつけていくように働きかけていきたい。

(北海道羅臼高等学校教頭 小川 政博)

十 勝 支 部

1 地区の概要

十勝地区は、北海道の南東部に位置し、北は大雪山系と十勝岳、西は日高山脈、東は北見山系と三方が山に囲まれ、南には太平洋を望む広大な十勝平野が広がっている。地区は1市16町2村から構成され、道内の総合振興局・振興局で最大の面積を有し、新潟県、秋田県と同程度の面積である。

十勝支部には、高等学校24校（道立18、市町村立2、私立4）と特別支援学校4校（うち高等部を有する学校2）、さらに農業大学校1校がある。

2 会員数の推移、歴代支部長・事務局担当者

〔会員数の推移〕

年度	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24
会員数	218	220	211	210	183	175	136	132	119	123

〔歴代支部長・事務局〕

年度	支部長	事務担当者	事務局校
15	東條 幸男	伊藤 宗武	帯広緑陽
16	形部 幸雄	井口 郁将	帯広緑陽
17	河合 慎二	朝野 良美	音更
18	佐々木誠治	竹村 優二	音更
19	平 富夫	佐藤 和英	芽室
20	山口 佳子	佐藤 和英	芽室
21	藤本 勝芳	西 博道	清水
22	藤本 勝芳	島 芳一	清水
23	佐藤 伸一	菅原 和良	帯広緑陽
24	菅野 誠	菅原 和良	帯広緑陽

3 支部活動

支部内には各教科等に係る研究団体が18あり、それぞれに活発な研究活動を行っている。

十勝支部の教育は、次の4点を重点に推進されている。

（1）学力の向上

授業改善を図り、学びの質を高める。

（2）豊かな心と健やかな体の育成

豊かな人間性と社会性をはぐくみ、健康でたくましい体をつくる。

（3）信頼される学校づくり

魅力ある揺るぎない学校を構築する。

（4）十勝らしい一人一人の学びの実現

新しい時代を切り拓く力を身に付けさせるとともに家庭や地域の教育力を一層高め、十勝のよさを取り入れた生涯学習活動を推進する。

4 研究発表者及び研究紀要掲載者

〔研究発表者・研究紀要掲載者〕

年度	項目	学校名	氏 名	分野
15	研究	士幌	福田 敏憲	世界史
		上士幌	辻 英明	生物
		足寄	木川田敏晴	地学
		鹿追	及川 佳勝	英語
		帯広南商業	武井 純子	商業
16	研究	本別	末信里佳子	数学
	紀要	帯広三条 帯広農業	千葉 和代 大関 俊郎	家庭 農業

17	研究	清水 本別 鹿追	太田 幸夫 蓑口 一哲 蜂谷 晶子	国語 日本史 音楽
	紀要	帯広柏葉	篠田 昌宏	数学
18	研究	新得 清水	小林 真里 高井 隆行	理科総合 化学
19	研究	帯広工業 帯広柏葉 音更	飯塚 浩二 岩田 勝美 小湊 秀子	工業 情報 情報
	紀要	帯広南	藤村一宏・國村光二・ 有塚修	商業
20	研究	帯広三条 帯広三条 帯広三条 帯広農業 帯広農業	矢ノ目慎也 新明 匠 千葉 和代 重堂 法人 廣瀬 之彦	数学 英語 家庭 農業 農業
	紀要	士幌	芳賀 雄太	農業
21	研究	帯広八千代中	能戸 貴英	情報
22	研究	上士幌 帯広農業	上村 剛 飛谷 淳一	国語 農業
	紀要	清水	浪岡 利光	教育一般
23	研究	芽室 大樹 更別農業 池田 足寄 帯広緑陽	石森由香利 岩松 親正 中川 智 園田 陽子 徳橋 孝之 前田健太郎	国語 地理 物理 美術 英語 情報
	紀要	帯広農業	飛谷 淳一	農業
24	研究	足寄 上士幌 池田 士幌 上士幌 更別農業	小林 央 泉 円人 川口 陽 佐藤 大 古川 泰弘 大和田恭平	倫理 数学 物理 化学 保健体育 農業
	紀要	帯広緑陽 帯広緑陽	山本ひろみ 前田健太郎	家庭 情報

5 今後の展望

十勝支部には文部科学省や道教委の研究指定を受けている学校が多数ある。

○教育研究開発事業（鹿追「地球学」）

○スクールカウンセラー活用事業（帯広柏葉、帯広農業）

○人権教育研究推進事業（大樹）

○サイエンス・パートナーシップ・プロジェクト事業（帯広農業）

○地域とともに学ぶ高等学校環境教育推進事業「環境教育実践校」（足寄）

○地域医療を支える人づくりプロジェクト事業（帯広柏葉）

○確かな学力を育む高校教育推進事業（帯広柏葉）

○スポーツエキスパート活用事業（足寄、帯広三条）

○高校生ステップ・アッププログラム（本別）

○高1クライシス未然防止事業（幕別）

○高等学校における発達障がい支援連携モデル事業（モデル校：更別農業、協力校：中札内高等養護学校）

○キャリア教育・職業教育推進事業（池田）

○北海道環境マネジメントシステムスタンダード（清水）

今後は支部内各学校との協力体制を一層深め、こうした研究事業の成果を広く普及・発信し、高教研での研修活動を活性化していくことが求められている。

（帯広緑陽高等学校教頭 菅原 和良）

胆 振 支 部

1 地区の概要

胆振地区は、東西に広く苫小牧を中心とする東部地区と室蘭を中心とする西部地区とに分かれる。この10年間、産業の不況等による人口の減少、少子化による中学卒業生の減少という条件が重なり、当地区の学校状況は大きく変わった。

今年度、胆振地区の学校状況は、高等学校26校、中等教育学校1校、高等養護学校1校で、10年前の平成15年度と今年度を比較すると、間口数で全日制21減、定時制2減であり、学級数で全日制64減、定時制8減である。今後も減少傾向にあることは否めない。

2 会員数の推移、歴代支部長・事務局担当者

高等学校の間口減に伴って、教員数が減少している現状に加え、本研究会对する関心の低下ということもあり、研究会発足当初の勢いが感じられないというのも事実である。当地区支部の会員数が20年前と比較して半分以下にまで減少している現状がそれを端的に表している。このような状況等をふまえて、各学校の協力を得ながら、本研究会の重要性を訴えつつ、更なる会員数増加のための努力が必要と思われる。

〔会員数の推移〕

年度	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24
会員数	209	184	184	167	174	179	165	153	133	144

支部長校は、この10年の間、2年で交代しながら地区支部の運営にあたり、特に会員数の増加のための啓発活動に努力してきたところです。

〔歴代支部長・事務局〕

年度	支部長	事務担当者	事務局校
15	高野 正昭	部田 則行	厚真
16	渡辺 省司	前田 豊	伊達緑丘
17	渡辺 省司	田中俊一郎	伊達緑丘
18	高橋 誠	朝野 良美	室蘭東翔
19	高橋 誠	朝野 良美	室蘭東翔
20	見方 益夫	坂東 眞一	鵠川
21	見方 益夫	谷 昭憲	鵠川
22	高橋 廣一	岩瀬張幸子	虻田
23	高橋 廣一	岩瀬張幸子	虻田
24	小松 芳幸	小形 和律	穂別

3 支部活動

会員相互の資質向上を目指して、地区として研修活動の確立のための努力が歴代の支部長にあった。当地区には支部高等学校長協会のもとに、教務部会、生徒指導部会、進路指導部会、養護部会、各教科研等があり、それぞれの研究会は活発に活動しているところであるが、高教研としての活動を行うことはなかった。

4 研究発表者及び研究紀要掲載者

本研究大会における研究発表及び本会の研究紀要への論文掲載には、当地区から積極的に実践発表を行っているところであり、今後、本道教育の発展に貢献するものと確信している。さらに多くの会員からの発表を望みたい。

〔研究発表者・研究紀要掲載者〕

年度	項目	学校名	氏 名	分野
15	研究	豊浦 室蘭工業	石川 広美 志田 泰範	生物 工業
16	研究	鵠川 苫小牧東 苫小牧総合経済	木元 亮仁 渡邊 昭博 板野 成人	国語 倫理 商業
	紀要	苫小牧工業	新山 雄士	工業
17	研究	洞爺 室蘭工業 苫小牧工業 苫小牧総合経済 苫小牧東	佐藤 豊記 高野 隆広 西後 勝美 濱下 昌也 矢嶋 裕之	現代社会 生物 工業 商業 情報
	紀要	室蘭商業	林 雅代	家庭
18	研究	鵠川 苫小牧総合経済 白老東 厚真	藤原 隆 米根洋一郎 酒井 誠至 金川 和人	数学 理科総合 化学 地学
19	研究	室蘭栄 北海道栄 白老東 厚真 室蘭栄	芳澤 文明 山田 高嗣 奈良 尚久 金川 和人 續木 辰也	地理 物理 生物 地学 音楽
20	研究	室蘭栄 登別青嶺 苫小牧南 室蘭工業	加藤 孝志 高野 聖三 塚西 圭満 佐藤 満	国語 化学 生物 理科総合
21	研究	虻田 登別明日 室蘭工業	濱野 葉月 坂本 朋嗣 板坂 浩毅	国語 化学 工業
	紀要	苫小牧総合経済	小笠原 聡	商業
22	研究	鵠川 室蘭工業 穂別 伊達緑丘 苫小牧西	稲川 幹雄 黒津 豊輝 伊藤 雄大 林 昭宏 伊藤 崇由	日本史 倫理 数学 物理 化学
23	研究	登別明日 苫小牧工業	高石 健一 木村 浩二	保健体育 工業
24	研究	登別明日 室蘭栄	酒井 誠至 石田 暁	生物 地学
	紀要	白老東	河内 健治	理科

5 今後の展望

「高教研」の最大の魅力は何といっても全道規模の交流にある。教員の研修は、自校内の分掌・教科における研修をはじめ管内における研究会等においても活発にされているところであるが、本会のような規模での研究会は大変貴重である。

特に若手や中堅の教員が、自校のみならず全道の教育に視野を広げ、教師間・学校間の連携を深め、互いに刺激し合いながら研鑽を深めていくことは北海道全体の教育にとって不可欠といえる。

50周年を機に、設立当初の趣旨・目的を再確認したうえで、会員数の増加や啓発活動に努めるとともに、会員の資質向上や日々の教育実践に生かせる本研究会としたい。

(穂別高等学校教頭 小形 和律)

日 高 支 部

1 地区の概要

日高地区は日高山脈と平行に走る海岸線に挟まれた長方形上の地形で、日勝峠麓の日高高校から太平洋に突き出す所に位置するえりも高校の町立2校の間に道立高校6校がほぼ海岸線に沿って点在する小さな地区支部である。

少子化の影響で年々中学卒業生の減少が続き、高校入学者が減っているなかで毎年3クラス分以上もの中学生が流出しており、管外の公立高校への流出が止まらず、地元高校にとっては大きな課題となっている。流出する生徒の教育ニーズを的確に把握し各学校が一層特色ある教育や個別化を進めて地元高校へ呼び戻せるよう努めることが求められている。

2 会員数の推移、歴代支部長・事務局担当者

高等学校の募集停止や間口減による教員数の減少に伴い、平成20年度をピークに会員数も年々減少の傾向にあるが、各学校の協力を得て、会員数の増加を図っていく必要がある。

〔会員数の推移〕

年度	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24
会員数	73	80	71	67	72	81	71	72	65	61

わずか8校という小さな支部のため支部長校は、平取高校が担当し、支部の運営および会員数の啓発に努めている。

〔歴代支部長・事務局〕

年度	支部長	事務担当者	事務局校
15	高橋 誠	沼澤 博美	平取
16	高橋 誠	田村 二郎	平取
17	高橋 誠	田村 二郎	平取
18	佐藤 博明	境 治雄	平取
19	佐藤 博明	境 治雄	平取
	池田 成徳		
20	池田 成徳	境 治雄	平取
21	池田 成徳	長田 淳	平取
22	池田 成徳	長田 淳	平取
23	杉本 祐子	長田 淳	平取
24	杉本 祐子	前川 幸啓	平取

3 支部活動

当管内には管内高等学校教育の振興を図ることを目的に平成6年までの「日高管内高等学校連盟」を発展的に改組し、平成7年「日高管内高等学校教育研究会」と名称を改め、下記のとおり各高等学校が当番校となって14部会が開催され、管内高等学校教育の充実・発展のために活発な活動を行っている。

今後は管内高教研と連携し、地区支部として部会講師招聘や講演講師への謝礼補助などを検討していく必要がある。

平成24年度日高管内高等学校教育研究会開催一覧

	部 会	当 番 校	開催日
①	教 務	様似高等学校	10月29日
②	生徒指導	静内高等学校	11月20日
③	進路指導	様似高等学校	11月28日
④	教育相談	富川高等学校	12月3日
⑤	国 語	えりも高等学校	11月22日
⑥	地歴公民	静内高等学校	11月8日
⑦	数 学	富川高等学校	11月16日
⑧	理 科	平取高等学校	10月23日
⑨	保健体育	静内農業高等学校	10月23日
⑩	英 語	日高高等学校	10月22日
⑪	家 庭	静内農業高等学校	11月9日
⑫	情 報	隔年実施開催せず	
⑬	芸 術	浦河高等学校	11月7日
⑭	養 護	隔年実施開催せず	

4 研究発表者及び研究紀要掲載者

〔研究発表者・研究紀要掲載者〕

年度	項目	学校名	氏 名	分野
15	研究	静内農業	塩村 亮	英語
16	研究	浦河 静内農業 富川	清水 義徳 山田 顕 小笠原 節	地理 生物 情報
17	紀要	平取	坂本さおり	家庭
18	研究	平取	須田 道春	数学
20	研究	浦河 静内	増田 功 泉田 悦宏	音楽 英語
21	研究	富川	櫻井 智	商業
22	研究	浦河 様似 静内	石橋 哲哉 藤田 尚樹 大塚 徹	数学 英語 英語
	紀要	浦河	小林 成人	数学

5 今後の展望

管内高教研を中心に支部全体の研究意欲を高め、会員数の増加に努めるとともに、多くの会委員が日頃の教育実践を本研究会へと結びつけていけるように働きかけていきたい。

(平取高等学校教頭 前川 幸啓)

30周年記念誌（日高地区支部）より

H5.1 発行

日高地区支部は8校による「日高地区高等学校連盟」（昭和52年発足）を組織し15年が経過している。途中定時制課程の閉課等があった部会の開催についても幾多の変遷を経ながら、①教務、②生徒指導、③進路指導、④教育相談の4部会と、⑤教科部会：国語、社会、数学、理科、英語、体育、家庭、商業（8教科）について当番校を定め研究協議会を計画的に行っている。

．．．．

折角の研究成果の記録を保存し、系統だて普及を図り発展させていくために是非集録にまとめて軌跡を明らかにしておきたいという気運が高まり、昭和63年度から実現を見ることとなった。

(平取高等学校長 佐藤 重喜)

教 科 部 会

国語部会

1 この10年を振り返り

国語部会のこの10年間の軌跡をたどってみますと、講演、研究発表、研究討議等、毎年充実した内容で発展してきたものと思います。特に本道は大都市の大規模校から郡部の小規模校まで、さまざまな規模の学校が混在する自治体であり、各学校で生徒の実態に合った教育活動が展開されていることが研究発表を通してうかがい知ることができました。また、評論文読解・韻文鑑賞・国語表現・古文理解・漢文解釈など高等学校国語科各分野からまんべんなく研究発表が出された10年間であります。

一方で少子高齢化の波は押し寄せており、小規模校の統廃合、また大規模校でも入学定員の減少が進んだ10年間であったともいえます。激動する社会情勢に対応して教育活動も変化が求められてきた10年間であったと考えております。

2 会員数の推移、歴代部会長・事務担当者

生徒数の減少に伴い、教員数も減り、あわせて会員数も右肩下がりで減少し続けています。

〔会員数の推移〕

年度	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24
会員数	383	353	329	321	312	305	277	278	252	266

〔歴代部会長・事務局〕

年度	部会長（所属）	事務担当者（所属）
15	柏倉 正明（札幌稲雲）	遠藤 彰（札幌稲雲）
16	武田 克伸（札幌平岸）	遠藤 彰（札幌平岸）
17	本間 芳樹（札幌手稲）	吉田 政司（札幌手稲）
18	武田 克伸（札幌平岸）	遠藤 彰（札幌平岸）
19	武田 克伸（札幌清田）	遠藤 彰（札幌平岸）
20	秋田 松年（大麻）	遠藤 彰（札幌平岸）
21	喜多 清彦（大麻）	遠藤 彰（札幌平岸）
22	喜多 清彦（大麻）	遠藤 彰（札幌新川）
23	田端 明雄（札幌東）	遠藤 彰（札幌新川）
24	大鐘 秀峰（札幌真栄）	遠藤 彰（札幌新川）

3 部会講演講師

〔講演演題・講師〕

年度	演題・講師
15	「科学とことば」 国際基督教大学大学院教授 村上陽一郎 氏
16	「21世紀に読みなおす『こころ』」 東京大学大学院教授 小森 陽一 氏
17	「『こころ』を読むこと、『こころ』を教えること」 早稲田大学教授 石原 千秋 氏
18	「『わかったつもり』をのりこえる」 宮城教育大学教授 西林 克彦 氏
19	「『古典』をつくる」 作家 橋本 治 氏

20	「ことばの世界をひろげる古典教育 ～古典教育は生き残れるか～」 國學院大學名誉教授 中村 幸広 氏
21	「『生きる力』を育てるための小論文・作文指導」 鶏鳴学園学長 中井 浩一 氏
22	「これからの日本に必要な言葉の教育 ～『言語技術』の有効性～」 つくば言語技術教育研究所所長 三森 ゆりか 氏
23	「対話の方法としての文学」 作家 奥泉 光 氏
24	「世界の不幸を見つめるドストエフスキー」 東京外国語大学 学長 亀山 郁夫氏

4 部会の現況

左記にあるとおり、当部会の会員数は毎年減り続けておりますが、数的減少が研究活動の停滞や意欲の低下を表しているわけではありません。ほとんどの管内で「国語研究会」は開催され、一定の参加者を集めて充実した内容の研究発表が行われ、盛会であるという報告も受けております。

また、平成24年8月には「北海道高等学校国語研究会」の第1回セミナーが開催され、高教研国語部会に匹敵する参加者を集めました。冬の「高教研国語部会」、夏の「高国研」、そして各管内で継続的に開催されている「国語研究会」という研究会3本柱を通じて、全道の国語科教員のネットワークを広げ、研修・研鑽を図っているところでございます。

5 今後の展望

明年から新学習指導要領に基づいた教育課程が、学年進行で実施され、国語科は、科目名としては国語総合(4)、国語表現(3)、現代文A(2)、現代文B(4)、古典A(2)、古典B(4)の6科目に改編されます。また、現行の学習指導要領でも示されている言語活動については、さらなる充実が求められています。具体的には「話すこと・聞くこと」・「書くこと」・「読むこと」・「言語事項」の3領域1事項を維持しつつ、新たに「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」を設け、我が国の言語文化に親しむ態度を育てたり、国語の役割や特質についての理解を深めたり、豊かな言語感覚を養ったりするための内容が盛り込まれています。言語活動の充実とあわせて、読書活動の充実にも触れられています。学校図書館や地域図書館などと連携し、読書の幅を広げ、読書の習慣を養うことや、生涯にわたって読書に親しむ態度を育成することや、情報を使いこなす能力を育成することを重視して改善を図るよう示されております。

今後はさらに各学校の実態に合った多種多様な教育課程が編制されつことと思われます。国語科の教員としてもますます創意工夫が求められ、教え込む授業から学び取る授業への転換が進んでいくことでしょう。国語科教員間で情報を共有し、研修・研鑽を積んでいきましょう。

（記者 札幌新川高等学校 遠藤 彰）

地歴・公民 部会

1 この10年を振り返り

この10年、各部会とも講演内容の充実に努め、道内外から様々な講師を迎えて、視野を広げるとともに新しい知識や考えの獲得に努めてきました。また、研究発表に関しても、教科の専門性を踏まえながら日々の実践を内容としており、生徒の主体性を引き出し学習意欲を高めるための創意工夫に富んだ授業や学習指導の様子がうかがえます。

2 会員数の推移、歴代部会長・事務局担当者

〔会員数の推移〕

年度	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24
会員数	418	420	414	388	382	395	358	335	322	302

〔歴代部会長・事務局〕

年度	部会長（所属）	事務担当者（所属）
15	武村 宗彦（札幌稲西）	亀山 範行（札幌稲西）
16	佐藤 静也（札幌真栄）	前田 豊（札幌真栄）
17	佐藤 静也（札幌真栄）	前田 豊（札幌真栄）
18	濱本 武司（札幌西）	湯田 恭丈（札幌西）
19	濱本 武司（札幌西）	湯田 恭丈（札幌西）
20	古林 由則（札幌東）	西嶋 潤一（札幌東）
21	古林 由則（札幌東）	西嶋 潤一（札幌東）
22	岡元 賢（札幌白石）	片桐 清実（札幌白石）
23	岡元 賢（札幌白石）	久保 真理（札幌白石）
24	荘司 信一（札幌平岡）	林 正憲（札幌平岡）

3 部会講演講師

〔講演演題・講師〕

年度	演題・講師
15	世界史「始皇帝とその時代 ～新発見の考古資料から～」 学習院大学教授 鶴間 和幸 氏 日本史「考古学からみた北海道の歴史」 二風谷沙流川歴史館学芸員 森岡 健治 氏 地理「食からみた北海道の地理」 ホテルクラビーサッポロ料理長 貫田 桂一 氏 現代社会「食の安全性と地産・地消」 拓殖大学北海道短期大学環境農学科長 相馬 暁 氏 倫理「ただよう高校生の心」 臨床心理士 市川 啓子 氏 政治経済「北海道経済社会の構造問題と将来像」 北海道大学大学院教授 宮脇 淳 氏
16	世界史「神聖ローマ帝国」 北海道大学助教授 山本 文彦 氏 日本史「中世十三湊と北方世界」 市浦教育委員会安藤の里賑興室係長 榊原 滋高 氏 地理「北海道の観光と食」 (株)リクルート北海道じゃらん 取締役編集長 ヒロ 中田 氏 現代社会「『北海道の経済活性化』に必要なもの」 北海道ベンチャーキャピタル(株) 代表取締役社長 松田 一敬 氏

16	倫理「精神分析から見た現代社会の『倫理』 —フロイト、ラカンの父性原理と自己の起源—」 北海学園大学教授 小島 康次 氏 政治経済「ヨン様は日本人の韓国観を変えたか？」 東京都立大学教授 鄭 大均 氏
17	世界史「現代西欧における社会史方法論 ～フランス土木業組合の組織史を事例に～」 北海道大学大学院助教授 高井 哲彦 氏 日本史「日本近代史研究と教育」 北海道大学大学院助教授 川口 暁弘 氏 地理「武四郎が愛した温泉」 北海道いい旅研究室編集長 館浦 海豹 氏 現代社会「『戦後60年』以後 マスコミの現状と これからの課題—日本のメディアは市民の期待に 応えられるか—」 立正大学教授 桂 敬一 氏 倫理「最近の青少年と保護者の意識について— 札幌市子どもアシストセンターから見える高校生 と保護者の姿—」 札幌市少年育成指導員 児玉 恭昌 氏 政治経済「間違いだらけの憲法学習 —戦後社会科教育言説を点検する—」 北海道教育大学教授 安藤 豊 氏
18	世界史「イスラームの拡大と西アジア社会 ～ズィンマの民という視点から～」 北海道大学大学院教授 太田 敬子 氏 日本史「学校教育におけるアイヌ史」 札幌大学助教授 本田 優子 氏 地理「白神山地の自然と人～伝統と未来～」 弘前大学名誉教授 牧田 肇 氏 現代社会「2030年の北海道」 社団法人 北海道未来総合研究所理事長 原 勲 氏 倫理「パラダイム・シフト ～教育現場に活かせるコオチング～」 ビー・クリエイト 土井 英里圭 氏 政治経済「法教育入門 ～何故、今『法教育』が求められているのか～」 弁護士 岸田 洋輔 氏
19	世界史「北魏胡族体制論」 北海道大学大学院助教 松下 憲一 氏 日本史「国民国家と古都奈良・京都」 京都大学准教授 高木 博志 氏 地理「世界遺産知床の生態とその保全」 斜里町知床博物館館長 中川 元 氏 現代社会「証券取引と金融市場の役割」 日本証券協会NPOエイブプロシス 増井 利光 氏 倫理「病むこと、回復すること～精神障害を持つ 若者の支援から見えてくるもの～」 北海道医療大学教授 向谷地 生良 氏 政治経済「企業社会で求められる能力 ～マネジメントの基礎理論と実務への応用～」 北海学園大学准教授 田中 史人 氏
20	世界史「インド独立をめぐるいくつかの問題」 函館工業高等専門学校教授 四宮 宏貴 氏 日本史「近世アイヌ社会史研究の論点」 北海道大学大学院準教授 谷本 晃久 氏 地理「北海道の鉄道が創る ～交通インフラ・イノベーション～」 北海道旅客鉄道株式会社副社長 柿沼 博彦 氏 現代社会「ごみと循環型社会」 北海道大学大学院教授 吉田 文和 氏 倫理「環境倫理と高校教育」 京都大学名誉教授 加藤 尚武 氏

20	政治経済「現代日本の労働と生活」 北海学園大学准教授 川村 雅則 氏
21	世界史「日本へのマニ教絵画の伝来とその世界史的背景」 大阪大学大学院教授 森安 孝夫 氏 日本史「女真海賊の侵攻（刀伊の入寇）と日本・高麗関係～日韓歴史教科書シンポジウムの成果から」 北海道教育大学准教授 鈴木 哲雄 氏 地理「現代社会における地域づくりの課題と農業・食料問題～地理教育の課題を視野に入れて」 北海道大学名誉教授 山田 定市 氏 現代社会「政権交代と生活保障～日本社会の転換」 北海道大学大学院教授 宮本 太郎 氏 倫理「近年の中学・高校生の現状と課題～スクールカウンセリングを通じて」 北海道教育大学 教職員大学院院長 扇子 幸一 氏 政治経済「新時代の民主主義と公民教育の課題～ポスト政権交代の民主政治と若者の政治」 北海道大学大学院教授 山口 二郎 氏
22	世界史「中国の生活文化を探る旅～中国西南地方の歴史と民俗をめぐって～」 琉球大学教授 辻 雄二 氏 日本史「歴史の読み方学び方～地貌を知る営みから～」 筑波大学名誉教授 大瀧 徹也 氏 地理「『近世蝦夷地図の変遷』～江戸期の地図にみる北海道の姿～」 北海道史研究協議会会員 高木 崇世 氏 現代社会「情報化社会と人権問題について」 北海道情報大学 准教授 有道 出人 氏 倫理「情報倫理と情報モラル教育」 北海道教育大学旭川校准教授 村田 育也 氏 政治経済「高校社会科の知識で外交問題をどう読み解くか」 作家・元外交官 佐藤 優 氏
23	世界史「イギリス史の現場からケルト論争を中心に」 北海学園大学人文学部教授 常見 信代 氏 日本史「考古学成果と文献資料をつなぐアイヌ文化の歴史～厚真町の遺跡発掘成果～」 厚真町教育委員会学芸員 乾 哲也 氏 地理「北海道の地名を歩く」 ノンフィクション作家 合田 一道 氏 現代社会「社会を変える教育-シティズンシップ教育と社会的課題解決の教育モデル-」 シティズンシップ教育推進ネット代表 大久保正弘 氏 倫理「高校科目『倫理』をどう考えるか～哲学・倫理学を『教育倫理』にどう結び付けるか～」 北海道大学大学院文学研究科教授 蔵田 伸雄 氏 政治・経済「『北海道じゃらん』の事例に見る地域活性化のポイント」 株式会社リクルート北海道じゃらん編集長 中西 基王 氏
24	世界史「宋代中国の政治と社会」 北海道大学大学院文学研究科東洋史研究室 専門研究員 宮崎 聖明 氏 日本史「受験日本史の指導」 学校法人河合塾 日本史講師 坂本 勝義 氏 地理「元気が出る地理教育を考える」 (財)日本デジタル道路地図協会 理事長 泉 堅二郎 氏
24	現代社会「教室で学ぶワークルール」 NPO 法人 職場の権利教育ネットワーク 代表理事 道幸 哲也 氏 倫理「命をつなぐ医療とは」 旭川医科大学外科学講座 消化器病態外科学分野教授 古川 博之 氏

24	政治経済「移行期における『政治・経済』教育の課題と展望」 北海商科大学商学部教授 堂徳 将人 氏
----	---

4 部会の現況

この10年間で登録数は約100名減じ、会の運営に若干の影響が出ています。しかしながら、各部会の運営委員などが中心となってネットワークをつくり、講演や研究発表の充実を図り、地歴・公民の教科目標実現に資するよう努力を続けています。また、各科目の研究会が夏季休業中に研究大会を行い、高教研と併せて、地歴・公民の教員の資質能力の向上に貢献しているところです。

5 今後の展望

平成25年度より新学習指導要領が完全実施となります。それに先立ち、教育基本法が約60年振りに改正され、21世紀を切り拓く心豊かでたくましい日本人の育成を目指すという観点から、新しい理念や教育の目標が明らかにされたところです。

人格の完成を目指し、平和で民主的な国家及び社会の形成者を育むという目的は不変ですが、新たに公共の精神の尊重、環境保全への寄与、伝統と文化の尊重、国際社会の平和と発展に寄与することなどが強調されています。そもそも地歴科及び公民科は、歴史的・地理的事象や先哲の考え方、政治・経済を学びながら、社会的事象についての見方や考え方を深め、人間としての在り方生き方についての自覚を一層深めることをねらいとしています。また、知識基盤社会化やグローバル化が進み、変化の激しい社会を子どもたちは生き抜いていかなければなりません。従って、地歴・公民科が高校教育において果たすべき役割はさらに大きなものになっていると思われます。

さらに、教育課程編成・実施の配慮事項として、道徳教育やキャリア教育の推進、言語活動の充実が重視されています。これらとの関連も地歴・公民科は積極的に考え研究し、外部へ発信していく必要があります。

以上のことから、高教研地歴・公民部会が取り組むべきことは山積していると言えます。当然のことながら、研究のための研究、机上の空論とならないように、学習指導要領の理念を現実の子どもたちにいかに具現化するか、どのように授業を組み立て、学習指導を行うか、そうした実践を報告し、また実践につながる講演や研究発表が必要です。また、都市部の学校も郡部の学校も、大学進学者が多い学校も少ない学校も、様々な課題や困難を抱えています。研究会に集った会員が日常の悩みなどを語り、支え合い、励まし合うようなつながりをつくっていくことがますます求められていると考えます。

今後とも当部会への皆様のご指導ご支援をよろしくお願い申し上げます。

(記載者 札幌平岡高等学校 林 正憲)

数 学 部 会

1 この10年を振り返り

50周年を迎えるにあたり、過去10年間の研究主題を記録として残し考察する。

〔会員数の推移〕

年度	研究主題
H 15	「学ぶ力」と「考える力」を育成する数学教育
H 16	自ら考え、解決する力を育む数学教育
H 17	〃
H 18	生きる力と確かな学力を育成する数学教育
H 19	学びとる力と学習意欲を育てる数学教育
H 20	〃
H 21	数学の良さを認識し、それを活用する数学教育
H 22	思考力・表現力を育て学ぶ意欲を高める数学教育
H 23	〃
H 24	数学的な見方や考え方を活用し、確かな学力の確立を目指す数学教育

この10年は、いわゆる「ゆとり教育」の理念を残しつつも、自ら考え、自ら学び、課題解決していく力を身に付けさせようという動きに、合わせて主題が立てられ教育実践を行ってきた。さらに、新しい学習指導要領の下で文科省から通知された学習評価を行うにあたっての配慮事項に関しても、協議・研修を重ねている。H 22年度以降は、知識・技能の習得のみならず、思考力・判断力・表現力をバランスよく身につけさせ、学ぶ意欲を高め、確かな学力の確立を目指した数学教育を研究の中心として実践している。

2 会員数の推移、歴代部会長・事務局担当者

〔会員数の推移〕

年度	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24
会員数	390	362	367	347	351	351	311	301	281	284

〔歴代部会長・事務局〕

年度	部会長（所属）	事務担当者（所属）
15	宮崎 英彰（札幌篠路）	岡崎 肇（札幌篠路）
16	吉田 正勝（札幌西）	本庄 聡（札幌西）
17	吉田 正勝（札幌西）	本庄 聡（札幌西）
18	小田 章雄（札幌稲雲）	宮本 幸紀（札幌稲雲）
19	蓑嶋 和央（札幌稲雲）	渡邊 幸輝（札幌稲雲）
20	蓑嶋 和央（札幌稲雲）	濱野 壽樹（札幌稲雲）
21	細野 敏（北広島）	白川 淳一（北広島）
22	中村 均（札幌手稲）	上西 亮（札幌手稲）
23	中村 均（札幌手稲）	上西 亮（札幌手稲）
24	佐々木高至（札幌平岸）	角 智幸（札幌平岸）

3 部会講演講師

〔講演演題・講師〕

年度	演題・講師
15	「数学と社会や生徒が軸となる数学教育」 国立教育政策研究所総合研究官 長崎 榮三 氏
16	「新しい時代に向けて一高等学校から大学へ、数学の教育」 東京大学大学院教授 岡本 和夫 氏
17	「みんなで考えよう学力低下問題」 慶応義塾大学教授 戸瀬 信之 氏
18	「小・中・高・大のつながりをもった数学教育を」 東京理科大学教授 芳沢 光雄 氏
19	「これからの数学教育について」 東京理科大学数学研究所所長 澤田 利夫 氏
20	「数学の問題解決力における読解分析力について」 千葉大学名誉教授 佐藤 恒雄 氏
21	「大学入試と数学教育」 早稲田大学教授 鈴木 晋一 氏
22	「数学科の学習指導における言語活動の充実」 筑波大学大学院教授 清水 美憲 氏
23	「数学活動を促す教材づくり～構造としての数学を具体から抽出するために～」 早稲田大学教育学部教授 渡邊 公夫 氏
24	「超入門・リーマン予想」 東京工業大学世界文明センターフェロー 桜井 進 氏

4 部会の現況

数学部会は、午前の部で総会および講演会、午後の部で研究協議という日程で行われている。研究発表者を地区支部ごとのローテーションで割り当てられているため、発表内容は教材研究から指導法まで多岐にわたる。年に一度の貴重な研修の機会であり会員相互の交流の場でありたいと願っているが、貴重な研究発表を3～4地区から出して頂いていることから、質疑応答に十分な時間がとれていないのが現状で、今後の課題である。

5 今後の展望

少子化が進み全国的に大がかりな統廃合が進んでいる。北海道は、その中でも顕著である。郡部の学校においては、各教科の専門教員を配置できない状況である。反面、質の保証が強く叫ばれている中で、道教委は、指導力向上も視野に入れた教員相互派遣を実施した。このように、我々も知恵を出し合い逆境を追い風にするような手立てを講じ、現状の打開を図らなければならない。

当部会では、すべての高校生に「質の保証」を提供することを念頭に、そのような各校の実践を紹介していただき研修を重ねている。会員の減少は、否めないが各会員の今後の資質向上に向けて、この会がさらに発展することを願っている。

（札幌平岸高等学校 角 智幸）

理 科 部 会

1 この10年を振り返り

中・高生の「理科ばなれ」や「理数系の学力不足」が社会的な問題となり、研究発表では地域の特長を生かした教材や生徒の興味・関心を高める授業実践に関する報告が多くなった。

平成21年3月に告示された新学習指導要領では理科の科目名や学習内容が大きく変更され、旧学習指導要領の「理科総合」という科目がなくなったが、理科部会の科目名については、これからも物理、化学、生物、地学、理科総合の5つの分野で構成し運営していくことを決めた。

全体講演や分科会講演では「理科教育」、「原子力」、「地震」、「エネルギー」に関する話題が多く見られるようになった。

平成23年度には新学習指導要領の先行実施に向けて、「全体協議」を実施した。理科センターから講師を招き、新学習指導要領に対する理解を深めた。

また、平成24年度は新学習指導要領が既に実施されている小中学校の事例について情報交換を行った。

2 会員数の推移、歴代部会長・事務局担当者

〔会員数の推移〕

年度	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24
会員数	387	374	353	367	379	360	348	326	306	289

〔歴代部会長・事務局〕

年度	部会長（所属）	事務担当者（所属）
15	佐藤 俊治（石狩翔陽）	村中 淑秀（有朋）
16	松崎 祥一（北広島西）	村中 淑秀（有朋）
17	清末 定子（札幌稲雲）	山田 大隆（札幌開成）
18	松下 榮顯（当別）	山田 大隆（札幌開成）
19	松下 榮顯（当別）	大久保政俊（札幌南）
20	青塚 健一（札幌新川）	大久保政俊（札幌南）
21	青塚 健一（札幌新川）	三浦 治彦（札幌啓成）
22	守屋 開（札幌大通）	三浦 治彦（札幌啓成）
23	古屋 睦雄（札幌あすかぜ）	佐藤 大樹（札幌篠路）
24	佐々木淳一（札幌西陵）	佐藤 大樹（札幌篠路）

3 部会講演講師

〔講演演題・講師〕

年度	演題・講師
15	全体「わが国の科学教育政策はこれでよいのか～諸外国との比較～」 お茶の水女子大学名誉教授 細谷 治夫 氏 理科総合「エントロピーから見た循環・共生思想の本質」 酪農学園大学 矢吹 哲夫 氏 物理「モノサイクル光パルスの発生とその計測」 北海道大学大学院助教授 森田 隆二 氏 化学「宇宙の中の化学 ～スペースシャトルからサッカーボールまで～」 お茶の水女子大学名誉教授 細矢 治夫 氏

15	生物「SARS 対策とウィルスの性質」 国立感染症研究所主任研究官 水谷 哲也 氏 地学「海洋から大気への影響を宇宙から見る」 北海道大学大学院助教授 谷本 陽一 氏
16	全体「南極オゾンホールが発見とその意義」 気象研究所 主任研究官 忠鉢 繁 氏 理科総合「原子力問題と環境問題」 北海道大学大学院教授 加藤 幾芳 氏 化学「最前線の天然物化学」 北海道大学大学院教授 宮下 正昭 氏 生物「湿原における植生成立機構の解析とその保全に関する研究—北海道の低地に分布する泥炭地湿原を対象として—」 札幌市立高等専門学校助教授 矢部 和夫 氏 地学「地球表層圏を記録するメディア—地質体」 北海道大学大学院助教授 川村 信人 氏
17	全体「惑星探査の最新成果」 国立天文台 天文情報公開センター助教授 渡部 潤一 氏 理科総合「北海道衛星プロジェクトとハイパースペクトル技術の展望」 北海道工業大学助教授 佐鳥 新 氏 物理「水素エネルギー・燃料電池を活用する北の街作り」 北海道大学触媒化学研究センター教授 市川 勝 氏 化学「大気中 CO ₂ からカーボンナノファイバーをつくるプロセスと触媒の役割」 北見工業大学教授 多田 旭男 氏 生物「ダニの生物学」 北海道教育大学助教授 高久 元 氏 地学「岩石の見方」 北海道立理科教育センター研究員 岡本 研 氏
18	全体「アレルギー病はなぜ増えたか～きれい好きの功罪検証～」 東京医科歯科大学名誉教授 藤田 紘一郎 氏 理科総合「北海道のバイオガスパラント」 北海道大学大学院教授 松田 従三 氏 物理「電気接点現象の物理と科学～現代社会を支える基盤技術～」 千歳科学技術大学助教授 長谷川 誠 氏 化学「ナノテクノロジーと化学」 北海道大学大学院教授 魚崎 浩平 氏 生物「藤田紘一郎先生との懇話会」 地学「中学校理科（地学分野）の高校への移行統合内容における問題点」 札幌市立伏見中学校教頭 前田 寿嗣 氏
19	全体「ハンガリー出身の天才科学者たち」 東京工業大学大学院准教授 中島 秀人 氏 物理「光子の不思議と量子情報通信処理」 北海道大学教授 竹内 繁樹 氏 化学「有機電子材料の発展」 北海道大学教授 高橋 保 氏 生物「葉緑体進化のダイナミズム」 北海道大学教授 堀口 健雄 氏 地学「自然災害の軽減を求めて…有珠山噴火からのメッセージ」 北海道大学名誉教授 岡田 弘 氏
20	全体「理科教育と『環境科学』『環境』は理科教育になじまない」 東京大学教授 渡辺 正 氏 理科総合「はじめよう！科学技術コミュニケーション」 北海道大学博士研究員 佐藤 祐介 氏

20	物理「超小型人工衛星『HIT-SAT』の開発」 北海道大学大学院準教授 戸谷 剛 氏 生物「ヒメマイマイー地理的変異の謎ー」 北海道網走水産試験場栽培技術科長 桑原 康裕 氏 地学「北海道における活断層と直下型地震について」 北海道立地質研究所表層地質科長 大津 直 氏
21	全体「ニセ科学と科学リテラシー」 大阪大学教授 菊池 誠 氏 理科総合「雪は白ダイヤ、利雪の普及に向けて」 国際雪倶楽部代表 森本 幸江 氏 化学「溶解と結晶化過程の理解と結晶設計」 北海道大学大学院教授 稲辺 保 氏 生物「植食性テントウムシと新しい種の誕生」 北海道大学大学院 片倉 春雄 氏 地学「デスモスチルスの出現とクジラの変革ー漸新世の北太平洋で起きたことー」 足寄動物化石博物館館長 澤村 寛 氏
22	全体「地球を知る、地震の巣を掘る」 東京大学大学院教授 木村 学 氏 理科総合「先端技術の模擬演示実験の試みと実践ー光通信、偏光技術などの実験デモー」 千歳科学技術大学教授 長谷川 誠 氏 物理「人工心臓の現況と先端医療研究者育成の理系教育」 東海大学教授 岡本 英治 氏 化学「ノーベル化学賞のこぼれ話」 北海道大学大学院教授 覚知 豊次 氏 生物「小さな木工蜂にみる進化の足跡ーツヤハナバチの仲間にみられる営巣習性の変化と種の分化ー」 日本生物教育会参与 塩川 信 氏 地学「地球を知る・地震の巣を掘る」 東京大学大学院教授 木村 学 氏
23	全体「真性粘菌ーたかが単細胞されど単細胞変形体がつくるネットワークの妙技の秘密ー」 公立はこだて未来大学教授 中垣 俊之 氏 理科総合「福島第一事故を踏まえた原子力・放射線・エネルギー教育について」 北海道大学大学院特任教授 杉山憲一郎 氏 物理「第2の地球は存在するか」 北海道大学大学院教授 倉本 圭 氏 化学「光化学に立脚した吸光および蛍光化学センサー」 北海道大学大学院教授 中村 博 氏 生物「理科教材としての粘菌」 公立はこだて未来大学教授 中垣 俊之 氏 地学「はやぶさが明らかにした小惑星の正体」 北海道大学大学院教授 塚本 尚義 氏
24	全体「サボリ上手な動物たちー海の世界で新発見」 東京大学大気海洋研究所国際 沿岸海洋研究センター准教授 佐藤 克文 氏 物理「どうする？福島後のエネルギー！」 北海道大学教授 藤井 義明 氏 生物「脳の性差形成とアポトーシス（細胞死）ー♂と♀の行動の違いをつくり出すしくみー」 北海道教育大学教授 木村 賢一 氏 地学「宇宙のはじまりと進化、そして未来について」 北海道大学教授 羽部 朝男 氏

4 部会の現況

午前の全体講演、午後の分科会講演と研究発表・研究協議というスタイルは10年以上前から継続して受け継がれている。

全体講演の講師は5科目の幹事によるローテーションによって選考されている。最新の研究から長年蓄積されてきた研究成果まで、さまざまな分野における報告を聞くとともに理科教育のあり方を考える機会となっている。

5つの分科会については各科目幹事が運営し、それぞれの科目の専門性を生かした講演と研究発表・研究協議を実施している。研究発表では道内の各学校における授業実践を報告してもらい、協議している。

5 今後の展望

新学習指導要領の実施により、理科教育のありかたが大きく変化すると思われる。指導法の研究や観察・実験の開発は今まで以上に必要性を増すだろう。

冬季休業中の研修の場として本大会が気軽に参加でき、参加者にとって得られるものが多いものにしていくには講演や研究発表を充実させることが求められるので、北理研など他団体との連携も考えなくてはならないだろう。

この10年で登録会員数は減少した。しかし、参加者数は減少せずに170名から250名の間を維持している。一定数の参加者がいるということは高教研理科部会に期待し、信頼しているところがあるからだと思う。

本研究会の一層の発展を願っている。

(札幌篠路高等学校 佐藤 大樹)

20周年記念誌（理科部会）より S58.1 発行

本部会は長年、北大のご好意により工学部を会場にお借りし、研究会を実施して参りましたが、諸般の事情から会場変更を余儀なくされ、第16回札幌女子高校、第17回札幌教育文化会館、第18回札幌西高校、第19回札幌平岸高校と転々といたしました。会場校の特段のご配慮と献身的なご協力で、力強く歩みを進めて参りました。

また、教育課程の改訂を控え、基礎理科分科会に代わって第18回から理科I分科会が誕生し、現在の5分科会、会員数約900名と進展を遂げました。

．．．．．

．．． 本部会を通じ会員相互の研究交流を深め、連帯感を増強し、また巾広い研修を重ねることで、本道理科教育の振興に貢献されることを信じています。

(札幌啓成高等学校長 飯田 保穂)

保健体育 部会

1 この10年を振り返り

～保健体育分科会講演・研究発表の記録

第41回（平成15年度）

☆世界のTOP10を目指して—サッカー界の取り組み—
筑波大学助教授 田嶋 幸三 氏

○生徒が積極的に取り組む授業を目指して
中川 暁（岩内）

○連携型中高一環教育における保健体育の取り組み
斉藤和彦・尾形一彦（上川）

第42回（平成16年度）

☆成長期のスポーツ外傷・障害
—その特徴と対策について—

医療法人松田整形外科病院
院長 菅原 誠 氏

○定時制における授業の充実と可能性について
鶴丸 慎也（稚内）

○阿寒高校健康教育プラン
—ライフスキルを中心とした保健授業—
竹田 安宏（阿寒）

第43回（平成17年度）

☆体力・気力・学力向上のアクティブライフづくり
—体力低下問題の解決とよい授業づくり—

北海道教育大学教育学部釧路校教授
医学博士 小澤 治夫 氏

○「地域と連携した海洋スポーツ学習への取り組み
～本校の実践報告と今後の展望～

高野 智史（瀬棚商業）

○ICTを活用した保健授業
—薬物乱用にNOと言える逞しい生徒を育てるために—
岩岡 勝人（釧路工業）

第44回（平成18年度）

☆スポーツによる外傷・傷害予防

札幌医科大学保健医療学部臨床理学療法学講座
助教授 片寄 正樹 氏

○地域と協働した教育活動で生徒を育てる
堀 智博（常呂）

○自ら学び、考えることのできる保健・体育の授業
を目指して

尾形 友秀（稚内）

第45回（平成19年度）

☆身体トレーニングの効果を高めるスポーツ栄養学
北海道大学大学院教育学研究院人間発達科学分野

教授 水野 眞佐夫 氏

○確かな学力の向上をめざして
岸本 泰輔（羽幌）

○清里高校における授業評価を通しての健康科学の
授業実践

上田 智史（清里）

第46回（平成20年度）

☆学校体育に求められている体力の向上
北海道教育大学旭川校 教授 古川 善夫 氏

○学ぶ意欲を高める学習指導と学習状況を的確に捉
える評価のあり方について

伊藤 新太郎（恵庭南）

○地域と関わる生涯スポーツ授業について

吉田 武史（霧多布）

第47回（平成21年度）

☆高等学校学習指導要領改訂による教科保健体育の
あり方

北海道教育大学札幌校 準教授 渡辺 基氏

○北広島高校体育科の特色ある取り組み
高井 学司（北広島）

○学習指導と評価の改善・充実
清水 大策（千歳北陽）

第48回（平成22年度）

☆「学校体育やスポーツ現場で頻発するケガからの
予防すべき外傷・障害について」

北翔大学 準教授 吉田 真 氏

○生徒が主体的に取り組む体育授業の工夫について
新居 潤哉（利尻）

第49回（平成23年度）

☆「新学習指導要領とこれからの体育授業のあり方」
早稲田大学スポーツ科学学術院

教授 友添 秀則 氏

○観点別評価を取り入れた授業実践例について
高石 健一（登別明日）

○未来（あす）につなげる保健授業の実践
八太 敦志（寿都）

第50回（平成24年度）

☆「障害予防とパフォーマンスアップのトレーニング」
国立スポーツ科学センタースポーツ医学研究部

前任研究員 松田 直樹 氏

○共に学び共に生きる力をつける体育授業
古川 泰弘（上士幌）

○WYSH（ウィッシュ）式指導の取り組みについて
今村 和彦（小樽水産）

2 会員数の推移、歴代部会長・事務局担当者

〔会員数の推移〕

年度	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24
会員数	374	353	343	313	293	309	276	260	267	243

〔歴代部会長・事務局〕

年度	部会長（所属）	事務担当者（所属）
15	波佐 光洋（札幌東豊）	内浦 亨（札幌東豊）
16	数馬田 敏（札幌月寒）	木田 道子（札幌月寒）
17	鶴丸 英昭（札幌厚別）	木田 道子（札幌月寒）
18	鶴丸 英昭（札幌厚別）	木田 道子（札幌月寒）
19	酒井 周文（札幌篠路）	田中俊一郎（札幌篠路）
20	酒井 周文（札幌篠路）	田中俊一郎（札幌篠路）
21	上杉 正三（札幌東豊）	小松 泰宏（札幌東豊）
22	松井 則之（札幌東豊）	佐藤 和英（札幌東豊）
23	加藤 和美（江別）	田中 俊明（江別）
24	加藤 和美（江別）	窪田 徳明（江別）

（記載者 江別高等学校 窪田 徳明）

養 護 部 会

1 この10年を振り返り

養護部会は昭和61年度に部会の仲間入りをし、今年度27回目の開催となりました。平成4年度より歴代の札幌北高等学校長に部会長をお引き受けいただき、現在に至っております。

この間、子どもを取り巻く社会の変化や心身の健康問題の多様化、深刻化等により養護教諭の複数配置が促進され、平成17年の発達障害者支援法施行後、各学校においては特別支援教育に関する校内体制整備やスクールカウンセラーの配置等がなされました。

その後、平成21年に学校保健安全法が施行され、平成22年度より部会の主題を「現代的な健康課題の解決と学校保健活動の推進をめざして」と改め、部会内容を設定して参りました。

養護部会の運営は、発足時より母体となった北海道高等学校養護教諭研究会が担っておりますが、平成19年より高教研石狩地区支部会員の若干名と協働で運営委員会を組織し、石狩地区支部養護部会研修会も毎年開催しております。

2 会員数の推移、歴代部会長・事務局担当者

〔会員数の推移〕

年度	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24
会員数	103	112	93	97	86	89	80	83	75	64

〔歴代部会長・事務局〕

年度	部会長（所属）	事務担当者（所属）
15	沖野 隼夫（札幌北）	佐藤 菜子（札幌西）
16	中村 隆信（札幌北）	大村 道子（札幌北）
17	中村 隆信（札幌北）	大村 道子（札幌北）
18	中村 隆信（札幌北）	大村 道子（札幌北）
19	角張 裕信（札幌北）	大村 道子（札幌北）
20	角張 裕信（札幌北）	大村 道子（札幌北）
21	角張 裕信（札幌北）	関 澄恵（札幌工業）
22	黒田 信彦（札幌北）	関 澄恵（札幌工業）
23	黒田 信彦（札幌北）	関 澄恵（札幌北）
24	黒田 信彦（札幌北）	関 澄恵（札幌北）

3 部会講演講師

〔講演演題・講師〕

年度	演題・講師
15	「現代的健康課題とライフスキル」 兵庫教育大学助教授 西岡 伸紀 氏
16	「平成教育改革と学校保健」 北海道教育大学教授 荒島 真一郎 氏
17	「エビデンスに基づく養護教諭の『職』を究め、養護学の確立－養護教諭の実践にとってのエビデンスとは－」 女子栄養大学教授 鎌田 尚子 氏
18	「クライシス・カウンセリング」 日本赤十字九州国際看護大学副学長 坂本 洋子 氏
19	「カウンセリングの基本技法」 鎌倉女子大学准教授 富田 久枝 氏
20	「養護教諭の仕事のこれまでとこれから～“養護”と“専門性”をどう捉え、発展させるか～」 宮城教育大学教授 数見 隆生 氏

21	「相談活動の考え方と実際～自尊感情を育む共有体験」 東海大学教授 近藤 卓 氏
22	「対応が難しい保護者・教員への対応－養護教諭（学校）が陥りやすい問題点と対処方法」 慶応義塾大学文学部講師 生田 倫子 氏
23	「高校生期の子どもの中心として、発達障がいの子どもの理解と支援・自立をどう援助していくか」 NPO法人えじそんくらぶ代表 高山 恵子 氏
24	「専門職としての養護教諭に期待する」 岡山大学大学院教育学研究科教授 高橋 香代 氏

4 部会の現況

部会内容は、養護教諭の資質向上や生徒の健康課題解決へ貢献するものなど、会員の希望も考慮しながら講演講師を依頼し、学校保健に関する最新情報等についても道教委他より情報提供をお願いしております。研究発表は、総会で決定する各地区支部毎の輪番制を用いて地域の偏りがないように配慮し、全道各地での研究・実践発表と協議、助言により、各学校での課題解決の一助となるように努めております。

今年度は50周年記念大会ということで、例年の研究発表をシンポジウムに変更し、「社会の変化の中で養護をつかさどるということ～学校保健活動推進の中核的役割とは～」というテーマのもとに、養護教諭の今後について会員と共に議論し考える場を設けました。また、平成24年度に道立学校に導入された「北海道公立学校校務支援システム」保健情報機能の解説及び今後の改善点について、デモンストレーションを交えた情報提供を取り入れる等、新しい試みを施しました。

しかし、高教研全体の会員数と同様に、養護部会の会員数は徐々に減少し、今年度はこの10年間の最多会員数の半数程度にまで落ち込むという厳しい現状です。

5 今後の展望

今後の課題としては、これ以上の会員減少をくい止め、充実した部会運営を行うことです。部会としても、この事態を少しでも打開すべく、平成22年度より会員登録時期に、養護部会長より各地区支部長に文書で会員登録を依頼するなど、独自の努力を重ねております。

しかし、大多数の学校で養護教諭が一人配置であること、また非会員でも会員と同じく高教研大会・部会への参加が可能なことなどから、ここ数年は非会員の参加者が約30名にものぼり、なかなか会員増加につながりません。今後、本部のお知恵も拝借しながら対策に取組みたいと思います。

そして、50周年記念事業の一環として一新された高教研のホームページには、各部会のページも新設されました。これを活用して情報発信をすることも会員増加への有効な手段となるのではないかと期待をしているところです。

これからも全道の高等学校養護教諭の皆様とともに高校生の生涯にわたる心身の健康と、学校保健活動における中核的役割を果たす養護教諭の資質向上に貢献したいと考えております。

運営する側としても、より一層魅力ある部会を目指して努力をして参ります。今後とも皆様のご理解とご支援を、どうぞよろしくお願い申し上げます。
（記載者 札幌北高等学校 関 澄恵）

芸術部会

1 この10年を振り返り

近年、分科会のテーマを「豊かな感性を拓く芸術教育」と位置づけ、高校教育の中での芸術教育がいかに人間形成に必要な教科であるかを模索してきた。本研究会は、普段は別々に活動をしている3つの教科〔音楽・美術・書道〕が一同に集まることによって、芸術教育全般にわたる課題と改善点を話し合う場であるだけでなく、普段あまり接点のない、他の芸術科目への関心と理解を深める有意義な会となっている。

新指導要領においての芸術の必修単位の縮減や、それに伴う専任の教師の減少など、芸術教科の現状は決してよいわけではないが、それだけに各参加者は、大変な教育に対する情熱と決意をもって熱心に研究を重ねている。

2 会員数の推移、歴代部会長・事務局担当者

〔会員数の推移〕

年度	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24
会員数	158	158	137	142	127	125	128	117	111	108

〔歴代部会長・事務局〕

年度	部会長（所属）	事務担当者（所属）
15	蓬田 秀泰（旭川南）	小林 雅澄（札幌南）
16	蓬田 秀泰（旭川南）	小林 雅澄（札幌南）
17	中田 千年（網走向陽）	小林 雅澄（札幌南）
18	大村 義美（上磯）	曲木須麻子（札幌東） 武石 英孝（札幌東） 水上夕規子（有朋）
19	齋藤 幸雄（倶知安）	森 義弘（札幌厚別）
20	齋藤 幸雄（旭川凌雲）	森 義弘（札幌厚別）
21	齋藤 幸雄（旭川凌雲）	水上夕規子（有朋）
22	齋藤 幸雄（旭川凌雲）	水上夕規子（有朋）
23	石塚 耕一（釧路明輝）	大野 太郎（札幌白陵）
24	石塚 耕一（釧路明輝）	大野 太郎（札幌白陵）

3 部会講演講師

〔講演演題・講師〕

年度	演題・講師
15	「北海道に生きて」 作家 小檜山 博 氏
16	「彫刻と私」 札幌市立高等専門学校教授 國松 明日香 氏
17	「オペラ『蝶々夫人』に見る東洋と西洋の出会い」 長崎総合科学大学教授 ブライアン・パークガフニ 氏
18	「芸術教科の課題と展望」 文部科学省初等中等教育局教育課程教科調査官 東京学芸大学教授 長野 秀章 氏
19	「私が考える芸術」 画家 野田 弘志 氏
20	「音と気」 ヴァイオリニスト 大平 まゆみ 氏
21	「育つこと、育てること」 北海道教育大学教授 矢野 敏文 氏
22	「美術が街と人をむすぶ」 札幌大谷大学短期大学部教授 岡部 昌生 氏

23	「演奏者から教育者になった理由」 札幌大谷大学音楽部音楽科専任講師 倉橋 健 氏
24	「中国出土文物と盗掘事情」 跡見学園女子大学教授 横田 恭三 氏

4 部会の現況

平成24年度の会員数は108名となっている。平成15年度の会員数158名と比べると、ほぼ3分の2に減少している状況である。学校数の減少など様々な要因が考えられるが、その中にあっても、音楽、美術、書道の3教科が唯一、一同に集まっただけの研究大会であり、毎年有意義な大会となっている。

5 今後の展望

〔音楽〕

芸術部会音楽科では全道の先生が研鑽を積めるように各地持ち回りで研究発表を担当、研究協議で内容を深め、参加者全員が研究内容を共有できるようにしている。

最近では、新学習指導要領を見据えて「生涯にわたって音楽を愛好する心」「中学校音楽科との関連」「音楽を形づくっている諸要素（の融合）」等に着目した研究発表、研究協議がおこなわれ、生徒が豊かな情操を持って社会に出ていけるように、授業の構築を考えている。

今後とも音楽的知覚と感受を通して多面的価値観、考え方、そして社会にでて逞しい生き方のできる生徒の育成を目指してさらに研鑽を深めて行きたい。

（札幌丘珠高等学校 三木 豊道）

〔美術〕

「芸術はその国のアイデンティティーであり、誇りである」

高等学校新学習指導要領における「美術、工芸の取り組むべき課題」の一節である。

いかなる時代にも私たち芸術科の教師が、誇りと責任を持ち、教科の指導に取り組むべきか、この一節に託されているのであろう。

生きる力の育成、自己の価値を求め続け、生活を心豊かに創造していく能力・態度を養うこと。その実現に向け創造的実践が我々に求められている。

高教研の長い歴史のなかで美術、工芸として多くの諸先生方が講演、研究発表を通して様々な観点で訴えてきたことでもある。

また、この場に参加された多くの先生方が、多くの糧を得て現場で実践されている。本会は、今後とも我々の大きな財産として受け継がれるものと期待している。

（北海道岩見沢東高等学校 小林 智彦）

〔書道〕

今後の展望の課題は、文化の継承であり、それを成し遂げるための人材の育成、環境の整備である。そして、先人がこれまでに行って来られた蓄積を大切にしながらも、世間の実態や教育現場を踏まえ、それに即した進歩的な実践を積み重ねてゆくことだと思う。これはいつの時代でも変わるまい。近年、この部会に若い顔がちらほら見える。頼もしく思う。是非彼らと一緒に仕事をしてゆく中で、文化を継承しようではないか。

（記載者 北海道札幌開成高等学校 柏 聡）

英 語 部 会

1 この10年を振り返り

平成14年から20年にかけてSELHiの指定、平成20年からは小学校における「外国語活動」の開始、さらに平成21年に公示された高等学校新学習指導要領においては「授業を英語で行うことを基本とする」事等が謳われるなど、日本の英語教育はコミュニケーション能力の育成により重点が置かれてきている。その中で本道高等学校英語教育は高等学校英語教育研究会が新しい形で再出発を遂げている。

このように北海道の英語教育環境はこの10年で大きな転換期となった。その中で高教研にあっては常にタイムリーな話題提供と課題解決のため、「21世紀に生きる地球市民を育む英語教育」を目標に掲げ示唆に富んだ方策を発信し続けてきている。

2 会員数の推移、歴代部会長・事務局担当者

〔会員数の推移〕

年度	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24
会員数	433	411	403	438	413	419	382	387	385	334

〔歴代部会長・事務局〕

年度	部会長（所属）	事務担当者（所属）
15	樋口 暉純（札幌東陵）	村井 太和（札幌東陵）
16	佐々木美喜雄（野幌）	村井 太和（札幌東陵）
17	深澤 宗明（札幌国際情報）	河合 宣孝（札幌国際情報）
18	岡田 義明（札幌国際情報）	河合 宣孝（札幌国際情報）
19	佐々木茂文（札幌丘珠）	土岐 均（札幌丘珠）
20	佐々木茂文（札幌丘珠）	毛内 顕史（札幌丘珠）
21	瀬戸 正（石狩南）	松ヶ瀬 章（石狩南）
22	佐藤 嘉典（石狩南）	松ヶ瀬 章（石狩南）
23	佐藤 嘉典（石狩南）	武田 久（石狩南）
24	釣 晴彦（千歳）	名平 裕（千歳）

3 部会講演講師

〔講演演題・講師〕

年度	演題・講師
15	「高校の英語教育はなぜ変わらないのか～問題・原因・処方箋～」 東海大学教育研究所教授 松本 茂 氏
16	「Expectations for School English Education —English Trainings for English Teachers—」 (株) アイ・シー・シー 代表取締役 千田 潤一 氏
17	「今の授業を少しだけ前進！ —アクション・リサーチを活用した授業改善」 帝京大学教授 佐野 正之 氏 「コーパスと英語教育—高校現場での活用」 明海大学教授 投野由紀夫 氏 「英文和訳を超えたリーディングの指導—スキーマ修正能力を身につけるプロセス型の指導を目指して」 筑波大学助教授 卯城 祐司 氏
18	「リーディング・ストラテジーの指導 —英文和訳を超えた深い読みを目指して」 筑波大学大学院助教授 卯城 祐司 氏
18	「コーパスを高校英語指導に活かす具体的なノウハウ」 明海大学教授 投野由紀夫 氏 「今の授業を少しだけ前進！ ～アクション・リサーチを活用した授業改善」 帝京大学教授 佐野 正之 氏

19	「新感覚☆わかる身いつく英文法」 慶応義塾大学教授 田中 茂範 氏
20	「これからの外国語教育、これからの外国語教師」
21	国立教育政策研究所教育課程調査官 太田 光春 氏 「英語教育改善のためのマクロ的発想と方策」 立教大学教授 松本 茂 氏
22	「英語嫌いを無くし、真に英語力を向上させるための秘策」 大阪樟蔭女子大学教授 菅 正隆 氏
23	「英語教員！乗り遅れないための情報共有と授業改善秘策」 大阪樟蔭女子大学教授 菅 正隆 氏
24	「国際共通語としての英語力向上を図る ～Can-Do リストの学習到達目標～」 上智大学言語教育研究センター教授・センター長 吉田 研作 氏

4 部会の現況

平成24年度からは千歳高等学校が事務局校としての役割を担っている。一方で、千歳高等学校は「北海道グローバル人材育成プログラム」指定校としても充実した活動を展開し、本道英語教育の充実に向け、高英研、高文連、中高英研、英語科・国際科設置校協議会の協力をいただきながら活動を展開している。

5 今後の展望

縁あって、高教研50周年の大きな節目に吉田研作教授を40周年記念大会以来、再度お迎えすることになりました。平成24年8月末に設置された文部科学省の「外国語教育における『CAN-DO リスト』」の形での学習到達目標設定に関する検討会議で座長を務めました吉田研作教授は、国際共通語としての英語力向上のための5つの提言と具体的施策をまとめられました。

CAN-DO リストは、各学校が生徒の実態を考慮しながら独自の項目を設定して、学習到達度の明文化と共有を図り生徒の成長に反映させていく手法です。これからの英語教育は、小学校、中学校、高校、大学、社会人教育までの各ステージを担う先生方が、バラバラの目標を持つのではなく、「共通の絵」を描くことが大切です。

しかし英語教育が抱える課題は、まだまだ問題を多く抱えています。日本の若者は内向き志向が顕著であり、国外に出て、勉強しようとする意欲が薄れていると言われます。グローバル化世界の中ますます必要とされる多国間交渉や話し合い、新しいルールの形成に、日本人が有効に関与できないことへの懸念も高まっています。英語は欧米、アジア、中東地域などで圧倒的に重要な国際共通語となっています。

また「グローバル人材」という言葉が今日キーワードになっています。「日本人としてのアイデンティティーを持ちながら、教養と専門性、異なる文化を乗り越えてのコミュニケーション能力や協調性、創造性や社会貢献の意識を持った人材」と産学連携によるグローバル人材育成推進会議で定義しています。

教育の成果は一朝一夕で得られるものではありません。能力の向上を目指すためには、妥当な施策が打ち出され、それに基づく条件整備と地道で継続的な教育現場の取り組みが必要です。今後高教研や高英研を通して、さらに関連な意見や情報の交換があらゆるレベルで行われていくことを強く願っています。

（記載者 千歳高等学校長 釣 晴彦）

家 庭 部 会

1 この10年を振り返り

家庭部会は、平成13年度から平成21年度までは「自立した生活者を育てる家庭科教育」、平成22年度以降は「生涯を見通して生活を創造する力を育む家庭科教育」を研究主題に掲げ、取組んでまいりました。平成15年度には教育課程の改訂により、普通教科「家庭」では必修科目として「家庭総合」「家庭基礎」「生活技術」という新しい科目がスタートし、3科目から選択して履修させることになりました。特に「家庭基礎」は2単位であり試行錯誤しながら授業を展開していた学校が多かったと思いますが、研究発表では、平成16年度には展開例の作成や全道のアンケート調査結果の分析、専門教科「家庭」の実施状況などから、教育課程編成や実施上の課題を明確にした上でその改善方策が提示されました。また、平成18年度には「フードデザイン」や「発達と保育」の2年間にわたる研究成果として創意工夫あるシラバスと実践事例などが提示され、新しい科目を指導するにあたり大変参考になりました。その後は具体的実践例として、地域に根ざした実践や普通高校における選択科目の取組、教科通信を活用した授業実践、大規模進学校における保育体験や調理実習の取組、職業学科や総合学科における取組など、体験学習や問題解決学習を重視した創意工夫された授業実践が発表され、学校規模や生徒の実情は異なりますが、私たちの明日の授業につながる大きな力をいただきました。講演は、道内外から講師を招き、学習指導要領、食生活、衣生活、福祉、環境、労働問題など多岐にわたる領域で、家庭科教育を広い視野でみつめることができる貴重な内容でした。

この10年間を振り返ってみると、家庭科教育の意義をあらためて実感するとともに、明日の授業に活かすことができる充実した研修の機会であったのではないのでしょうか。

2 会員数の推移、歴代部会長・事務局担当者

〔会員数の推移〕

年度	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24
会員数	122	123	114	107	92	96	86	89	91	84

〔歴代部会長・事務局〕

年度	部会長（所属）	事務担当者（所属）
15	大久保克洋（札幌開成）	鈴木里津子（札幌開成）
16	佐藤真理子（札幌開成）	柿澤小百合（札幌開成）
17	高 悦夫（大麻）	小野寺泰子（大麻）
18	高 悦夫（大麻）	小野寺泰子（大麻）
19	廣田 邦生（北広島西）	遠嶋 美里（北広島西）
20	田中 政昭（北広島西）	遠嶋 美里（北広島西）
21	新沼 明（札幌南陵）	高橋 理緒（札幌南陵）
22	新沼 明（札幌南陵）	高橋 理緒（札幌南陵）
23	成田 雅昭（札幌東陵）	佐藤 弘子（札幌東陵）
24	成田 雅昭（札幌東陵）	佐藤 弘子（札幌東陵）

3 部会講演講師

〔講演演題・講師〕

年度	演題・講師
15	「障がい者とつきあって人のつながりを考える」 北海道医療大学教授 阿部 哲美 氏

16	「食育教育」 札幌グランドホテル 副総支配人 総料理長 小針 一夫 氏
17	「北海道の働く女性の実情 ～仕事と家庭の両立をめぐる問題～」 厚生労働省北海道労働局雇用均等室地方女性労働者福祉専門官 田原 咲世 氏
18	「少子高齢化時代の家庭科教育 ～子どもと創る魅力ある家庭科の授業～」 聖心女子大学教授 鶴田 敦子 氏
19	「次期学習指導要領の改訂に向けて」 文部省初等中等局参事官付教科調査官 望月 昌代 氏
20	「大豆の変身～豆乳とおから作りから考える食と環境問題～」 「フルーツ探検～糖度調べ実験から考える食生活の諸問題～」 お茶の水大学特任アソシエイトフェロー 佐藤 典子 氏
21	「自立と孤立と共生と ～家庭科から学校教育の希望を語る～」 大阪府立成城高等学校教諭 南野 忠晴 氏
22	「食は生命（いのち）の第一歩～食環境を整えよう～」 トータルフード・コーディネーター 高井 瑞枝 氏
23	「ジャパンテキスタイルの可能性」 テキスタイルデザイナー 梶原加奈子 氏
24	「これからの生活と環境・生命・カガク・ICT」 新潟県立大学准教授 本間 善夫 氏

4 部会の現況

家庭部会は、石狩地区の学校がブロックごとのローテーションで担当しておりますが、事務局校だけではなくブロック校の先生方のご協力のもと運営しております。午前に総会・講演、午後に研究発表・研究協議を行うスタイルが数年続いており、ここ3年間は新教育課程の実施に向けて行政サイドからの説明もしていただいております。会員数は平成15年度は122名でしたが、平成24年度には82名と減少傾向にあり、参加者数は70～90名ほどです。家庭科教員が1校1名という学校も多く、研究会を通して横のつながりを持つことも大切であり、多くの先生方に参加していただくためにも一層有意義な研修の機会になるよう工夫し、運営していきたいと考えております。

5 今後の展望

平成25年度から新教育課程が実施されます。高等学校家庭科の目標は、「人間の生涯にわたる発達と生活の営みを総合的にとらえ、家族・家庭の意義、家族・家庭と社会とのかかわりについて理解させるとともに、生活に必要な知識と技術を習得させ、男女が協力して主体的に家庭や地域の生活を創造する能力と実践的な態度を育てる」ことです。限られた授業時数を有効に使うためにテーマを設定していくつかの学習内容を組み合わせる指導、地域性を活かし地域と連携しながらの授業、選択科目や学校設定科目により発展応用させながらの授業、学科の特性を活かした授業展開など、多くの学校が創意工夫しながら取り組んでいると伺っております。

家庭科は、思考力・判断力・表現力を高めることができる教科であり、生徒の生きる力につながる教科です。家庭科の単位数が減少したり、専任の教員が減っているという状況ですが、ネットワークを広げながら取り組むことが大切ではないのでしょうか。この家庭部会が、全道の先生方との実践交流を深める場となり、魅力的な家庭科の授業につながるよう、有意義な研修の機会になることを願っています。

（記載者 札幌東陵高等学校教諭 佐藤 弘子）

農 業 部 会

1 この10年を振り返り

この度、高教研50周年を迎えるにあたり、過去10年間の足跡をたどってみたいと思います。

農業部会は、その時々の農業情勢と表裏一体となり、講演、研究発表、研究協議を重ねてまいりました。

特にこの十年は、平成11年に成立した、「食料・農業・農村基本法」から、食料の安定供給、農村の振興、環境への配慮、伝統文化の継承等が重要視されました。それに伴い、農業教育は、農業や地域産業の方向性を見極め、生産から販売までを含むフードシステム系と環境系の分野で深化充実が進みました。特に、販売に取り組むことで、消費者が求める安全・安心な農産物の提供を意識した生産に変わり、売る教育によって、つくる教育の質的な転換が図られました。食彩フェアもこういう狙いで生まれ、多くの試みがなされております。

このような観点から主題を設定し、多彩な講師による貴重な講演、それぞれの学校における特色ある実践による研究発表・研究協議へと結集しており、有意義で充実した内容でありました。

2 会員数の推移、歴代部会長・事務局担当者

〔会員数の推移〕

年度	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24
会員数	193	194	199	184	174	164	130	134	119	123

〔歴代部会長・事務局〕

年度	部会長（所属）	事務担当者（所属）
15	小原 忠雄（倶知安農業）	八木 啓充（倶知安農業）
16	岡田 正裕（ニセコ）	湯浅 純人（ニセコ）
17	岡田 正裕（ニセコ）	湯浅 純人（ニセコ）
18	大西 千郷（真狩）	中川 尚之（真狩）
19	齊藤 信寛（真狩）	中川 尚之（真狩）
20	河村 英二（留寿都）	長田 淳（留寿都）
21	河村 英二（留寿都）	宮川 明子（留寿都）
22	畠山 佳幸（壮瞥）	林 正憲（壮瞥）
23	畠山 佳幸（壮瞥）	上田 徹（壮瞥）
24	北澤 住人（岩見沢農業）	野村 博之（岩見沢農業）

3 部会講演講師

〔講演演題・講師〕

年度	演題・講師
15	「共生農業と豊かな大地」 雁音農産開発有限会社 代表取締役社長 小野寺實彦 氏
16	「自治の課題とこれから」 ニセコ町 町長 逢坂 誠二 氏
17	「村の元気をつくる地元学のすすめ」 地元学ネットワーク主宰 吉本 哲郎 氏
18	「食と農の美味しい関係」 クッキングキャスター 星澤 幸子 氏
19	「農業の国際化（WTO等）に対応した北海道農業」 北海道農政庁農業経営局長 渡邊 毅 氏
20	「農業を志す青年たちに就農の道を拓くには」 北海道農業担い手育成センター長 青山 俊夫 氏
21	「国際化と農業～東アジア諸国を中心として」 拓殖大学副学長 篠塚 徹 氏
22	「『風土』は食をつくり、『フード』が人をつくる」 作家 森 久美子 氏
23	「北海道経済とこれからの農業教育に期待すること」 札幌商工会議所会頭 高向 巖 氏
24	「北海道の未来を拓く有機農業」 学校法人 酪農学園理事長 麻田 信二 氏

4 部会の現況

学校の閉校、閉科、学科の改編等により部会会員の減少がつづいております。また、年齢の不均衡がみられ、50代の会員が極端にすくなくっております。また、40代以下でも会員に加入しない傾向があり、このことは、実学を基礎とする農業教育にとってゆゆしきことであります。

今後、会員数の増加に向けて、教職員の部会に対するニーズを把握し、内容の充実により一層努めていく必要があります。

5 今後の展望

農業教育は今、知識基盤社会を裏付けるかのように、国際化や情報化が進み、農業経営も生産・加工・流通など経営の多様化、技術の高度化・精密化、安全・安心な食料の安定供給、地球規模での環境保全、動植物や地域資源を活用したヒューマンサービスの拡大などが求められています。さらに国際的な視野をもって、TPP問題や国際市場開拓など高い資質を持った行動できる農業のスペシャリストが求められる時代です。こうした現状を踏まえると農業教育は大きな転換が迫られています。

道内の農業や関連産業については、北海道は日本の食糧基地ともいわれ、農業生産や食品加工、流通の仕事が多い地域です。農業にかかわる仕事は、時代が変わっても決して無くなることはありません。こうした仕事に就くために必要な知識や技量を確実に定着していく必要があります。

世界の人口は、増加傾向にあります。このままでは、輸入に頼る日本全体の食糧が危機的な状況になります。食糧生産は、国や国民生活を支える最も大切な仕事です。そういう意欲を持った生徒を育てなければいけません。何より自分たちの食べ物を扱う仕事に就くことにプライドを持った生徒を育てる事が大切です。

そのためには、国際化に対応した農業経営者の育成が必要と考えています。少なくとも英語は話せなければいけません。農業教科だけでなく、基礎となる普通教科の充実が、さらに農業教育の質を高めます。アジアの大消費地でビジネスができるよう、中国語も必要な時代が来ます。世界に羽ばたく農業経営者の育成が求められています。こうした対応が、産業としての農業を発展させる基本にもなります。

その教育基盤となるのは、普通教科の基礎・基本の定着にあると考えています。その上に立ち、専門教科の基礎・基本的な知識・技術・技能を定着させると共に体験的（実験実習）学習を通して実践力を育成することができると考えています。そして、高い職業意識や職業観・規範意識・コミュニケーション能力等の育成に努めていかなければなりません。

そのためにも教師は、教えることに対する情熱と使命感をもって、一歩先んずる知恵（考え抜く力）・前に踏み出す勇気（行動力）・チームで働く力（組織力）を機能させ、情報を共有し、お互いに信頼し合い、助け合い、学び合い、高め合う、そういう部会でありたいと思います。

高度情報化、先端技術化、IT化等と進展するなか、農業教育もそれらと無縁ではいられず、今後とも時機にあった研究テーマのもとで頑張らねばならぬと思っております。

（岩見沢農業高等学校長 北澤 住人）

工業部会

1 この10年を振り返り

平成11年3月に学習指導要領が改訂され、これに基づく教育課程が平成15年度から年次進行で実施された。教科「工業」においては、従前の目標の精神を基本的には受け継ぎながらも「いかに作るか」から「どのようなものをいかに作るか」という能力を重視し、「社会における工業の意義や役割を理解させるとともに環境に配慮すること」や「工業技術の諸問題を主体的、合理的に解決し社会の発展を図る創造的な能力と実践的な態度を育成すること」などが目標として示された。また、この目標の改訂に伴い、「実験実習を重視し、将来のスペシャリストとして必要な専門性の基礎・基本を重視した科目の改善」や「工業倫理及び環境やエネルギー問題に対応した科目の改善」等が行われた。

本研究会工業部会においては、これらの改訂の趣旨を踏まえるとともに、従前から重視してきている工業高校と地域や産業界との間のパートナーシップの確立や資格取得指導の充実等について研究協議を行い、本道工業教育の活性化を図ってきた。

研究発表の記録（H15年度～H24年度）

- H15「出張授業の取り組み」志田泰範（室工）
「産学官による協同研究の取り組み」川村広幸（琴工）
H16「専門高校等における日本版デジタルシステムの導入のための調査研究について（中間報告）」諸橋宏明（旭工）
「デジタルコンテンツを活用した効果的な授業の展開」榎本哲史（滝工）
「資格取得の取り組みと課題点」梶 猛（稚商工）
H17「起業家教育実践研究事業の取り組み」西後勝美（苦工）
「工業教育活性化のためにどのように取り組んだらよいか～合同課題研究発表会～」中嶋孝之（名光凌）
「江差南高校としての最後の年間の取り組みについて」田中聖志（江差南）
H18「指定研究事業を通じた工業教育活性化の取り組み」西田猛志（札工）
「本校におけるログハウス製作の取り組み」佐藤靖尚（北工）
「板金琴から板金ギターへの挑戦」原山 聡（紋南）
H19「社会人入学生受け入れのための取組～公開講座とPowerPoint授業の展開～」平井柳太（樽工）
「高校生ものづくりコンテスト電子回路組立部門」飯塚浩二（帯工）
「釧路川水防公開演習の参加と成長」佐藤貴雄（釧工）
H20「高大連携の取り組み～遠隔授業・訪問授業～」平間信一（琴工）
「教育課程の変遷と進路指導について」長谷哲生（国情）
「輝く生徒 輝く定時制～資格取得、部活動での取り組み～」盛田典男（函工）
H21「基礎・基本の定着に向けた取り組みについて」佐藤淳彌（緑峰）
「北の匠プロジェクトの取り組み」板坂浩毅（室工）
「地域社会と連携した実践的なものづくり教育」小野博道（美工）
H22「本校土木科での教育実践」三浦嘉之（滝工）
「旭工式資格指導法～合格率を上げるための工夫～」下村幸広（旭工）
「社会で生きる実践的な力の育成」千葉智寛（千望）
H23「本校の三修制について」有泉睦夫（札工）
「担い手育成事業を終えて」木村浩二（苦工）
「学科集合型高校の地域社会に貢献できるものづくり教育」和田博之（名産）
H24「北工におけるキャリア教育と知的財産教育の融合と体系化」菊地 智（北工）
「三大学科（普・工・商）の特色を活かした工業教育の実践」木村一貴（紋別）
「専門知識を生かし、企業と連携した地域貢献事業「樽工建プロジェクト」の取り組み」高橋孝児（樽工）

2 会員数の推移、歴代部会長・事務局担当者

〔会員数の推移〕

年度	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24
会員数	101	103	98	90	84	84	84	86	75	77

〔歴代部会長・事務局〕

年度	部会長（所属）	事務担当者（所属）
15	四宮 知之（札幌琴似工業）	南山 幸雄（札幌琴似工業）
16	四宮 知之（札幌琴似工業）	松浦 雅章（札幌琴似工業）
17	海老名 優（札幌琴似工業）	中谷 秀夫（札幌琴似工業）
18	海老名 優（札幌琴似工業）	本間 健彦（札幌琴似工業）
19	浅野 吉保（札幌琴似工業）	小川 経一（札幌琴似工業）
20	浅野 吉保（札幌琴似工業）	松田 圭右（札幌琴似工業）
21	木田 清一（札幌琴似工業）	中谷 真樹（札幌琴似工業）
22	木田 清一（札幌琴似工業）	荒當 聖吾（札幌琴似工業） 野村 洋幹（札幌琴似工業）
23	木田 清一（札幌琴似工業）	鎌田 聡（札幌琴似工業）
24	廣瀬 覚（札幌琴似工業）	塚本 慶一（札幌琴似工業）

3 部会講演講師

〔講演演題・講師〕

年度	演題・講師
15	「日本の製造業について」 資源エネルギー庁省エネルギー・新エネルギー 部長 藤田 昌弘 氏
16	「これからの工業高校及び教員に期待するもの」 文部科学省初等中等教育局教科調査官 池守 滋 氏
17	「砲丸と私の人生」 有限会社 辻谷工業代表取締役 辻谷 政久 氏
18	「トヨタの『ものづくり』と『人材育成』」 トヨタ自動車北海道株式会社取締役 佐々木 健太郎 氏
19	「鉄鋼業における『ものづくり』の実際 ～世界最大の600ton 鋼塊製造～」 (株)日本製作所室蘭製作所製鋼部長 柴田 尚 氏
20	「勇気を出してまず一歩！道はそこから拓けます ～世界初鋳鉄製スピーカー誕生の裏話～」 白井鋳鉄工業株式会社代表取締役 白井 憲之 氏
21	「燃やせない時代の森林・木材の利活用について ～環境先進国ドイツでの取り組みから学ぶ～」 飯田ウッドワークシステム株式会社代表取締役 飯田 信男 氏
22	「大学生による超小型衛星の開発」 北海道工業大学教授 佐鳥 新 氏
23	「高校生から社会人基礎力 ～気づきと習慣化をめぐる支援策～」 法政大学大学院教授 諏訪 康雄 氏
24	「今後の『ものづくり』のあり方について」 明星大学教授 関 満博 氏

4 部会の現況と今後の展望

近年、本研究会の会員数は減少の一途を辿る。工業部会においても同様の状況にあり、喫緊の課題となっている。課題解決に向けて、部会の在り方について検討を重ね「部会協議の活性化に向けた工夫・改善」はもとより、「専門分野に限らない今日的な教育課題に即した講演会のテーマ設定」や「利便性を考慮した会場の変更」等に取り組んできた。しかし、残念ながら、どれも決定打には至らず、今のところ改善の兆しは見られない。何よりも肝要なことは、生徒に最良の教育を提供するため、我々教員が日々研鑽に励み資質・能力を向上させようとする意欲と情熱を持つことである。『一人でも多くの先生の心に火をつける！』そんな研究会でありたい。

本研究会の40周年から10年が経過した。学習指導要領もまた改訂され、来年度から新学習指導要領に基づく教育課程が年次進行で実施される。『新たな時代のものづくり産業を支える人材を育成する』という観点に立ち、これまで以上に本道の工業教育が力強く推進されるよう、本研究会工業部会の役割をしっかりと果たして参りたい。

（記載者 札幌琴似工業高校 太田 潤一）

商 業 部 会

1 この10年を振り返り

北海道高等学校研究会が発足して50周年を迎えましたことを心よりお祝い申し上げますとともに、これまでの歩みがつづられた記念誌が発刊されますことを心よりお慶び申し上げます。

さて、顧みますと、この10年間の商業部会は、変化の激しい社会環境に適応できる人材の育成を目標に、商業教育のあるべき姿を求め、この高教研での研究を中心に各種研究協議会で各校の実践に学ぶとともに活発な情報交流を図ってきたところです。その間、高等学校の専門教育に対する社会の評価も厳しさを増し、私たちの課題も、これまでにない視点が求められるようになりました。特に、若年者の高い失業率や早期離職、若年無業者の存在、そして生徒個人の問題ではない産業構造や就業構造の変化等社会全体を通じた構造的な問題を商業教育にどう捉え返すかという難問に直面しました。この10年間の研究成果を今後に生かすとともに継続させなければなりません。

2 会員数の推移、歴代部会長・事務局担当者

〔会員数の推移〕

年度	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24
会員数	286	258	221	212	225	205	178	175	156	158

〔歴代部会長・事務局〕

年度	部会長（所属）	事務担当者（所属）
15	金間 正克（札幌啓北商業）	大川 徹（札幌啓北商業）
16	金間 正克（札幌啓北商業）	滝本 茂（札幌啓北商業）
17	金間 正克（札幌啓北商業）	滝本 茂（札幌啓北商業）
18	横尾 栄二（札幌啓北商業）	滝本 茂（札幌啓北商業）
19	横尾 栄二（札幌啓北商業）	飯野 修一（札幌啓北商業）
20	横尾 栄二（札幌啓北商業）	飯野 修一（札幌啓北商業）
21	横尾 栄二（札幌啓北商業）	飯野 修一（札幌啓北商業）
22	横尾 栄二（札幌啓北商業）	久保田法順（札幌啓北商業）
23	滝本 茂（札幌啓北商業）	久保田法順（札幌啓北商業）
24	滝本 茂（札幌啓北商業）	鈴木 恵一（札幌啓北商業）

3 部会講演講師

〔講演演題・講師〕

年度	演題・講師
15	「日本一のケーキづくりと人づくり」 きのとや社長 長沼 昭夫 氏
16	「多様化する社会と時代のニーズに対応できる教師をめざして」 札幌大学助教授 菱村 壽夫 氏
17	「まず、考えてみよう」 作家 小檜山 博 氏
18	「新時代に求められる企業経営と社員教育」 キャリアバンク株式会社 代表取締役 佐藤 良雄 氏
19	「地域に根ざした企業経営」 株式会社北海道日本ハムファイターズ 取締役会長 今村 純二 氏

20	「企業の取り組む国際貢献～メガネを通じて海外貢献」 株式会社 富士メガネ 代表取締役会長兼社長 金井 昭雄 氏
21	「北海道の活性化を担う企業として」 株式会社ラルズ代表取締役会長 横山 清 氏
22	「大いなる生き方 ～明日の北海道を支える人材の育成を目指して～」 (株) 土屋ホールディングス 代表取締役会長 土屋 公三 氏
23	「変化を実現する人財教育」 (株) セイコーマート 運営支援本部本部長 執行役員 伊藤 朋之 氏
24	「立場も違う、仕事も違う。多種多様な人とコミュニケーションすることについて」 (株) リクルート北海道じゃらん 地域振興統合プロデューサー 原田 亜紀 氏

4 今後の展望

平成21年3月に告示された新学習指導要領が平成25年度4月から完全実施となります。私たち商業部会にとって、今後の指針や拠り所となるのは、『高等学校学習指導要領解説・商業編』です。さらに、現在も協議が続けられている中央教育審議会高等学校教育部会の提言も重要な手がかりとなります。

特に、平成23年1月の答申における「学校におけるキャリア教育と職業教育の在り方」については、今後のわが国の教育の基本的な方向性を示すものとして位置付けられており、幼児期の教育から高等教育に至るまでの体系的なキャリア教育の推進をはじめ、実践的な職業教育の重視と職業教育の意義の再評価、生涯学習の観点に立ったキャリア形成支援等は、正に私たち商業教育に携わる者が主体的・積極的に取り組まなければならない重要課題です。

これまで標榜してきた基礎的・基本的な知識・技能の定着と問題解決能力等の育成はもちろんのこと、実践的な教育活動の実施と充実、地域や産業界との密接な連携、適切な教育課程の編成、学科の在り方、高等教育機関との接続等についても、より踏み込んだ取り組みが求められています。

基本的な方向性として、「キャリア教育」と「ビジネス教育」について、一人ひとりの社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、人が生涯のなかでさまざまな役割を果たす過程で、自らの役割の価値や自分の役割との関係を見出していく連なりや積み重ねを促す教育と捉え、当研究会を通じてより研究を深めていきたいと考えております。推進のポイントは以下の4点です。

- (1) 基礎的・基本的な知識の定着と問題解決能力の育成
- (2) 長期実習等、実践的な教育活動の実施、実務経験の登用
- (3) 地域や産業界との密接な連携による学科整備・教育課程編成
- (4) 専攻科の在り方と高等教育機関との接続

今後も北海道における高等学校の商業教育が益々充実・発展するよう、商業部会の結束を強めて参りたいと思います。

（記載者 札幌啓北商業高等学校教頭 鈴木 恵一）

水産部会

1 この10年を振り返り

この10年間に道内水産系高校では、平成16年に函館水産高校の水産食品科2学級のうち1学級が、全国で唯一の「品質管理流通科」への学科転換、平成17年に戸井高校情報通信科の閉科、平成21年に厚岸水産高校の閉校、そして厚岸水産高校と厚岸潮見高校とが統合した厚岸翔洋高校の開校など、様々な変化が起こっている。高教研水産部会においても平成13年度から継続されていた主題「新世紀のふるさとをきり拓く水産教育はいかにあるべきか」が、平成22年度から「変化の激しい時代をきり拓く水産・海洋教育はいかにあるべきか」に変更となった。

この期間、研究集会では日本のみならず世界経済や社会状況の変化など水産業の現状や課題などを、政策実行の先頭に立って活躍されている講師の方々にご講演いただいたり、自然や野生生物を記録・観察し、情報を発信し続けている方々や、大学などの研究機関の先生方による先進的な海洋に関する研究など、多岐にわたる講演を聞く機会に恵まれた。さらに、平成19年度には世界的に著名な海洋冒険家白石康次郎氏に大変夢にあふれ、水産教育を応援していただける講演をしていただいた。また、各会員の先生方には学校全体や進路に関する課題、先進的な授業・実習内容についてや、新設校・新設学科の課題や取り組みについて紹介したものなど、数多くの研究発表をいただき、会員相互のよりよい情報交換の場となっている。

2 会員数の推移、歴代部会長・事務局担当者

〔会員数の推移〕

年度	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24
会員数	84	83	82	76	89	86	85	82	85	84

〔歴代部会長・事務局〕

年度	部会長（所属）	事務担当者（所属）
15	成田 安孝（小樽水産）	大山 知幸（小樽水産）
16	成田 安孝（小樽水産）	大山 知幸（小樽水産）
17	谷口潤一郎（小樽水産）	大山 知幸（小樽水産）
18	谷口潤一郎（小樽水産）	大山 知幸（小樽水産）
19	谷口潤一郎（小樽水産）	堀井 亜希（小樽水産）
20	谷口潤一郎（小樽水産）	堀井 亜希（小樽水産）
21	齋藤 隆（小樽水産）	堀井 亜希（小樽水産）
22	齋藤 隆（小樽水産）	古賀 英裕（小樽水産）
23	齋藤 隆（小樽水産）	梅崎 真大（小樽水産）
24	村松 裕史（小樽水産）	梅崎 真大（小樽水産）

3 部会講演講師

〔講演演題・講師〕

年度	演題・講師
15	「北海道水産業の現状と課題」 北海道水産林務部主幹 藤島 浩見 氏
16	「北海道における漁業協同組合の現状と課題 ～漁業協同組合の合併等について～」 北海道漁業協同組合連合会 指導教育部長 大久保 法幸 氏

17	「水産資源管理の基本理念について」 水産庁資源管理部資源管理室長 長谷 成人 氏
18	「海からの素晴らしい贈りものー流水ー」 北海道立オホーツク流水センター所長 青田 昌秋 氏
19	「夢、挑戦、そして人とのつながり」 海洋冒険家 白石 康次郎 氏
20	「流水の来る海 知床」 知床ダイビング企画 代表取締役 関 勝則 氏
21	「日本海の深層水から地球温暖化を見る」 北海道大学大学院准教授 磯田 豊 氏
22	「北太平洋の生物多様」 自然写真家 寺沢 孝毅 氏
23	「オホーツク海の流水が生み出す豊かな水産資源」 北海道大学低温科学研究所 環オホーツク観測研究センター准教授 西岡 純 氏
24	「時代の変化、魚食振興等に対応した水産・海洋教育の担うべき役割と課題」 元文部科学省視学官 中谷 三男 氏

4 部会の現況

小樽水産高校、函館水産高校、厚岸翔洋高校の水産科教員の先生方を主な会員とし、近年は80名程度加入している。この会員数は道内の水産科教員の9割に近い加入率であり、小さいながらも大変まとまりがあり、本会の活動が会員相互の研鑽と親睦に寄与しているものと考えている。

5 今後の展望

全国の水産・海洋系高校での研究会では「次時代を捉えて、水産・海洋系教育におけるキャリア教育をいかに進めるべきか」、「新学習指導要領を踏まえ、地域の発展に寄与する人材をいかに育てるべきか」という主題で研究協議がなされている。これらの趣旨として、キャリア教育について、インターシップや長期就業実習などを含めて実践的な職業教育の進め方や、企業等との関係構築などの調査・研究を課題とし、さらに水産業の6次産業化など現在重要視されている事柄に対して水産・海洋系高等学校が果たすべき役割は何かを踏まえ、新学習指導要領など、政府および各自治体等からの答申に基づいた効果的な人材育成はいかにあるべきかを研究することを課題としている。

本会においても「変化の激しい時代をきり拓く水産・海洋教育はいかにあるべきか」の主題に基づき、時代の変化に対応し、各学校で取り組まれている実践事例などを研究発表していただくことより、会員の先生方のよりよい研修の場を提供していきたいと考えている。また、これまで同様、様々な講師の先生方にご講演いただくことにより、先進的な研究や、これからの水産業を取り巻く課題について会員の先生方に紹介していく。

このような本会の取り組みを通して、水産教育の振興を図り、全国シェア一位の水産業を誇る北海道において、地域の求める漁業後継者や各企業で働く技術者等の育成につなげていきたい。

（記載者 小樽水産高校 梅崎 真大）

情報部会

1 この10年を振り返り

新しい教科として誕生した「情報」も、授業開始から今年がちょうど10年目である。情報部会では、メーリングリストによる情報交換や、Webを活用しての情報共有をいち早く取り入れた。今でこそスマートフォンの普及が進み、SNS利用率も飛躍的に高まったが、当時からこうしたインターネットを活用した交流が情報部会を支え続けてきた。

平成18年には道内各地を巡る「キャラバン研究会」もスタートし、なかなか研究集会に参加できない方々とも情報交換や交流を行う取り組みが続いている。

2 会員数の推移、歴代部会長・事務局担当者

〔会員数の推移〕

年度	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24
会員数	34	58	79	60	56	61	62	68	67	57

〔歴代部会長・事務局〕

年度	部会長（所属）	事務担当者（所属）
15	吉田 正勝（札幌西）	奥村 稔（札幌北）
16	友成 充（札幌東陵）	奥村 稔（札幌北）
17	友成 充（札幌東陵）	奥村 稔（札幌北）
18	成田 雅昭（留辺蘂）	奥村 稔（札幌北）
19	成田 雅昭（留辺蘂）	奥村 稔（札幌北）
20	成田 雅昭（釧路江南）	奥村 稔（札幌北）
21	成田 雅昭（釧路江南）	奥村 稔（札幌北）
22	成田 雅昭（釧路江南）	奥村 稔（札幌北）
23	小山 茂樹（遠軽）	奥村 稔（札幌北）
24	宮嶋 衛次（弟子屈）	杉本 式史（札幌平岸）

3 部会講演講師

〔講演演題・講師〕

年度	演題・講師
15	「勇気と元気が出る情報の授業」 岩手県立大学 鈴木 克明 氏
16	「情報手段の新たな活用方法と情報教育のありかた」 早稲田大学IT教育研究所助教授 宮澤 賀津雄 氏
17	「授業支援環境としてのe-learning～フリーソフトでもここまでできる、授業支援のあれこれ～」 稚内北星学園大学教授 金山 典世 氏
18	「カリキュラムと評価 ～思うような学習活動をデザインするために～」 関西大学教授 黒上 晴夫 氏
19	「ICT教育がめざす本当の学ぶ力」 青山学院大学教授 佐伯 胖 氏
20	「今、求められている学力とは」 株式会社内田洋行専務執行役 大久保 昇 氏
21	「新学習指導要領と教科『情報』」 文部科学省初等中等教育局視学官 永井 克昇 氏
22	「学習目標と評価の一体化、その考え方と方法」 玉川大学准教授 ダグラス・トレルファ 氏
23	「新科目の性格と特徴の研究」 滋賀大学教授 松原 伸一 氏
24	ワークショップ形式の研修会を開催

4 部会の現況

高教研情報部会への登録数、教科別研究集会への参加数ともに研究集会が3日日程だった頃と比較して思うように数字を伸ばせていない。情報と他教科とを掛け持ちして授業を担当している先生が多いという実態が情報部会によるアンケートによって見えてきた。北海道の地域性を考えると仕方のない部分もあるが、教科の専門性を考えるならば、情報の専任教員が少ないというのが現状ではないだろうか。

部会の取り組みについては全国的にも評価されており、キャラバン研究会等を通じて、多くの方々と情報を共有できるよう活動を行っている。

5 今後の展望

他教科と比較して歴史の浅い情報部会ではあるが、10年という年月を経て授業の担当者もずいぶん入れ替わりがあった。教科「情報」が誕生した当時を知らない先生も増えてきた。しかしながら、部会の中に蓄積されてきた様々な実践が、教科別研究集会やキャラバン研究会を通じて広まって、道内各地の学校でいろいろな形で活かされているのではないだろうか。

平成25年度からは新学習指導要領に基づいた共通教科「情報」がスタートする。今までの「情報」で培ってきたノウハウを活かしながら、新しい「情報」をどう授業で扱っていくのかは情報部会の中で繰り返し議論されてきた。キャラバン研究会の中でも、新学習指導要領でどのような授業を行えば良いのか、という話題は毎回大変盛り上がる。参加された方々が情報部会に対して期待していると感じられる。

情報部会としては、今まで蓄積してきたノウハウを提供するだけでなく、今後はそれぞれの学校で取り組んだことを発信してもらえようような取り組みを行いたいと考えている。授業の実践を集めて共有することで、新たな実践が生まれる可能性がある。また、共有された実践を掘り起こすことで、授業がうまくいかなかった箇所へのヒントが見つかるかもしれない。他の先生がやった授業を比較することで、自分の授業を客観的に捉えるチャンスにもなるだろう。情報部会では、今まで以上に授業担当者の繋がりを重視して、北海道の情報科の更なるレベルアップをはかりたいと考えている。

また北海道以外の動向にも注目し、他の都府県で活躍されている先生方の実践を見るために全国大会へ参加者を派遣することを平成24年度より始めた。情報ではまだ教科の取り組みを行う全国組織ができていないが、道外の研究大会へ参加することで、より多くの実践に触れることが可能となる。

情報科を取り巻く周囲に目を向けると、情報科の授業づくりに関わる大きな動きも見られるようになってきた。ここ数年来「情報」を大学入試センター試験に入れるか入れないかという議論が起こっている。現時点ではまだ組み入れられる予定はないが、私立大学を中心に「情報」を受験教科に採用する大学も現れ、今後増えるのではないかと予測も出てきた。今後の動向を見守るばかりである。

（記者 札幌平岸高等学校 杉本 式史）

教科別集会研究成果一覽

教科別集会講演

年度	回	教科(分科会)	講演テーマ	所属	講師名 (敬称略)
14	40	地歴公民	国語	「十代のぬくもり」	作家 谷村 志徳
			世界史	「世界システム論の世界観－基礎から新発見まで」	北海道大学大学院文学研究科助教授 山下 範久
			日本史	「函館と云う地名－何故、函館に人が住むようになったか－」	函館市史編さん室室長 紺野 哲也
			地理	「鉄道から見た北海道」	フォトライター 矢野 直美
			現代社会	「現代社会が失ったもの～『人権社会』の落とし穴」	札幌市保健福祉局健康衛生局 保健指導担当課長 渡部 正行
			倫理	「近代社会とは何か」	明治学院大学教授 竹田 青嗣
			政治経済	「『テロと戦争』と国際政治」	北海道大学法学部国際政治学科教授 中村 研一
		理科	数学	「内側から見た大学入試」	京都大学名誉教授 桜花学園大学教授 岩井 齊良
			全体	「市民教育・キャリア教育としての科学技術教育 －拡大される科学技術教育の地平－」	神戸大学発達科学部教授 小川 正賢
			理科総合	「北海道における自然エネルギー技術開発の現況と課題」	北海道自然エネルギー研究センター長 大友 詔雄
			物理	「量子力学への招待」	北海道大学名誉教授 田中 一
			化学	「ソフト&ウエットマシーン～人工筋肉をめざす～」	北海道大学大学院理学研究科教授 長田 義仁
			生物	「森林生態系における大規模観測と野外実験の導入」	北海道大学苫小牧研究林林長 日浦 勉
			地学	「海洋地殻の実体の解明について －海底掘削と潜水船による直接観察に基づいて－」	北海道大学大学院理学研究科地球惑 星科学専攻助手 前田 仁一郎
		保健体育	保健体育	「スポーツと自己実現～陸上競技からのアプローチ～」	東海大学助教授 高野 進
			養護	「養護教諭であること・あり続けることの探求」	愛知教育大学養護教育講座助教授 後藤 ひとみ
			芸術	「北海民謡に父 今井篁山の生涯」	江別市囃託・市史編集 藤倉 徹夫
			英語	「金魚鉢から大海へー英語学習と生きた英語の架け橋ー」	上智大学教授 吉田 研作
			家庭	「スローフードと食の安全性 ～地球環境を守り、人々のモラル再生を果たすことが大前提～」	拓殖大学北海道短期大学教授 相馬 暁
			農業	「食糧生産基地北海道の行方 －新たなる農業教育の推進を目指して－」	北海道東海大学工学部生物工学科教授 西村 弘行
			工業	「日本のものづくりと人づくり」	ものづくり大学学長 野村 東太
		情報	商業	「簿記教育と会計基準の変化について」	札幌学院大学商学部教授 坂下 紀彦
			水産	「水産教育の今日的課題」	全国水産高等学校長協会前理事長 赤津 豊
			情報	「情報教育の展開と新しいメディアリテラシーの育成」	関西大学教授・大阪大学名誉教授 水越 敏行
			国語	「科学とことば」	国際基督教大学大学院教授 村上陽一郎
		地歴公民	世界史	「始皇帝とその時代～新発見の考古資料から～」	学習院大学教授 鶴間 和幸
			日本史	「考古学からみた北海道の歴史」	二風谷沙流川歴史館学芸員 森岡 健治
			地理	「食からみた北海道の地理」	ホテルクラブーサッポロ料理長 貫田 桂一
			現代社会	「食の安全性と地産・地消」	拓殖大学北海道短期大学環境農学科長 相馬 暁
			倫理	「ただよう高校生的心声」	臨床心理士 市川 啓子
			政治経済	「北海道経済社会の構造問題と将来像」	北海道大学大学院教授 宮脇 淳
			数学	「数学と社会や生徒が軸となる数学教育」	国立教育政策研究所総合研究官 長崎 榮三
15	41	理科	全体	「わが国の化学教育政策はこれでよいのか～諸外国との比較～」	お茶の水女子大学名誉教授 細矢 治夫
			理科総合	「エントロピーから見た循環・共生思想の本質」	酪農学園大学 矢吹 哲夫
			物理	「モノサイクル光パルスの発生とその計測」	北海道大学大学院助教授 森田 隆二
			化学	「宇宙の中の化学 －スペースシャトルからサッカーボールまで」	お茶の水女子大学名誉教授 細矢 治夫
			生物	「SARS 対策とウィルスの性質」	国立感染症研究所主任研究官 水谷 哲也
			地学	「海洋から大気への影響を宇宙から見る」	北海道大学大学院助教授 谷本 陽一
		保健体育	保健体育	「世界の TOP10 を目指して～サッカー界の取り組み～」	筑波大学助教授 田嶋 幸三
			養護	「現代的健康課題とライフスキル」	兵庫教育大学助教授 西岡 伸紀
			芸術	「北海道に生きて」	作家 小檜山 博
			英語	「高校の英語教育はなぜ変わらないのか ～問題・原因・処方箋～」	東海大学教育研究所教授 松本 茂
			家庭	「障がい者ときあう人のつながりを考える」	北海道医療大学教授 阿部 哲美
			農業	「共生農業と豊かな大地」	雁音農産開発有限会社 代表取締役社長 小野寺実彦
			工業	「日本の製造業について」	資源エネルギー庁省エネルギー 新エネルギー部長 藤田 昌弘
		情報	商業	「日本一のケーキづくりと人づくり」	きのとや社長 長沼 昭夫
			水産	「北海道水産業の現状と課題」	北海道水産林務部主幹 藤島 浩晃
			情報	「勇気と元気が出る情報の授業」	岩手県立大学 鈴木 克明

年度	回	教科(分科会)	講演テーマ	所属	講師名 (敬称略)	
16	42	地歴公民	国語	「21世紀に読みなおす『こころ』」	東京大学大学院教授	小森 陽一
			世界史	「神聖ローマ帝国」	北海道大学助教授	山本 文彦
			日本史	「中世十三湊と北方世界」	市浦教育委員会安藤の里賑興室係長	榊原 滋高
			地 理	「北海道の観光と食」	(株)リクルート北海道じゃらん 取締役編集長	ヒロ 中田
			現代社会	「『北海道の経済活性化』に必要なもの」	北海道ベンチャーキャピタル(株) 代表取締役社長	松田 一敬
			倫 理	「精神分析から見た現代社会の『倫理』 ーフロイト、ラカンの父性原理と自己の起源ー」	北海学園大学教授	小島 康次
			政治経済	「ヨン様は日本人の韓国観を変えたか？」	東京都立大学教授	鄭 大均
		理科	数学	「新しい時代に向けてー高等学校から大学へ、数学的教育」	東京大学大学院教授	岡本 和夫
			全体	「南極オゾンホールの発見とその意義」	気象研究所 主任研究官	忠針 繁
			理科総合	「原子力問題と環境問題」	北海道大学大学院教授	加藤 幾芳
			化学	「最前線の天然物化学」	北海道大学大学院教授	宮下 正昭
			生物	「湿原における植生成立機構の解析とその保全に関する研究 ー北海道の低地に分布する泥炭地湿原を対象としてー」	札幌市立高等専門学校助教授	矢部 和夫
			地学	「地球表層圏を記録するメディアー地質体」	北海道大学大学院助教授	川村 信人
			保健体育	「成長期のスポーツ外傷・障害ーその対策と予防についてー」	医療法人松田整形外科病院院長	菅原 誠
		家庭	養護	「平成教育改革と学校保健」	北海道教育大学教授	荒島 真一郎
			芸術	「彫刻と私」	札幌市立高等専門学校教授	國松 明日香
			英語	「Expectations for School English Education ー English Trainings for English Teachers ー」	(株)アイ・シー・シー代表取締役	千田 潤一
			家庭	「食育教育」	札幌グランドホテル 副総支配人 総料理長	小鉢 一夫
			農業	「自治の課題とこれから」	ニセコ町 町長	逢坂 誠二
			工業	「これからの工業高校及び教員に期待するもの」	文部科学省初等中等教育局教科調査官	池守 滋
			商業	「多様化する社会と時代のニーズに対応できる教師をめざして」	札幌大学助教授	菱村 壽夫
		水産	水産	「北海道における漁業協同組合の現状と課題 ～漁業協同組合の合併等について～」	北海道漁業競合組合連合会 指導教育部長	大久保 法幸
			情報	「情報手段の新たな活用方法と情報教育のありかた」	早稲田大学IT教育研究所助教授	宮澤 賀津雄
			国語	「『こころ』を読むこと、『こころ』を教えること」	早稲田大学教授	石原 千秋
	17	地歴公民	世界史	「現代西欧における社会史方法論 ～フランス土木業組合の組織史を事例に～」	北海道大学大学院助教授	高井 哲彦
			日本史	「日本近代史研究と教育」	北海道大学大学院助教授	川口 暁弘
			地 理	「武四郎が愛した温泉」	北海道いい旅研究室編集長	舘浦 海豹
現代社会			「『戦後 60 年』以後 マスコミの現状とこれからの課題 ー日本のメディアは市民の期待に込めているかー」	立正大学教授	桂 敬一	
倫 理			「最近の青少年と保護者の意識についてー札幌市子どもアシストセ ンターから見える高校生と保護者の姿ー」	札幌市少年育成指導員	児玉 恭昌	
政治経済			「間違いだらけの憲法学習 ー戦後社会科教育言説を点検するー」	北海道教育大学教授	安藤 豊	
数学			「みんなで考えよう学力低下問題」	慶応義塾大学教授	戸瀬 信之	
理科			全体	「惑星探査の最新成果」	国立天文台天文情報公開センター助教授	渡部 潤一
			理科総合	「北海道衛星プロジェクトとハイパースペクトル技術の展望」	北海道工業大学助教授	佐鳥 新
			物理	「水素エネルギー・燃料電池を活用する北の街作り」	北海道大学触媒化学研究センター教授	市川 勝
			化学	「大気中CO ₂ からカーボンナノファイバーをつくるプロセスと触媒の 役割」	北見工業大学教授	多田 旭男
		生物	「ダニの生物学」	北海道教育大学助教授	高久 元	
		地学	「岩石の見方」	北海道立理科教育センター研究員	岡本 研	
保健体育		保健体育	「体力・気力・学力向上のアクティブライフづくり ～体力低下問題の解決とよい授業づくり～」	北海道教育大学教授	小澤 治夫	
		養護	「エビデンスに基づく養護教諭の『職』を究め、養護学の確立 ー養護教諭の実践にとつてのエビデンスとはー」	女子栄養大学教授	鎌田 尚子	
		芸術	「オペラ『蝶々夫人』に見る東洋と西洋の出会い」	長崎総合科学大学教授	ブライアン・パーク ガフニ	
		英語	英語	「今の授業を少しだけ前進！ ーアクション・リサーチを活用した授業改善」	帝京大学教授	佐野 正之
			英語	「コーパスと英語教育ー高校現場での活用」	明海大学教授	投野 由紀夫
			英語	「英文和訳を超えたリーディングの指導ースキーマ修正能力を身に つけるプロセス型の指導を目指して」	筑波大学助教授	卯城 祐司
			英語	「英文和訳を超えたリーディングの指導ースキーマ修正能力を身に つけるプロセス型の指導を目指して」	筑波大学助教授	卯城 祐司
		家庭	家庭	「北海道の働く女性の実情 ～仕事と家庭の両立をめぐる問題～」	厚生労働省北海道労働局雇用均等室 地方女性労働者福祉専門官	田原 咲世
			農業	「村の元気をつくる地元学のすすめ」	地元学ネットワーク主宰	吉本 哲郎
			工業	「砲丸と私の人生」	有限会社 辻谷工業代表取締役	辻谷 政久
			商業	「まず、考えてみよう」	作家	小樽山 博
			水産	「水産資源管理の基本理念について」	水産庁資源管理部資源管理室長	長谷 成人
	情報		「授業支援環境としての e-learning ～フリーソフトでもここまでできる、授業支援のあれこれ～」	稚内北星学園大学教授	金山 典世	

年度	回数	教科(分科会)	講演テーマ	所属	講師名 (敬称略)		
18	44	国語	『『わかったつもり』をのりこえる』	宮城教育大学教授	西林 克彦		
		地歴公民	世界史	「イスラームの拡大と西アジア社会 ～ズィンマの民という視点から～」	北海道大学大学院教授	太田 敬子	
			日本史	「学校教育におけるアイヌ史」	札幌大学助教授	本田 優子	
			地 理	「白神山地の自然と人～伝統と未来～」	弘前大学名誉教授	牧田 肇	
			現代社会	「2030 年の北海道」	社団法人北海道未来総合研究所理事長	原 勲	
			倫 理	「パラダイム・シフト～教育現場に活かせるコーチング～」	ビー・クリエイト	土井 英里圭	
			政治経済	「法教育入門～何故、今『法教育』が求められているのか～」	弁護士	岸田 洋輔	
		数学	「小・中・高・大のつながりをもった数学教育を」	東京理科大学教授	芳沢 光雄		
		理科	全体	「アレルギー病はなぜ増えたか～きれいな好きの功罪検証～」	東京医科歯科大学名誉教授	藤田 紘一郎	
			理科総合	「北海道のバイオガスプラント」	北海道大学大学院教授	松田 従三	
			物理	「電気接点現象の物理と科学～現代社会を支える基盤技術～」	千歳科学技術大学助教授	長谷川 誠	
			化学	「ナノテクノロジーと化学」	北海道大学大学院教授	魚崎 浩平	
			生物	「藤田紘一郎先生との懇話会」			
			地学	「中学校理科(地学分野)の高校への移行統合内容における問題点」	札幌市立伏見中学校教頭	前田 寿嗣	
		保健体育	「スポーツによる外傷・障害予防」	札幌医科大学助教授	片寄 正樹		
		養護	「クライシス・カウンセリング」	日本赤十字九州国際看護大学副学長	坂本 洋子		
		芸術	「芸術教科の課題と展望」	文部科学省教育課程教科調査官 東京学芸大学教授	長野 秀章		
		英語	「リーディング・ストラテジーの指導 ー英文和訳を超えた深い読みを目指して」	筑波大学大学院助教授	卯城 祐司		
			「パーコースを高校英語指導に活かす具体的ノウハウ」	明海大学教授	投野 由紀夫		
			「今の授業を少しでも前進！ ～アクション・リサーチを活用した授業改善～」	帝京大学教授	佐野 正之		
		家庭	「少子高齢化時代の家庭科教育 ～子どもと創る魅力ある家庭科の授業～」	聖心女子大学教授	鶴田 敦子		
		農業	「食と農の美味しい関係」	クッキングキャスター	星澤 幸子		
		工業	「トヨタの『ものづくり』と『人材育成』」	トヨタ自動車北海道株式会社取締役	佐々木 健太郎		
		商業	「新時代に求められる企業経営と社員教育」	キャリアバンク株式会社 代表取締役	佐藤 良雄		
		水産	「海からの素晴らしい贈りもの一流氷ー」	北海道立オホーツク流氷センター所長	青田 昌秋		
		情報	「カリキュラムと評価～思うような学習活動をデザインするために～」	関西大学教授	黒上 晴夫		
	19	45	国語	『『古典』をつくる』	作家	橋本 治	
			地歴公民	世界史	「北魏胡族体制論」	北海道大学大学院助教	松下 憲一
				日本史	「国民国家と古都奈良・京都」	京都大学准教授	高木 博志
				地 理	「世界遺産知床の生態とその保全」	斜里町知床博物館館長	中川 元
現代社会				「証券取引と金融市場の役割」	日本証券協会 NPO エイブロシス	増井 利光	
倫 理				「病むこと、回復すること ～精神障害を持つ若者の支援から見えてくるもの～」	北海道医療大学教授	向谷地 生良	
政治経済				「企業社会で求められる能力 ～マネジメントの基礎理論と実務への応用～」	北海学園大学准教授	田中 史人	
数学			「これからの数学教育について」	東京理科大学数学研究所所長	澤田 利夫		
理科			全体	「ハンガリー出身の天才科学者たち」	東京工業大学大学院准教授	中島 秀人	
			物理	「光子の不思議と量子情報通信処理」	北海道大学教授	竹内 繁樹	
		化学	「有機電子材料の発展」	北海道大学教授	高橋 保		
		生物	「葉緑体進化のダイナミズム」	北海道大学教授	堀口 健雄		
		地学	「自然災害の軽減を求めて…有珠山噴火からのメッセージ」	北海道大学名誉教授	岡田 弘		
		保健体育	「身体トレーニングの効果を高めるスポーツ栄養学 ～高タンパク質・アミノ酸の摂取とそのタイミング～」	北海道大学大学院教授	水野 眞佐夫		
養護		「カウンセリングの基本技法」	鎌倉女子大学准教授	富田 久枝			
芸術		「私が考える芸術」	画家	野田 弘志			
英語		「新感覚☆わかる身いつく英文法」	慶応義塾大学教授	田中 茂範			
家庭		「次期学習指導要領の改訂に向けて」	文部省初等中等局参事官付教科調査官	望月 昌代			
農業		「農業の国際化(WTO 等)に対応した北海道農業」	北海道農政部農業経営局長	渡邊 毅			
工業		「鉄鋼業における『ものづくり』の実際 ー世界最大の 600ton 鋼塊製造ー」	(株)日本製作所室蘭製作所製鋼部長	柴田 尚			
商業		「地域に根ざした企業経営」	株式会社北海道日本ハムファイターズ 取締役会長	今村 純二			
水産		「夢、挑戦、そして人とのつながり」	海洋冒険家	白石 康次郎			
情報		「ICT 教育がめざす本当の学ぶ力」	青山学院大学教授	佐伯 胖			

年度	回	教科(分科会)	講演テーマ	所属	講師名 (敬称略)
20	46	国語	「ことばの世界をひろげる古典教育 ～古典教育は「生き残れるか～」	國學院大學名誉教授	中村 幸広
		世界史	「インド独立をめぐるいくつかの問題」	函館工業高等専門学校教授	四宮 宏貴
		日本史	「近世アイヌ社会史研究の論点」	北海道大学大学院準教授	谷本 晃久
		地 理	「北海道の鉄道が創る～交通インフラ・イノベーション～」	北海道旅客鉄道株式会社副社長	柿沼 博彦
		現代社会	「ごみと循環型社会」	北海道大学大学院教授	吉田 文和
		倫 理	「環境倫理と高校教育」	京都大学名誉教授	加藤 尚武
		政治経済	「現代日本の労働と生活」	北海学園大学準教授	川村 雅則
		数学	「数学の問題解決力における読解分析力について」	千葉大学名誉教授	佐藤 恒雄
		全体	「理科教育と『環境科学』「環境」は理科教育になじまない	東京大学教授	渡辺 正
		理科総合	「はじめよう！ 科学技術コミュニケーション」	北海道大学博士研究員	佐藤 祐介
		物理	「超小型人工衛星『HIT-SAT』の開発」	北海道大学大学院準教授	戸谷 剛
		生物	「ヒメマイマイの地理的変異の謎ー」	北海道網走水産試験場栽培技術科長	桑原 康裕
		地学	「北海道における活断層と直下型地震について」	北海道立地質研究所表層地質科長	大津 直
		保健体育	「学校体育に求められている体力の向上 ～体づくり運動7～10単位時間をどう展望するか～」	北海道教育大学旭川校	古川 善夫
		養護	「養護教諭の仕事のこれまでとこれから ～“養護”と“専門性”をどう捉え、発展させるか～」	宮城教育大学教授	数見 隆生
		芸術	「音と気」	ヴァイオリニスト	大平 まゆみ
		英語	「これからの外国語教育、これからの外国語教師」	国立教育政策研究所 教育課程調査官	太田 光春
		家庭	「大豆の変身～豆乳とおから作りから考える食と環境問題～」 「フルーツ探検～糖度調べ実験から考える食生活の諸問題～」	お茶の水大学特任アソシエイトフェロー	佐藤 典子
		農業	「農業を志す青年たちに就農の道を拓くには」	北海道農業担い手育成センター長	青山 俊夫
		工業	「勇気を出してまず一歩！ 道はそこから拓けます ～世界初鋳鉄製スピーカー誕生の裏話～」	臼井鋳鉄工業株式会社代表取締役	臼井 憲之
		商業	「企業の取り組み国際貢献～メガネを通じて海外貢献」	株式会社 富士メガネ	金井 昭雄
		水産	「流水の来る海 知床」	知床ダイビング企画 代表取締役	関 勝則
		情報	「今、求められている学力とは」	株式会社内田洋行専務執行役	大久保 昇
21	47	国語	「『生きる力』を育てるための小論文・作文指導」	鶏鳴学園学長	中井 浩一
		世界史	「日本へのマニ絵巻の伝来とその世界史的背景」	大阪大学大学院教授	森安 孝夫
		日本史	「女真海賊の侵攻(刀伊の入寇)と日本・高麗関係 ～日韓歴史教科書シンポジウムの成果から」	北海道教育大学准教授	鈴木 哲雄
		地 理	「現代社会における地域づくりの課題と農業・食料問題 ～地理教育の課題を視野に入れて」	北海道大学名誉教授	山田 定市
		現代社会	「政権交代と生活保障～日本社会の転換」	北海道大学大学院教授	宮本 太郎
		倫 理	「近年の中学・高校生の現状と課題 ～スクールカウンセリングを通じて」	北海道教育大学教職員大学院院長	扇子 幸一
		政治経済	「新時代の民主主義と公民教育の課題 ～ポスト政権交代の民主政治と若者の政治」	北海道大学大学院教授	山口 二郎
		数学	「大学入試と数学教育」	早稲田大学教授	鈴木 晋一
		全体	「ニセ科学と科学リテラシー」	大阪大学教授	菊池 誠
		理科総合	「雪は白ダイヤ、利雪の普及に向けて」	国際雪倶楽部代表	森本 幸江
		化学	「溶解と結晶化過程の理解と結晶設計」	北海道大学大学院教授	稲辺 保
		生物	「植食性テントウムシと新しい種の誕生」	北海道大学大学院	片倉 春雄
		地学	「デスモスチルスの出現とクジラの変革 ー漸新世の北太平洋で起きたことー」	足寄動物化石博物館館長	澤村 寛
		保健体育	「学校学習指導要領改訂による教科保健体育の在り方について」	北海道教育大学准教授	渡部 基
		養護	「相談活動の考え方と実際～自尊感情を育む共有体験」	東海大学教授	近藤 卓
		芸術	「育つこと、育てること」	北海道教育大学教授	矢野 敏文
		英語	「英語教育改善のためのマクロ的発想と方策」	立教大学教授	松本 茂
		家庭	「自立と孤立と共生と～家庭科から学校教育の希望を語る～」	大阪府立成城高等学校教諭	南野 忠晴
		農業	「国際化と農業～東アジア諸国を中心として」	拓殖大学副学長	篠塚 徹
		工業	「燃やせない時代の森林・木材の利活用について ～環境先進国ドイツでの取り組みから学ぶ～」	飯田ウッドワークシステム株式会社 代表取締役	飯田 信男
		商業	「北海道の活性化を担う企業として」	株式会社ラルズ代表取締役会長	横山 清
		水産	「日本海の深層水から地球温暖化を見る」	北海道大学大学院準教授	磯田 豊
		情報	「新学習指導要領と教科『情報』」	文部科学省初等中等教育局視学官	永井 克昇

年度	回	教科(分科会)	講演テーマ	所属	講師名 (敬称略)
22	48	国語	「これからの日本に必要な言葉の教育～『言語技術』の有効性～」	つくば言語技術教育研究所所長	三森 ゆりか
		世界史	「中国の生活文化を探る旅 ～中国西南地方の歴史と民俗をめぐって～」	琉球大学教授	辻 雄二
		日本史	「歴史の読み方学び方 ー地貌を知る営みから～」	筑波大学名誉教授	大瀧 徹也
		地 理	「『近世蝦夷地図の変遷』～江戸期の地図にみる北海道の姿～」	北海道史研究協議会会員	高木 崇世芝
		現代社会	「情報化社会と人権問題について」	北海道情報大学 准教授	有道 出人
		倫 理	「情報倫理と情報モラル教育」	北海道教育大学旭川校准教授	村田 育也
		政治経済	「高校社会科の知識で外交問題をどう読み解くか」	作家・元外交官	佐藤 優
		数学	「数学科の学習指導における言語活動の充実」	筑波大学大学院教授	清水 美憲
		全体	「地球を知る、地震の巣を掘る」	東京大学大学院教授	木村 学
		理科総合	「先端技術の模擬演示実験の試みと実践 ～光通信、偏光技術などの実験デモ～」	千歳科学技術大学教授	長谷川 誠
		物理	「人工心臓の現況と先端医療研究者育成の理系教育」	東海大学教授	岡本 英治
		化学	「ノーベル化学賞のこぼれ話」	北海道大学大学院教授	覚知 豊次
		生物	「小さな木工蜂にみる進化の足跡～ツヤハナバチの仲間にみられる 営巣習性の変化と種の分化～」	日本生物教育会参与	塩川 信
		地学	「地球を知る・地震の巣を掘る」	東京大学大学院教授	木村 学
		保健体育	「学校体育やスポーツ現場で頻発するケガのからの予防すべき外 傷・障害について」	北翔大学准教授	吉田 真
		養護	「対応が難しい保護者・教員への対応 ～養護教諭(学校)が陥りやすい問題点と対処方法」	慶応義塾大学文学部講師	生田 倫子
		芸術	「美術が街と人をむすぶ」	札幌大谷大学短期大学部教授	岡部 昌生
		英語	「英語嫌いを無くし、真に英語力を向上させるための秘策」	大阪樟蔭女子大学教授	菅 正隆
		家庭	「食は生命(いのち)の第一歩 ～食環境を整えよう～」	トータルフード・コーディネーター	高井 瑞枝
		農業	「『風土』は食をつくり、『フード』が人をつくる」	作家	森 久美子
		工業	「大学生による超小型衛星の開発」	北海道工業大学教授	佐鳥 新
		商業	「大いなる生き方 ～明日の北海道を支える人材の育成を目指して～」	(株)土屋ホールディングス 代表取締役会長	土屋 公三
		水産	「北太平洋の生物多様」	自然写真家	寺沢 孝毅
		情報	「学習目標と評価の一体化、その考え方と方法」	玉川大学准教授	ダグラス・トルファ
	49	国語	「対話の方法としての文学」	作家	奥泉 光
		世界史	「イギリス史の現場からケルト論争を中心に」	北海学園大学人文学部教授	常見 信代
		日本史	「考古学成果と文献資料をつなぐアイヌ文化の歴史 ～厚真町の遺跡発掘成果～」	厚真町教育委員会学芸員	乾 哲也
		地 理	「北海道の地名を歩く」	ノンフィクション作家	合田 一道
		現代社会	「社会を変える教育 ーシティズンシップ教育と社会的課題解決の教育モデルー」	シティズンシップ教育推進ネット代表	大久保 正弘
		倫 理	「高校科目『倫理』をどう考えるか ～哲学・倫理学を『教育倫理』にどう結び付けるか～」	北海道大学大学院文学研究科教授	蔵田 伸雄
		政治経済	「『北海道じゃらん』の事例に見る地域活性化のポイント」	株式会社リクルート北海道じゃらん編集長	中西 基王
		数学	「数学活動を促す教材づくり ～構造としての数学を具体から抽出するために～」	早稲田大学教育学部教授	渡邊 公夫
		全体	「真性粘菌～たかが単細胞されど単細胞変形体がつくるネットワ ークの妙技の秘密～」	公立はこだて未来大学教授	中垣 俊之
		理科総合	「福島第一事故を踏まえた原子力・放射線・エネルギー教育につ いて」	北海道大学大学院特任教授	杉山 憲一郎
		物理	「第2の地球は存在するか」	北海道大学大学院教授	倉本 圭
		化学	「光化学に立脚した吸光および蛍光化学センサー」	北海道大学大学院教授	中村 博
		生物	「理科教材としての粘菌」	公立はこだて未来大学教授	中垣 俊之
		地学	「はやぶさが明らかにした小惑星イトカワの正体」	北海道大学大学院教授	込本 尚義
		保健体育	「新学習指導要領とこれからの体育授業のあり方」	早稲田大学スポーツ科学学術院教授	友添 秀則
		養護	「高校生期の子どもの中心として、発達障がいの子どもの理解と支 援・自立をどう援助していくか」	NPO 法人えじそんくらぶ代表	高山 恵子
		芸術	「演奏者から教育者になった理由」	札幌大谷大学音楽部音楽科専任講師	倉橋 健
		英語	「英語教員！乗り遅れないための情報共有と授業改善秘策」	大阪樟蔭女子大学教授	菅 正隆
		家庭	「ジャパンテキスタイルの可能性」	テキスタイルデザイナー	梶原 加奈子
		農業	「北海道経済とこれからの農業教育に期待すること」	札幌商工会議所会頭	高向 巖
		工業	「高校生から社会人基礎力 ～気づきと習慣化をめぐる支援策～」	法政大学大学院教授	諏訪 康雄
		商業	「変化を実現する人財教育」	(株)セイコーマート 運営支援本部長 執行役員	伊藤 朋之
		水産	「オホーツク海の流氷が生み出す豊かな水産資源」	北海道大学低温科学研究所 環オホーツク観測研究センター准教授	西岡 純
		情報	「新科目の性格と特徴の研究」	滋賀大学教授	松原 伸一

年度	回	教科(分科会)	講演テーマ	所属	講師名 (敬称略)
24	50				
		国語	「世界の不幸を見つめるドストエフスキー」	東京外国語大学学長	亀山 郁夫
		世界史	「宋代中国の政治と社会」	北海道大学専門研究員	宮崎 聖明
		日本史	「受験日本史の指導」	河合塾 日本史講師	坂本 勝義
		地 理	「元気が出る地理教育を考える」	(財)日本デジタル道路地図協会理事長	泉 堅二郎
		現代社会	「教室で学ぶワークルール」	NPO 法人 職場の権利教育ネットワーク代表理事	道幸 哲也
		倫 理	「命をつなぐ医療とは」	旭川医科大学外科学講座 消化器病態外科学分野教授	古川 博之
		政治経済	「移行期における「政治・経済」教育の課題と展望」	学校法人北海学園 北海商科大学商学部教授	堂徳 将人
		数学	「超入門・リーマン予想」	東京工業大学世界文明センターフェロー	桜井 進
		全体	「サバリ上手な動物たちー海の世界で新発見」	東京大学大気海洋研究所国際沿岸海洋研究センター准教授	佐藤 克文
		理科総合			
		物理	「どうする？福島後のエネルギー！」	北海道大学教授	藤井 義明
		化学			
		生物	「脳の性差形成とアポトーシス(細胞死)～♂と♀の行動の違いをつくり出すしくみ～」	北海道教育大学教授	木村 賢一
		地学	「宇宙のはじまりと進化、そして未来について」	北海道大学教授	羽部 朝男
		保健体育	「障害予防とパフォーマンスアップのトレーニング」	国立スポーツ科学センタースポーツ医学研究部専任研究員	松田 直樹
		養護	「専門職としての養護教諭に期待する」	岡山大学大学院教育学研究科教授	高橋 香代
		芸術	「中国出土文物と盗掘事情」	跡見学園女子大学教授	横田 恭三
		英語	「国際共通語としての英語力向上を図る～Can-Do リストの学習到達目標～」	上智大学言語教育研究センター教授・センター長	吉田 研作
		家庭	「これからの生活と環境・生命・カガク・ICT」	新潟県立大学国際地域学部准教授	本間 善夫
		農業	「北海道の未来を拓く有機農業」	学校法人 酪農学園理事長	麻田 信二
		工業	「今後の「ものづくり」のあり方について」	明星大学教授	関 満博
		商業	「立場も違う、仕事も違う。多種多様な人とコミュニケーションすることについて」	(株)リクルート北海道じゃらん 地域振興統合プロデューサー	原田 亜紀
		水産	「時代の変化、魚食振興等に対応した水産・海洋教育の担うべき役割と課題」	元文部科学省視学官	中谷 三男
		情報	ワークショップを開催		

教科別集会研究発表表

年度	回	教科(分科会)	テーマ	所属学校名	氏 名
14	40	国語	「地域教材を考える」	檜山北	熊木 啓二
			「表現指導と評価」	様似	三井 智和
			「他者に繋がってゆき力を育てるために」	札幌東陵	宮下 義晴
		世界史	「平和資料記念館見学を活用した国際平和の授業展開」	檜山北	村中 譜佐朗
			「概念史とその意義」	札幌厚別	横山 茂
		日本史	「実物教材等を活用した授業実践」	北広島西	高橋 一矢
			「日本とロシアの文化比較ー国際理解と地域学習を取り入れた授業ー」	稚内定時制	岩間 洋之
		地理	「インターネットを活用した授業展開例」	訓子府	宮沢 護
			「地理的な見方・考え方を培う学習指導の工夫について」	大野農業	大端 開
		現代社会	「総合的な学習の時間を視野に入れた国際理解教育の実践」	鹿追	小笠原 一彦
		倫理	「エンカウンターについてー現代の青年期についての考察ー」	石狩南	鈴木 究
		政治経済	「授業における情報機器の活用方法について」	白糠	佐藤 匡
			「心を育てる公民科教育を目指して」	上富良野	矢橋 佳之
			「『納得の数学』に向けての授業実践」	夕張緑ヶ丘実業	長尾 良平
			「『学び』の援助ーわかる『楽しい』授業を目指してー」	沼田	須田 和幸
		数学	「土曜日を利用しての中高連携ー数学大好き!!を育てるためにー」	浦河	杉本 式史
			「想像力の育成と地域社会への貢献ーコンピュータを用いた学習活動ー」	徳別	横山 徹
			「北海道石油史と環境教育ー特に厚田石油史の教材開発ー」	札幌開成	山田 大隆
			「総合理科における実験観察と評価」	和寒	宮腰 幸樹
		理科総合	「光を題材にした探究活動についてーシャボン玉を中心にしてー」	羅臼	中道 洋友
			「波動分野のシミュレーション開発」	本別	田端 修
		物理	「理科全般における授業の進め方の工夫」	美幌農業	大山 裕三
			「課題研究の実践とデジタルコンテンツ化の試み」	滝川	三浦 治彦
		化学	「トンボ玉の教材化」	浦河	飯島 晶子
			「PC カメラを使った画像の活用ー微速度撮影を用いた教材化ー」	静内農業	渡邊 徳彦
		生物	「緩歩動物クマムシの教材化」	滝川	名苗 顕治
			「科目『地学』以外での地学教育の実践についてー総合理科・生物Ⅱなどにおける取り組みについてー」	歌志内	藤田 秀樹
		地学	「運動部活動顧問のための指導ハンドブック」	札幌藻岩	近藤 壽
			「『生きる力』を身につける武道指導を目指してーこれからの学校体育の関わりについてー」	北広島	町田 英謙
			「全国学校体育研究大会からの報告ー自ら学び、自ら考え、積極的に取り組む体育学習ー」	札幌国際情報	田苗 隆男
		保健体育	「小規模校の特性を生かした器楽指導の実践報告ーリコーダーグレードテストを通じてー」	増毛	大野 光
			「小規模校における美術教育の実践ー教材づくりと指導法の工夫ー」	長沼	渡邊 敬之
			「網走管内書道教育研究会の歩み」	北見緑陵	若松 顕仁
		芸術	「生徒が輝く仕掛け作りー小規模校における基礎指導ー」	北見仁頃	石橋 栄
			「生徒が輝く仕掛け作りーTwo JTEs and one ALT in a small school ～ cooperationー」	中川商業	新江 雅宏
			「ALT とティームティーチングーALT との TT に対する英語科としての取組み」	様似	清水 まゆみ
		英語	「ALT とティームティーチングーActivities about Grammarー」	網走向陽	福浦 奈朋子
			「ALT とティームティーチングーTT での少人数指導の取組みー」	鹿追	佐々木 真一
			「シラバスデザインとスーパーイングリッシュの取組みー実践的コミュニケーション能力の育成を目指してー」	札幌南陵	俵谷 俊彦
			「シラバスデザインとスーパーイングリッシュの取組みー南陵高等学校4か年シラバスの取組みー」	札幌国際情報	小西 晃
			「高校英語のバージョンアップーAuthenticity を求めてー」	函館中部	今井 康人
			「中高連携・中高一貫を目指してー中学校の現場からー中学校での実践的コミュニケーション活動と評価の実践ー」	札幌市立中島中	木村 嘉宏
			「中高連携・中高一貫を目指してー中学校の現場からー中高一貫についてー」	立命館慶祥中高	竹中 宏文
			「やる気を出させる知恵と技ー学習意欲向上への働きかけについてー」	稚内	徳長 誠一
			「やる気を出させる知恵と技ー僕(私)にだってわかるー」	札幌星園	中村 正人
		家庭	「生活を創造する力の育成を目指して」	札幌厚別	今多 靖子
			「より確かな職業観、労働観の育成を目指して」	岩見沢農業	坂口 真奈美
		農業	「循環型農業への挑戦！」	静内農業	伊與部 明
			「個に応じた特色ある農業教育の創造を目指してー小規模校における柔軟な教育課程編成の取組みー」	東藻琴	森川 哲・神田 大介
		工業	「電子工作を取り入れた実習の実践(同期式10進カウンタの製作)」	富良野緑峰	今堀 祐
			「就職慣行の見直しについて」	札幌琴似工業	猪瀬 徹
			「工業所有権教育についてー『平成 12 年度工業所有権教育実験協力校』としての取組みー」	芦別総合技術	山本 克郎
		商業	「本校の特色ある教育課程について」	美唄	伊藤 康生
			「インターンシップの取組みについて」	稚内商工	千葉 貴仁
			「江別高校における進路指導」	江別	秋本 直人

年度	回	教科(分科会)	テーマ	所属学校名	氏 名
15	41	水産	「船用ディーゼル機関による大気汚染の現状と課題」	函館水産	中野 専司
			「無線従事者養成校の科目内実習における効果的な教材について」	戸井	木村 昌志
			「水産高校におけるダイビングの指導方法について」	厚岸水産	菅沼 俊介
		情報	「新教科『情報』で準備していること」	富川	小笠原 節
			「情報Aデジタル教材開発プロジェクト」	南茅部	川崎 知文
			「評価規準と評価基準表 Rubric を用いた評価はどこまで可能か」	札幌北	奥村 稔
			「『学校図書館』と『情報』(生徒の意識調査分析と『情報』の授業に向けた実践例)」	札幌南陵	菅原 陽
	41	国語	「小説と古文を活用した『書くこと』の指導」	大成	荒木 直也
			「『書く』表現から『話す・聞く』能力の向上をめざして ー新聞記事を用いた作文指導の実践例ー」	旭川商業	岸 美千代
			「情報活用能力の育成をめぐる」	釧路工業	佐野比呂己
			「大型地図を利用した授業展開～マグネット式ラミネート白地図の教材開発」	札幌東	遠藤 忍
		世界史	「映像を活用した授業の一例～知識の定着を目指して」	士幌	福田 敏憲
		日本史	「コシャマインの蜂起による討論授業」	岩見沢緑陵	河本 由生
		地理	「上川高校における総合学習「大雪基礎」」	上川	佐藤 淳
		倫理	「生徒が興味・関心の持てる授業を目指して～地域学習を例として～」	厚岸潮見	高木 優
		政治経済	「高校倫理における実存主義の授業作り」	旭川東栄	木村 浩
			「環境教育の取り組み」	美唄	中島 康晴
		数学	「憲法教育の課題」	釧路江南	渡辺 真
			「『学ぶ力』と『考える力』を育成する数学教育の実践 1. 『自力で解ける数学』を目指して」	稚内	桶谷 真平
			「『学ぶ力』と『考える力』を育成する数学教育の実践 2. 評価について」	東川	上津 隆路
			「『学ぶ力』と『考える力』を育成する数学教育の実践 3. 新課程に向けての取り組みーイメージを重視した授業を目指してー」	天塩	水口 直樹
		理科	「本校における環境教育の構想について ーコスモサイエンス科「環境教育」と GLOBE プロジェクト」	札幌開成	山田 大隆
			「石狩川の水はアドリア海に注ぐ」	上川	印部 陽一
		物理	「配線ルールを用いた物理実験？一つの教材から可能な実験を探る？」	札幌厚別	松田 素寛
			「新課程「物理Ⅰ」電気分野の実践について？新課程「物理Ⅰ」の変更点とその可能性について？」	根室	溝上 忠彦
		化学	「少人数学級の利点を生かした化学教育の実践」	浜益	大畑 真人
			「上川高校における環境教育 ～クロアチアで開催された GLOBE 世界大会へ参加するまで～」	上川	印部 陽一
		生物	「ウミネコ Larus crassirostris の教材化」	奥尻	塩見 浩二
			「総合理科～上士幌高校の取り組み～」	上士幌	辻 英明
		地学	「サクラの鋸歯数の差異 ーコンピュータを利用した処理ー」	豊浦	石川 広美
			「生徒の興味にうったえかける、地域を題材とした授業実践報告」	足寄	木川田敏晴
		保健体育	「生徒が積極的に取り組む授業を目指して ～体育ダンス授業における「よさこい発表会」の実践～」	岩内	中川 暁
			「連携型中高一貫教育校における保健体育科の取り組み ～課題と今後の展望～」	上川	斉藤和彦・尾形一彦
	41	芸術	「ギターを活用した授業の展開～表現から鑑賞まで～」	湧別	那須 郁夫
			「職業高校における美術教育の実践」	留萌千望	朝地 信介
			「生徒の潜在力を呼び覚ます書教育」	函館西	松岡 篤志
	41	英語	「コミュニケーションにおける英文法」	札幌南	石井 信幸
			「北陵高校1年生の取り組み」	札幌北陵	高野 龍彦
			「The Gifts From My Students」	新十津川農業	豊岡 裕康
			「鹿追高校の国際理解教育(国際事情学習・カナダ留学・カナダ研究)」	鹿追	及川 佳勝
			「生徒をやる気にするティームティーチング」	静内農業	塩村 亮
			「国際理解教育実践例～カナダのホームステイ、授業を通して学ぶこと」	常呂	杉山 賢一
	41	家庭	「お弁当づくりをとおして考える食品の衛生と安全」	札幌西	村田ひろ美
			「体験的な習得を重視した授業の実践」	妹背牛商業	小松 裕美
			「新産業技術指導者養成講習受講報告」	紋別南	石岡 亜季
	41	農業	「地域の期待に応える農業教育」	遠別農業	三上真道・佐藤麻美
			「総合学科における農業教育の取り組み」	標茶	中西 聖
	41	工業	「～地域との連携～ 産学官による共同研究の取り組み」	札幌琴似工業	川村広幸・矢倉賢二
			「出張授業の取り組み」	室蘭工業	志田 泰範
	41	商業	「本校における進路指導について」	旭川商業	埴山 悟
			「遠軽郁陵高校『情報ビジネス科』21世紀ビジョン」	遠軽郁陵	奥原 祥・皆口美香・迫中 学
			「南商インターンシップ Plan Do See」	帯広南商業	武井 純子
	41	水産	「無線従事者養成校において、最先端通信技術をいかにして授業内容に取り入れるか」	戸井	木村 昌志
			「専攻科情報通信科第1学年における航海実習の評価と課題について」	小樽水産	宮下 直之
	41	情報	「情報教育の施策について」	札幌稲西	長尾 嘉雄
			「校内イントラネットによるインターラクティブな授業」	札幌稲北	加藤 誠
	41	【シンポジウム】	「実習作品の生徒相互による評価の試み」	岩見沢東	高木 昭信
			「情報教育の高大連携を探る」	札幌新川 札幌北	早苗 雅史 奥村 稔

年度	回	教科(分科会)	テーマ	所属学校名	氏 名
				南茅部	西村 昇
16	42	国語	「高等学校における漢文指導への一考察－漢学出身者の漢文観－」	札幌稲雲	山谷 浩光
			「基礎・基本の定着を目指して－国語力向上のモデル事業の実践から－」	女満別	秋口 裕
			「『オツベルと象』から『高瀬舟』へ－中高六年間を見通した教材の位置づけ－」	鶴川	木元 亮仁
		世界史	「大戦中のアルザス地方～マジノ要塞(シムセルホフ要塞)の実地調査から考える」	風連	室田 恵二
			「アジア史の中のオホーツク人 ～北海道枝幸高等学校『総合的な学習』の実践と関連して～」	枝幸	藤井 秀樹
		日本史	「飛鳥・奈良の歴史遺産の見学を活性化するための事前学習の一例」	大麻	小山内 壘
			「魅力ある授業づくりをめざして～授業における自分の関わりを評価する工夫～」	木古内	田嶋 公一
		地理	「地域に根ざした環境地図作成の試み～地域の地図化とその応用～」	有朋	吉井優紀彦
			「シラバスの活用による授業実践」	浦河	清水 義徳
		現代社会	「『設問懷疑』(イラク人三人人質事件編) ～小論文構成法を生かして、生徒が複眼思考で考えた～」	函館中部	外山 聖武
			「課題学習『市町村合併を考える』～生徒が主体的に取り組む授業をめざして～」	由仁商業	沖口 晃子
		倫理	「キルケゴール－精神史における意義と思想の特殊性－」	苫小牧東	渡邊 昭博
			「コンピュータを使ったテーマ学習について～Excel・Power point による 実践例～」	浜頓別	下川 欣哉
		政治経済	「専門高校における政治経済の実践」	釧路商業	高橋 昌宏
			「評価の観点を意識した授業の在り方について」	木古内	石黒 勝
		数学	「連携型中高一貫教育の特性を利用した上ノ国版数学検定について」	上ノ国	千田 隆史
			「学力向上を目指す習熟度別学習の取り組み」	本別	末信里佳子
		理科総合	「コズモサイエンス科の環境教育教材(本校グローブ活動の2年間の実践も含めて)」	札幌開成	山田 大隆
			「理科地域巡検の実戦について」	和寒	宮腰 幸樹
		物理	「リコーダーとオカリナ」	札幌南陵	佐藤 和宏
			「針穴写真器と望遠鏡～レンズの中心を通る光は屈折しないという性質に注目して～」	八雲	神山 義茂
			「偏光板とセロハンの着色現象に関する考察 ～理科部の指導と高大連携～」	南茅部	堀 輝一郎
			「簡単な手作り実験器具を用いての演示実験・生徒実験 ～簡単な構造だから、『へー』と関心してしまう～」	釧路湖陵	氏家 正規
		化学	「自ら学ぶ意欲を育てる実験の展開」	函館中部	松島 美穂
			「新カリキュラムへの対応～化学専門教員がいない中での化学Ⅰの実践～」	中標津	市村 由子
		生物	「アウトドア活動と自然再生が釧路湿原の水鳥の生息環境に与える影響」	中標津	浦 巧
			「身近な植物の観察方法の工夫 ～静内農業高校で見ることのできる植物のデータベース化～」	静内農業	山田 顕
		地学	「生徒の興味・関心にうったえかける“ものづくり”を通じた授業実践報告」	旭川北	柳本 高秀
		保健体育	「定時制における授業の充実と可能性について ～遅い生徒を育てる授業を求めて～」	稚内	鶴丸 慎也
			「阿寒高校健康教育プラン～ライフスキルを中心とした保健授業～」	阿寒	竹田 安宏
		養護	「自分を見つめる！自分を生きる！～集団的保健指導の試み～」	砂川北	坂本 喜久
		芸術	「リズム教材を使った授業の展開～ボディーパーカッションに挑戦～」	浜頓別	木幡 和由
			「身近に感じ、伝える美術教育の実践」	札幌山の手	齋藤 美佳
			「生徒の主体性を生かす授業をめざして」	旭川北都商業	斎藤 肇
		英語	「北陵高校2年生の取り組み」	札幌北陵	高野 龍彦
			「Improving Students' Communication Skills-Through the Setana-Hanford Sister-School Project (米国姉妹校や海外旅行の取り組み)」	瀬棚商業	今北 敦子
			「小規模校でわくわく実践～楽しめる OCI～」	津別	炭屋 正人
			「オーラル授業における JTE と TT の実践」	根室	加藤理恵子
		【パネルディスカッション】	「国際情報の CALL SYSTEM」	札幌国際情報	船本 龍一
			「南陵高校英語科の改革」	札幌南陵	俵谷 俊彦
			「『白樺英語科の取り組み』－既存の英語教授法からの脱却を目指して－」	札幌白陵	中川 順一
			「“少人数指導”自主教材を活用したオールイングリッシュ授業」	旭川北	松井 徹朗
		家庭	「北海道における家庭科教育の今後に向けて 第2グループ報告」	石狩翔陽	石川 幸孝
			「北海道における家庭科教育の今後に向けて 第3グループ報告」	江別	井上 明子
			「北海道における家庭科教育の今後に向けて 第1グループ報告」	函館商業	加賀美砂百合
		農業	「特色ある農業教育を目指した、地域社会との連携の在り方」	富良野緑峰	田村 弘樹
			「地域に学び地域に共に生きる～花づくり、人づくり、ふる里づくり～」	剣淵	村井 一幸
		工業	「デジタルコンテンツを活用した効果的な授業の展開」	滝川工業	榎本 哲史
			「専門高校等における『日本版デュアルシステム』の導入のための調査研究について(中間報告)」	旭川工業	諸橋 宏明
		商業	「資格取得の取り組みと問題点」	稚内商工	梶 猛
			「本校におけるインターンシップの取り組みについて」	札幌東商業	石井 照之
			「芦別高等学校情報ビジネス科伝統校の新たな挑戦」	芦別	澤田 真泰
		水産	「本校における進路指導について」	苫小牧総合経済	長谷 成人
			「地域の要請に応える新学科の教育内容について」	函館水産	長谷 昇
			「魚醤油を中心とした最新食品加工技術の研究について」	函館水産	我妻 雅夫
		情報	「学科の統合による変化と可能性について」	厚岸水産	高橋 篤
			「中高連携を考える」	札幌発寒中学 札幌厚別南中学 旭川藤女子 江差	荒島 晋 梅津 由一 鎌田 亮樹 畠澤 貴幸
			「『情報活用能力』理解の授業展開と評価について －試行錯誤でスタートした情報Aを振り返って－」	札幌平岡	石谷 正

年度	回	教科(分科会)	テーマ	所属学校名	氏 名
17	43		「再構成型コンセプトマップ作成ソフト『あんどろ君』を用いた授業」	札幌稲北	加藤 誠
			「デジタル表現で見えてくるもの」	札幌平岸	杉本 式史
			「学習指導と評価の工夫」	札幌北	日比 誠
			「協調型電子掲示板 Wiki を用いたデータベースの作成 ー 自律的共同作業へのメタ認知 ー」	札幌北	奥村 稔
			「情報通信と計測・制御の技術ー動作を確認できるような実演とはいけれどー」	倶知安	津端 公彦
			「漁業の生産ー流通ー消費の関係を総合的にとらえよう ー発展的な学習・漁業経営者としてー」	天売	香澤 里美
			「情報の科学的な理解を重視した『情報A』の授業」	釧路北	村上 肇
			「新教科『情報』の評価をいかにしたか(実践報告)」	富川	小笠原 節
		国語	「班発表で読む『ころ』～読者論とのかかわりを通して～」	千歳	加納 敏隆
			「指導と評価の一体化を目指して～読解から表現の流れの中で～」	妹背牛商業	石尾みどり
		世界史	「楽しさから深まりへ～総合学科における古典教育の模索～」	清水	太田 幸夫
			「地歴・公民における小規模校での実践」	中川商業	田原 史子
			「思い込みで作られる歴史」	北見仁頃	太田 稔
		日本史	「元気のでる授業づくり 2006～取材からつくる教材～」	本別	養口 一哲
			「知り、考え、行動する地理教育を目指して ～国際協力クラブ 8 年のあゆみが授業を変えた～」	当別	田辺 孝規
		地理	「地域の素材を生かした地域学習の実践報告」	戸井	大谷 真澄
			「プリント、小道具を活用した授業づくり～生徒が主体的に考える授業を目指して～」	岩見沢農業	福本 直人
		現代社会	「興味・関心を持たせる授業を目指してー地域・新聞等を活用した授業実践ー」	洞爺	佐藤 豊記
			「高校倫理に生かすレヴィナスー他者との出会いの倫理学ー」	有朋	横山 茂
		政治経済	「問題解決型授業における一考察」	札幌工業	古川 敬子
			「法教育の実践と課題」	置戸	木村 哲也
		数学	「間違いを生かす授業」	津別	金田 和実
			「確かな基礎学力を身につける授業の工夫 ～個に応じた習熟度別・チームティーチング指導と評価の工夫～」	阿寒	大和 智也
			「看護学校進学に向けた取り組み～看護数学を通した考える力の育成～」	根室	熊谷 英則
		理科総合	「理科総合における 1 年間の授業実践～思い出に残る実験を目指して～」	江差南	堀内 信哉
			「探究活動への導入としての観察実験～ミズクラゲボリブ観察実験ほか～」	三笠	山口 由人
		物理	「化石レプリカをつくらうー理科総合Bの実習からー」	富良野緑峰	森 伸一
			「物理指導における『観点』を模索してー木古内高校での実践と課題ー」	木古内	稲子 寛信
			「視聴覚機器を用いた演習授業について」	遠軽	山崎 恒輝
		化学	「『防爆くん』を使った気体の実験」	紋別北	中西竜太郎
			「興味関心や、広い視野を持たせる広がりのある化学 I の授業展開について」	美唄	宇城 隆司
		生物	「生徒が関心を持つ無機実験の実践～金属イオンの分離・確認の実験～」	留萌	市橋 洋幸
			「環境教育の試み～エゾシロチョウの教材を中心にして～」	札幌旭丘	奥井 則行
			「アサガオ類を研究対象にした理科部の指導と教材研究」	函館白百合学園	中村 信雄
		地学	「細胞の浸透圧変化を定量的に捉える実験教材の開発」	室蘭工業	高野 隆広
			「コズモサイエンス科における特色ある科目を実施して ～『野外観察』地学分野を例に～」	札幌開成	梅原 宏之
		保健体育	「地学気象分野における学習指導上の問題点と指導実践」	標茶	石井 亮
			「地域と連携した海洋スポーツ学習への取り組み～本校の実践報告と今後の展望～」	瀬棚商業	高野 智史
		養護	「ICTを活用した保健授業～薬物乱用によるNOと言える正しい生徒の育成を目指して～」	釧路工業	岩岡 勝人
			「地域と連携した健康教育の実践～骨密度検査からみえるライフスキル教育の重要性～」	枝幸	十川 光穂
		芸術	「中高乗り入れ授業の取り組み～これまでの成果と今後の課題～」	鹿追	蜂谷 晶子
			「地方の高等学校における美術教育の実践と課題」	北見北斗	神田 陽子
		家庭	「総合学科における学校設定科目の実践」	留辺蘂	籬 宏行
			「社会の変化に対応した『家庭総合』の指導内容の精選と指導の工夫 ～『人の一生と家族・家庭』の指導計画と指導の工夫～」	函館工業	金澤 久子
		農業	「地域の実態を考慮した『家庭基礎』の指導の工夫 ～高齢者疑似体験を通しての意識づけ～」	長万部	橋本 晃子
			「地域の期待に応えられる農業教育とは～学科改編を目指した取り組み～」	当別	室伏 諭
		工業	「専門技術を生かして取り組む地域活動の実践」	旭川農業	赤穂 悦生
			「江差南高校としての最後の年間の取り組みについて」	江差南	田中 聖志
		商業	「工業教育活性化のためにどのように取り組んだらよいか『合同課題研究発表会』」	名寄光凌	中嶋 孝之
			「『起業家教育実践研究事業』の取り組み」	苫小牧工業	西後 勝美
		水産	「本校におけるインターンシップの取り組みについて ～進路選択に向けて動機づけを意識して～」	函館商業	前田 貴世
			「本校における進路指導について」	苫前商業	藤曲 健司
		情報	「科目『ビジネス情報』の教育内容の充実に向けて」	苫小牧総合経済	濱下 昌也
			「水産工学に関する先端的な研究について」	函館水産	西川 正一
		情報	「潜水実技の指導方法と安全確保について」	小樽水産	菊地 功
			「新聞記事データベースの活用」	札幌旭丘	高瀬 敏樹
		情報	「変わった視点から見たい『情報』とその環境整備」	札幌北陵	今野 篤志
			「ネットワークを有効活用した授業での取り組み」	札幌藻岩	高木 昭信
		情報	「パソコンを組み立てて始めて知るハードウェア(高大連携大学出張授業をとおして)」	札幌藻岩	三関 直樹
			「カリキュラム系統性の検証についての一考察(網羅性の保証と重複性の克服)」	札幌北	奥村 稔
		情報	「電子会議システムを用いたディベート学習」	札幌稲北	加藤 誠
			「情報収集の基礎的能力(記録 記憶 情報化への過程について)」	札幌丘珠	川西 裕二

年度	回	教科(分科会)	テーマ	所属学校名	氏 名	
			「実感を伴う授業を求めて(手作業で知る、データ伝送の基礎)」	倶知安	津端 公彦	
			「情報科での即時実践力の向上を目指して(時事即応型の実践をふりかえって)」	苫小牧東	矢嶋 裕之	
18	44	国語	「ディベート学習を活かした文章作成指導～立場を決めて意見を書く～」	北嶺	石山 昌周	
			「国語力向上を目指す学校としての取り組み～PISA型読解力育成を中心に～」	標茶	内藤智芳・佐藤圭子	
		世界史	「生徒の主体的取り組みを促す授業の創造 ～教育用コンテンツを活用した授業の取り組みについて～」	置戸	松田 卓也	
			「生徒の主体的取り組みを促す授業の創造 ～デジタル教材を使った授業 マルチメディアボードの活用～」	北見北斗	新濱 学	
			日本史	「視覚に訴える教材の開発」	大成	花海 直人
				「考える近現代史の授業をめざして」	様似	図師 広光
			地理	「インターネットを利用した授業実践について～模擬海外授業の実践～」	遠別農業	久恒 亮
				「身近な地域の学習に関する授業事例～摩周湖・屈斜路湖周辺の再認識～」	弟子屈	岡田 則之
			現代社会	「経済分野における評価の改善と今後の展望 ～学力の把握に関する研究指定事業の取り組み～」	滝川	志田 淳哉
		倫理	「宗教性の教育～その教育的アプローチの可能性について」	小清水	白石 芳光	
		政治経済	「ワークシートを活用した評価と授業改善」	上ノ国	庄司 健浩	
			「市場機構の現実～寡占と価格競争～」	雄武	宮崎啓一郎	
		数学	「本校における『数学基礎』の取り組みについて」	沼田	大沢 裕史	
			「鶴川で学ぶ子どもたちの自己表現を支援する」	鶴川	藤原 隆	
			「数列 授業プランを用いた数学帰納法の指導 ハノイの塔、欠損チェス盤から帰納法を実感する」	平取	須田 道春	
		理科	理科総合	「『見えない空気』を『見える現象』から考える」	妹背牛商業	坂本 朋嗣
				「理科総合Aの授業実践」	新得	小林 真里
				「大学との連携による野外実習授業の取り組みについて」	苫小牧総合経済	米根洋一郎
			物理	「光分野 寒天を利用した授業実践例」	岩見沢緑陵	大屋 泰宏
				「視聴覚機器を用いた演示の工夫～『視点』を意識した映像教材～」	清里	藤野 忠
			化学	「理科嫌いを克服する理科教育を目指して～日々の実験から課題研究まで～」	清水	高井 隆行
				「水素結合を実感する実験とそのレポート作成における工夫」	白老東	酒井 誠至
			生物	「高輝度LEDを用いた光発芽種子の実験」	札幌稲雲	北明 基史
				「カラー粘土を使った発生の教材開発」	大麻	菊池 洋好
				「学校ビオトープを利用した環境教育の取り組み ～環境の向上に積極的に取り組める生徒の育成を目指して～」	岩見沢農業	傳法 寿紀
			地学	「地域教材の活用とTTにおける新しい授業方法について」	札幌西	木川田敏晴
				「テニスボール容器を使った堆積学と校内気温調査」	厚真	金川 和人
		保健体育	「地域と協働した教育活動で生徒を育てる～カーリング授業の実践～」	常呂	堀 智博	
		養護	「自ら学び考えることのできる保健・体育授業をめざして」	稚内	尾形 友秀	
			「保健室における高校生の心と体の実態 ～子供たちとの10年間のかかわりの中から見えてきたこと～」	北見緑陵 北見商業	中谷 恭子 笹谷 幸	
		芸術	音楽	「生徒が自ら学ぶ活動の支援への実践」	標茶	西村 真
			美術	「美術教育の実践と課題」	七飯	船田 尚美
			書道	「刻字の試み」	小樽桜陽	小西 広恵
		英語		「リーディング指導における試みー和訳をしない指導をめざして」	南茅部	山内 章裕
				「商業高校での英語への苦手意識の克服を目指したアクション・リサーチ」	福島商業	高西 貴幸
				「生徒による授業評価と連結した英語の授業改善 ～”KAIZEN”を用いた英語授業マネジメント～」	清里	山崎 秀樹
				「高校生・大学生の英語語彙学習ストラテジーと使用語彙の関係に関する研究」	札幌南陵	田中洋也・佐々木陽平
				「中学・高校教科書、センター試験問題、語彙リストの作成と単語集の比較、ならびに授業への応用」	札幌開成	片桐 徳昭
				「Running after the Better Ways:A `Realistic` Approach to Developing Students` Reading Skill`」	釧路江南	一瀬 幸司
		家庭		「Pre/Post Task を活用したリーディング指導ースキーマ・アクティベーションの試み」	紋別北	鈴木 修平
				「生活を創る力を高める『フードデザイン』『発達と保育』の指導と評価 ～創意工夫あるシラバスと実践事例～」	旭川北都商業 ニセコ	松橋 英子 佐々木 香
		農業		「地域の産業人を育成するための農業教育について ～生徒一人一人の勤労観、職業観を育てるための取り組み～」	大野農業	中村 一晴
	「壮瞥高校における勤労観、職業観を育てるための取り組み」		壮瞥	幡野 洋		
工業		「指定研究事業を通した工業教育活性化の取り組み」	札幌工業	西田 猛志		
		「本校におけるログハウス製作と取り組み」	北見工業	佐藤 靖尚		
商業		「課題研究 板金琴から板金ギターへの挑戦」	紋別南	原山 聡		
		「本校商業科の学校設定科目『観光一般』の設置について」	虻田	柏原 真人		
		「国家資格『初級システムアドミニストレータ』の対策について」	虻田	佐藤 祐志		
		「本校における職場体験学習について」	様似	工藤英太郎		
		「本校における進路指導について」	富良野緑峰	河田 章宏		
水産		「学習指導における評価規準の作成とその運用について」	小樽水産	須貝 暢裕		
		「『北のくにづくり』事業～平成18年度 水産食品科の取り組み～」	函館水産	我妻 雅夫		
		「『地域企業への人材安定供給のための専攻科入学基準見直しに関する考察』」	函館水産	島田 直		
情報	【WS1】	「Net Commons を利用した Web 教材の作成」	札幌稲北	加藤 誠		
	【WS2】	「デジタルデータの互換性とその加工方法」	札幌丘珠	川西 裕二		
	【WS3】	「Perl や VBS などを用いた、授業に役立つスクリプト」	札幌平岸	杉本 式史		
	【WS4】	「マインドマップを用いた発想とその整理」	札幌北	奥村 稔		

年度	回	教科(分科会)	テーマ	所属学校名	氏 名
19	45	国語	『授業規律の確立』から『授業の改善』へ	南茅部	江尻 巧
			「視覚効果を活用した古典学習指導の試み」	遠別農業	樋口かおり
		世界史	「海外研修からとらえる授業展開について」	真狩	高 雅彦
			「記憶の歴史学と世界史の授業」	剣淵	本間 靖章
		日本史	「興味・関心を高めるための教材開発についてー 自校史の活用を中心にー」	札幌東	相庭 達也
			「地域巡検を活用した授業の取り組みについて」	上ノ国	紀伊國 薫
		地理	「生徒と歩いた軍都・月寒(歩兵第 25 連隊跡を中心に) ～『身近な地域の調査』に関わる野外巡検の実践例～」	札幌月寒	鈴木 良伸
			「地域の素材を使った授業と評価問題例」	室蘭栄	芳澤 文明
		現代社会	「コーチングを利用した教科指導」	豊富	山崎 辰也
		倫理	「自ら学ぶ意欲を高める倫理の授業展開『教室で生命倫理を考えてみよう ～現代倫理学の授業実践』」	札幌創成	渡辺 祥介
		政治経済	「調査・発表を通じて社会人としての経済的資質を養う」	苫前商業	江尻 憲昭
		数学	「数学のメガネで現実の世界を読み解く～タコ箱漁オーナーと確率～」	札幌新川	清水 貞人
			「学校は勉強するところだ～わかる授業で教育困難校を立て直す～」	美瑛	浪岡 知朗
			「暗算で何曜日からわかる～カレンダーの数学～」	留萌	木村 尚士
			「礼文高校数学科の実践について～小中高連携と授業の工夫・自己評価～」	礼文	小山内義輝
		理科総合	「バプアニューギニアの自然とヒューマンインパクト」	札幌第一	荻原 法子
			「上ノ国高校における4年間の実験実践について ～簡単にできる身近な材料を用いた実験～」	上ノ国	栗山 亮
			「商業高校における理科総合A(物理分野)の指導事例」	小樽商業	武田 伸彦
			「水鳥調査から時空スケールの実感ー 学校設定科目『知床自然概論』授業実践例」	斜里	植木玲一・細井久美子
		物理	「シャボン膜の力学的反応について」	札幌開成	堀 輝一郎
			「ホール・センサーを用いた携帯電話の電磁波測定 ー 生活環境中の電磁波による健康リスクと環境教育ー」	旭川東	萬木 貢
			「コース別授業実践について～北大からトヨタまで～」	北海道栄	山田 高嗣
			「ペットボトルを用いた気体発生装置の開発」	札幌西陵	藤田啓太郎
		化学	「生徒が意欲的に取り組む実験を目指して ～普段の実験から創立 50 周年記念課題研究まで～」	利尻	山崎 努
			「地域素材を生かした環境学習の試み～学校設定科目『環境科学』の実践～」	沼田	山岡 景寛
		生物	「生物『My 図説』の作成」	釧路江南	早津 茂行
			「『生物学的窒素除去』の多角的検証」	白老東	奈良 尚久
		地学	「地球温暖化を論ずる上での大気ー海洋間の重要性」	利尻	高橋 伸元
			「自然科学同好会で取り組んだローム層の調査について」	厚真	金川 和人
		保健体育	「確かな学力の向上を目指してー保健・課題解決学習の取り組み～」	羽幌	岸本 泰輔
			「清里高校における授業評価を通しての健康科学の授業の実践」	清里	上田 智史
		養護	「本校における特別支援教育体制の構築と運用の実践報告」	寿都	乙川 望美
		芸術	「進学校における芸術科の取り組み」	室蘭栄	續木 辰也
			「創意工夫におけるー考察ー成就感のある単元設定とはー」	滝川	武蔵 恒一
			「おもいを筆に～『ヒロシマ』を書く」	旭川西	今野 康典
		英語	「英語リスニング力を高めるための指導法ー 高教研研究紀要論文よりー 先行研究と実践・センター試験対策を含めてー」	札幌旭丘	庄末 剛
			「OCにおいてのリスニング指導について ー英語で英語を学習し、英語脳をつくる助けとなる授業を目指してー」	札幌南	手塚 茂也
			「清田高校 SELHi プロジェクトーSELHiは何を変えたかー」	札幌清田	熊谷 修司
			「よりよい自由英作文指導を目指してー手順とフィードバックを中心にー」	函館中部	岩田 哲
			「英語を使って英語の授業ー思い立ったら今すぐにー」	砂川	城地 英典
		家庭	「B-SLIM 理論とその背景にある概念を応用した英語指導の試み ーペアグループワークによる互いに学び合う学習者中心の英語授業ー」	下川商業	藤井亜希子
			「情報社会の賢い消費者になろうー教科『情報』との相互乗り入れ実践とその後ー」	旭川凌雲	渡部 真紀
		農業	「別海高校におけるホームプロジェクトを中心とした酪農教育の実践について」	別海	漆原 剛
		工業	「社会人入学生受け入れのための取組『公開講座とPower Point 授業の展開』」	小樽工業	平井 柳太
			「釧路川水防公開演習の参加と成長」	釧路工業	佐藤 貴雄
		商業	「高校生ものづくりコンテスト電子回路組立部門」	帯広工業	飯塚 浩二
			「本校における『インターンシップ』および『進路プロジェクト』の取組について」	美唄	深戸 紀明
			「本校における課題研究の取り組みについて」	岩見沢緑陵	坂口 勝幸
			「本校の就職活動の改善に関する研究指定に係る進路指導について ～専門高校における就職支援の成果と課題～」	留萌千望	富永 薫
		水産	「海洋技術科のコース制と進路の現状について」	函館水産	石尾 敏文
			「民間教育を導入した施設の有効利用」	小樽水産	大町 善成
			「過渡期にある樽水についての考察」	小樽水産	我妻 雅教
		情報	「Net Commons による教材作成」	札幌稲北	川村 雅人
			「新聞作成と評価(フリーソフトの活用)」	札幌旭丘	高瀬 敏樹
			「ブレーンストーミングとKJ 法を用いた問題解法」	札幌拓北	梅田 充
			「Web Diary Pro のインストールと実習」	札幌白陵	高木裕・鈴木崇令・竹中直人
			「OS のセキュリティポリシーを用いたセキュアな情報教室作りとモラル教育」	札幌大谷	今井 豊章
			「新聞作成と評価(フリーソフトの活用)」	帯広柏葉	岩田 勝美
			「携帯電話との付き合い方」	音更	小湊 秀子
20	46	国語	「伝え合う力の育成を目指した取り組みについて」	小清水	川口 修平

年度	回	教科(分科会)	テーマ	所属学校名	氏 名			
21	47		「どうすれば国語ができるようになるのですかへ」の答えを考える。 ～『読みの力』指導のための覚え書き～	室蘭栄	加藤 孝志			
		地歴公民	世界史	「ジョチ・ウルス(キプチャク・ハン国)および継承政権の歴史再構築に向けて」 「進学校での世界史の授業とその反省」	北嶺 旭川東	長峰 博之 佐野 祐子		
			日本史	「地域の歴史教材を活用した授業の一例」	標津	干場 大輔		
			地理	「中学校社会科からの高校地理へのつながりー中高一貫校の事例ー」 「気候学習の工夫～Excelを使用した雨温図とハイサーグラフの作成～」	立命館慶祥 檜山北	中村 素木 村中 譜佐朗		
			現代社会	「『水』に着目した環境教育の実践例」	弟子屈	岡田 則之		
			倫理	「地域とともに学ぶ環境学習」	上川	川崎 尚子		
			政治経済	「間違いだらけの経済教育～ミクロ・マクロ経済学で本当の理解を～」	千歳	菅原 晃		
			数学	「デジタルペンを使った学習指導～主体的な学力向上を目指して～」 「数学を楽しむ～『数学課題探求』の実践から～」 「『帯広三条高校数学科』の実践について～単位制システムを生かす指導の工夫～」	札幌稲雲 松前 帯広三条	山本 大輔 吉田 正和 矢ノ目慎也		
		理科	理科総合	「宿泊研修における旭山動物園を利用した環境教育」 「科学者ゆかりの地を訪ねてーイタリア編」 「郡部小規模校における授業実践～初任から5年間を振り返って～」	石狩南 札幌清田 室蘭工業	浦巧・渡部恵太 鶴岡 森昭 佐藤 満		
				物理	「ハイスピードカメラを使った実験の工夫【協同研究】」 「物理の教授学習法の一考～認知論からのアプローチ～」 「手作り教材」 「『卵落とし』やってみました」	木古内 枝幸 倶知安 小樽工業 富良野	稲子 寛行 杉本 修 保格 秀規 菅原 陽 美土路 建	
					化学	「定性的化学実験で校正する授業展開 ～本校学校設定科目『生活の化学』の授業実践～」 「繊維と染色の化学」 「科学的な見方や考え方を育成する定時制での取り組み」 「有機化学を身近なものにとらえるために～プラスチックの性質を調べてみよう～」	札幌真栄 岩内 釧路湖陵 登別青嶺	中俣 明泰 本間 順 富田 一茂 高野 聖三
			生物			「目で見ると！ 人体の構造学習の工夫～人体の不思議を理解しよう～」 「中学校理科から高校生物への接続について」 「理解を促すための小さな工夫～遺伝、他～」	三笠 釧路湖陵 苫小牧南	越後 暁子 金本 吉泰 塚西 圭
						地学	「断層運動の指導方法について」 「地球内部の構造や性質を考える実験」 「授業における太陽観察の実践について」	札幌稲雲 苫前商業 網走南ヶ丘
			保健体育	「学ぶ意欲を高める学習指導と学習状況を的確に捉える評価のあり方について」 「地域と関わる生涯スポーツ授業について～霧多布高校の授業実践から～」	恵庭南 霧多布		伊藤新太郎 吉田 武史	
			芸術	養護	「生きる力をはぐくむ健康教育で、人任せ健康観からの脱却」	別海	林 よし子	
				音楽	「多角的な芸術活動の取組ー授業、総合、特活、地域連携を含めてー」	浦河	増田 功	
				美術	「学ぶ意欲を高め、豊かな心を育成する指導の工夫改善」	おといねっぶ美術工芸	前田 健浩	
				書道	「定時制高校における書道教育の一実践～札幌星園高等学校での実践紹介～」	札幌大通	宮崎 洋司	
			英語	「受験に対応する『道具としての英語』の授業 ー準備ー授業(訓練)ー考査作成まで、および、効果的な講習資料の作り方ー」 「SELHi中間報告ー『探る力』と『使う力』ー」 「英語嫌いを英語好きにする方法～生徒が思わず手を挙げてしまうテクニック～」 「滝川西高校のSELHiの取り組み ーinput-intake-output の流れを核とした生徒中心型の授業展開を目指してー」 「45分の授業で音読を10回以上目指し、筆写までつなげるインプットトレーニング」 「ALTを教室にーいつでも、どの教科でもALTと一緒に授業をする方法ー」	札幌南 札幌聖心 上ノ国 滝川西 帯広三条 静内	中條 伸義 古矢治子・市川暁子 高堰 みちほ 近本学・中川修司 新明 匠 泉田 悦宏		
				家庭	「自立した生活者を育てる家庭科教育 ～普通高校における家庭科選択科目の取り組みについて～」	帯広三条	千葉 和代	
				農業	【パネルディスカッション】 「北海道農業の継続的発展を進めることが出来る人材を育成するため、どのような農業教育を推進するべきか～他県の農業教育および農業大学校などの教育内容を参考にした、指導の重点および指導内容の改善～」 「高大連携の取り組み～遠隔授業・訪問授業～」	岩見沢農業 帯広農業 札幌琴似工業	山川 直樹 重堂 法人 平間 信一	
					工業	「これからの工業高校(工業学科)の進路指導と工業高校(工業学科)の在り方」 「輝く生徒 輝く定時制～定時制教育における取り組み～」	札幌国際情報 函館工業	長谷 哲生 盛田 典男
				商業	「販売実習における成果と課題 ～地域産業に根ざした実践と商品開発にむけたプロジェクト～」 「地域企業と連携した『起業プロジェクト』 ～閉校をむかえ、町特産品のPRと付加価値をつけた商品の開発～」 「本校におけるキャリア教育の実践について ～3年間の進路研修とインターンシップの取組～」	八雲 妹背牛商業 中川商業	柿崎 哲平 和田和儀・朝日佑佳 松山淳一郎	
		水産			「品質管理流通科の実験・実習の取り組みと水産教育のこれからの在り方についての一考察」 「これからの水産・海洋教育はいかにあればよいか」 「新設校への移行に伴い、時代の変化に対応した水産・海洋教育はどのようにあればよいか」	函館水産 小樽水産 厚岸水産	長谷 昇 山本 十三 佐々木正吾	
			情報		【WS】 「実態としてわかる情報の次世代教材(レゴマインドストーム)」 「フリーソフトでマインドマップ！(情報化社会に生きる態度を考える)」	札幌東豊 札幌北	室木 茂良 奥村 稔	
				国語	「論文指導の授業実践」 「平成19・20年度国立教育政策研究所 研究指定事業実践報告 ～国語力-PISA 型読書力-を身に付けさせるための工夫に関する研究～」	札幌北陵 長万部	浅川 敬 鎌田 俊彦	

年度	回	教科(分科会)	テーマ	所属学校名	氏 名
			「課題解決学習による生徒の主体的な学習態度の形成 ～『読む』能力の育成を目指した読文指導～」	虻田	濱野 葉月
		地歴公民	世界史 「授業時間の有効活用について」	旭川北	石川 竹博
			日本史 「地域に密着した日本史授業の取り組み ～間宮林蔵、デレン到達 200 周年に関連づけて～」	稚内	古川 博之
			地理 「地理はビジュアル！～Google earth を授業でどう生かすか？～」	札幌新川	佐久間直樹
			『確かな学力』を育成するために～つなげる力とくらべる力～」	富良野緑峰	小林 洋介
			現代社会 「高等学校において現代社会を教える使命とは」	剣淵	吉田 拓
		倫理	『自分』について考える～青年期における実践研究～	上磯	倉部英利子
			政治経済 「負の連鎖から抜け出すための『政治経済』とは～女子生徒の自立を促す授業～」	余市	大地 豪
		数学	「個に応じた指導の充実を目指して」	岩内	土井みのり
			「単位制導入に伴う数学教育の現状」	網走南ヶ丘	稲場 琴美
			「数学Ⅰ・Aにおける『課題学習』について 新しい高等学校学習指導要領の実施に向けて～」	釧路江南	須田 和幸
			「別海高校数学科の実践について～学力の向上を目指して～」	別海	佐藤 一昭
		理科総合	「ヤリキレナイ川と環境浄化液～課題研究と校内発表会～」	由仁商業	安達 妙己
			「特別支援教育の理科における事例研究」	月形 旭川東	石塚 忍 富田 一茂
		物理	「情報機器を利用した授業実践について ～ペンタブレットと白板ソフトの活用の可能性について～」	札幌南	溝上 忠彦
			「物理の教授学習法の一考 2～認知論からのアプローチ～」	倶知安	保格 秀規
			「科学実験教室・科学の祭典の中で培った物理実験とものづくり」	小樽工業	菅原 陽
			「地域の特性を活かした物理の展開はどこまで可能か」	旭川東定時	平松 和彦
		化学	「有機化合物分野の授業プラン」	砂川	高橋 理恵
			「マイクロスケールを利用した金属イオンの反応実験」	登別明日	坂本 朋嗣
		生物	「セミの脱皮殻標本の作製を通じて身近な環境を知る」	岩見沢東定時	土岐 剛史
			「地域連携を活用した野外学習と生徒の環境意識の変容」	北見北斗	布施 達治
			「動物の発生および内部形態の観察実験」	中標津農業	山口 由人
			「学校設定科目「気象」・「郷土の自然」における授業実践～環境教育の視点から」	檜山北	倉本 能行
		保健体育	「北広島高校体育科の特色ある取り組み～体力向上を目指して～」	北広島	高井 学司
			「学習指導と評価の改善・充実」	千歳北陽	清水 大策
		養護	「グループ研修を通して築いたネットワーク ～空知高等学校養護教諭研究会(南空知地区)の歩み～」	岩見沢東全日 岩見沢東定時	橋本 宏美 木田美佐子
		芸術	音楽 「フィンランド民俗楽器カンテレ教育実践報告」	札幌創成	板倉 雄司
			美術 「総合学科における美術教育の実践と課題」	檜山北	佐々木 龍
			書道 「札幌東陵高校での授業実践と反省 ～自作短歌を作品に～」	札幌東陵	小笠原 輝
		英語	「3Dimension Way～バランスの良い言語活動を目指した授業～」	札幌真栄	本杉 聡
			「達成感を与える授業の工夫 ～「飽きない」タスクで集中力を途切れさせないための試行錯誤～」	有朋	中川 弘子
			「集団の英語力にかかわらず指導者がすべきこと ～池田高校と中部高校での 12 年間でみてきたこと～」	函館中部	荻津 賢
			「悩める英語教師(2)～上川高校での実践～」	上川	都筑 宏海
			「小規模校での誰しものが参加できる雰囲気の良い授業づくりを目指して ～音読からスピーキング、リスニングへ」	津別	炭屋 正人
			「生徒のハートに火をつける授業づくり～あの子を振り向かせるささやかな実践集～」	釧路北陽	野田 貴洋
		家庭	「専門教育に関する調査研究委員会報告」	岩見沢西	高橋 誠
			「家庭科の力をのばす食育の実践～地域に根ざした課題解決学習の取り組み～」	富良野緑峰	森本 鈴奈
		農業	【研究協議】他県の農業教育および農業大学校などの教育内容を参考にした、 指導の重点および指導内容の改善」	真狩 岩見沢農業	田村 弘樹 大坂 道明
		工業	「新しい時代を切り拓く工業教育の創造と実践 ～地域社会と連携した実践的なものづくり教育～」	美唄工業	小野 博道
			「新しい時代を切り拓く工業教育の創造と実践 ～基礎・基本の定着に向けた取り組みについて～」	富良野緑峰	佐藤 淳爾
			「新しい時代を切り拓く工業教育の創造と実践 ～北の匠プロジェクトの取り組み～」	室蘭工業	板坂 浩毅
		商業	「キャリア教育について～本校の進路指導の現状」	深川東	山内 康司
			「本校における商業教育の取り組みについて～新しい釧商を目指して～」	釧路商業	多賀友秋・辰山功一
			「課題研究による地域に信頼される学校づくりを目指して ～教員外の評価を取り入れた生きる力の育成～」	富川	櫻井 智
		水産	「本校水産食品科における課題研究での取り組みについて」	函館水産	宮崎 和貴
			「総合実習の発展的展望と課題」	函館水産	和野 博樹
			「本校の漁業後継者について」	小樽水産	柴田耕一郎
		情報	【WS】 「体験的に学習する！授業で使えるネットワークセキュリティ」	札幌篠路	鶴間 伸一
			【WS】 「レッツ コミュニケーション！ 授業で使おうネットワークツール」	札幌平岸 札幌東陵	杉本 式史 高田 和典
			【WS】 「モバイル機器の教育活用(全国キャラバン講習会)【協同】」	札幌北陵 帯広八千代中	大平 育代 能戸 貴英
22	48	地	世界史 「『聞く力』を高めるための実践～国語科におけるリスニング指導～」	檜山北	本間真理・柴田朝幸
			「古典教材を主体的に読むための授業づくり～言語活動をきっかけとして～」	上士幌	上村 剛
			「『朝鮮を愛した美術家たち』展の構想について」	道立旭川美術館	井内佳津恵

年度	回	教科(分科会)	テーマ	所属学校名	氏 名
		歴 公 民	「多角的な視野と多様な価値観を体感し知的好奇心を高める授業をめざして ～利尻高等学校世界史の実践より～」	利尻	鈴木香代子
			日本史 「パワーポイントを使った授業展開の仕方について」	鶴川	稲川 幹雄
		地理	「地理的基礎教養を身につけるための授業展開について ～クイズ番組的手法を取り入れた授業～」	札幌拓北	久米 隆
			「生徒の主体性を引き出す授業の創造と評価の改善 ～シミュレーション教材の活用を通して生徒の主体性を引き出す授業の構築～」	函館工業	森 智希
		倫理	「情報倫理の実践授業～個人として・社会人として～」	室蘭工業	黒津 豊輝
			政治経済 「『課題探究型学習』の実践」	芦別	岩渕 啓介
		政治経済	「『法』に関する教育実践」	中標津	井上結香子
			「金融経済からアプローチする高校数学」	札幌西	正田 隆之
		数学	「言語活動に着目した数学の授業の実践」	砂川	三浦 信一
			「誰でもできる数学を目指して～徳別高校の取り組み～」	穂別	伊藤 雄大
			「学力の把握に関する研究指定の報告」	浦河	石橋 哲哉
			理科総合 「地域とともに学ぶ環境学習」	蘭越	田端 修
		物理	「ヒグマを教材とする意義～環境倫理面からの検討～」	斜里	植木 玲一
			「回路の授業の導入に使う簡単な回路の紹介」	留萌	神山 義茂
		化学	「水槽を使った夕焼け、青空、昼気楼の再現」	伊達緑丘	林 昭宏
			「中学校での実験経験を活かした高校化学の展開」	稚内	青山 佳弘
		生物	「βゼオライトを用いたエチレンの生成実験～実験方法に関する研究と授業実践～」	苫小牧西	伊藤 崇由
			「私の研究活動～コガネムシに魅せられて～」	函館西	多田 茂男
		地学	「色から考える光合成」	別海	松原 直紀
			「偏光顕微鏡観察の再検討～授業でもう一度試みるには～」	札幌稲西	宮古 昌
			「本校理数科課題研究で取り組んだ地学系テーマの紹介」	札幌啓成	三浦 治彦
			「地学における空間の理解とペーパークラフトの活用」	旭川東定時制	平松 和彦
		保健体育	「生徒が主体的に取り組む体育授業(授業ノートの工夫)」	利尻	新居 潤哉
			「生徒の意欲を引き出す保健授業の実践 ～プレゼンテーションソフトの視聴覚効果を活用した授業とその課題～」	標津	小川 将
		養護	「アンケート調査による高校生の受傷発生に関する一考察 ～ライフスタイルとセルフエスティーム等の側面から～」	札幌稲雲	佐藤 朱美
			「特別支援教育の現状と課題解決への提案 ～高等学校における特別支援教育の取組～」	札幌東陵	菅原 綾子
		芸 術	芸術 「フランス教育の紹介」	松前	石塚 耕一
			音楽 「学校設定科目『演奏に親しむ』の授業実践報告～あらゆる音楽活動を通して～」	長万部	土井 泰志
			美術 「札幌北陵高校における美術教育の実践と課題」	札幌北陵	菊地 大
			書道 「本校単位制における書道科の役割について」	砂川	星野 壮志
		英語	「英語教育における授業力とは？」	千歳北陽	長野 健二
			「英語を使える授業をめざして～BSLIM を学んでの試行錯誤～」	札幌東	清水まゆみ
			「Post SELHi における滝西の英語教育について」	滝川西	中川 修司
			「音読・Back Translation を軸とした Step System の実践紹介 ～4 技能の同時トレーニングで定着アップをねらう～」	釧路江南	加藤 渉
			「生徒の英語使用を増やす授業の試みと検証について」	様似	藤田 尚樹
			「授業を all English にするために、私たちに今できること ～郡部校からでもできる授業変革～」	静内	大塚 徹
		家庭	「感じる力を育てる指導方法の工夫 ～教科通信から始まる授業、全員が何かを感じられることを目指して～」	共和	吉村佳名子
		農 業	研究 協議 「食彩フェアの取組を通して、どのような資質・能力の向上が図られたか。また、 新たな課題の解決方法は何か。」	大野 岩見沢農業 岩見沢農業 旭川農業 美幌農業 標茶 帯広農業	山本 雅史 伊與部 明 近江 勉 菊地 誠 漆原 剛 林 雅也 飛谷 淳一
		工業	「本校土木科での教育の実践」	滝川工業	三浦 嘉之
			「旭工式資格指導法 ～合格率を上げるための工夫～」	旭川工業	下村 幸広
			「生徒の特性等に対応した、教育内容・指導方法の工夫・改善について ～社会で生きる実践的な力の育成～」	留萌千望	千葉 智寛
		商業	「地域社会と連携した『モノづくり』の授業 ～『課題研究』での実践～」	千歳	落合雄一郎
			「地域活性化プロジェクト～町おこしに貢献するビジネス教育～」	由仁商業	神戸 裕普
		水産	「本校の水産食品科における実験・実習の取り組みについて」	小樽水産	小林 実顕
			「生徒の特性等に応じ、教育内容・方法をどのように取り組んだらよいか」	小樽水産	伊藤 健太
			「Power Up プロジェクトの取り組みにおける一考察(高大連携による海鳥調査)」	函館水産	菅沼 俊介
		情 報	【WS】 「Back Track4 を利用したネットワーク解析入門」	札幌篠路	鶴間 伸一
			【WS】 「Let's communication! ポスターセッションで意見交換しよう」	札幌平岸	杉本 式史
			【WS】 「HTML5+CSS を用いた Web ページの制作」	興部	鈴木 健之
	23 49	国語	「現代文・古典における言語活動の充実を図る取り組み」	岩内	真鍋かおり
			「言語活動を通して育む『伝え合う力』～自己肯定感と他者理解を育む言語活動～」	芽室	石森由香利
		地 歴 公	世界史 「19世紀ロシア社会と絵図～移動派絵画教材化の試み～」	札幌月寒	出口 敬智
			「本校生徒にあわせた授業実践とその工夫・改善」	厚岸翔洋	澤向 亮賢
		日本史	「本校の単位制における日本史の位置づけと授業実践」	砂川	山中 勇人

年度	回	教科(分科会)	テーマ	所属学校名	氏 名
		民	「生徒に『アイデンティティを探るきっかけ』を与える日本史授業を考える」	浜頓別	飯田恵利子
			「地形図を利用した土地利用図の作成～地図作成を通した主体的な学習の実践～」	おいねつ芸術工芸	岩本 清海
			「生徒の主体的な学習活動を目指した授業 ～積極的な地図活用と地域調査を取り入れた授業実践～」	大樹	岩松 親正
			「カントの永遠平和論と国際連合の果たすべき役割について～戦争と平和に関する議論を現代社会の授業でどのように教えることが出来るか～」	中標津農業	中野 俊光
			「悩める倫理教師～人間としての在り方生き方への演習的アプローチ～」	中川商業	前田 寛
		政治経済	「政治経済における生徒参加型授業の実践について ～ワークショップの手法を取り入れて～」	浜頓別	小西 真一
			「基礎・基本の定着を図るための習熟度クラスの指導実践」	札幌厚別	矢田 龍介
		数学	「語り合う数学を目指して～上川高校数学科の取り組み例～」	上川	岡崎 知之
			「幅広い学力差の生徒への対応を目指して(発展途上)～留萌高校の実践紹介～」	留萌	菊田 茜
			「どう基礎学力を育成するか～豊富高校における実践紹介～」	豊富	袴田 純
			「放射線の指導実践」	札幌清田	鶴岡 森昭
		理科総合	「放射線を使った授業の導入・展開のモデル提案 ～放射線をもっと身近な存在として認識するために必要なことは何か～」	砂川	畑恵成・高橋賢司
			「誘導型静電気発生装置について」	岩見沢緑陵	大屋 泰宏
			「実験における誤差のまとめと重力加速度測定実験への適用例」	更別農業	中川 智
			「生徒の課題解決力、発想力を育む高校化学の授業研究」	市立函館	五十嵐直樹
			「実験レポート作成に関する実践」	北見北斗	吉谷川史恵
			「顕微鏡を用いた教材研究および実践を報告」	石狩南	大澤 達郎
			「生き物の進化ゲームの教材化」	札幌第一	高橋 芳枝
			「入試でも結果を出せた観察・実験も行う生物の授業実践」	網走南ヶ丘	菊池 貴広
			「風景を読む力を育てる地学教育の試み②」	札幌あすかぜ	松田 義章
			「風景を読む力を育てる地学教育の試み①」	苫前商業	佐藤 誠
		保健体育	「未来につなげる保険授業の実践～主体的により良い人生を生きるために～」	寿都	八太 敦志
			「観点別評価を取り入れた授業実践例について」	登別明日	高石 健一
		養護	「管内各校の外部機関との連携について」	留萌 苫前商業	柴田美有紀 伊東久見子
			「外部講師との連携による和楽器の取り組み」	倶知安	稲垣 佳恵
		芸術	「北海道池田高等学校での授業実践」	池田	園田 陽子
			「小樽潮陵高校 書道Ⅰの実践と課題」	小樽潮陵	西原 樹理
		英語	「『英語力』って何？～進路多様校の生徒にとって必要な力とは？～」	札幌厚別	畑野 好美
			「基礎力・実践力を養うタスク消化型授業と居残り反省チャレンジ学習」	札幌北陵	佐藤 敦
			「生徒の活動を中心とした英語の授業実践」	長万部	土田 麻帆
			「英語授業の再構築を目指して～『わからない』を乗り越えるための取り組み～」	旭川商業	盛本 尚美
			「評価が変われば授業が変わる!? ～文部科学省『学習評価に関する研究指定校』を受けて～」	紋別	加藤 洋平
			「英語を自動化する授業づくり」	足寄	徳橋 孝之
		家庭	「大規模進進学校における家庭基礎の実践 ～専任1人でできる保健体育・調理実習の取り組み～」	札幌手稲	東 昌江
			「美唄尚栄高等学校総合学科における農業教育の展望について」	美唄尚栄	渡部 哲哉
		農業	「学科の特色を生かした新教育課程の編成と取り組み」	旭川農業	菊地 誠
			「本校における三修制の現状について」	札幌工業	有泉 睦夫
		工業	「学科集合型高校の地域に貢献できるものづくり教育」	名寄産業	和田 博之
			「担い手育成事業を終えて」	苫小牧工業	木村 浩二
		商業	「ビジネス社会で生きる人づくりを目指した本校の教育活動」	瀬棚商業	川村周・稲見好恵
			「高度な資格取得を目指した取り組み－ITパスポート－」	北見商業	高原 修
		水産	「品質管理流通科における微生物実習の現状と課題」	函館水産	中野 紀彦
			「『生徒とネットと携帯電話』～担任と教科担任としての一考察～」	小樽水産	藤本 崇人
			「地域の期待に応える水産教育はいかにあるべきか」	厚岸翔洋	鈴木 一幸
		情報	【WS1】「Ubuntu を利用したセキュリティ入門」	札幌篠路	鶴間 伸一
			【WS2】「ネットを活用した情報モラルの授業づくり」	札幌拓北	梅田 充
			【WS3】「ポスターセッションで授業実践を報告し合おう」	札幌平岸 帯広緑陽	杉本 式史 前田健太郎
24	50	国語	多様な生徒が楽しみを見いだし、主体的に学ぼうとする授業への挑戦 ～日常的な授業実践の充実を目指して～	士別翔雲	藤本 純一
			古典の授業改善(チョークとトークからの脱却)	遠軽	齋藤 利一
		世界史	世界史に関する地理的条件の関連づけと、 それに関する知識の定着を図る指導方法の工夫・改善	津別	三浦 徹
			双方向の授業(世界史A)を目指して	札幌大通	榊原 康文
		日本史	「おぼえる」と「わかる」の間～「歴史の考察」を手がかりに摸索してみる～ 思考・判断力を身につける授業実践～基礎基本から発展へと導く指導～	札幌大通	蒲生 崇之
			高等学校における北方領土学習の考察 ～確かな学力を育む高校教育推進事業から考えた取り組みの一例～	江差	岩間 洋之
		地理	「地理に興味関心をもち、生徒の学習意欲向上を目指した授業 ～資料調査とグループ学習を通して、地理的認識を養う学習の実践～」	枝幸	楠本 学
			「教室で学ぶワークルール」	岩見沢東	藤澤 善美
		現代社会	「NPO 法人 職場の 権利教育ネットワーク 代表理事」		道幸 哲也

年 度	回	教科(分科会)	テーマ	所属学校名	氏 名
		倫理	伝えたいこと ～結びつきやつながりへの気づきを目指した授業づくり～	足寄	小林 央
			プレゼンテーションソフトを活用した思考力の育成	森	飯岡 寛治
		政治経済	租税に関する教育実践	清里	大崎 敦子
			図形・空間認識に関する一考察と実践にあたって	八雲	吉田 奏介
		数学	漸化式の指導をめぐる～発問と言語活動	江差	梶谷 拓人
			暗号理論から学べること	上士幌	泉 円人
			道立高校間連携事業実施指定の報告 副題: ～枝幸高校と浜頓別高校での相互派遣授業～	枝幸	土田 泰裕
			学校設定科目「理科の実験」を通じた科学的素養の涵養に関する実践	枝幸	佐藤 革馬
			デジタル地球儀ダジックアースを用いた授業実践	札幌厚別	河端 将史
		理科総合	定時制における地震教育を通じた科学的思考力育みの取り組み	稚内	田島 芳
			光の反射について	池田	川口 陽
		物理	マグカップの音程変化 ～先行研究, 物理部による追試実験の取り組みの紹介～	旭川西	藤野 忠
			電磁気分野の本質を理解するために必要な実験ミニマム 第2報	札幌南	溝上 忠彦
		化学	南極地域を教材化するために	登別明日	酒井 誠至
			学校に「やって来る」生物から見えるもの	留萌千望	朝田 累
			ジクソー法の実践	紋別	春木 崇志
		生物	これまで教えてきた地学、これから教えたい地学	旭川工業	宮崎 一範
			本校 SSH 課題研究で取り組んだ地学系テーマの紹介	室蘭栄	石田 暁
		地学	WYPH(ウイッシュ)式指導の取り組みについて	小樽水産	今村 和彦
			共に学び共に生きる力をつける体育授業	上士幌	古川 泰弘
		保健体育	シンポジウム 社会の変化の中で養護をつかさどること ～学校保健活動推進の中核的役割とは～	岡山大学大学院教育 学研究科発達支 援学系(養護教育講 座)教授	高橋 香代
				北海道教育庁	渡邊 祐美子
				札幌北	黒田 信彦
				札幌東	大村 道子
		芸術	「ソルフェージュ指導の授業実践」 ～生涯に渡る自主的な音楽活動の礎として～	夕張	土井 泰志
			「釧路東高等学校での実践授業」	釧路東	竹本 万亀
			「便利なものは感動の始まり」	札幌手稲	宮田 敦夫
		書道	「‘書’を生かす～私流様々なアプローチ」	札幌南陵	島田美紀子
		英語	故郷を世界に「地球の歩き方in松前」 好きも嫌いも・得意も苦手も関係ない! 地球密着型授業の実践について	松前	興水 飛鳥
			半年間の留学から学んだこと ～第1回日本人英語教員米国派遣事業に参加して～	南幌	佐藤 寿成
			「心にタネをまく英語授業」～生徒と共に楽しく学べる授業を目指して～	阿寒	澤田 大輝
		家庭	職業学科・総合学科における授業の実践について	美唄尚栄	坂口真奈美
		農業	専門高校 PowerUp プロジェクトの実践内容等の成果を共有し指導の改善を図る 物づくり・商品開発分野	更別農業	大和田 恭平
			専門高校 PowerUp プロジェクトの実践内容等の成果を共有し指導の改善を図る 先端技術分野	大野農業	服部 良太
			専門高校 PowerUp プロジェクトの実践内容等の成果を共有し指導の改善を図る 環境保全分野	美幌	興水 隆宏
		工業	北工におけるキャリア教育と知的財産教育の融合と体系化	北見工業	菊地 智
			三大学科(普・工・商)の特色を活かした工業教育の実践	紋別	木村 一貴
			専門知識を生かし、企業と提携した地域貢献事業 「樽工建プロジェクト」の取り組み	小樽工業	高橋 孝児
		商業	魅力ある緑峰をめざして	富良野緑峰	迫中 学・竹内 栄二
			進路相談員とともに構築する進路指導	小樽商業	長澤 裕泰・北出 英俊
		水産	PDCA サイクルを運用した効果的なカリキュラム・マネジメントに関する実践研究 について	函館水産	大山 知幸
			長期乗船実習における国際理解教育の取組み 缶詰製造から何を学ばせるか?	小樽水産	木村 剛
		情報		函館水産	星澤 克幸
			ワークショップ形式の研修		

研究紀要一覽

年度	回	分野	テーマ	学校名	氏名
14	40	巻頭言		会長	島 隆
		地歴公民	地域紛争の概略・分析及び紛争の構造的変化～『現代国際社会理解』授業実践例～	立命館慶祥	齋藤 忠和
		数学	生活に関係した数学講座	清水	正田 隆之
		理科	Eスクエアプロジェクトと放射線環境教育～IOST 第10回国際会議参加報告～	札幌開成	山田 大隆
		保健体育	『総合的な学習の時間』と教科『保健体育』の関わり～『フィットネス』講座の授業評価	阿寒	竹田 安宏
		家庭	生活の質の向上を目指して～生徒の疑問に応える授業作り～ Ⅰ 食生活分野(鶏の解体実習)	富良野緑峰	齋藤 めぐみ
			生活の質の向上を目指して～生徒の疑問に応える授業作り～ Ⅱ 衣生活分野(糸づくり実験)	上富良野	山本 夏奈子
		農業	心のオアシスとなる農場をめざして～併置校における農業科の取り組み～	帯広農業定時制	細川徹・中澤誠 史・守屋華奈子
		工業	インターンシップの取り組みについて	稚内商工	公平 和彦
		商業	商業教育としての商業計算の必要性 ～『情報処理』等における商業計算の指導の在り方～	由仁商業	重山 輝仁
		芸術	音楽の営みを探る～日本の伝統音楽から学ぶもの、西洋音楽から学ぶもの～	古平	熊谷 百合子
15	41	英語	Learner Autonomy を目指した Reading の指導について	札幌厚別	稲毛 知子
		巻頭言		会長	青塚 健一
		地歴公民	『守城録』訳注稿(一)～巻三～	立命館慶祥	齋藤 忠和
			ハイデッカー試論～『存在と時間』と脳科学～	札幌稲北	岩田 昭夫
		数学	ベクトルと相対性理論	八雲	岩澤 利守
		理科	最近の理科教育思潮の動向 ～IOSTE 国際会議、アドバンシング物理、現行要領にみる構成主義の分析から～	札幌開成	山田 大隆
		英語	SELHi指定に向けた英語科の歩み	札幌南	石井 信幸
		英語	不定詞と動名/分詞/that 節との関係	函館中部	厚谷 智
		家庭	保育分野の授業実践報告～保育体験学習を中心に～	稚内商工	榊原 しほじ
			インターンシップの実践を通して～自立した生活者を育てる～	紋別南	狩野千賀子
		工業	工業高校の教育力を生かした 地域に信頼される学校づくりの実践	美唄工業	原野 勉
16	42	商業	インターネットを利用した商品販売～科目『課題研究』での取り組み～	小樽商業	岡田 賢一
		水産	マシニングセンタに関する指導方法の研究	厚岸水産	松川 道義
		巻頭言		会長	青塚 健一
		地歴公民	『守城録』訳注稿(三)～巻四～	立命館慶祥	齋藤 忠和
		数学	中高連携による『BS数学』の取り組みについて ～数学に対する興味・関心を高め、基礎的な知識の定着を図るための中高連携による授業実践～	札幌国際情報	奥田 智紀
		英語	移動表現と認知様式:認知意味論からのアプローチ	風連	沖本 正憲
		家庭	家庭総合の授業実践を通して	標津	石垣 志保子
			授業実践報告～和服(浴衣)着実習を中心に～	帯広三条	千葉 和代
		農業	『北海道プロフェッショナルハイスクール奨励校』の取り組みについて 環境保全型農業経営および産業人育成プロジェクト	帯広農業	大関 俊郎
		工業	『産業財産権標準テキスト』実験協力校、『指導カリキュラムと指導マニュアル』実践研究校について	苫小牧工業	新山 雄士
		商業	『職業専門教育における日韓の取組 ～高度情報化社会に対応した21世紀における職業専門教育のあり方～	札幌啓北商業	稲津 正巳
17	43	情報	状況論的学習観による教育用コンテンツの効果的な利用法 ～再構成型コンセプトマップ作成ソフトウェア『あんどろ君』を用いた授業～	札幌稲北	加藤 誠
		巻頭言		会長	青塚 健一
		地歴公民	地歴科教育における今日的課題とその指導法について ～旅行記を扱った地理の授業づくり～	札幌真栄	永幡 豊
			自ら考え、解決する力を育む数学教育～数学と実生活～	帯広柏葉	篠田 昌宏
		数学	数式処理ソフト Mathematica を活用した教材作成事例 ～コンピューター・グラフィックスを用いて大学入試問題を視覚化して解説する～	岩見沢東	松本 陸郎
		理科	本校におけるグローブ研究の構想と展開 ～コズモサイエンス科環境科学とグローブ研究～	札幌開成	山田 大隆
		保健体育	水泳学習に関する調査研究 ～寒冷地の高等学校における効果的な水泳学習の在り方～	恵庭南	重成 敏史
17	43	英語	Exploration of factors which constrain the acquisition effect of output during interactive tasks	函館東	佐藤臨太郎

年度	回	分野	テーマ	学校名	氏 名
			家庭	都市部における地域の教育力を生かした家庭総合の取り組み	室蘭商業 林 雅代
				専門科目『フードデザイン』の授業実践～豆類を取り入れた調理実習～	平取 坂本さおり
			農業	高等学校における観光教育の実践	ニセコ 橋口 友和
			工業	地域に貢献するテクノボランティア活動	滝川工業 梶 邦明
			商業	教育の情報化と教材開発～『北海道ITハイスクール』の取り組みから～	北見商業 敦賀 和芳
			水産	『魚醤油』教材化の試み	函館水産 我妻 雅夫
18	44	教科部会	巻頭言		会長 金間 正克
			教職一般	『アイヌ民族の歴史』に関する実践報告～高校教育におけるその意義と課題の考察～	弟子屈 阿部 保志
			地歴公民	兵制研究から見た宋代史～教科書の記述に対して～	立命館慶祥 齋藤 忠和
			数学	数学教育における科目『数学基礎』の在り方	江差 上野 昌生
			理科	北海道東部・春国岱における森林植生と水・土壌環境の特性の解析	根室 西島 博樹
			英語	英語 I の指導と評価～訳読からの脱却を目指して	旭川北 松井 徹朗
			家庭	『家庭看護・福祉』の授業失線～ともに生きる社会を目指して～	札幌真栄 佐紺 摂子
			農業	地域に根ざしたキャリア教育～地域と連携した勤労観、職業観を育てる教育～	真狩 中西 聖
			商業	地域と連携したビジネス教育の推進～地域から学ぶ体験学習の方策について～	福島商業 浜本 秀樹
19	45	教科部会	巻頭言		会長 金間 正克
			理科	尻別川を起点とした環境学習	蘭越 田端 修
			芸術	貝製、木製及び樹皮製の法螺貝の楽器学的考察 ー日本各地の呼称からみた音具の歴史ー	札幌拓北 枡谷 隆男
			英語	THE EFFECTIVENESS OF DICTATION ON LISTENING COMPREHENSION IMPROVEMENT IN JAPANESE EFL STUDENTS	札幌旭丘 庄末 剛
			家庭	蘭越高校における家庭科の授業実践	蘭越 成田 多江
			農業	多世代型および年間継続型の学校農場開放～計根別食育学校の運営～	中標津農業 尾崎 仁
			工業	マイクロ波を利用する塩素系有機化合物の無害化処理法の開発 ～平成 19 年度高等学校産業教育担当教員長期実技研修報告～	札幌琴似工業 松田 圭右
			商業	本校商業教育の実践とこれからの課題	帯広南 藤村一宏・國村 光二・有塚修
			水産	水産食品における鮮度判定法の教材化	小樽水産 小坂 実顕
20	46	教科部会	情報	確かな学力と教科『情報』 ～教科『情報』における思考力・表現力を育成するための教育実践～	函館稜北 福士公一朗
			巻頭言		会長 宮浦 俊明
			地歴公民	間違いだらけの経済教育～ミクロ・マクロ経済学で本当の理解を～	千歳 菅原 晃
			数学	生徒の学習意欲を高める授業を目指して	倶知安 信田 匡哉
			理科	野幌森林公園のキノコ相ー植生環境別におけるキノコ相の相違についてー	札幌東 干場 敏博
			養護	保健指導・健康相談活動への身体測定値の活用	札幌北 大村 道子 札幌稲雲 佐藤 朱美 千歳北陽 佐藤 恵子 札幌工業 関 澄恵
			英語	B-SLIM 理論に基づく言語活動ー学習者中心の指導法の在り方について	下川商業 藤井亜希子
			家庭	家庭看護福祉における実践報告	栗山 瀬尾 敦子
			農業	“総合的な力”を身につけさせる学校農場のあり方	士幌 芳賀 雄太
21	47	教科部会	工業	『目指せスペシャリスト』研究開発について	札幌工業 宮武 宏行
			商業	商業教育における知的財産教育の実践研究 ー地域との連携による商品開発教育の取り組みー	下川商業 佐藤 公敏
			巻頭言		会長 宮浦 俊明
			数学	学校間連携による学力向上の取り組みについて	寿都 菊池 康
			理科	天然染料を使った繊維と染色の科学	岩内 本間 順
			芸術	喪乱帖から見た王羲之の特質について	有朋 小林 雅澄
			英語	英語嫌いを英語好きにする方法～生徒が思わず手を挙げてしまうテクニック～	札幌国際情報 高堰みちほ
			商業	地域と連携した教育活動～本校における『商品開発』～	苫小牧総合経済 小笠原 聡
			水産	水産食品の開発と起業家教育	厚岸翔洋 植井 真
21	47	教科部会	情報	『情報科における問題解決型授業の現状と可能性』	札幌北 奥村 稔 札幌篠路 鶴間 伸一 札幌旭丘 高瀬 敏樹 札幌平岸 杉本 武史 札幌東陵 高田 和典 札幌丘珠 川西 裕二 倶知安 津端 公彦 岩見沢緑陵 川崎 知文

年度	回	分野	テーマ	学校名	氏 名	
				旭川藤女子 釧路江南	鎌田 亮樹 成田 雅昭	
22	48	巻頭言		会長	宮浦 俊明	
		教育一般	総合学科の特色と本校の取り組みー生徒の未来に応える総合学科をめざしてー	清水	浪岡 利光	
		教科部会	国語	芥川龍之介『おぎん』の授業ー『語り手』はすべてを知って騙っているー	北嶺中・高	菅原 利晃
			数学	学力の把握と学習評価の工夫について	浦河	小林 成人
			理科	気象データを活用し地域独自の天気予報を考える	長万部	石井 亮
			英語	指導者集団のチームプレー 生徒は先生を選べない…	函館中部	荻津 賢
			家庭	体験活動を通して学ぶ食の大切さ～家庭総合における授業実践～	士別東	山本 史江
			商業	『ふるさと学習プロジェクト』と提携した教育活動の推進 ～課題研究での展開を中心として～	中川商業	増山 淳一
			情報	小学校から高等学校まで、情報教育の系統性のデザイン	札幌北 札幌篠路 札幌平岸 札幌藻岩 札幌藻岩 札幌東陵 札幌北 倶知安 岩見沢緑陵 旭川藤女子 釧路江南	奥村 稔 鶴間 伸一 杉本 式史 高木 昭信 日比 誠 高田 和典 有田 幸史 津端 公彦 川崎 知文 鎌田 亮樹 成田 雅昭
23	49	巻頭言		会長	守屋 開	
		理科	探究心を育む化学教育 ～有機マイクロスケール実験～	滝川高校	本間 順	
		書道	高等学校芸術科書道における感性・創造性を育む漢字仮名交じりの書の授業の研究	松前	西川 竜矢	
		英語	英語授業の組織化・システム化からハンドアウト開発へ ～ALL English 授業の実現を目指して～	函館中部	大塚 徹	
		家庭	専門科目を活用した普通科における被服に関する学習指導 (1) 普通教育における選択科目『服飾手芸』の実践 (2)『服飾文化』における思考力・判断力・表現力の育成を図る指導実践	湧別高校 枝幸	齊藤 文那 丸子 恵未	
		農業	帯広農業高校からの新しい農業技術の発信	帯広農業	飛谷 淳一	
		工業	定時制から発信するこれからの教育～自信と意欲をもたせる取り組み～	札幌琴似工業	三本木 豊	
		商業	本校における商品開発の成果と今後の展望	留萌千望	秋本 直人	
		水産	最新の船舶の保守・整備に関する現状と教材作成	厚岸翔洋	大倉 誠	
24	50	巻頭言		会長	守屋 開	
		国語	古文の「解釈」に関する一考察	北嶺	菅原 利晃	
		理科	花粉の発芽と生態的意義について	白老東	河内 健治	
		英語	進路多様校における英語を自動化する授業の実践と検証 ～英語での言語活動を中心とした授業づくり～	北広島西	徳橋 孝之	
		家庭	「家庭基礎」における授業展開の工夫 ～テーマを決め、学習の総合化を図る～	帯広緑陽	山本ひろみ	
		農業	『専門学校 Power Up プロジェクト』の取り組みと成果について	旭川農業	菊地 誠	
		商業	「地域に密着した商業高校のあり方」 ～「Power Up」から「Skill Up」へ～	奈井江商業	酒井 友彰	
		情報	『授業レシピデータベースプロジェクトへの取り組み』	授業レシピデータベースプロジェクトワーキンググループ 札幌篠路 札幌拓北 江差 旭川藤女子 霧多布 帯広緑陽 札幌成陵 岩見沢緑陵 奥部	鶴間 伸一 梅田 充 福田 亮 鎌田 亮樹 小笠原 清陽 笠原 健太 前田 一 村中 文 川崎 幸 鈴木 健之	

高教研 50 年の歩み

1963（昭和38）年～2015（平成25）年

年	月	高 教 研	月	教 育 関 係 （※その他の出来事）
1963 (昭 38)	5	北海道高等学校教育研究会設立総会が札幌南高校で開かれ初代会長として梶浦善次氏が就任	1	道「学力向上対策協議会」発足
	12	昭和 38 年度会員登録者数 1, 985 名	1	「能力開発研究所」設立
1964 (昭 39)	1	第 1 回北海道高等学校教育研究大会 会 場 札幌旭丘高等学校 参加者 335 名 講 師 森戸 辰男(中央教育審議会会長) 『高校教育の問題点』	4	高校、「新教育課程」実施
	3	会報第 1 号発刊	6	中教審に「後期中等教育の拡充整備」を諮問
	3	研究紀要第 1 号発刊	7	小中、「全国学力調査実施」
	12	昭和 39 年度会員登録者数 2, 228 名	11	能力開発研究所第 1 回能研テストを実施
			2	文部省、小中学校の「道徳の指導資料」第 1 集 70 万部を発刊
1965 (昭 40)	1	第 2 回北海道高等学校教育研究大会 会 場 札幌静修高等学校 参加者 725 名 講 師 高坂 正顕(東京学芸大学学長) 『日本教育の課題』 (この年から教科別集会が開かれる)	4	高校入試制度を改訂し「総合選抜制」を打ち出す
	3	会報第 2 号発刊	5	道教委、「教頭制」を公布
	3	研究紀要第 2 号発刊	7	能力開発研究所、「進学適正能力テスト」実施
	7	会報第 3 号発刊	9	文部省、「体育施設五カ年計画」発表
	12	昭和 40 年度会員登録者数 2, 710 名	10	文部省全国学力調査を 20%抽出に改めると発表
1966 (昭 41)	1	第 3 回北海道高等学校教育研究大会 会 場 札幌静修高等学校 参加者 1, 200 名 講 師 沢田 慶輔(東京大学教授) 『考える力をもった人間を育てる教育』	11	文部省、「わが国の教育水準」(教育白書)を発表
	3	会報第 4 号発刊		
	3	研究紀要第 3 号発刊		
	4	梶浦会長退職、長瀬米蔵氏会長就任		
	7	会報第 5 号発刊		
1967 (昭 42)	12	昭和 41 年度会員登録者数 3, 343 名	1	中教審、「期待される人間像」の中間報告を発表
			5	道教委、小学区制を廃止し、大学区制に移行を決定
			6	高校再編成の基本方針発表
			7	家永三郎氏、「教科書検定問題」で第 1 次訴訟を起こす
			11	「わが国の社会教育」－現状と課題－教育白書
1968 (昭 43)	1	第 4 回北海道高等学校教育研究大会 会 場 札幌静修高等学校 参加者 1, 656 名 講 師 平塚 益徳(国立教育研究所良) 『後期中等教育への諸問題について』 中川 秀三(札幌医科大学教授) 『大脳生理学と精神衛生について』	1	教課審、「愛国心の育成」などを内容とする改定方針をまとめる
	3	会報第 6 号発刊	2	盲学校及び聾学校の高等部の学校を定める省令
	3	研究紀要第 4 号発刊	4	札幌啓成高等学校開校
	7	会報第 7 号発刊	7	東京都高校、学校群設置と入試教科を 3 教科に削減
	12	昭和 42 年度会員登録者数 4, 426 名	10	中教審、「後期中等教育の拡充整備」答申 (期待される人間像)
1969 (昭 44)	1	第 5 回北海道高等学校教育研究大会 会 場 札幌市民会館 参加者 2, 323 名 講 師 細谷 俊夫(東京大学教授) 『わが国の中等教育』 伊藤 祐時(日本大学教授) 『進路指導について』	11	道中等教育振興協議会、「高校入試科目削減」を諮問
	3	会報第 8 号発刊		
	3	研究紀要第 5 号発刊		
	6	会報第 9 号発刊		
	12	昭和 43 年度会員登録者数 5, 090 名		
1970 (昭 45)	1	第 6 回北海道高等学校教育研究大会 会 場 札幌市民会館 参加者 2, 352 名 講 師 高坂 正堯(京都大学助教授) 『転換期における日本の諸問題』 大飼 哲夫(北海道大学名誉教授) 『開拓百年と北海道の野獣』	5	二本木教育長勇退・岡村教育次長が昇格
	3	会報第 10 号発刊	6	家永三郎、「教科書検定は違憲」であると第 2 次訴訟を提訴
	3	研究紀要第 6 号発刊	7	高校適正配置及び教職員数の標準等に関する法律を一部改正
	6	会報第 11 号発刊	8	「高等学校における職業教育の多様化について」答申
	12	昭和 44 年度会員登録者数 5, 052 名	9	中・高教員の海外研修派遣始まる
1970 (昭 45)	1	第 7 回北海道高等学校教育研究大会 会 場 札幌市民会館 参加者 2, 551 名 講 師 岸本 康(共同通信社論説委員科学評論家) 『宇宙開発と変革の時代』	10	教課審、「小学校教育課程改正について」最終答申
			10	「高校生生の意識調査」実施

年	月	高 教 研	月	教 育 関 係 (※その他の出来事)
		益井 重夫(国立教育研究所第2研究部長) 『教育改革と後期中等教育の諸問題』 —諸外国の実状と関連して—	6 6 10	東京地裁、教科書裁判で家永三郎勝訴の判決を下す 文部省、杉本判决を不服として東京高裁に控訴 「高等学校学習指導要領」告示(4次:改訂3回目)
	3 3 4 7 12	会報第12号発刊 研究紀要第7号発刊 長瀬会長退職、磯貝芳司氏会長就任 会報第13号発刊 昭和45年度会員登録者数 5,213名		
1971 (昭 46)	1 3 3 7 12	第8回北海道高等学校教育研究大会 会 場 札幌市民会館 参加者 2,921名 講 師 衛藤 藩吉(東京大学教養学部教授) 『日本と中国』 岸田 純之助(朝日新聞論説委員、評論家) 『情報化社会における教育のシステム』 会報第14号発刊 研究紀要第8号発刊 会報第15号発刊 昭和46年度会員登録者数 5,792名	1 1 2 4 6 12	文部省、「小・中新学習指導要領」の部分改定を告示 (福祉優先の公害教育方針を明確化する) OECD、「日本の教育」で報告書まとめる 文部省、「小・中学校の新しい指導要録」を通知 小学校の教育課程、10年ぶりに改定(神話、公害など登場) 中教審、「今後における学校教育総合的な拡充整備のための基本的 施策について」答申 大学入試改善会議、「大学入学選抜方法の改善について」最終報告
1972 (昭 47)	1 3 3 7 12	第9回北海道高等学校教育研究大会 会 場 札幌厚生年金会館 参加者 3,326名 講 師 林 健太郎(東京大学文学部教授) 『民主主義を考える』 矢口 新(能力開発工業センター所長) 『教育革新の課題』 会報第16号発刊 研究紀要第9号発刊 会報第17号発刊 昭和47年度会員登録者数 5,714名	4 6 6	札幌北陵高校開校 教育制度検討委員会、「日本の教育をどう改めるべきか」の第2次報 告書を日教組委員長に提出 高見文相、中教審に「教育・学術・文化の国際交流」を諮問
1973 (昭 48)	1 3 3 7 12	第10回北海道高等学校教育研究大会 第10回記念大会全体集会 同10周年記念祝賀会 会 場 札幌厚生年金会館 参加者 3,249名 講 師 和達 清夫 (中央公害審議会会長・前埼玉大学長) 『地球科学と環境問題』 市村 真一(京都大学教授) 『変わりゆく日本と教育』 会報第18号発刊 研究紀要第10号発刊 会報第19号発刊 昭和48年度会員登録者数 6,031名	2 3 3 4 5 6 9 9 11 12 @	札幌藻岩高校の土地代、史上最高の八億円 第一次高等教育懇談会、最終答申(地方大学拡充諮問) 校舎爆破の脅迫状で札幌啓成高校卒業式中止 札幌藻岩高校・千歳北陽高校開校 奥野文相、「学校週5日制」の検討を支部当局に指示 道教委、都市部の高校入試50年から総合選抜制を検討 動労スト続行で23高校が臨休、修学旅行延期・中止 中教審の筑波大学設置が特別国会で決まる 旭医大開設 「公立高校適正配置計画」決まる、定員715名増(道教委) OECD、「リカレント教育」提案
1974 (昭 49)	1 3 3 7 12	第11回北海道高等学校教育研究大会 会 場 札幌厚生年金会館 参加者 3,255名 講 師 天城 勲(日本育英会理事長) 『近代学校制度—その性格と展望—』 橋本 重治(応用教育研究所長) 『教育評価の今日的問題』 会報第20号発刊 研究紀要第11号発刊 会報第21号発刊 昭和49年度会員登録者数 6,143名	4 4 5 9	札幌手稲高校開校 北教組の全日スト 中教審、「教育・学術・文化における国際交流」答申 道教委、稚内、美唄両市の養護学校開校正式決定(52年度開校)
1975 (昭 50)	1 3 3 7 12	第12回北海道高等学校教育研究大会 会 場 札幌厚生年金会館 参加者 3,321名 講 師 会田 雄次(京都大学教授) 『日本の心と世界の心』 菊池 浩吉(札幌医科大学教授医学博士) 『ガンの免疫』 会報第22号発刊 研究紀要第12号発刊 会報第23号発刊 昭和50年度会員登録者数 6,164名	4 4 7 12	札幌丘珠高校・札幌清田高校開校 国大協入試改善調査委員会、「共通テスト」の実施検討、 出題は必修科目(5教科7科目)とし、2次試験は選択科目 53年春から実施の見通し 高校入選抜改善研究協議会は51年度の総合選抜制見送る 道教委、札幌市内に52年度開校メドに公立2校の新設決める (52.4札幌西陵高校・札幌白石高校開校)
1976 (昭 51)	1 3 3	第13回北海道高等学校教育研究大会 会 場 札幌厚生年金会館 参加者 3,338名 講 師 池田 弥三郎(慶応義塾大学教授) 『言葉としつけ』 田上 義也(北海学園大学講師) 『北の環境の中で』 会報第24号発刊 研究紀要第13号発刊	5 ※1 ※3 ※5 ※7 ※11	最高裁、「旭川学テ事件」で学テは「合憲」と判断 「宅急便」発売 道庁爆破事件 植村直己、北極圏単独犬ソリ走破 ロッキード事件、田中角栄逮捕 アメリカ大統領選挙、カーター初当選

年	月	高 教 研	月	教 育 関 係 (※その他の出来事)
	7 12	会報第 25 号発刊 昭和 51 年度会員登録者数 6, 201 名		
1977 (昭 52)	1 3 4 7 12	第 14 回北海道高等学校教育研究大会 会 場 札幌厚生年金会館 参加者 3, 508 名 講 師 加藤 陸奥雄(東北大学学長) 『自然保護』 岡路 市郎(北海道教育大学学長) 『「教え」への幻想』 会報第 26 号発刊 研究紀要第 14 号発刊 蔵員会長退職、瀬戸哲郎氏会長就任 会報第 27 号発刊 昭和 52 年度会員登録者数 6, 272 名	1 1 2 6 7 8 8 9	海部文相と日教組トップ会談(主任制について) 国語審議会、「新漢字表」を海部文部大臣に中間報告 道教委、昭和 60 年までの「北海道教育長期総合計画」決定 文部省、新しい「小・中学校学習指導要領」発表 道立近代美術館開館(東北以北最大) 文部省、「教科書検定規則」と「同検定基準」の全面的改正 道教委、53 年度の公立高校入試の総合選抜制導入見送り 道教委、北教組対立の中、気境公男道教育長辞職 道教委、53 年度の「公立高校適正配置計画」を道議会に報告、 3 学区に 4 校新設
1978 (昭 53)	1 3 3 7 12	第 15 回北海道高等学校教育研究大会 会 場 札幌厚生年金会館 参加者 3, 660 名 講 師 村松 剛(筑波大学教授) 『国際情勢と日本の進路』 河和 文一郎(札幌医科大学教授) 『医療と福祉』 会報第 28 号発刊 研究紀要第 15 号発刊 会報第 29 号発刊 昭和 53 年度会員登録者数 6, 549 名	3 4 5 6 6 10 11	道教委、「公立高校の入試選抜に関する改善試案」を発表 北広島高校・石狩高校開校 道教委、「公立高校の入試選抜に関する改善試案」細則を発表 文部省、「高校学習指導要領」告示(5 次:改訂 4 回目)57 年度実施 中教審、「教員の資質能力の向上について」答申 道教委、教育局、市町村教委、各小中高校長に主任手当実施通達 道教委、公立高校・特殊学校職員の人事異動の実施要領決める (各学校を A、B、C、D の 4 つの“群”に区分)
1979 (昭 54)	1 3 3 4 7 12	第 16 回北海道高等学校教育研究大会 会 場 札幌厚生年金会館 参加者 3, 731 名 講 師 黛 敏郎(作曲家) 『日本の音』 田中 彰(北海道大学教授) 『近代日本の岐路』 会報第 30 号発刊 研究紀要第 16 号発刊 瀬戸会長退職、樋浦浩氏会長就任 会報第 31 号発刊 昭和 54 年度会員登録者数 6, 411 名	1 2 4 6	初の国公立大学共通一次試験が全国一斉に行われる 大学入試センター、1 月実施の共通一次試験結果を発表 5 教科平均点 636. 07 点、最高 972 点、最低 0 点、 σ 134. 28 点 札幌東陵高校・札幌新川高校・札幌平岸高校開校 中教審、「地域社会と文化について」答申
1980 (昭 55)	1 3 3 7 12	第 17 回北海道高等学校教育研究大会 会 場 札幌厚生年金会館 参加者 3, 891 名 講 師 犬飼 孝 (大阪大学名誉教授・甲南女子大学教授) 『万葉のころ』 武谷 愚(北海道大学名誉教授) 『エネルギー資源の今日と将来』 会報第 32 号発刊 研究紀要第 17 号発刊 会報第 33 号発刊 昭和 55 年度会員登録者数 6, 450 名	2 4 4 11	小学校の新学習指導要領、「ゆとりある、充実した教育」スタート 道内に高校が 5 校開校 札幌南陵高校開校 道教委、56 年度の公立高校適正配置設置計画を決定 (新設校はゼロ、職業科中心に 18 校 18 学級削減)
1981 (昭 56)	1 3 3 7 10 12	第 18 回北海道高等学校教育研究大会 会 場 札幌厚生年金会館 参加者 4, 121 名 講 師 今堀 宏三(大阪大学教授・理学博士) 『かけがえのない地球と私たちの環境』 倉田 公裕 (北海道立近代美術館長・明治大学教授) 『美術に見る東西のころ』 会報第 34 号発刊 研究紀要第 18 号発刊 会報第 35 号発刊 樋浦会長死去(8 月)、尾崎信夫氏会長就任 昭和 56 年度会員登録者数 6, 317 名	2 4 5 6 6 6 6 12	道教大札幌分校、市内北区篠路に移転決定 教科書協会、中学社会科「公民的分野」の大幅改訂方針を決める 道教委、57 年度からの「公立高校入試制度」改革(学区 21→52) 道教委、来春の「入試制度改革案」を発表 (学区細分化、学力検査、日程の短縮、職業高校の推薦入試導入) 文部省、高校教科書「現代社会」に厳しい検定 「放送大学学園法」公布 中教審、「生涯教育について」答申 定時制離れが進み道教委は来年度から入試を行わないことを決定
1982 (昭 57)	1 3 3 7 12	第 19 回北海道高等学校教育研究大会 会 場 札幌厚生年金会館 参加者 4, 121 名 講 師 広中 平祐(京都大学教授) 『日本の教育を考える』 小林 禎作(北海道大学教授) 『「雪華図説」と雪文様』 会報第 36 号発刊 研究紀要第 19 号発刊 会報第 37 号発刊 昭和 57 年度会員登録者数 6, 230 名	2 5	文部省、「学力テスト」16 年ぶりに実施 道退職校長会の教育問題調査研究部、校長 OB の意識調査実施 (文部省の教科書検定強化反対)
1983 (昭)	1	第 20 回北海道高等学校教育研究大会 創立 20 周年記念大会	1 2	共通一次試験(5 回目)終了、種々の問題点が指摘される 道内の公立高校新設校に人気

年	月	高 教 研	月	教 育 関 係 (※その他の出来事)
58)		会 場 札幌厚生年金会館 参加者 4, 004 名 講 師 黒川 紀章(建築家) 『共生の時代』 梅原 猛(京都市立芸術大学教授) 『アイヌー日本民族の基層』	3 4 6 9 12	「校内暴力」が社会問題化する 札幌真栄高校・札幌厚別高校・札幌稲西高校・札幌稲北高校・札幌東豊高校・北広島高校・石狩南高校開校 中教審、「教科書の在り方について」答申 日教組、12 年続いた槇枝氏に代わり田中一郎氏を委員長に選出 道教委、教頭昇任選考へ来秋から筆記試験導入
	3 3 7 12	会報第 38 号発刊 研究紀要第 20 号発刊 会報第 39 号発刊 昭和 58 年度会員登録者数 6, 246 名		
1984 (昭 59)	1 3 3 7 12	第 21 回北海道高等学校教育研究大会 会 場 札幌厚生年金会館 参加者 4, 061 名 講 師 外山 滋比古(お茶の水女子大学教授) 『新しい人間像と教育』 伊藤隆一(北海道教育大学教授) 『北からの出発』 会報第 40 号発刊 研究紀要第 21 号発刊 会報第 41 号発刊 昭和 59 年度会員登録者数 6, 245 名	1 2 2 3 3 4 8 9 12	「札幌芸術の村」原案出来る 首相直属の「教育臨調」設置 道内の公立高校 4 年ぶりに授業料値上げ 旧有島武郎邸芸術の村に移転決定 文化と教育に関する懇談会(座長:深井大)報告書 札幌稲雲高校・大麻高校開校 「臨時教育審議会」設置(会長:岡本道雄) 道高校長期収容対策検討協議会、「中卒者増対策」を道教委に答申 全国の公立高校で中退者が 10 万人の大台を上回る
1985 (昭 60)	1 3 3 4 7 12	第 22 回北海道高等学校教育研究大会 会 場 札幌厚生年金会館 参加者 4, 054 名 講 師 黒羽 亮一(日本経済新聞論説委員) 『なぜ今教育改革か』 岡田宏明(北海道大学文学部教授) 『北方民族における伝統と近代』 会報第 42 号発刊 研究紀要第 22 号発刊 尾崎会長退職、小柳六郎氏会長就任 会報第 43 号発刊 昭和 60 年度会員登録者数 6, 231 名	3 6 6 6 9 9 9 9	北大の学長に有江氏再選 小樽に道内初の「職訓大学」設置決定(61 年開校の予定) 臨教審、「第 1 次答申」まとまる、「共通テスト」案が浮上する 校内暴力が下火になる一方「いじめ」が社会問題化する 教課審が 12 年ぶりに福井謙一氏を会長に発足 文部省、全国小中高へ入学・卒業式の「国旗国歌」通達を出す 北海学園が創立 100 年式典を挙行
1986 (昭 61)	1 3 3 7 12	第 23 回北海道高等学校教育研究大会 会 場 札幌厚生年金会館 参加者 4, 012 名 講 師 加藤 秀俊(放送大学教授) 『生涯教育の将来』 黒 直文(北海道拓殖銀行常務取締役) 『これからの企業の求める人間像』 会報第 44 号発刊 研究紀要第 23 号発刊 会報第 45 号発刊 昭和 61 年度会員登録者数 5, 859 名	1 1 2 4 4 4 9 ※	道内の高校進学者人数 3 年連続で増加(道教委間口増に大童) 札幌大学長に菊地浩吉氏選出される 全国で「いじめ」の発生は 2 校に 1 校と文部省発表 臨教審、「第 2 次答申案」を発表 ('生涯学習体系への移行)を主軸とする教育の見直し) 国語審議会、40 年ぶりに「現代仮名遣い」を改定 札幌篠路高校開校 藤尾文相、7 月と 9 月の日韓関係についての発言で罷免される イギリスで狂牛病発生
1987 (昭 62)	1 3 3 4 7 12	第 24 回北海道高等学校教育研究大会 会 場 札幌厚生年金会館 参加者 3, 972 名 講 師 江藤 淳(東京工業大学教授) 『ことばとこころ』 岡村 正吉(北海道虻田町長) 『地方自治と教育』 会報第 46 号発刊 研究紀要第 24 号発刊 小柳会長退職、高島淳彦氏会長就任 会報第 47 号発刊 昭和 62 年度会員登録者数 5, 729 名	3 3 4 4 5 6 8 12	北大学長に伴義雄氏選出される 国公立大入試初の A・B 日程で開始 臨教審(岡本道雄会長)、「第 3 次答申」 (9 月入学に向けて条件整備の必要性を力説) 札幌平岡高校開校 道内の高校生の総数史上初めて 24 万人台になる 文部省、「児童生徒問題行動実態調査」 (登校拒否と自殺が過去最高、学習塾の過熱) 国大協、63 年度入試の 2 次試験出願を共通一次以降に繰り下げ 臨教審、「最終答申」(個性重視、生涯学習、変化への対応) 教課審、「最終答申」(自ら学ぶ意欲)
1988 (昭 63)	1 3 3 7 12	第 25 回北海道高等学校教育研究大会 会 場 札幌厚生年金会館 参加者 4, 114 名 講 師 野坂 昭如(作家) 『近ごろ思うこと』 小松 作蔵(札幌医科大学副学長) 『心臓移植をめぐる』 会報第 48 号発刊 研究紀要第 25 号発刊 会報第 49 号発刊 昭和 63 年度会員登録者数 5, 645 名	2 4 4 8 10 11 11	国大協、64 年以降の入試は「分離・分割方式」採用を発表 道教委と北教組が主任制問題で「主任は中間管理職でなく主任を固定しないこと」で合意 札幌拓北高校開校 旭川北高同窓会 4, 000 万円の基金で海外留学財団を設立 入試センター、65 年からの「新テスト」を 1 月中旬に移行決定 北大、65 年度以降「分離・分割」制度を導入を発表 道教委、62 年度の「公立高校の定員枠を 30 学級増」と発表 文部省、「共通一次試験」に代わる「新テスト」の 65 年実施を発表
1989 (平 元)	1 3	第 26 回北海道高等学校教育研究大会 会 場 札幌厚生年金会館 参加者 3, 972 名 講 師 多湖 輝(千葉大学教授) 『日本人と創造性』 美濃 羊輔(帯広畜産大学教授) 『バイオテクノロジーの現状と問題点』 会報第 50 号発刊	1 1 3 3 3	西岡文相、道教委・北教組の「主任は中間管理職とせず」合意案を強く批判(国庫補助の停止をにらむ) 「共通一次試験」、その歴史に幕をおろす(受験者 37. 4 万人) 沢教育長、「主任制の北海道方式」の白紙撤回を発表 文部省、「教科書検定図書調査審議会」は 40 年ぶりに基準を改正 (3 段階審査を 2 段階に、文相に訂正勧告権を与える) 「小中高学習指導要領」告示(6 次:改訂 5 回目) (個に応じた指導、文化と伝統、国際理解)

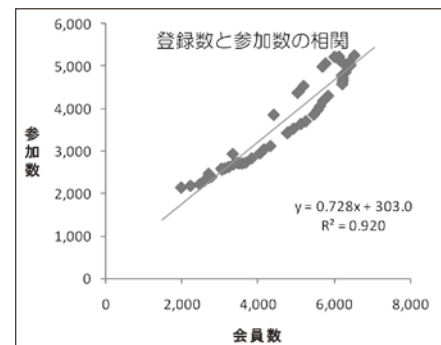
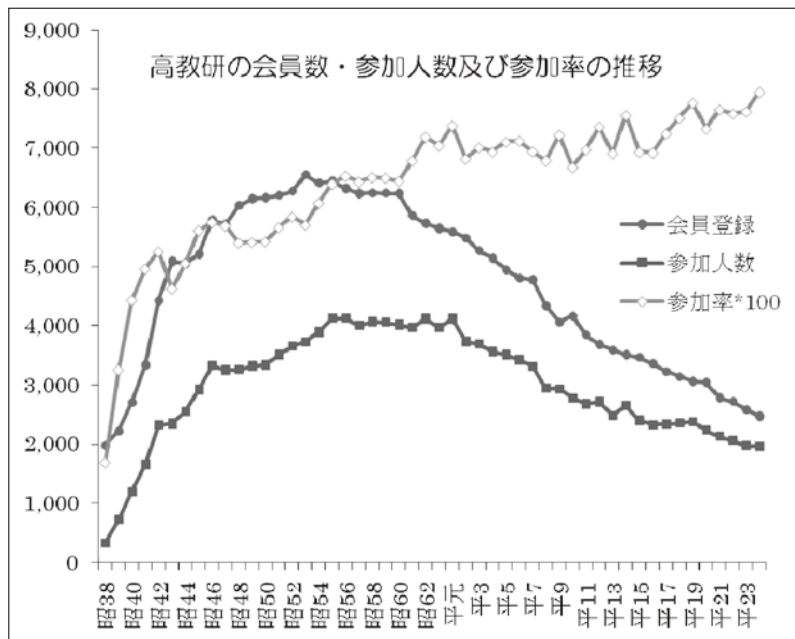
年	月	高 教 研	月	教 育 関 係 (※その他の出来事)
	3 7 12	研究紀要第 26 号発刊 会報第 51 号発刊 平成元年度会員登録者数 5,586 名	3 11 @	「教員免許法施行規則等の一部改正」省令 道教育大が大学院新設構想を発表 文部省、「社会教育局」を廃し「生涯学習局」を新設
1990 (平 2)	1 3 3 7 12	第 27 回北海道高等学校教育研究大会 会 場 札幌厚生年金会館 参加者 4,118 名 講 師 金田一 春彦(文学博士) 『日本語の心』 高橋 良治(釧路市丹頂鶴自然公園園長) 『タンチョウの四季』 会報第 52 号発刊 研究紀要第 27 号発刊 会報第 53 号発刊 平成 2 年度会員登録者数 5,482 名	1 1 9	「大学入試センター試験(新テスト)」がスタート、43.5 万人参加 中教審、「生涯学習の基盤整備について」答申 寺山教育長、「主任制の北海道方式」の平成 3 年度実施を表明
1991 (平 3)	1 3 4 7 12	第 28 回北海道高等学校教育研究大会 会 場 札幌厚生年金会館 参加者 3,734 名 講 師 菊地 元一(青山学院大学法学部良) 『経済法秩序における公正としての正義』 一日米構造協議を中心にして 高畑 直彦(札幌医科大学神経精神科教授) 『心の危機と反応』 会報第 54 号発刊 研究紀要第 28 号発刊 高畠会長退職、本間恒太氏会長就任 会報第 55 号発刊 平成 3 年度会員登録者数 5,269 名	1 2 3 4 6 6 11	「入試センター試験」で国公立離れが目立つ 国語審議会、「外来語の表記法について」を答申 兵庫県立農業高校で 91 年度入試答案の改ざん事件が発覚 中教審、「新し時代に対応する教育の諸制度の改革について」答申 (特定高校の有名大学寡占化の是正) 明大で替え玉受験発覚 文部省、「日の丸は国旗」「君が代は国歌」と 92 年用教科書で明記 「入試センター試験」の受験者、史上最多の 47.2 万人
1992 (平 4)	1 3 3 4 7 12	第 29 回北海道高等学校教育研究大会 会 場 札幌厚生年金会館 参加者 3,690 名 講 師 なだ いなだ(精神科医・作家) 『心の底をのぞく』 坂本 与一(北海道文理科学短期大学学長) 『オスとメスのエソロジー』 会報第 56 号発刊 研究紀要第 29 号発刊 本間会長退職、染谷昌志氏会長就任 会報第 57 号発刊 平成 4 年度会員登録者数 5,142 名	1 1 2 3 4 6 6 7 8 9	センター試験 47 万人受験で行われる 高校中退者 12.3 万人にのぼる 筑波大学学長に江崎玲於奈氏選出される 文部省、「学校 5 日制」で通達出す リクルート事件担当の掘田検事、慶応大学の教壇にのぼる 姉妹校提携大はやり(全国で 1,200 校) 指導要録の全面開示問題裁判請求へ(大阪) 大検志願この 10 年で 4 倍に(全国で 2 万人台にのぼる) 不登校中学生 100 人に 1 人の割合-学校嫌い過去最高に 「学校 5 日制」スタート、毎月第 2 土曜日休業になる
1993 (平 5)	1 3 3 7 12	第 30 回北海道高等学校教育研究大会 第 30 回記念大会 同 30 周年記念祝賀会 会 場 札幌厚生年金会館 参加者 3,563 名 講 師 伊東 光晴(放送大学教授・京都大学名誉教授) 『技術革新の現在と社会の変容』 古葉 竹識(野球評論家) 『耐えて勝つ』 会報第 58 号発刊 研究紀要第 30 号発刊 会報第 59 号発刊 平成 5 年度会員登録者数 4,945 名	1 3	入試センター試験、51.2 万人受験・史上最高 最高裁、「家永教科書裁判」で教科書検定制度を「合憲」と判断
1994 (平 6)	1 3 3 7 12	第 31 回北海道高等学校教育研究大会 会 場 中島体育センター 参加者 3,510 名 講 師 C. W. ニコル(作家) 『自然と人間』 若井 邦夫(北海道大学教授) 『子供が発達するときー必要と遊びの間にー』 会報第 60 号発刊 研究紀要第 31 号発刊 会報第 61 号発刊 平成 6 年度会員登録者数 4,807 名	1 2 5 8 8 9 12	大学入試センター試験志願者過去最高(53 万 1 千人) 高校中退者 10 万 1 千人 福岡県教委が指導要録を全面開示 国立大学入学辞退率過去最低(17.1%) 女子生徒の 2 割、4 年制大学へ 入学式の日の丸掲揚率 95%超、君が代斉唱率は小中 8 割、高 7 割 「学校が楽しい」中・高で急減
1995 (平 7)	1 3 3 4 7 12	第 32 回北海道高等学校教育研究大会 会 場 札幌厚生年金会館 参加者 3,420 名 講 師 中村 雄二郎(明治大学名誉教授) 『共通感覚と自己実現』 杉岡昭子(札幌国際プラザ専務理事) 『「故郷忘じがたく候」の旅』 会報第 62 号発刊 研究紀要第 32 号発刊 染谷会長退職、綾井健二氏会長就任 会報第 63 号発刊 平成 7 年度会員登録者数 4,777 名	4 4 4 4 4 ※ ※1 ※3	第 15 期中教審がスタート(有馬朗人会長) 学校 5 日制(月 2 回、第 2、第 4 土曜日) 道内公立高校学級定員 43 名へ スクールカウンセラー派遣(いじめ、不登校問題) 初の新学科集合型高校開校(北海道札幌国際情報高等学校) 道内 96 年度教員採用試験は狭き門 阪神・淡路大震災 地下鉄サリン事件

年	月	高 教 研	月	教 育 関 係 (※その他の出来事)
1996 (平 8)	1	第 33 回北海道高等学校教育研究大会 会 場 札幌厚生年金会館 参加者 3, 314 講 師 河合 雅雄 (京都大学名誉教授、日本福祉大学教授) 『人間一進化の道からずれた動物』 山中 燦子 (北海学園大学人文学部教授) 『世界の中の日本と日本人』	3	道内公立高校合格者氏名発表取り止め
	3	会報第 64 号発刊	4	道内公立高校学級定員 40 名へ
	3	研究紀要第 33 号発刊	6	全国で学校給食で集団中毒 (0157) 多発
	7	会報第 65 号発刊	7	中教審、「21 世紀を展望した我が国の教育の在り方について」第 1 次 答申、「(生きる力)「ゆとり」を提唱)
	12	平成 8 年度会員登録者数 4, 338 名	8	教課審発足
1997 (平 9)	1	第 34 回北海道高等学校教育研究大会 会 場 札幌厚生年金会館 参加者 2, 942 名 講 師 佐原 真 (国立民族博物館福館長) 『大むかしと現代』 横湯 園子 (北海道大学教授) 『子供を観る眼』—教育臨床心理の立場から—	8	文部省、「いじめ対策本部」設置
	3	会報第 66 号発刊	8	「全国高等学校総合文化祭」の開催
	3	研究紀要第 34 号発刊	※	道内 97 年度教員採用試験は史上最高倍率
	4	綾井会長退職、武田泰明氏会長就任	※2	豊浜トンネル岩盤崩落事故
	7	会報第 67 号発刊	※3	イギリス政府、狂牛病が人に感染する可能性を発表
1998 (平 10)	12	平成 9 年度会員登録者数 4, 064 名	※4	コンサドーレ札幌誕生
	1	第 35 回北海道高等学校教育研究大会 会 場 札幌厚生年金会館 参加者 2, 932 名 講 師 浅井 信雄 (神戸市外国語大学教授) 『国際化と私たちの暮らし』 中野 武房 (北海学園北見大学教授) 『カウンセリングを体験してみませんか』 (昼休みに「ミニコンサート」を実施)	3	公立高校入試でミス続出 (英語、数学、社会)
	3	会報第 68 号発刊	4	97 年度教育予算 6, 432 億円
	3	研究紀要第 35 号発刊	4	初めての総合学科の設置 (北海道清水高等学校) (平成 15 年度までに 7 校設置)
	7	会報第 69 号発刊	6	中教審、「21 世紀を展望した我が国の教育の在り方」第 2 次答申、(能 力適性、入試改善、中高一貫、飛び級、高齢社会)
1999 (平 11)	12	平成 10 年度会員登録者数 4, 167 名	8	中教審に「幼少期からの心の教育の在り方について」諮問
	1	第 36 回北海道高等学校教育研究大会 会 場 札幌厚生年金会館 参加者 2, 779 名 講 師 梶田 叡一 (ノートルダム女子大学学長) 『変革期の高校教育を考える』 (午後)《シンポジウム》～問題行動の背景を探る～ 『今のこどもの心は』 パネラー 渡部 正行 (札幌医科大学講師) 小菅 正夫 (旭川市旭山動物園良) 檜田 英樹 (札幌市立中央中学校教諭) 中村 廣治 (浦河高等学校教諭) 坂口 由美子 (札幌東高等学校養護教諭) コーディネーター 宮森正勝 (札幌啓北商業高等学校長) (昼休)「ミニコンサート」	9	中教審に「今後の地方教育行政の在り方について」諮問
	3	会報第 70 号発刊	※11	道内 98 年度教員志願者は過去最高
	3	研究紀要第 36 号発刊	※	不登校全国で 10 万人突破
	4	武田会長退職、田村勸氏会長就任	※11	拓銀経営破綻
2000 (平 12)	7	会報第 71 号発刊	※11	山一証券廃業
	12	平成 11 年度会員登録者数 3, 849 名	2	道教委と北教祖、主任制基本事項で一致
	1	第 37 回北海道高等学校教育研究大会 会 場 札幌厚生年金会館 参加者 2, 681 講 師 養老 孟司 (東京大学名誉教授、北里大学教授) 『からだと脳』	4	道立高校入試で「観点別評価」を中止
	3	会報第 72 号発刊	5	道教委、「職員倫理綱領」施行
	3	研究紀要第 37 号発刊	6	中教審、「新しい時代を拓く心を育てるために」答申
2001 (平 13)	7	会報第 73 号発刊	7	教課審、答申 (自ら学び自ら考える)
	12	平成 12 年度会員登録者数 3, 686 名	9	中教審、「今後の地方教育行政の在り方について」答申
	1	第 38 回北海道高等学校教育研究大会 会 場 札幌厚生年金会館 参加者 2, 711 名 講 師 河合 隼雄 (京都大学名誉教授、国際日本文化研究センター所長) 『青春の夢』	11	中教審に「初等中等教育と高等教育との接続の改善について」諮問
	3	会報第 74 号発刊	※	少年によるナイフ事件発生
	3	研究紀要第 38 号発刊	※	「環境ホルモン」社会問題化
2000 (平 12)	4	田村会長退職、島隆氏会長就任	※7	和歌山毒物カレー事件
	7	会報第 75 号発刊	※12	AirDo「道民の翼」就航
	1	第 39 回北海道高等学校教育研究大会 会 場 札幌厚生年金会館 参加者 2, 779 名 講 師 梶田 叡一 (ノートルダム女子大学学長) 『変革期の高校教育を考える』 (午後)《シンポジウム》～問題行動の背景を探る～ 『今のこどもの心は』 パネラー 渡部 正行 (札幌医科大学講師) 小菅 正夫 (旭川市旭山動物園良) 檜田 英樹 (札幌市立中央中学校教諭) 中村 廣治 (浦河高等学校教諭) 坂口 由美子 (札幌東高等学校養護教諭) コーディネーター 宮森正勝 (札幌啓北商業高等学校長) (昼休)「ミニコンサート」	3	「高等学校学習指導要領」改訂
	3	会報第 76 号発刊	6	99 年度教育予算 6, 217 億円
	3	研究紀要第 39 号発刊	7	「地方分権一括法」
2001 (平 13)	7	会報第 77 号発刊	8	「国旗・国歌法」が成立
	12	平成 13 年度会員登録者数 3, 686 名	11	「高等学校学習指導要領」(7 次:改訂 6 回目) (ゆとりある教育活動、総合的な学習の時間の新設)
	1	第 40 回北海道高等学校教育研究大会 会 場 札幌厚生年金会館 参加者 2, 711 名 講 師 河合 隼雄 (京都大学名誉教授、国際日本文化研究センター所長) 『青春の夢』	12	中教審、「初等中等教育と高等教育との接続の改善について」答申
	3	会報第 78 号発刊	12	教課審に「児童生徒の学習と教育課程の実施状況の評価の在り方について」諮問
	3	研究紀要第 40 号発刊	※	全国の学校で「セクハラ・わいせつ事件」多発
2002 (平 14)	4	島田会長退職、島隆氏会長就任	※9	東海村 JOC 臨界事故
	7	会報第 79 号発刊	3	道内公立高校の入試改革実施 (学力点、学習点の配分)
	1	第 41 回北海道高等学校教育研究大会 会 場 札幌厚生年金会館 参加者 2, 711 名 講 師 河合 隼雄 (京都大学名誉教授、国際日本文化研究センター所長) 『青春の夢』	4	中教審、「少子化と教育について」報告
	3	会報第 80 号発刊	5	中教審に「新しい時代における教養教育の在り方について」諮問
	3	研究紀要第 41 号発刊	10	白川英樹 (筑波大名誉教授) にノーベル化学賞
2003 (平 15)	7	会報第 81 号発刊	12	教課審、「児童生徒の学習と教育課程の実施状況の評価の在り方について」答申
	12	平成 14 年度会員登録者数 3, 686 名	※1	2000 円紙幣発行
	1	第 42 回北海道高等学校教育研究大会 会 場 札幌厚生年金会館 参加者 2, 711 名 講 師 河合 隼雄 (京都大学名誉教授、国際日本文化研究センター所長) 『青春の夢』	※9	シドニーオリンピック、高橋尚子、田村亮子が金メダル
	3	会報第 82 号発刊	1	「文部科学省」発足
	3	研究紀要第 42 号発刊	10	野依良治 (名大教授) にノーベル化学賞
2004 (平 16)	4	島田会長退職、島隆氏会長就任	11	遠山教子文科相、中教審に「教育基本法の全面改正」を諮問
	7	会報第 83 号発刊	※9	アメリカ、同時多発テロ
	1	第 43 回北海道高等学校教育研究大会 会 場 札幌厚生年金会館 参加者 2, 711 名 講 師 河合 隼雄 (京都大学名誉教授、国際日本文化研究センター所長) 『青春の夢』	※9	狂牛病の発生
	3	会報第 84 号発刊		
	3	研究紀要第 43 号発刊		

年	月	高 教 研	月	教 育 関 係 (※その他の出来事)
	12	平成 13 年度会員登録者数 3, 595 名		
2002 (平 14)	1	第 39 回北海道高等学校教育研究大会 会 場 札幌厚生年金会館 参加者 2, 482 名 講 師 阿部 謹也(共立女子大学学長) 『日本社会の構造と教育』	2 2 4 10 10	中教審、「今後の教員免許制度の在り方について」答申 中教審、「新しい時代における教養教育の在り方について」答申 「完全学校週 5 日制」スタート 教科書検定審議会、「教科書制度の改善について」 小柴昌俊(東大名誉教授)にノーベル物理学賞 田中耕一(島津製作所研究所主任)にノーベル化学賞 連携型中高一貫教育の実施 (上川高等学校、上川町立上川中学校)(平成 15 年度 3 校で実施)
	3 3 7 12	会報第 76 号発刊 研究紀要第 39 号発刊 会報第 77 号発刊 平成 14 年度会員登録者数 3, 513 名	※6	AirDo 経営破綻、ANA傘下へ
2003 (平 15)	1	第 40 回北海道高等学校教育研究大会 第 40 回記念大会 会 場 札幌厚生年金会館 参加者 2, 652 名 講 師 五木 寛之(作家) 『日本人のこころ』	3 4 5 10 12	中教審、「新しい時代にふさわしい教育基本法と教育振興基本計画の在り方について」答申 「高等学校新学習指導要領」施行 中教審、「今後の初等中等教育改革の推進方策について」答申 中教審、「当面の教育課程と指導の充実・改善方策について」答申 「学習指導要領一部改正」 (基準性踏まえて指導・総合学習・個に応じた指導の一層の充実)
	3 4 7 12	会報第 78 号発刊 研究紀要第 40 号発刊 島会長退職、青塚健一氏会長就任 会報第 79 号発刊 平成 15 年度会員登録者数 3, 466 名	※ ※3 ※5 ※8	高校進学率 97%、大学・短大進学率 49% イラク戦争勃発 「はやぶさ」打ち上げ 北海道日本ハムファイターズ誕生
2004 (平 16)	1	第 41 回北海道高等学校教育研究大会 会 場 札幌厚生年金会館 参加者 2, 401 名 講 師 毛利 衛(宇宙飛行士、日本科学未来館館長) 『宇宙の視点からの教育』	1 5 8 10	中教審、「食に関する指導体制の整備について」答申 「学校教育法」改正 中教審、「大学入学資格検定の見直しについて」 中教審に「今後の教員養成・免許制度の在り方について」諮問
	3 3 7 12	会報第 80 号発刊 研究紀要第 41 号発刊 会報第 81 号発刊 平成 16 年度会員登録者数 3, 362 名	※9 ※10 ※12	浅間山噴火 新潟県中越地震発生 インドネシアのスマトラ島沖で M9.0 の地震が発生
2005 (平 17)	1	第 42 回北海道高等学校教育研究大会 会 場 札幌厚生年金会館 参加者 2, 325 名 講 師 寺島 実郎 (三井物産戦略研究所所長、日本総合研究所理事長) 『世界潮流と日本及び北海道の進路』	1 10 12 ※3 ※4	中教審、「我が国の高等教育の将来像」答申 中教審、「新しい時代の義務教育を創造する」答申 中教審、「特別支援教育を推進するための制度の在り方について」答申 愛知県、愛・地球博(3～9 月) 「JR 福知山線脱線事故」、快速電車が脱線、マンション地下駐車場に衝突、死者 107 人、負傷者 400 人以上
	3 3 7 12	会報第 82 号発刊 研究紀要第 42 号発刊 会報第 83 号発刊 平成 17 年度会員登録者数 3, 232 名	※9 ※11	「はやぶさ」、イトカワに到着 「はやぶさ」、イトカワに着陸
2006 (平 18)	1	第 43 回北海道高等学校教育研究大会 会 場 札幌厚生年金会館 参加者 2, 339 名 講 師 吉村 作治(早稲田大学国際教養学部教授) 『夢の実現の仕方』	2 7 12	文科省、「教育改革のための重点行動計画」を発表 中教審、「今後の教員養成・免許制度の在り方について」答申 新教育基本法成立
	3 3 7 12	会報第 84 号発刊 研究紀要第 43 号発刊 青塚会長異動、金間正克氏会長就任 会報第 85 号発刊 平成 18 年度会員登録者数 3, 140 名	※ ※2 ※11	小・中学生の自殺多発 冬季トリノオリンピック(金 1・銀 0・銅 0)、女子フィギュアスケートで荒川静香選手がアジア勢初の金メダル 佐呂間町で瞬間風速 80m の竜巻発生、9 人が死亡、21 人が重軽傷
2007 (平 19)	1	第 44 回北海道高等学校教育研究大会 会 場 札幌厚生年金会館 参加者 2, 355 名 講 師 桜井 進(sakurAi Science Factory、サイエンスナビゲーター) 『サウンド オブ サイエンス ジョン・ネイピア〜対数誕生物語』	1 1 4 4 6	教育再生会議、「社会総がかりの教育再生をー公教育再生への一歩」発表 中教審、「次代を自立した青少年の育成に向けてー青少年の意欲を高め、心と体が伴った成長を促す方策ー」答申 市立函館、士別翔雲、紋別、釧路明輝、登別明日開校 南空知支部と北空知支部を統合し空知支部とする 「教育改革関連 3 法」が国会で可決、成立(教育免許更新制の導入)
	3 3 7 12	会報第 86 号発刊 研究紀要第 44 号発刊 会報第 87 号発刊 平成 19 年度会員登録者数 3, 063 名	※2 ※ ※ ※	郵政民営化がスタート 不二家、赤福、石屋製菓、船場吉兆、ミートホープなど食品偽装事件 年金記録問題発覚
2008 (平 20)	1	第 45 回北海道高等学校教育研究大会 会 場 札幌厚生年金会館 参加者 2, 376 名 講 師 金子 勝(慶應義塾大学経済学部教授) 『ニュースの嘘と教育』	1 1 1 2 3 4 4	文科省、改訂「学校評価ガイドライン」を策定 中教審、「子どもの心身の健康を守り、安全・安心を確保するために学校全体としての取組を進めるための方策」答申 中教審、「教育振興基本計画についてー教育立国の実現」答申 中教審、「小中高特別支援の学習指導要領の改善について」答申 士別、大成、中頓別農業、中札内、室蘭商業、網走高校閉校 札幌大通高校開校
	3 3 7 12	会報第 88 号発刊 研究紀要第 45 号発刊 金間会長退職、宮浦俊明氏会長就任 会報第 89 号発刊 平成 20 年度会員登録者数 3, 049 名	※8 ※9 ※10	中教審、「新時代を切り拓く生涯学習の振興方策について」答申 アテネオリンピック開催 米証券会社リーマン・ブラザーズ経営破綻、世界的な金融危機に 南部陽一郎(シカゴ大)、小林誠、益川敏英(名大)がノーベル物理学賞、下村脩(ボストン大)がノーベル化学賞受賞
2009 (平 21)	1	第 46 回北海道高等学校教育研究大会 会 場 札幌コンベンションセンター 参加者 2, 265 名 講 師 阿刀田 高(作家)、阿刀田 慶子(朗読者)	3 4 6	恵山、妹背牛、遠軽郁陵、紋別北、釧路西、釧路星園、名寄光凌、厚岸水産、厚岸潮見高校閉校 名寄産業、厚岸翔洋高校開校 新型インフルエンザ流行

年	月	高 教 研	月	教 育 関 係 (※その他の出来事)
		『アイデアの発見』		
	3	会報第 90 号発刊	※1	アメリカ、オバマ大統領「チェンジ」就任
	3	研究紀要第 46 号発刊	※8	裁判員裁判始まる
	7	会報第 91 号発刊	※8	第 45 回衆議院選挙で民主党が過半数を確保し政権交代
	12	平成 21 年度会員登録者数 2, 785 名		
2010 (平 22)	1	第 47 回北海道高等学校教育研究大会 会 場 さっぽろ芸術文化の館ホール(旧厚生年金会館) 参加者 2, 129 名 講 師 福岡 伸一(青山学院大学理工学部教授) 『科学のおもしろさをどう伝えるか』	2	バンクーバーオリンピック開催
	3	会報第 92 号発刊	3	札幌星園、余市高校閉校
	3	研究紀要第 47 号発刊	4	余市紅志高校開校
	7	会報第 93 号発刊	10	根岸英一(パデュー大特別教授)、鈴木章(北大名誉教授)がノーベル化学賞を受賞
	12	平成 22 年度会員登録者数 2, 721 名	10 ※ ※6	チリ、サンホセ高山落盤事故で 33 名の作業員救出 人里にクマ出没 「はやぶさ」地球に帰還
2011 (平 23)	1	第 48 回北海道高等学校教育研究大会 会 場 ニトリ文化ホール(旧厚生年金会館) 参加者 2, 061 名 講 師 見田 宗介(東京大学名誉教授) 『現代社会はどこに向かうか』	1	中教審、「学校のキャリア教育・職業教育の在り方について」答申
	3	会報第 94 号発刊	2	大学入試でネット悪用の不正発覚
	3	研究紀要第 48 号発刊	3	東日本大震災、死者不明者約2万人、福島第一原発で深刻な被害
	4	宮浦会長退職、守屋閑氏会長就任	4	北見仁頃、浜益、由仁商業、愛別、増毛、札幌稲北、北都商、名寄農業、厚岸潮見高校閉校
	7	会報第 95 号発刊	4	札幌稲北、稲西が統合し札幌あすかぜ、美唄、美唄工業が統合し美唄尚栄、稚内、稚内商工が統合し稚内、美幌農業、美幌が統合し美幌高校開校
	12	平成 23 年度会員登録者数 2, 592 名	4	FIFA女子ワールドカップ、なでしこジャパン世界1に
			4	テレビ放送が地デジに移行
2012 (平 24)	1	第 49 回北海道高等学校教育研究大会 会 場 ニトリ文化ホール(旧厚生年金会館) 参加者 1, 973 名 講 師 内田 樹 (神戸女学院大学名誉教授・凱風館館長) 『転換期の教育ーグローバリズムに抗して』	3	木古内、三笠、古平、仁木商業高校閉校
	3	会報第 96 号発刊	3	中教審、「学校安全の推進に関する計画の策定について」答申
	3	研究紀要第 49 号発刊	4	新学習指導要領、「理数で先行実施」
	7	会報第 97 号発刊	4	室蘭大谷、登別大谷が統合し大谷室蘭、市立三笠開校
	11	高教研新規HP公開	8	ロンドンオリンピック開催、柔道メダルゼロ
	12	平成 24 年度会員登録者数 2, 473 名	8	中教審、「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について」答申
			※	いじめ問題が深刻化
2013 (平 25)	1	第 50 回北海道高等学校教育研究大会 第 50 回記念大会 会 場 ニトリ文化ホール(旧厚生年金会館) 参加者 1, 963 名 講 師 川口 淳一郎 (JAXA宇宙航空研究開発機構教授) 『「はやぶさ」が挑んだ人類初の往復の宇宙飛行、その 7 年間の歩み』 全体講演のインターネット配信実験 はやぶさ展・高教研展(地下歩行空間)	3	札幌稲西、美唄工業、稚内商工、中川商業、瀬棚商業、登別大谷閉校。
	3	会報第 98 号発刊	4	札幌篠路と札幌拓北が合併して英藍高校開校
	3	研究紀要第 50 号発刊		
	3	50 周年記念誌発行		

高教研登録会員数、研究大会参加者数及び参加率の推移

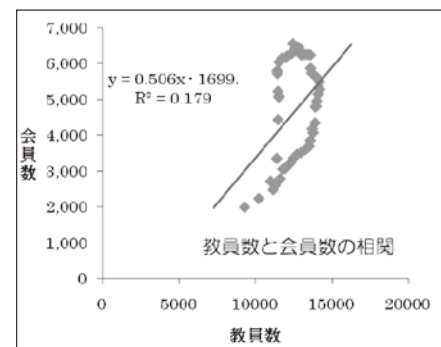
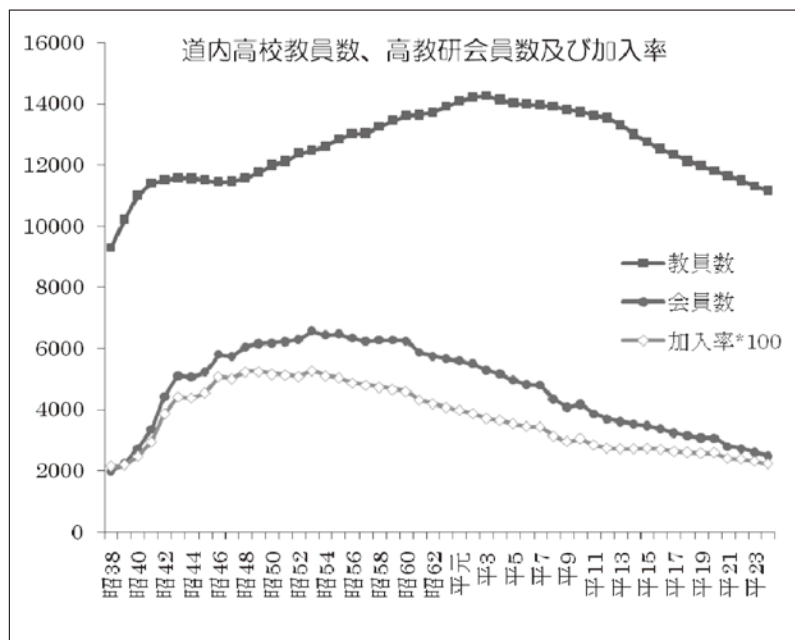


会員数が多いほど、大会への参加人数が多くなることは、特別のことではない。しかし、増加率が、やや正という特徴が認められる。



研究会発足とともに会員数は急激に増加し、昭和53年度の6,549名が最大で、その後は徐々に減少し、平成24年度は2,473名となった。

このように、会員数はピークを経て減少しているが、研究大会への参加者数は、長い期間にわたり3千～4千で推移し、その後、徐々に減少している。そのために、参加率でみると、年々増加傾向にあることがわかる。



教員数が増えても会員数が増加していない期間も相当あり、R²からも単純な相関は認められない。よって、教員数が減少に転じたことが、会員数減の主たる理由とは、言い切れない。

加入率は、昭和53年度の52.6%が最大で、その後は減少が続いており、平成24年度は22.2%となっている。



本部事務局の歩み

昭和 38 年 5 月、札幌南高校を会場にして設立総会が開かれ「北海道高等学校教育研究会」が産声を上げた。全てが何もないところからの出発である。それでも昭和 39 年 1 月に札幌旭丘高校を会場に開催された第 1 回大会には、森戸辰男中央教育審議会会長を全体講演に招き、会員数 2 千名弱、参加者 335 名であった。昭和 40 年 1 月、第 2 回研究大会は静修高校を会場に開催され、このときから教科別集会被開催されている。会則には、「本会は高等学校の各教科などに関する事項を研究し、会員相互の研修と識見の向上につとめ、高等学校教育の振興を図る」ことを目的として定めており、誰もが会員となって参加できる自由な教育研究団体である。



第 10 回大会要項

その後、昭和 41 年度、3,343 名の会員数は、昭和 47 年度には、5,714 名と 6 千名に迫る勢いで急増し、昭和 43 年度には市民会館、そして、昭和 47 年度、10 周年記念大会からは、厚生年金会館（現ニトリ文化ホール）を会場に開催を続けている。ピークの昭和 53 年度には、会員が 6 千 5 百名を超え、道内の高校教員の 2 人に 1 人以上（52.3%）が会員となり、昭和 55 年度には研究大会に 4 千百名を超える参加があった。



第 20 回大会要項



その後、会員数は徐々に減少を始めるが、昭和 57 年度には 20 周年記念大会を開催し、昭和 60 年度、6,231 名の会員数を誇り、参加者の高止まりが、平成 4 年度の 30 回大会の前頃まで続く。しかし、その後も会員数の減少が続き、高止まりしていた参加者数も減少の一途をたどり、平成 5 年度、会員数が 5 千名を切り、平成 10 年度には、4,167 名となる。

平成 11 年度、会員数は、4 千名を切り、平成 14 年度、40 周年を迎え、平成 22 年度には、3 千名を切る。平成 24 年度、会員数は 2,473 名となり、50 周年記念大会を迎えるに至る。

本部事務局には、全体を統括する「総務」の下に、「企画」、「運営」、「会計」の 3 部門が設けられており、企画は、さらに「編集・記録」、「会員登録」、「発送・印刷」、「研究紀要」の 4 グループに、また、運営は、「会場設営」、「受付」、「接待・救護」の 3 グループに分かれている。また、会計は、「会計」の他に日常的な「庶務」全般の業務を行っている。

会の運営にあたっては、地区支部の業務の軽減化、会費の見直し、旅費規程の緩和、さらには、道私立中高協会、道校長協会との連携など、改革を進めてきたが、今日の国際化、情報化、少子高齢化といった時代を迎え、価値の多様化、あるいは、インターネットや携帯電話、スマホ、タブレット PC といった様々なツールから情報が溢れる中であって、会員数の減少も参加者数の減少も止むを得ない面がある。しかし、研究大会の参加率を見ると、いまなお増加の一途をたどっていることは、本研究会の今後を考えるうえで注目に値する。

今後とも、組織・機構の見直しも含め、教育研究の在り方など、この 50 周年記念大会を通じ、新たな展望が拓かれていくことを願っている。



第 1 回大会要項



第 30 回大会要項



研究紀要第 1 号

◆ 50 周年記念事業 ◆

1 基本方針

- (1) 魅力ある、より充実した研究会を目指す。
- (2) 教科部会の予算を増額して、裁量を広げる。
通常予算以外に積立金の半分程度を各教科部会へ。
- (3) 今後のあるべき姿を模索する。

2 記念事業

(1) 教科研究事業への増額補助

各教科 18 万円の増額補助を行いました。

(2) 「記念講演」及び特別展示「はやぶさ」・「高教研」展

川口氏の記念講演に合わせて特別展示を地下歩行空間「憩いの空間」で1月6日(日)～10日(木)の期間に開催し、50年に及ぶ高教研の活動を道民に広報しました。

「はやぶさ」展：本体・帰還カプセルレプリカ・小惑星イトカワ・M-V ロケット模型、パネル展示(3枚)

「高教研」展：パネル展示(4枚)・資料展示(50年の歴史・部会の概要など)



(3) 記念講演の「地方配信実験」

株式会社 KDDI のご協力により、全体講演を Ustream で配信しました。

閲覧方法等(→パスワードなし、HP 上)は、大会参加証発送に合わせて、別途、ご案内しました。

(4) HP の全面改定

レンタルサーバーを借用し、CMS を基本とする新規 HP を 11 月より公開しました。

電子化を終えた過去の資料は、自由に閲覧できるようになっています。今後も追加を予定しています。

また、高教研の新メールアドレスは、次年度の総会・第 1 回研究協議会から利用を開始し、それまでは、従来のアドレス (asahigaoka-h@sapporo-c.ed.jp) を用います。

(5) 50 周年記念誌

3 月に発行しました。

記念誌は各学校に 1～2 冊配布し、会員は HP 上で閲覧できるようにしました。

(6) 「功労表彰」

この 10 年間(平成 15 年度～平成 24 年度)の大会役員、地区支部長、教科部会長及び事務担当者を紙面上で表彰しました。



北海道高等学校教育研究会

創立 50 周年記念特別展示「はやぶさ」・「高教研」

北海道民の皆様へ

新年あけましておめでとうございます。

北海道高等学校教育研究会（略称「高教研」）は、昭和 38 年 5 月、札幌南高等学校を会場に、札幌旭丘高等学校長梶浦善次氏を初代会長として設立された、北海道の高等学校の教員や教育委員会の職員を中心とした教育研究団体です。

この度は、その創立 50 周年にあたり、道民の皆様からのご支援ご協力に感謝を込めて、1 月 9 日、ニトリ文化ホール（旧厚生年金会館）を会場に、宇宙航空研究開発機構（JAXA）教授川口淳一郎氏の全体講演会を開催するのに合わせて、この地下歩行空間を利用した特別展示「はやぶさ」・「高教研」を企画いたしました。

ここ 10 年間を振り返ると、「はやぶさ」が、7 年の歳月をかけて、あらゆる苦難を乗り越えて、人類初の往復の宇宙飛行という使命を果たしたことに、歓喜の声を上げ、誰もが感動を覚えたことは記憶に新しいところです。北海道教育の発展という使命を担い、「未来を担う心豊かな生徒の育成」を研究主題に掲げ、道内各地から集まった教職員の「研鑽」・「修養」に寄与するとともに、その成果をそれぞれの学校に持ち帰り、情熱を持って教育活動に取り組むことで、そこで学ぶ生徒のみなさんが、未来に向かって力強く健やかに育まれていくことを、私たち「高教研」に携わる者たちは、心より願っております。

今後とも道民の皆様からのご指導ご鞭撻をよろしくお願い申し上げます。



北海道高等学校教育研究会
会長 守 屋 開
(札幌旭丘高等学校長)

特別展示「はやぶさ」・「高教研」展

小惑星探査機(MUSES-C)「はやぶさ」

こんな形・性能の衛星です

開発機	2002年(平成14年)5月10日
打ち上げ機	2003年(平成15年)5月13日
打ち上げ場所	種子島宇宙センター
重量	5,170kg(発射時)
長さ	10.5m(全長)
幅	約1.5m(最大幅)
高さ	約1.5m(最大高)
電力	太陽電池発電
通信機	Xバンド

開発の目的と役割

1. 工学技術実証
(小惑星探査機の技術的実現性の検証と技術的課題の抽出)
2. サンプルリターン技術の確立
(小惑星からのサンプルリターン技術の確立)
3. 小惑星の調査
(小惑星の調査と調査結果の公表)

ここがスゴイ!

「はやぶさ」ミッションは世界初の「はやぶさ」の観測装置がスゴイ!

チャレンジ!

1. 電気推進エンジン稼働[達成]
(1) 2003年(平成15年)5月13日
2. 地球スウィングバイ成功[達成]
(1) 2003年(平成15年)5月13日
3. イトカワにタッチダウンしてサンプル採取[達成]
(1) 2005年(平成17年)11月1日
4. カプセルが地球に帰還、大気圏に再突入して回収[達成]
(1) 2010年(平成22年)6月13日
5. イトカワのサンプル入手[達成]
(1) 2010年(平成22年)6月13日

宇宙航空研究開発機構

はやぶさのパネル

小惑星「イトカワ」

「はやぶさ」が撮影したイトカワ

「はやぶさ」が撮影したイトカワ

イトカワは、小惑星帯に属する小惑星で、その表面は非常に多くの割や石でおおわれていました。一方、細かい石やおおわれた場所もありました。イトカワは密度が1.9g/cm³と、他の小惑星などと非常に近い値となっており、内部に空洞があるという考えがもたれています。イトカワは、互いに衝突しあうことで形成されたと考えられています。イトカワは、太陽系初期に形成された微惑星の残骸と見られています。イトカワは、互いに衝突しあうことで形成されたと考えられています。イトカワは、太陽系初期に形成された微惑星の残骸と見られています。

「はやぶさ」が撮影したイトカワ

イトカワは、小惑星帯に属する小惑星で、その表面は非常に多くの割や石でおおわれていました。一方、細かい石やおおわれた場所もありました。イトカワは密度が1.9g/cm³と、他の小惑星などと非常に近い値となっており、内部に空洞があるという考えがもたれています。イトカワは、互いに衝突しあうことで形成されたと考えられています。イトカワは、太陽系初期に形成された微惑星の残骸と見られています。

宇宙航空研究開発機構

「はやぶさ」帰還カプセル

「はやぶさ」の目的は、小惑星のサンプルを地球に持ち帰り、太陽系天体の往復航行に必要な技術を実証することにあります。回収したサンプルを地球に送り届ける役割を担っているのが帰還カプセルです。2005年11月、「はやぶさ」は小惑星イトカワに到着し、そのサンプルを採取しました。その後発生した化学エンジンの燃料漏洩により、地球への帰還計画は大幅な変更を余儀なくされましたが、「はやぶさ」は数々の困難を克服し、地球帰還への旅を続けてきました。

日本時間2010年6月13日22時51分、「はやぶさ」は無事大気圏に突入しました。そして、小惑星イトカワのサンプルを搭載したカプセルが無事オーストラリアのウーメラ砂漠に着地し、回収されました。

カプセルの回収

2010年6月13日に最後の軌道修正を行った「はやぶさ」は、6月13日、いよいよ大気圏再突入への最終段階に入りました。日本時間(以下全て)16時頃に、7年前に打ち上げられた内之浦宇宙空間観測所上空を通過し、19時51分に無事カプセルを分離しました。その後、「はやぶさ」は正角カプセルで最後の地球帰還を遂行し、徐々にオーストラリア・ウーメラ砂漠地域に向けて高度を下げていきました。22時51分頃に大気圏に再突入しました。「はやぶさ」母船は大気圏で燃え尽きた後、カプセルは降下を続けました。ウーメラ砂漠の地味な「はやぶさ」ミッションのフィナーレとなる明るい火柱が観測されました。22時56分、高度5kmでカプセルの熱シールドが分離されるとほぼ同時にパラシュートが展開され、ピーコン発煙が開始されました。カプセルは23時8分、着陸しました。

「はやぶさ」カプセルからのピーコンは、発煙開始から間もなく、地上の各探査機によって検出され、発煙源の方位が決定されました。この探検結果をもとにヘリコプターによる捜索の結果、6月13日23時56分にウーメラ内の着陸予定区域内において、探検にも関わらず、着陸したカプセルがヘリコプターからの目視により発見されました。

カプセル回収作業は、14日に行われました。カプセルに損傷はなく、火災の安全化を確認後、移送用の輸送コンテナへの梱包が行われ、RCC(Range Control Center)へ搬送されました。作業は16時8分に完了しました。

熱シールドは14日14時頃に発熱され、翌15日13時2分に回収作業が完了しました。

宇宙航空研究開発機構

この50年の全体講演 —その時代を振り返る—

回	開催 年度	演 題	講 師 (敬称略)	テーマ	会長	会員数	期
1	昭38	高校教育の問題点	森戸 辰男 中央教育審議会会長	高等学校教育と学習指導の現代化について	高教研 会長 森戸辰男	1,989名	創設期
2	昭39	日本教育の課題	高坂 正顕 東京芸術大学長			2,228名	
3	昭40	考える力をもった人間を育てる教育	沢田 慶輔 東京大学教授			2,710名	
4	昭41	後期中等教育の諸問題について	平塚 益徳 国立教育研究所長			3,343名	
		大脳生理学と精神衛生について	中川 秀三 札幌医科大学教授			3,429名	
5	昭42	わが国の中等教育	細谷 俊夫 東京大学教授			4,298名	
		進路指導について	伊藤 祐時 日本大学教授			5,090名	
6	昭43	転換期における日本の諸問題	高坂 正亮 京都大学助教授			5,052名	
		開拓百年と北海道の野獣	大飼 哲夫 北海道大学名誉教授			5,213名	
7	昭44	宇宙開発と変革の時代	岸本 康 共同通信社論説委員/科学評論家			5,792名	急成長期
		教育改革と後期中等教育の諸問題 —諸外国の実情と関連して—	益井 重夫 国立教育研究所第2研究部長			5,714名	
8	昭45	日本と中国	衛藤 藩吉 東京大学教養学部教授	研究協働を行う	高教研 会長 森戸辰男	5,031名	
		情報化社会における教育のシステム	岸田 純之助 朝日新聞論説委員/評論家			5,143名	
9	昭46	民主主義を考える	林 健太郎 東京大学文学部教授			5,194名	
		教育革新の課題	矢口 新 能力開発工学センター所長			5,201名	
10	昭47	地球科学と環境問題	和達 清夫 中央公害審議会会長			5,272名	
		変わりゆく日本と教育	市村 真一 京都大学教授			5,400名	
11	昭48	近代学校制度 —その性格と展望—	天城 勲 日本育英会理事長			5,317名	
		教育評価の今日の問題	橋本 重治 応用教育研究所長			5,411名	
12	昭49	日本の心と世界の心	会田 謹次 京都大学教授	高等学校教育と学習指導の現代化を推進する	高教研 会長 森戸辰男	5,230名	充実・発展期
		ガンの免疫	菊地 浩吉 札幌医科大学教授			5,246名	
13	昭50	言葉としつけ	池田 弥三郎 慶応義塾大学教授			5,285名	
		北の環境の中で	田上 義也 北海道大学講師			5,302名	
14	昭51	自然保護	加藤 陸奥雄 東北大学学長			5,328名	
		「教え」への幻想	岡路 市郎 北海道教育大学学長			5,340名	
15	昭52	国際情勢と日本の進路	村松 剛 筑波大学教授			5,346名	
		医療と福祉	河邨 文一郎 札幌医科大学教授			5,365名	
16	昭53	日本の昔	黛 敏郎 作曲家			5,395名	
		近代日本の岐路	田中 彰 北海道大学教授			5,409名	
17	昭54	万葉のこころ	犬養 孝 大阪大学名誉教授	高等学校教育と学習指導の現代化を推進する	高教研 会長 森戸辰男	5,425名	新たな未来の創造期
		エネルギー資源の今日と将来	武谷 憲 北海道大学名誉教授			5,440名	
18	昭55	かけがいのない地球と私たちの環境	今堀 宏三 大阪大学教授			5,377名	
		美術に見る東西のこころ	倉田 公裕 北海道近代美術館長/明治大学教授			5,385名	
19	昭56	日本の教育を考える	広中 平祐 京都大学教授			5,395名	
		「雪華図説」と雪文様	小林 慎作 北海道大学低温科学研究所教授			5,409名	
20	昭57	共生の時代	黒川 紀章 建築家			5,425名	
		アイヌ・日本文化の基層	梅原 猛 京都市立芸術大学教授			5,440名	
21	昭58	新しい人間像と教育	外山 温比呂 お茶の水女子大学教授			5,455名	
		北からの出発	伊藤 隆市 北海道教育大学教授			5,470名	
22	昭59	なぜ 今 教育改革か	黒羽 亮一 日本経済新聞社論説委員	高等学校教育と学習指導の現代化を推進する	高教研 会長 森戸辰男	5,485名	新たな未来の創造期
		北方民族における伝統と近代	岡田 宏明 北海道大学文学部教授			5,500名	
23	昭60	生涯教育の将来	加藤 秀俊 放送大学教授	高等学校教育と学習指導の現代化を推進する	高教研 会長 森戸辰男	5,515名	新たな未来の創造期
		これからの企業の求める人間像	石黒 直文 北海道拓殖銀行常務取締役			5,530名	

回	開催 年度	演 題	講 師 (敬称略)	テーマ	会長	会員数	期
24	昭61	ことばとこころ	江藤 淳 東京工業大学教授	高等学校教育と学習指導の現代化を推進する	高教研 会長 森戸辰男	5,545名	昭和から平成への転換期
		地方自治と教育	岡村 正吉 北海道釧路市助役			5,560名	
25	昭62	近ごろ思うこと	野坂 昭如 作家			5,575名	
		心臓移植をめぐる	小松 作蔵 札幌医科大学副学長			5,590名	
26	昭63	日本人と創造性	多胡 輝 千葉大学教授			5,605名	
		バイオテクノロジーの現状と問題点	美濃 羊輔 帯広畜産大学教授			5,620名	
27	平元	日本人の心	金田一春彦 文学博士			5,635名	
		タンチョウの四季	高橋 良治 釧路市丹頂鶴自然公園園長			5,650名	
28	平 2	経済法秩序における公正としての正義 —日米構造協議を中心に—	菊地 元市 青山学院大学法学部長			5,665名	
		心の危機と反応	高畑 直彦 札幌医科大学神経精神科教授			5,680名	
29	平 3	心の底をのぞく	なだ いなだ 精神科医/作家	時代の変化に対応する高等学校教育の創造	高教研 会長 森戸辰男	5,695名	教育再生期
		オスとメスのエソロジー	坂本 与市 北海道文理科短期大学学長			5,710名	
30	平 4	技術革新の現在と社会の変容	伊東 光晴 放送大学教授/京都大学名誉教授			5,725名	
		耐えて勝つ	古葉 竹識 野球評論家			5,740名	
31	平 5	自然と人間	C.W.ニコル 作家			5,755名	
		子どもが発達するとき —必要とあそびのあいだ—	若井 邦夫 北海道大学教育学部教授			5,770名	
32	平 6	共通感覚と自己表現	中村 雄二郎 明治大学法学部教授			5,785名	
		「故郷忘れがたく候」の旅	杉岡 昭子 札幌国際プラザ専務理事			5,800名	
33	平 7	人間・進化の道からずれた動物	河合 雅雄 京都大学名誉教授/日本福祉大学教授			5,815名	
		世界の中の日本と日本人	山中 輝子 北海道学芸大学人文学部教授			5,830名	
34	平 8	大むかしと現代	佐原 真 国立歴史民俗博物館副館長	新しい時代を切り拓く高等学校教育の創造	高教研 会長 森戸辰男	5,845名	新たな未来の創造期
		子どもを親る目 —教育臨床心理の立場から—	横溝 園子 北海道大学教育学部教授			5,860名	
35	平 9	国際化と私たちの暮らし	浅井 信雄 神戸市外国語大学教授			5,875名	
		カウンセリングを体験してみませんか	中野 武房 北海道学芸北見大学教授			5,890名	
36	平 10	変革期の高校教育を考える	梶田 徹一 ノートルダム女子大学学長			5,905名	
		「今こどもの心は」 —問題行動の背景を探る—	シンポジウム シンポジウム			5,920名	
37	平 11	からだと脳	養老 孟司 北里大学教授			5,935名	
38	平 12	青春の夢	河合 隼雄 京都大学名誉教授			5,950名	
39	平 13	日本社会の構造と教育	阿部 謹也 共立女子大学学長			5,965名	
40	平 14	日本人のこころ	五木 寛之 作家	新しい時代を切り拓く高等学校教育の創造	高教研 会長 森戸辰男	5,980名	新たな未来の創造期
41	平 15	宇宙の視点からの教育	毛利 衛 宇宙飛行士/日本科学未来館館長			5,995名	
42	平 16	世界潮流と日本および北海道の進路	寺島 実郎 三井物産戦略研究所所長/日本総合研究所所長			6,010名	
43	平 17	夢の実現の仕方	吉村 治治 早稲田大学国際教養学部教授			6,025名	
44	平 18	サウンド オブ サイエンス ジョン・ネイピア ～ 対数誕生物語	河合塾、早稲田塾、数学講師/sakurai			6,040名	
45	平 19	ニュースの嘘と教育	金子 勝 慶應義塾大学経済学部教授			6,055名	
46	平 20	アイデアの発見	阿刀田 高 作家			6,070名	
		阿刀田 慶子 朗読家				6,085名	
47	平 21	科学のおもしろさをどう伝えるか	福岡 伸一 青山学院大学理工学部化学・生命科学科教授			6,100名	
48	平 22	現代社会はどこに向かうか	見田 宗介 東京大学名誉教授	北海道高等学校教育研究会 設立50周年記念大会	北海道高等学校教育研究会 会長 森戸辰男	6,115名	新たな未来の創造期
49	平 23	転換期の教育 —グローバル化に抗して—	内田 樹 神戸学院大学名誉学長			6,130名	
50	平 24	「はやぶさ」が跳んだ人類初の往復の宇宙旅行、その7年間の歩み	川口 孝一郎 宇宙航空研究開発機構教授			6,145名	

この10年の全体講演 —ポートレート—

第43回



「夢の実現の仕方」

吉村 作治 氏

第41回



毛利 衛 氏

「宇宙の視点
からの教育」

第42回



「世界潮流と日本および北海道の進路」

寺島 実郎 氏



第44回



「サウンド オブ サイエンス
ジョン・ネイピア〜対数誕生物語」

桜井 進 氏



阿刀田 高 氏
阿刀田 慶子 氏

第49回



内田 樹 氏



「転換期の教育
『グローバルバリズムに抗して』」

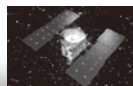
第40回



五木 寛之 氏



「日本人の心」



第50回記念大会



川口 淳一郎 氏



第46回
「アイデアの発見」

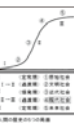


第47回



福岡 伸一 氏

「科学のおもしろさを
どう伝えるか」



第48回



「現代社会はどこに向かうか」
見田 宗介 氏



北海道高等学校教育研究会50年の歩み

高教研

道内の高等学校、教育委員会、教育研究機関等の職員を対象に、教科教育に関する研究を通じて、会員相互の研修や識見の向上につとめ、高等学校教育の振興を図ることを目的に、昭和38年に設立された教育研究団体であり、現在の会員数は、2,400名余りを有する。全ての事業は、会員の会費で運営されており、本部事務局は、会長校（札幌旭丘高校内）に置かれている。



創設期

S38.5~41.4

昭和38年5月、梶浦善次氏が初代会長に就任。会員数 1,985名。昭和39年1月、森戸辰男中央教育審議会会長を招き第1回研究大会（旭丘高校）を開催する。昭和40年1月、第2回研究大会（静修高校）から教科別集會が加わる。

昭38「高等学校新教育課程」実施、昭39「ナショナル大統領略殺」「東京列ビッ」、昭40「ハッパム戦争」
主題「高等学校教育と学習指導の現代化について、研究協議を行う」（昭38〜）

初代会長 梶浦善次（S38.5~41.4）



昭和から平成への転換期

S61.4~H5.4

昭和61年度、会員数が6千名を切り、緩やかに減少を始め、平成4年度、5,142名となり、30周年記念大会を開催する。

昭61「高校進学増への対応」、「いじめ」全国で2校に1校、臨教審「第2次答申（初任者・現職研修、不適格教師排除）」、昭62「第3次答申（教科書検定強化、大学教員任期制）」、「最終答申（個性重視、生涯学習、変化への対応）」、教育課程審「最終答申（自ら学ぶ力）」、平2中教審「生涯学習の基盤整備」答申、平3中教審「新し時代に対応する教育諸制度改革」答申、平4「中学不登校100人に1人」、「学校5日制（第2土曜日休業）」

第7代会長 小柳六郎（**~62.4）
第8代会長 高畠彦彦（S62.4~H3.4）
第9代会長 本間恒太（H3.4~4.4）
第10代会長 染谷昌志（H4.4~**）



急成長期

S41.4~48.4

昭和41年度、3,343名の会員数は、昭和47年度には、5,714名と6千名に迫る勢いで増加。昭和43年度には市民会館、そして、昭和47年度、10周年記念大会からは、厚生年金会館（現ニトリ文化ホール）を会場に開催する。

昭41中教審「後期中等教育の拡充整備〜期待される人間像」答申、昭45「高等学校学習指導要領（第4次）」告示

第2代会長 長瀬米蔵（S41.4~45.4）
第3代会長 磯貝芳司（S45.4~*）



教育再生期

H5.4~11.4

平成5年度、会員数が5千名を切り、平成10年度には、4,167名となる。

平5最高裁「家永裁判」教科書検定合憲、平6センター試験志願者53万1千人、福岡県教委「指導要録全面開示」、「高校中退者10万1千人」、「入学式の国旗掲揚95%超、国歌斉唱小中8割、高7割」、「学校が楽しい」中・高で急減、平7「阪神淡路大震災」、「地下鉄サリン事件」、「学級定員43」、「学校週5日制（第2・4土曜休業）」、「スクールカウンセラー派遣（いじめ、不登校）」、平8「学級定員40」、「O157」、平8中教審第1次答申「21世紀を展望した教育の在り方（生きる力、ゆとり）」、平9中教審第2次答申「21世紀を展望した我が国の教育の在り方（能力適性、入試改善、中高一貫、飛び級、高齢化社会）」、平10教課審答申「教育課程の基準の改善（自ら学び自ら考える）」、平11「高等学校学習指導要領」改訂

主題「時代の変化に対応する高等学校教育の創造」（平5〜）

第10代会長 染谷昌志（***~7.4）
第11代会長 綾井健二（H7.4~9.4）
第12代会長 武田泰明（H9.4~11.4）



充実・発展期

S48.4~61.4

昭和48年度、会員数は、6千名を超え、ピークの昭和53年度は、6,549名を記録する。その後、徐々に会員数が減少を始めるが、昭和57年度、20周年記念大会を開催し、昭和60年度、6,231名の会員数を誇る。

昭53「高等学校学習指導要領（第5次）」告示、昭54「共通一次試験」、昭58「校内暴力」、昭59「臨教審」設置、「中卒増対策」道教委へ答申、「全国で高校中退10万人上回る」、昭60臨教審「第1次答申（我が国の伝統文化、日本人の自覚、6年制中等教育学校、単位制高校、共通テスト）」、「教育課程審」設置

主題「高等学校教育と学習指導の現代化を推進する」（昭53〜）

第3代会長 磯 芳司（*~52.4）
第4代会長 瀬戸哲郎（S52.4~54.4）
第5代会長 梶浦 浩（S54.4）
第6代会長 尾崎信夫（S56.10~60.4）
第7代会長 小柳六郎（S60.4~**）



新たな未来の創造期

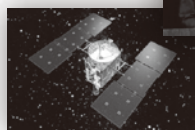
H11.4~

平成11年度、会員数は、4千名を切り、平成14年度、40周年を迎え、平成22年度には、3千名を切る。平成24年度、2,473名となり、50周年記念大会を迎える。

平11「地方分権一括法」、「国旗・国歌法」、「学習指導要領改訂（第7次）（ゆとり教育、総合学習）」、平12「道内高校入試改革（学力点、学習点）」、中教審「少子化と教育」報告、平13「文部科学省」発足、「同時多発テロ」「狂牛病」、平14中教審「教員免許制度」答申、「完全学校週5日制」、平15「イラク戦争」、「学習指導要領」実施、「はやぶさ」打ち上げ、「指導要領一部改正（基準性、総合学習・個に応じた指導）」、平17「はやぶさ、イトカワに着陸」、平18中教審「今後の教員養成・免許制度」答申、「新教育基本法」、平19「郵政民営化」、「教育改革関連3法（教育免許更新制の導入）」成立、平20「リーマン・ブラザーズ」破たん、平成21「オバマ大統領」就任、「新型インフルエンザ」、「政権交代」、平22「はやぶさ」帰還、平成23年「東日本大震災」、「地デジ」移行、平24「学習指導要領」理数で先行実施

主題「新しい時代を切り拓く高等学校教育の創造」（平16〜）
主題「未来を担う人を育む北海道高等学校教育の創造」（平22〜）

第13代会長 田村 勤（H11.4~13.4）
第14代会長 島 隆（H13.4~15.4）
第15代会長 青塚健一（H15.4~18.4）
第16代会長 金間正克（H18.4~20.4）
第17代会長 宮浦俊明（H20.4~23.4）
第18代会長 守屋 開（H23.4~25.4）



北海道高等学校教育研究会

本部事務局（北海道札幌旭丘高等学校内）

Tel 011-513-2238

HP <http://kokyoken.com/>

高教研の活動 - 14の地区支部と14の教科部会 -

北海道高等学校教育研究会

地区支部活動

全道の14地区支部が会員募集を担い、併せて地区支部の研究事業を独自に開催。
地区の実態やこれまでの活動を大切にしながらも、新しい時代を見据えて、
未来を担う若い教員の研修の場として大きく寄与している。



檜山地区学力向上推進会議
檜山地区地域連携研修



本部と事務担当者研究会



研修活動



本部と事務担当者



国語研究会



会長



服飾手芸「スイーツデコ」
湧別高校



家庭看護福祉
栗山高校

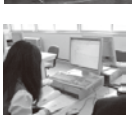


数学「学習意欲の向上」
倶知安高校

地区支部	会員数	事務局校
石狩	1,019	札幌拓北
渡島	174	函館中部
檜山	34	江差
後志	131	二セコ
上川	181	南幌
留萌	174	旭川南
宗谷	43	留萌千望
網走	61	枝幸
釧路	156	遠軽
根室	124	釧路江南
十勝	48	羅臼
胆振	123	帯広緑陽
日高	144	穂別
合 計	61	平取
	2,473	(H24.12現在)

教科部会活動

会員は14教科部会のいずれかに所属し、研究大会の2日目、各会場で開催される「教科別集会」に参加し、講演会や研究発表・研究協議を通して力量を高め、各学校に戻って実践に役立てる。



服飾文化「調べ学習」
枝幸高校



司会



分科会



開会式



分科会



役員



事務局会場準備



専門高校Power Upプロジェクト
旭川農業高校



琴似工業高校定時制



講演



分科会



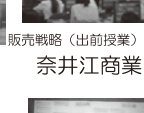
分科会



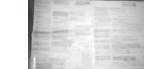
助言者



実験演示



販売戦略（出前授業）
奈井江商業



考える授業
帯広緑陽高校

教科部会	会員数	事務局校
国語	266	札幌新川
地歴・公民	302	札幌平岡
数学	284	札幌平岸
理科	289	札幌篠路
保健体育	243	江別
養護	64	札幌北
芸術	108	札幌白陵
英語	334	千歳
家庭	84	札幌東陵
農業	123	岩見沢農業
工業	77	札幌琴似工業
商業	158	札幌西小樽
水産	84	小樽水産
情報	57	札幌平岸
合 計	2,473	(H24.12現在)

各教科部会の研究主題	会 場
言語活動の充実 ～組織的な授業改善に向けて～ 課題意識を持ち、主体的に学び考える力を育む学習指導の工夫・改善 数学的な見方や考え方を活用し、確かな学力の確立を目指す数学教育 科学的な自然観を育成する理科教育の実践 逞しい生徒を育てる授業を求めて 現代的な健康課題の解決と学校保健活動の推進をめざして 豊かな感性を育む芸術教育 21世紀に生きる地球市民を育む英語教育 生涯を見通して生活を創造する力を育む家庭教育 北海道の未来を拓く農業教育の創造 新しい時代を切り開く工業教育の創造と実践 創造性豊かな人材育成のためのビジネス教育 変化の激しい時代をきり拓く水産・海洋教育はいかにあるべきか 求められる授業の構想、デザイン	札幌JPA パソコンセンター 札幌平岡高校 札幌エルブラザ 市立札幌大通高校 江別高校 札幌市教育文化会館 札幌白陵高校 札幌大学 札幌エルブラザ 北農保健会館 札幌全日空ホテル 北大学術交流会館 小樽水産高校 札幌北高校
★平成25年1月10日（木）、各会場で教科別集会が開催されます★	

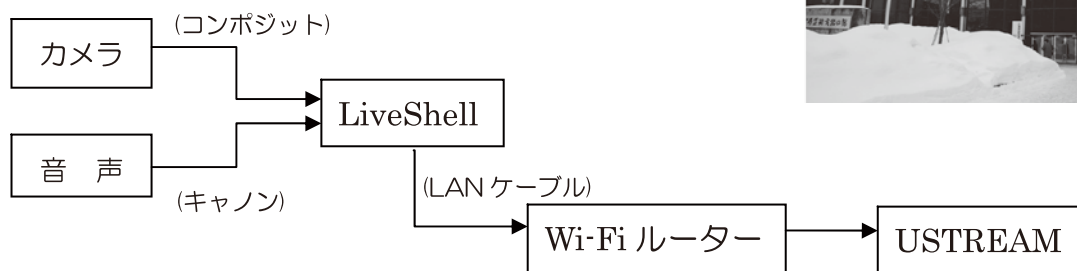
高教研 50 周年記念事業

記念講演の「地方配信実験」実施要領

実験内容 北海道高等学校教育研究会 50 周年記念講演を USTREAM を利用して
動画配信する。

配信日時 平成 25 年 1 月 9 日 (水) 13:40 ～ 15:40

構 成



カメラ (旭丘高校放送局より借用)
音声 ホール音響 (キャノン)
LiveShell (高教研にて購入)
Wi-Fi ルーター (KDDI より借用)
USTREAM 有料アカウントを取得 (高教研にて 2 ヶ月間)
視聴アドレス <http://www.ustream.tv/channel/do-koukyouken>

配信試験

平成 24 年 10 月 16 日 (火) 16:00 ～ 旭丘高校にて
平成 24 年 12 月 3 日 (月) 15:00 ～ ニトリホールにて

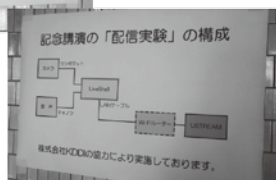
留 意 点

- ・ 講演講師よりインターネット配信についての許諾を得て実施。
- ・ 株式会社 KDDI の協力により実施。





配信のお知らせ



簡単な機器構成



単焦点プロジェクターとタブレットPCのデモ



通常のビデオカメラで撮影



全体講演の配信画像



会場内の通路の床に
LAN ケーブルを固定。



LAN ケーブルの箱の上に WiFi ルーター



音源はホールのマイクから



三脚脇の小さな LiveShell が
カメラ画像を USTREAM へ



カメラは固定のままで

功劳表彰

ご氏名は五十音順にさせていただきました。
読み違い等がありましたらお許しください。

本部役員

樹一保貴一隆優俊隆人彦克二一子之進昭之敏之廣覺次雄篤彦朗明二開	英健吉尚俊雅壽伸正英清真理博秀雅憲憲睦雅克俊昭	澤塚野戸上本名保庭方原間村田藤宮田山井鉢村岡瀬江屋野田木浦山屋	相青淺井井岩海老久大大緒小金河木佐四滝館土中中西廣古古牧増丸宮村守
---------------------------------	-------------------------	---------------------------------	-----------------------------------

地区支部長・教科部会長

[illegible]

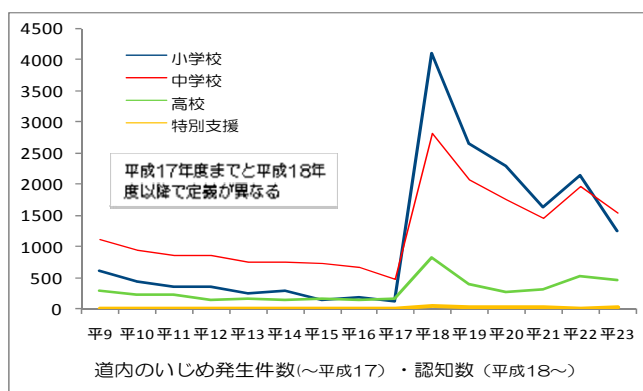
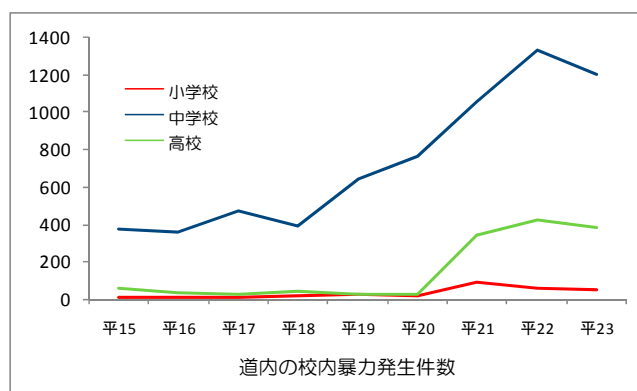
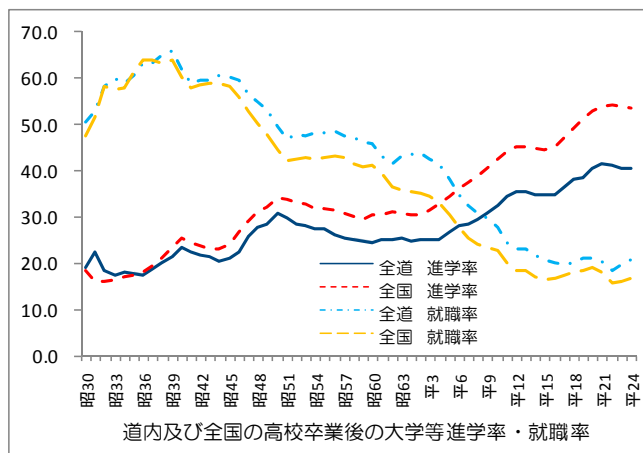
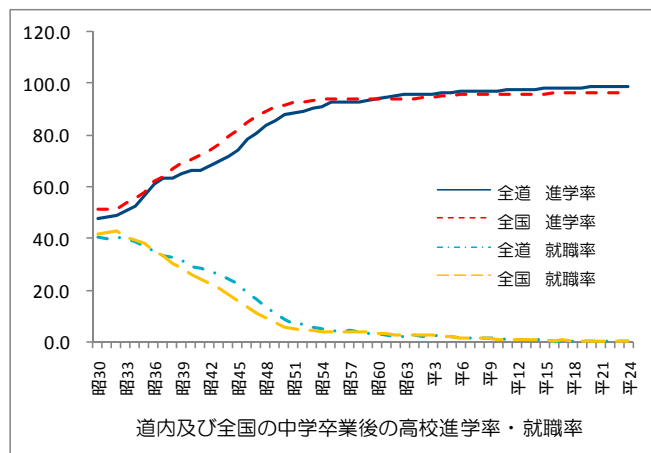
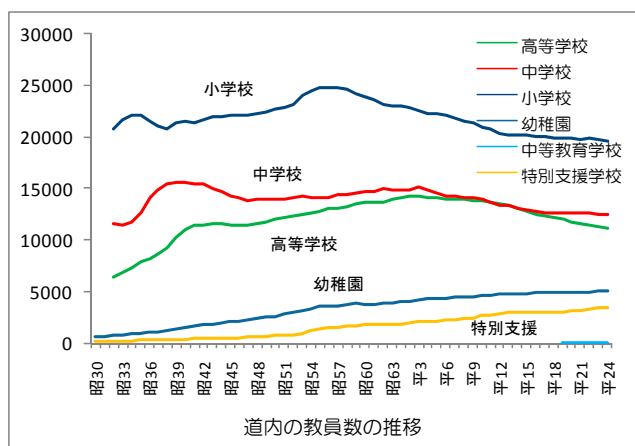
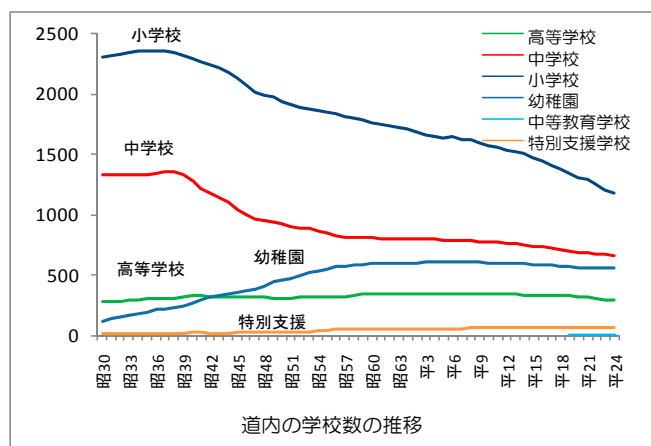
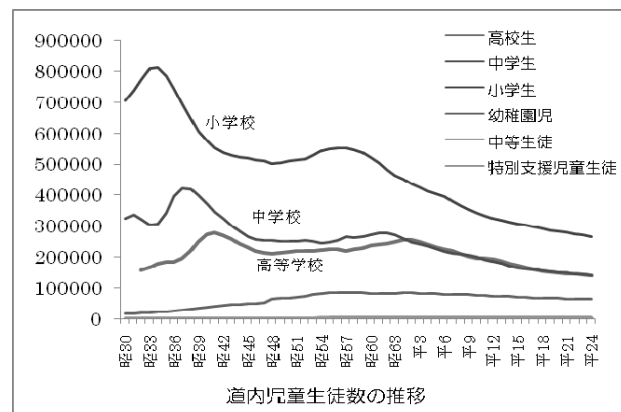
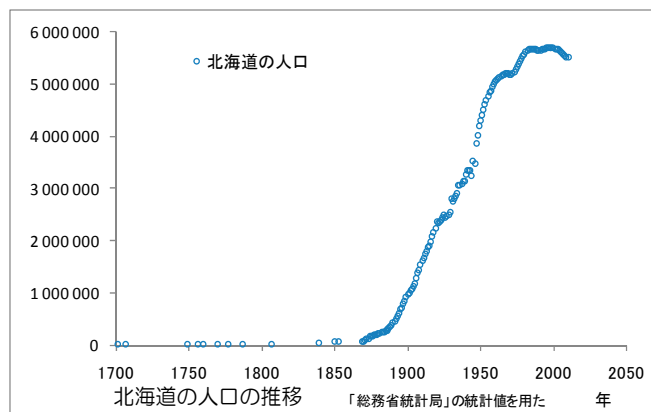
事務担当

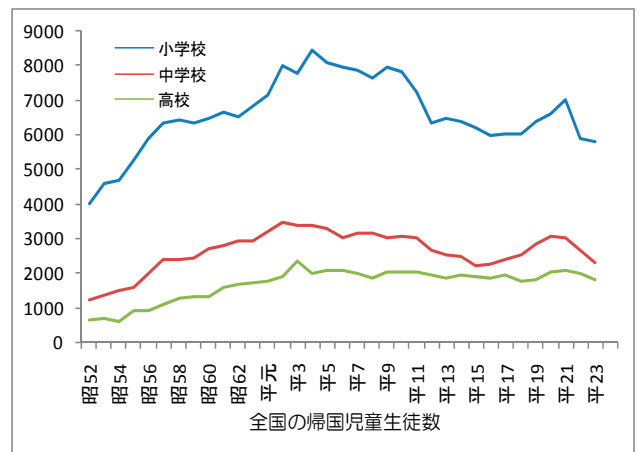
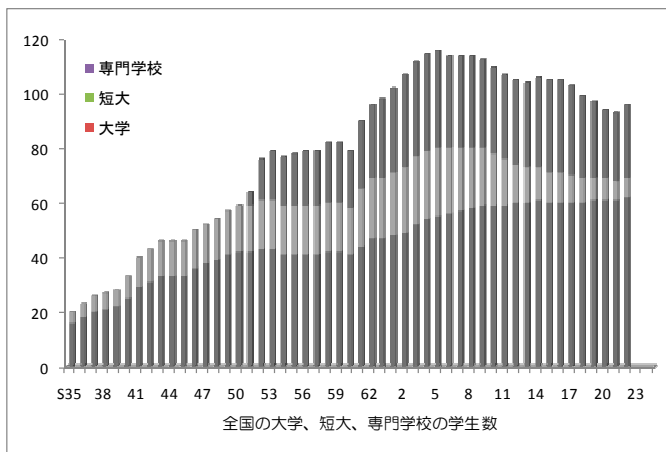
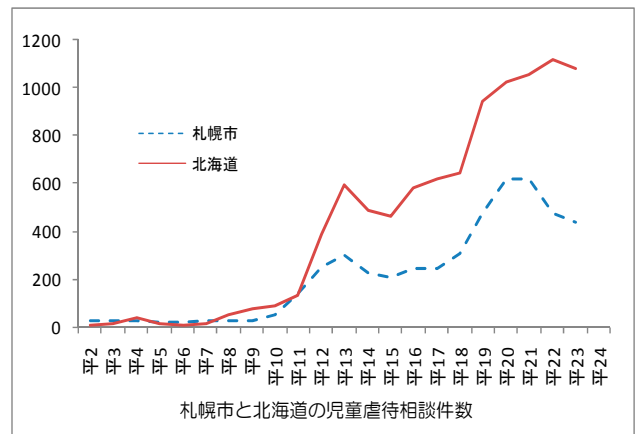
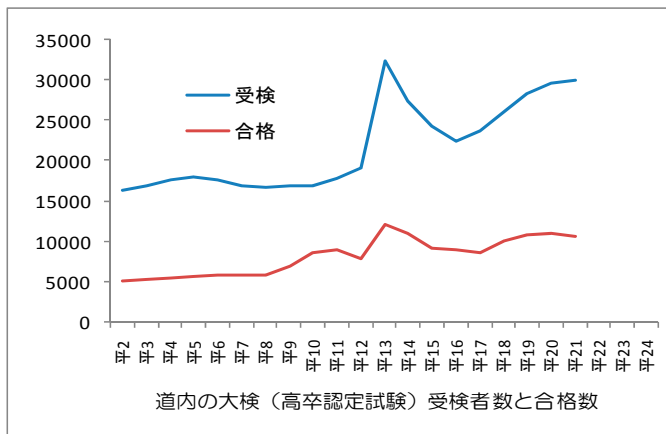
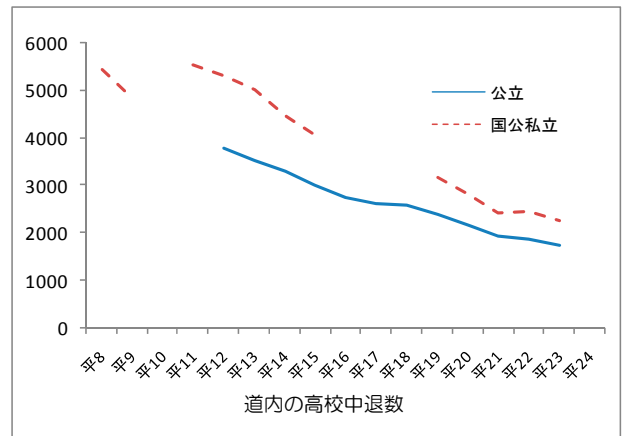
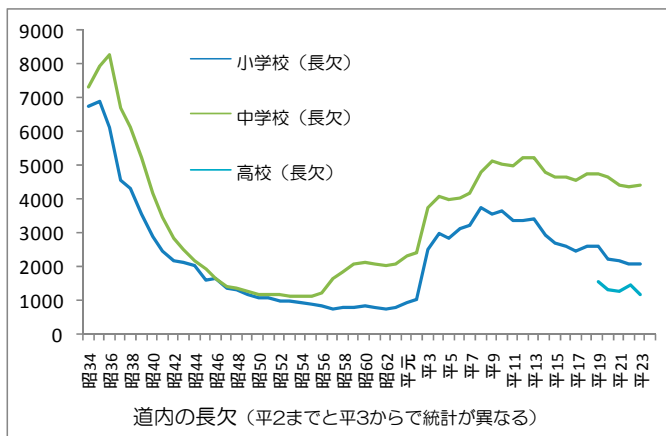
青 浅 朝 荒 飯 飯 井 伊 伊 伊 井 井 井 岩 岩 石 上 上 内 梅 遠 大 大 大 大 大 大 大 岡 尾 岡 小 小 奥 長 小	木 野 野 當 田 野 口 藤 藤 上 上 林 瀬 田 見 田 野 浦 崎 藤 川 保 坂 関 田 野 村 山 崎 形 戸 川 川 村 田 寺	祐 良 聖 知 修 郁 一 博 宗 俊 政 昌 幸 一 清 直 真 政 道 俊 倫 太 道 知 雅 康 経 政 泰	治 敏 美 吾 男 一 将 正 史 武 一 史 喜 子 郎 孝 徹 幸 亨 大 彰 徹 俊 明 郎 夫 郎 子 幸 肇 史 浩 一 博 稔 淳 子	柿 片 勝 角 鎌 鎌 亀 河 菊 岸 木 日 久 久 窪 毛 古 小 小 小 小 小 境 佐 佐 佐 佐 島 上 白 菅 菅 杉 杉 鈴 鈴	澤 桐 木 田 田 山 合 田 田 下 保 田 田 内 賀 形 林 林 松 松 藤 藤 藤 藤 西 川 原 原 本 本 木 木	小 清 祐 智 範 宣 正 隆 道 真 法 德 顕 英 和 茂 雅 将 泰 治 和 菜 大 裕 弘 芳 淳 和 修 式 祐 恵 龍	百 実 一 幸 聡 到 行 孝 敏 志 子 哉 理 順 明 史 裕 律 広 澄 人 宏 雄 英 子 樹 寛 子 一 亮 一 良 治 史 子 一 昭	鈴 関 外 高 高 高 滝 武 武 武 竹 田 田 田 谷 谷 田 田 田 千 千 塚 遠 土 部 中 中 中 中 中 名 納 西 西 額 沼 沼	木 川 橋 橋 本 本 石 田 田 村 尻 中 中 川 端 村 村 葉 葉 本 嶋 岐 田 川 田 谷 野 谷 平 谷 嶋 田 澤 田	里 澄 藤 理 和 英 英 優 勝 俊 昭 敬 秀 二 弘 憲 浩 慶 美 則 尚 伸 秀 潔 真 泰 博 潤 博 靖	津 恵 博 緒 渡 明 茂 孝 久 俊 二 敏 一郎 明 憲 一 行 郎 樹 一 次 一 里 均 行 之 次 夫 明 樹 裕 文 道 一 実 美 生	野 野 野 花 花 濱 林 坂 日 藤 舟 堀 本 本 前 曲 牧 政 松 松 ケ 松 松 三 水 南 宮 宮 宮 宮 村 村 村 元 森 森 八	村 村 村 高 松 野 東 向 井 山 井 庄 間 田 木 野 野 井 浦 瀬 田 永 浦 上 山 上 川 原 本 井 中 端 村 塚 木	俊 洋 博 了 正 壽 正 眞 浩 栄 重 健 須 麻 則 雅 圭 治 夕 幸 秀 明 淑 幸 太 淑 治 義 勝 啓	夫 幹 之 三 彦 樹 憲 一 稔 之 治 希 聡 彦 豊 子 敏 仁 之 章 章 右 務 彦 子 雄 仁 子 彰 紀 和 秀 悟 郎 弘 敏 充	山 山 山 山 湯 湯 吉 吉 吉 吉 吉 我 和 渡 渡	口 崎 田 田 田 浅 田 澤 田 田 田 森 妻 田 邊 邊	聰 俊 清 大 純 恭 恒 政 光 光 公 周 幸	史 一 典 隆 人 丈 男 聡 司 利 敏 裕 明 一 輝
--	--	---	---	--	--	---	---	---	--	--	--	---	---	--	---	---	--	---	---

本研究会の発展にご尽力を賜りました皆様のご功労を讃え、ここに敬意を表しますとともにこの場を借りて心より感謝申し上げます。

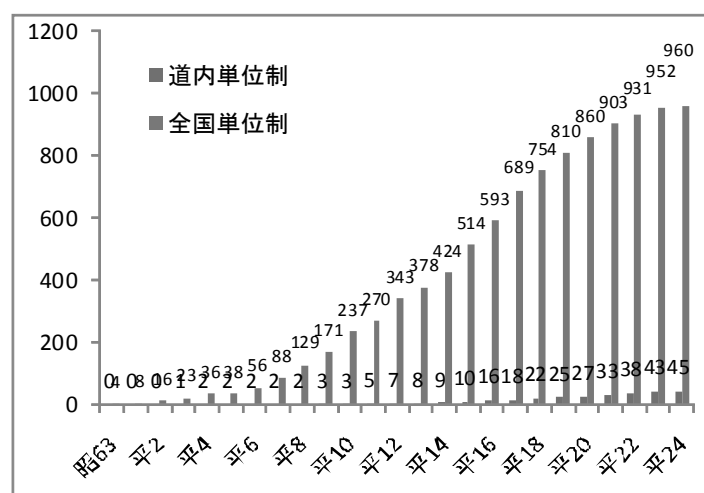
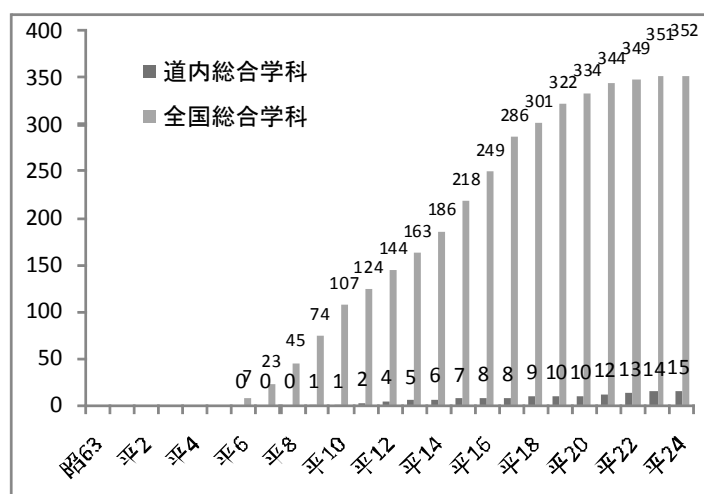
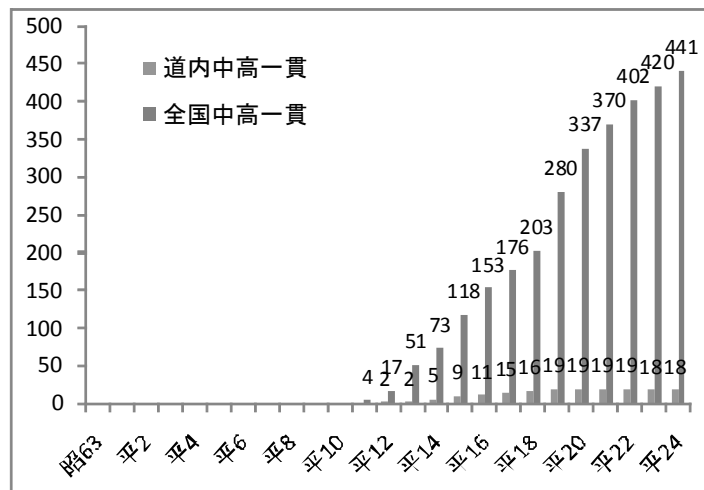
北海道高等学校教育研究会
会 長 守 屋 開

◆教育統計資料◆ 主に学校基本調査をもとに図を作成した。





高校改革の推進状況



中高一貫（連携、併設、中等教育学校）

年度	学校名	累計
平12	*函館ラサール(併)、*立命館慶祥(併)	2
平14	上川(連)、*北嶺(併)、*藤女子(併)	5
平15	上ノ国(連、H22.3.31終了)、鶴川(連)、鹿追(連)、*札幌日大(併)	9
平16	えりも(連)、*双葉(併)	11
平17	湧別(連)、長万部(連)、*武修館(併)、*北星学園女子(併)	15
平18	広尾(連)	16
平19	登別明日(中等)、羅臼(連)、*遺愛女子(併)	19
平24	※上ノ国、H22.3.31終了	18

総合学科

年度	学校名	累計
平9	清水	1
平11	森	2
平12	留辺蘂、標茶	4
平13	石狩翔陽	5
平14	檜山北	6
平15	池田	7
平16	斜里	8
平18	室蘭東翔	9
平19	釧路明輝	10
平21	旭川南、剣淵	12
平22	余市紅志	13
平23	美唄尚米	14
平24	浦河	15

単位制

年度	学校名	累計
平3	有朋	1
平4	*クランク	2
平9	清水	3
平11	森、*星槎	5
平12	留辺蘂、標茶	7
平13	石狩翔陽	8
平14	檜山北	9
平15	池田	10
平16	斜里、江差、砂川、札幌旭丘、*池上学院、*函館大谷	16
平17	札幌手稲、釧路江南	18
平18	室蘭東翔、旭川北、室蘭清水丘、*北海道芸術[株]	22
平19	釧路明輝、帯広三条、市立函館	25
平20	網走南ヶ丘、札幌大通	27
平21	旭川南、剣淵、札幌白石、北見柏陽、静内、*札幌自由が丘[株]	33
平22	余市紅志、倶知安、岩見沢西、苫小牧南、*とわの森三愛	38
平23	美唄尚米、札幌白陵、北広島、小樽桜陽、遠軽	43
平24	大麻、浦河	45

編集後記

高教研 50 周年にあたり、これまでの資料に目を通そうとして、扉に手をかけると、一つ一つ丁寧な文字で綴られた冊子が次々と出てきた。

その色あせた紙面に並ぶ活字やその時代を記録した数々の資料を手にしてしまうと、急に、何かが通り過ぎて行くようなめまいを覚え、タイムスリップしたのか、チャイムの音で我に返り、遠く廊下に響く生徒のざわめきで、急に現実に戻される。腕時計を見て、随分と時間がたっていたことを知る。



この 50 年をどのように総括し、また、ここ 10 年をどのように意義づけるのかは、大切な仕事が残っているが、まだまだ力不足を感じてしまう。

この思いをどうにか伝えたく、研究紀要第 1 号（昭和 39 年 3 月発行）に掲載された初代会長梶浦善次氏の巻頭言を再掲することにする。（ただし、波線は、編集委員が付した。）

巻 頭 言

会 長 梶 浦 善 次

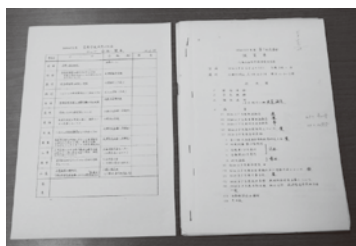
このたびわたくしたちの研究会の研究論文集第 1 号を会員の皆さまにお届けできる運びになったことは、まことに喜ばしいことであり、また同時にいろいろな感懐をもたざるを得ないのである。

今さらいうまでもないが、この研究会は、昨年 5 月に発足したものであり、会費収入、国の助成金などが決定して、厳密な事業計画をたてることができたのは、秋も晩くなってからであった。全道的な研究大会の開催と研究論文集の刊行の二つを柱としてその運営に入ったのであった。大会は 2 月の初めに実施され、この論文集の刊行をもって、第 1 年度の事業は一応終了することとなる。この研究会の歩みが一つの形を得たという感じである。熱心な会員の皆さまのご参加とご鞭撻によって、予定された事業を遂行できたことは、まことに感謝にたえない。とくに日常生徒の指導に多忙な日を送りつつ、研究をつづけられ、論文集の第 1 号に寄稿された会員に対しては、心かななるお礼を申しあげたい。

ところでわたくしたちは、この程度の実績に満足しているのではない。研究論文集にしても、当初は文科系と、理数系及び実業科関係の二分冊としようという計画であった。しかしそれが具体化したのは忙しい三学期に入ってからのものであり、各教科平均した寄稿が得られなかったため二分冊とすることができなかった。この研究会は、高校における各教科の研究を主目的とするのであり、将来各教科において、それぞれ独立した論文集の刊行ができるほどに成長して欲しいと願うのである。この論文集を出すにあたり、複雑な感慨を禁じることを得ないというゆえんである。

率直に言って、高校の先生方は、高い教育的背景と深い専門の研究領域をもっている。しかし特別の場合を除いては、その研究の成果を発表して相互に交流する場と機会に恵まれていなかったのではないかと。本会は、そうした実態を検討し、反省して自主的な研究をし、高校教育を前進させようという意欲をもつ人びとによって結成されたのである。これ以外には裏も表もないということを、ここでも改めて確認したいと思う。

わたくしたちの研究会が、正しく成長するためには、二つの条件が必要であると思う。一つはいかなる研究も、自由に発表され、討究されるという「学問の自由」が確保されることであり、他は研究がなされる財政的な基盤である。会の運営に当るわたくしたちは、この二つの条件を明確に区別しながら、しかもその二つを確保することに努めなければならない。研究論文集を出すに当り、会の運営に対する所信をのべ、会員の皆さまのご自愛を祈って巻頭言とする次第である。



これまでの成果が、次の世代に引き継がれていくこととともに、今後ともあらたな教育が創造され続けていくことを祈念して、50 周年記念誌のまとめとしたい。

平成 25 年 2 月 12 日（編集委員）



平成 24 年度 北海道高等学校教育研究会
本 部 事 務 局

会 長	守屋 開
事 務 局 長	梅原 宏之
事務局次長	尾崎 寿春 上家 浩幸 横関 直幸 春木 孝之

	企 画		運 営	会計 庶務
	横関 直幸		春木 孝之	上家 浩幸
編 集 (表彰) (記念誌)	◎ 坂口 毅 ○ 関 孝志 瓜田 純子 能勢 裕 石田富美子 信田 篤 佐々木光憲 横山 朋美 飯島 晶子 小森 勝 齋藤 周 高山 朗	会場設営 (配信実験)	◎ 河崎 淳 ○ 浅沼 奨 大橋 昌郎 酒井 真 村山 嘉啓 川口 浩史 菅原 満 三浦 裕司 坂口 公志 村上 知二 庄末 剛 鳴海 隆之 (当日協力・会員登録)	◎ 密山 潤子
会員登録 (HP更新)	◎ 中島 和夫 ○ 今野 篤志 中村 文則 近藤 肇 長澤 美香 大木 秀一 船本 治 高瀬 敏樹	受付	◎ 菅原 善之 ○ 長谷川詩織 細田 季男 小泉 泰之 鈴木 綾 反橋 徹 加藤 勉 桑島 宏明 布施 喜明 芦田 朋美 千葉 順世 山口 繁 清水 りか 武田 考介 森 政蔵 山根 康裕 (当日協力・発送・印刷)	
発送・印刷 (表彰)	◎ 川内 瑞歩 ○ 成田 英行 松井 均 佐々木英俊 菊池 一樹 芳賀 雪枝 綿路 昌史 西田 清人 齊 昌己 上田 隆 林 清隆 坂間 卓朗	接待救護	◎ 神尾 知佳 ○ 有田 みゆき 新谷 めぐみ 櫻田 暁子 植田 珠代 伊藤 幸子 下段 華代 佐藤美智子 (当日協力・研究紀要作成)	
研究紀要 (記念誌)	◎ 宮田五輪夫 ○ 皆上 誠 佐藤 直人 河西 博之 吉野龍太郎 丸岡 ひとみ			

50 周年 記 念 誌

発 行 日 2013 年 3 月 21 日
発 行 北海道高等学校教育研究会
〒 064-8535 札幌市中央区旭ヶ丘 6 丁目 5-18
(北海道札幌旭丘高等学校内)
TEL (011) 513 - 2238
FAX (011) 513 - 2244
発 行 者 守 屋 開 (会長)
印刷・製本 旭プリント株式会社

